

Summer Pockets #3

トミー@サマポケ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

サマポケRBの要素を加えた、Summer Pockets #2 (<https://syosetu.org/novel/168785/>)の続編となります。

前作のエピローグから一年後。鳥白島の小学校に入学した羽未ちゃんが初めて迎える夏休み。

どれだけ時間が流れても変わらない島民たちと、鷹原一家が織りなす夏の物語。

あの夏の先に訪れた未来。新しい思い出を紡ぐお話をお楽しみください。

目次

登場人物紹介	1	
第一話	7月25日	6
第二話	7月26日	47
第三話	7月27日	94
第四話	7月28日 (前編)	146
第五話	7月28日 (後編)	180
第六話	7月29日 (前編)	227
・第七話	7月29日 (後編)	253
第八話	7月30日	279
第九話	7月31日 (前編)	327

登場人物紹介

登場人物たちの近況は前作（SummerPockets#2）の最終話をベースにしています。原作とは異なる部分もあると思いますが、そこはご了承ください。

鷹原 羽依里

元・傷ついた渡り鳥。現在は鳥白島に移住し、しろはの良き夫、羽未の良き父親として、民宿『加藤家』を経営しながら島の仲間達と賑やかな日常を過ごしている。定期的にしろはに習ってはいるものの、料理の腕はからつきし。

初めての夏休みを迎える羽未のために、楽しい思い出を作っただけようと奔走する。

鷹原 しろは

羽依里の良き妻として、羽未ちゃんにとってはおかーさんとして。時に厳しく、時に優しく接している。

民宿『加藤家』の食事全般を取り仕切っていて、羽未ちゃんが大きくなって手伝ってくれる日を心待ちにしている。

相変わらずスイカバーが好きで、食材の仕入れのついでに駄菓子屋で買って来ては、せっせと冷凍庫にため込んでいるんだとか。

鷹原 羽未

羽依里としろはの娘で、島の学校に通う小学一年生。

初めての夏休みを楽しみたいと思っている。勉強も遊びも一生懸命な、心の優しい女の子。

おかーさんと折り紙をしたり、おとーさんのバイクで島を巡るのが好き。

岬 鏡子

羽依里の叔母にあたり、羽依里が鳥白島に来るきっかけをくれた人物。

加藤家が民宿となった今は住宅地のはずれに大きな庭付きの家を借りて、そこで大規模な家庭菜園をしている。

それでも偏食癖は治っているわけではなく、時々差し入れ（カップうどん）を持って会いに来る。

古物品に詳しく、現在の家に引越す際に加藤家に置いてあった品物の一部を持って行ったという噂がある。

空門 藍

双子の空門姉妹の姉。今は島の小学校で教師をしていて、羽未の担任。

可愛い女の子が大好きで、教え子のはずの羽未や駄菓子屋の堀田ちゃんを密かに狙っているとかいないとか。

でも、蒼ちゃん大好きなのは変わっておらず、職場の休憩時間を利用して駄菓子屋を訪れている。

空門 蒼

双子の空門姉妹の妹。駄菓子屋のおばーちゃんが腰を悪くしたのをきっかけにその店を受け継ぎ、現在は島唯一の駄菓子屋を営んでいる。二代目看板娘の堀田ちゃんの教育に熱心な一方、相変わらず脳内ピンクで、時々暴走する。

久島 鷗

現在は母親の鷗さんが経営している会社の一部を引き継いで、島で色々な事業（主にイベント企画・運営）をしている。その関係で毎年夏になると鳥白島に滞在する。

元々は病気持ちだったが、最近新薬が開発されたらしく体調も良いようで、昔に比べてより一層パワフルになっている。それでも、相変わらずスーツケースに乗って押してもらうのが好きらしい。

紬・ヴェンダース

廃灯台に住んでいたハーフの少女。老朽化により灯台への立ち入りが制限されて以後、その灯台の目の前に建てられた灯台資料館の一角に部屋を借り、資料館の管理人として働いている。

静久とは相変わらず親友で、手紙のやりとりをしているとか。

昔からこつそりとパリングルスの空き容器を集めていて、ベランダを作る夢は諦めていない様子。ちなみに、何年たっても身長も胸もほとんど変わっていないと、本人は嘆き節。

加納 天善

学校を卒業した後は家業の修理屋を継いで、鍋釜からバイクまで、あらゆるものの修理を請け負っている。

何年にも及ぶ遠距離恋愛を経て一年前に静久と結婚したが、多忙を極める静久は島にいないことも多く、甘い新婚生活とは至っていない様子。

加納 静久

通っていた美術大学を卒業すると同時にヨーロッパへ修行へ出て、現代アートの先駆者となった。

天善の妻となった現在も忙しく世界をまわる傍ら、お世話になった鳥白島に恩返しをするためにアート作品を島に設置している。

その作品目当てで島にやってくる観光客も近年は増えている、嶋と並んで島の観光に多大な貢献をしている。

三谷 良一

数年前にのみきと結婚してからは、さすがに突然裸になることは減ったらしいが、のみき曰く酒に酔うとその限りではないらしい。

学校を卒業した後は家業を継いで漁師となったが、元々テントコレクターであり、いつかは島でレンタルテント屋を営む夢を持っている。

嶋が主催するサマーキャンプに毎年テントの貸し出したり、インストラクターを引き受けたりと人脈作りに勤しんでいるが、妻のみきからは呆れられている。

三谷 美希

学校を卒業後はそのまま役所に就職した。結婚して苗字が変わっても、島の仲間達からは相変わらず『のみき』と呼ばれている。

最近は事務仕事が増えたせいで、仕事の時は眼鏡をかけているらしい。また、良一が外で裸になることが減ったため、必然的に鉄塔に登ることもなくなったが、島内放送は相変わらずのみきが担当している。

愛用の水鉄砲も数年前のハイドロエターナルカノンを最後に製作活動は止まっていて、今は後継育成に力を入れているとかなんとか。

鳴瀬 小鳩

しろはの祖父。80歳近くになった今でも現役の漁師として船を出して、定期的に加藤家に魚を卸してくれている。

見た目は怖いが、ひ孫の羽未を溺愛していて、彼女の前ではとても優しいひーじーじになっってしまう。

堀田ちゃん

駄菓子屋の二代目看板娘……もとい、バイトの子。小さな時から駄菓子屋にやってきていて、蒼にスカウトされたのを機に看板娘となった。島の少年団で最年長ということもあって、最近はのみきから水鉄砲の手ほどきを受けているらしい。

また、夏海ちゃんとは年が近いせいか、よく一緒にいる。例の口癖は健在。

神山 識

突然島にやってきた、自称鬼の少女。なぜか羽未のことを知っていて、島の薬草に詳しい。

岬 夏海

オリジナルキャラクター。

鏡子さんの姪になる女の子。前作に引き続き登場。夏休みの間は叔母の鏡子さんの所に下宿して畑を手伝う傍ら、島での暮らしを満喫している。過去の事故により長い間眠っていた関係で身体の成長が遅く、年齢の割に身長は中学生くらい。それでも、のみきよりは少し背が高いのが自慢らしい。

第一話 7月25日

……おかえり。久しぶりだね。夏海ちゃん。

……はい！ ただいまです！

「……あれ？」

蝉の声がだんだん大きくなり始めた頃。俺はいつもと同じ時間に目が覚める。

同時に味噌汁のいい匂いが鼻をくすぐる。どうやらしろはは既に起きていて、朝ごはんの支度をしてくれているみたいだ。

俺はまだ半分寝ぼけたまま、すぐ隣で眠る羽未の顔を見る。楽しい夢でも見てるんだろうか。幸せそうな寝顔だった。

「……なんだか懐かしい夢を見たなあ」

去年の夏、夏海ちゃんがこの島に戻ってきた時の夢だった。

あれから一年。羽未も無事小学校に入学して、初めての夏休みを迎えようとしていた。

「……羽依里さん！ 羽未さん！ 朝ですよー！」

その時、勢いよく襖が開かれて、夢の中にいたその子が顔を覗かせた。

「しろはさんに言われて、起こしに来ました！ そろそろ起きてくださいー！」

「夏海ちゃん、おはよう。今日も早いね」

「えへへ。早起きは得意ですから！」

屈託のない笑顔でそう言う。彼女の叔母にあたる鏡子さんも朝に強いし、やっぱり岬家の血筋なんだろうか。

そんな夏海ちゃんは夏休みの間、住宅地のはずれに新居を構えた鏡子さんと一緒に住んでいる。

鏡子さんは最近、広すぎる庭を開墾して畑を始めたとかで、そこに実った野菜を夏海ちゃんが毎日のように届けてくれているというわけだ。

「夏海ちゃん、今日も野菜を持って来てくれたの？」

「はい！ おすそわけです！ キュウリにトマト、小さいですけど、カボチャもありますよ！」

畳の上に置かれたビニール袋からは、によきつとキュウリが顔を覗かせていた。

「いつもありがとう。すっかり農家さんだね」

「鏡子さん、向こうの家に引越してからすっかり野菜作りに凝っちゃってですね。今度は古来種野菜を育てると言っていました」

古来種野菜って何だろう。よくわからないけど、鏡子さんは骨董品とか好きだし、古くからある野菜にも浪漫を感じるんだろうか。

「でも、これだけ野菜を育てたら、鏡子さんの偏食も少しは直ったんじゃない？」

「そうですね。最近は美容と健康を考えているらしく、季節の野菜をカップうどんに乗せて食べてますよ。フレッシュですよね！」

……一瞬、キュウリやトマトがどつきり乗ったカップうどんを想像してしまった。確かに健康には良さそうだけど、美味しいのかな。

「それじゃ、確かに起こしましたから！ この野菜、しろはさんの所に持っていきますね！」

「うん。よろしくね」

夏海ちゃんはよっこいしよと小さく口にしながら、野菜の入った袋を持ち上げて台所の方へ行ってしまった。

彼女は年齢のわりに身体が小さくて、少し子供っぽいところがあるんだけど、それは昔の事故の後遺症みたいなものだし、仕方ないと思う。

もともと、本人は全く気にしてる様子はないし、島では普通の女の子なんだけど。そういうものに寛容な島民性も根底にあるのかな。

「……それにしても、起きないか……」

あれだけ賑やかかったにもかかわらず、俺の隣で気持ち良さそうに

寝息を立てている羽未を見やる。

「おーい、羽未ー。起きろー」

「うみゅー」

幸せそうなところ可哀想だけど、ゆきゆきとその小さな身体を揺する。数日後にはラジオ体操も始まるんだし。今から早起きする癖をつけておかないと。

「羽未ー、朝だぞー。おかーさんが朝ごはんを作ってくれてるぞー」

しろはが朝ごはんを作ってくれる代わりに、俺が羽未を起こして、支度をさせる。いつの間にか、それが毎日の日課になっていた。

「うー。おとーさん、おはよう……」

何度か間隔を空けて揺すっていると、愛娘が目を覚ました。

「ほらほら、しっかり起きて。顔を洗って、髪も梳かさないと」

それでもまだ眠たいらしく、大きなあくびをしている羽未をあやすようにして、俺も一緒に洗面所へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……炊きたての白いごはんに、豆腐とわかめの味噌汁、アジの干物に、野菜の浅漬け。

身支度を整えてから向かった居間には、四人分の朝ごはんが用意されていた。

「あの、本当に私もちそうになっちゃって良いんですか？」

そんな朝ごはんを前にして、夏海ちゃんが申し訳なさそうに首を垂れていた。

「今日はお客さんもないし、朝はゆっくりなんだよ。夏海ちゃんも遠慮しないでいいからね」

俺はその背中にそう声をかけながら、羽未と一緒に食卓につく。

「え、今日はお客さん、来てないんですか？」

それを聞いた夏海ちゃんが客室の方を見ながら、心配そうな声を出

していた。

この家……加藤家を改築して今年の頭から始めた民宿は、一日一組限定の小さな宿だ。日によつては、今日みたいにお客さんがいない日もある。

「……良かったら私、今度おかーさん呼んで泊まりに来ましようか?」
「いや、そこまで気を使つてくれなくても大丈夫だよ。今日から夏休みだし、さつそく夕方からお客さんが来る予定になっているしさ」

俺は近くに置いてある宿泊台帳を見ながら、そう教えてあげる。なんだかんだで夏休みだし、それなりに予約は入っている。

「そうなんです。おかーさん、一度あいさつに来たいって言つてましたけど」

確か、夏海ちゃんの実家は神戸の方にあるんだっけ。その親御さんとも何度か電話で話したことはあるけど、実際に会つたことはない。どんな人か、少し気にはなるけど。

「夏海ちゃんはいつも新鮮な野菜を持ってきてくれるし、遠慮せずしつかり食べてね」

「しろはさん、ありがとうございます!」

……その時、エプロンを外したしろはが居間にやってきた。

「……それにその、夏の間夏海ちゃんを預かる身としては、栄養の偏りも気になるし」

しろはの気持ちはわかる。一応、夏海ちゃんも料理はするんだけど、なぜかチャーハンばかり作つてみたいだし。一緒に住んでる鏡子さんもなかなかの偏食だ。せめて時々でも、うちの朝ごはんでは栄養のバランスを整えてあげたいんだろう。

「それじゃ、冷めないうちにめしあがれ」

「いただきます!」

しろはが食卓に着いて、四人で挨拶をしてから朝食に箸を伸ばす。アジの干物は身がほこほこで、塩加減も絶妙だった。野菜の浅漬けと合わせて、ごはんがいくらでも食べられる。

「この干物はおじーちゃんが持つて来てくれたんだよ。羽未ちゃんに食べてほしいって」

「そうなんだ。羽未、美味しいか？」

「うんー。おいしいー」

「そっちの浅漬は昨日夏海ちゃんが持って来てくれた野菜を使っているの。おいしいよ」

「本当だ。このニンジンとか甘いな」

「にんじん、すきー」

羽未もそう言って浅漬を美味しくそうに食べていた。島の新鮮な食べ物のおかげで、羽未は今のところ好き嫌いもなく、健康そのものだ。

これは、いつも美味しい料理を用意してくれるしろはや、島の皆に感謝だよな。

「朝ごはん、ごちそうさまでしたー！」

……やがて朝食を終えて、夏海ちゃんは去っていった。本当、朝から元気だなあ。

「それで羽依里、今日の予定は？」

そんな夏海ちゃんを見送って、羽未と居間でテレビを見ていると、洗い物を終えたしろはがそう聞いてきた。

「お昼からはお客さんを迎える準備をしなきゃいけないけど、午前中は特に予定ないかな」

「じゃあ、おとーさんとあそべるの？」

俺の言葉を聞いて、向かいに座る羽未の瞳がキラキラと輝いた。

「ああ、遊べるぞ。何して遊ぶ？」

「えーっと。えーっとね」

「……羽未ちゃん。おとーさんと遊ぶ前に、今日の宿題をしないと」

「あ、うん……」

おかーさんにそう言われて、がつくりと肩を落としてしまった。でも、夏休みの宿題は少しずつでも消化しておかないと、後で大変なことになっちゃうしね。

「羽未、おとーさんが見てあげるから、宿題頑張ろう」

「……うん！」

そう伝えると、羽未は元気に立ち上がり、駆け足で部屋に宿題を取りに行った。うんうん。やる気が出たみたいで、良かった良かった。

「……懐かしいな。夏の友って、まだあるんだ」

真剣なまなざしで漢字ドリルに向かっている羽未の横顔を眺めながら、俺は畳の上に置かれた夏の友をパラパラとめくっていた。

読書感想文とか、宿題によっては日数がかかるものもある。羽未にとっては初めての夏休みだし、遊びだけじゃなく、色々と教えてあげないと。

「あ」

多種多様な宿題が並ぶ中、自由研究の項目が目止まる。

「自由研究かあ……」

俺の記憶にはないけど、小学校一年生の頃から自由研究ってあったんだ。

「じゅー、けんきゅー？」

俺の呟きが聞こえたのか、羽未が首をかしげながら俺の方を見る。

「何をしてもいい勉強だよ」

「んー??？」

よくわかってないみたいだった。初めての夏休みだし、当然だと思
う。

……そうだ。この際、島の皆に相談してみるのも良いかもしれない。具体的な案が出れば、羽未も興味がわくかもしれないし。

「おわったー！ おとーさん、みてー！」

そんなことを考えていると、羽未の宿題が終わったらしい。嬉しそうに漢字ドリルと算数の宿題を俺に差し出してきた。

「よしよし、おとーさんが答え合わせしてあげるからな」

その宿題を受け取って、しっかりと目を通す。うんうん。ちゃんと

できてる。

「あつてるー?」

「うん。全部合ってるよ」

「やったー!」

まあ、小学校一年生の宿題だし。答え合わせもまだまだ楽勝だった。

「それじゃ羽未、どこに遊びに行きたい?」

「んー、じんじゃ!」

「え、神社?」

「うん。虫とりしたい!」

ああ、そういうことか。

「いいよ。それじゃ、神社に行こうか」

「うん!」

羽未は立ち上がると、その笑顔を爆発させる。

「それじゃ、おとーさんは虫取り網と虫かごを用意してくるから。羽未はおかーさんに言つて、麦わら帽子と水筒を用意してもらつて」

「わかつたー。おかーさーん!」

元気よく廊下を駆けていく羽未の背中を微笑ましく見ながら、俺は道具がしまつてある蔵へと向かつた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

準備を終えた俺と羽未は、並んで神社へと続く道を歩く。今日も夏真つ盛りと言つた感じで、蝉が空を叩くように鳴いている。なかなか暑い。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

俺の前に行く羽未はそんな蝉の声にも負けず、ご機嫌に鼻歌を歌っていた。すっかり覚えてしまったらしい、島の童謡だった。確か、ずいぶん昔に紬が教えてくれたんだつたな。

「あ、羽依里ー、羽未ちゃんー！」

その時、前方からスーツケースがやってきた。あれは鷗だな。

「かもめさん、おはよー！」

「おっはよー！ 羽未ちゃん、今日も元気いっぱいだねえ」

麦わら帽子越しに羽未の頭を撫でながら、鷗が太陽に負けない笑顔を向けていた。そういえば、鷗も昨日から島に来ていたんだっけ。

「鷗も負けずに元気いっぱいだな」

「そろそろサマーキャンプの準備もしないといけないし、疲れてる暇なんてないよ！」

……そういえば、先日回ってきた回覧板に今年のサマーキャンプは8/8からと書かれていた気がする。

ちなみにサマーキャンプというのは、数年前から鷗が始めた夏のイベントだ。島の内外から集まった子供たちの交流と自立心を養うことが目的で、島民の協力もあってか、すっかり定着している。

「かもめさん、ことしもサマーキャンプあるの!？」

「あるよー。今年からは羽未ちゃんも参加できるし、楽しみにしててね！」

「あいあいさー！」

キャンプに参加できるのが嬉しいのか、羽未はびしつと敬礼しながら返事をする。

ああ見えて、鷗は島の子供たちからキャプテンカモーメツと呼ばれて親しまれているし、なかなかの人気者だからなあ。

「……ところで、羽依里たちは今から虫取り?」

そして羽未の格好から判断したんだろう。鷗がそう聞いてきた。

「そうだよ。ちよつと神社に行こうと思ってるさ」

「おお、じゃあ今日一日は虫取り三昧ですな」

「そうしたいのは山々なんだけど、俺も午後からは民宿の仕事があるし、やっても午前中だけかな」

「そうなの? だったら羽未ちゃん、お昼から私と遊ばない? スーツケース乗せてあげるよ?」

「うん! のりたい!」

「鴫、良いのか？ それこそさつき、サマーキャンプの準備があるとか言ってたけど」

「いいのいいの。それこそ羽依里と逆で、午前中には終わっちゃうから」

「そうなのか。なら、お昼から羽未をよろしく頼むな」

「お任せあれ！ それじゃー！」

「……あ。鴫、最後に一つ聞きたいんだけどさ」

鴫が手を振りながら俺たちの横を通り過ぎようとしたので、俺はそれを慌てて呼び止める。

「え、なに？」

「実はさ……」

ここで会ったのも何かの縁と、俺は羽未の自由研究について鴫に聞いてみた。

「自由研究？ やっぱり、王道は工作だよな。羽未ちゃん、スイーツのスのミニチュア作ってみる？」

「うーん？」

そんな鴫の提案に、羽未は首をかしげていた。いきなり工作はレベルが高い気がする。

「鴫、ありがとう。羽未も迷ってるみたいだし、もう少し他の皆の意見も聞いてみることにするよ」

そうは言ったけど、鴫は知り合いの中でもずば抜けて手先が器用だ。自由研究とは関係なしに、工作を教えてもらっても良いかもしれない。

「うん！ せっかくの夏の思い出だし、しっかりと考えてね！ それじゃ、またねー！」

鴫は今度こそ、スイーツケースを引いて去っていった。

……鴫、本当に元気になったよなあ。

元々、彼女は病弱な所があったんだけど、最近は新薬ができたとかで、だいぶ症状も改善されたらしい。医学の進歩ってすごい。

そして元気になった鴫は母親の資金を元手に『財団法人 ひげ猫』……通称ひげ猫団を設立。島の観光協会と協力して、先のサマーキャ

ンプを筆頭に島のイベントをいくつも手掛けている。あの行動力は見習いたいくらいだ。

「おとーさん?」

「え? ああ、ごめんごめん」

去り行く鷗の背中を見送っていたら、羽未から不思議そうな顔で見上げられた。そろそろ、神社に行かないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「とうちやくー」

やがて羽未と競争するように石段を登って、神社に到着した。ここは島の中でも高くて開けた場所にあるからか、風があつて涼しい。

「ハイリさん、ウミさん、いらっしやいませー」

……そんな境内の真ん中に、何故か紬が立っていた。

「あれ、紬?」

「つむぎさん?」

「はい。紬さんですよー」

遮蔽物も何も無い境内の真ん中で、紬はニコニコ顔だった。

「どうして紬が神社にいるんだ?」

「実は、ビラ配りをしています! どうぞ!」

不思議に思っていると、紬は手にしていたチラシの束から一枚抜き出して手渡してくれた。

それには『海の家・近日オープン! 名物カレー、ついに復活!』と大きく書かれていた。

「海の家? そんなものができるのか?」

「そうです! シズクがプロデュースするんですよ!」

確か静久って、今は世界を股にかける敏腕芸術家になってるんじゃないかってたっけ。その静久が、この島で海の家を?

「それで、オープンに先駆けてこのチラシを配ろうと思ったのですが、

見事に誰もいません！」

「うん。この暑い中、好き好んで神社に来るような人はいないと思うよ……」

本当、紬はどうしてここでビラを配ろうを思ったんだろう。謎だった。

「テンゼンさんから、夏休みになれば神社に人が集まると聞いたのですが。騙されました。むぎぎぎ……」

ああ……天善はたぶん、ラジオ体操のことを言ったんだろうな。確かにラジオ体操が始まれば、人は集まるし。

「紬、神社でラジオ体操が始まるのは28日からだよ。それまでは港とかで配るのが賢明じゃないかな」

「そうですか。それでは、港に行ってみることにします！」

「あ。紬、ちよつと！」

「……むぎぎゅ？」

元気よく立ち去ろうとする紬を呼び止めて、俺は鷗と同じように自由研究について聞いてみた。

「むー。灯台の観察日記とかどうでしょうか」

「紬らしいけど、羽末の足で毎日観察しに来るのは難しいかな」

うちから灯台まで結構な距離があるし。一応、羽末も自転車には乗れるけど、さすがに遠すぎると思う。

「それに、余程の自然災害でも起こらない限り、灯台は365日同じだと思っしよ」

「では、絵ハガキを書いてみるのはどうでしょうか」

「絵葉書？」

「はい！ 先日シズクから、こんなステキな絵ハガキをもらいました！」

紬がスカートのポケットから、一枚の絵葉書を取り出して見せてくれる。一面にアサガオの絵が描かれていて、一言が添えられていた。

『暑中搦見舞い申し上げます』

……しよちゆうもみまい。

「……相変わらずブレないな」

「はい。相変わらずブレません！」

「おとーさん、なんて書いてあるのー？」

「うん。暑さに負けずに頑張りましようって書いてあるんだよ」

とりあえず羽未にはそう伝えておいた。絵はさすが芸術家といったレベルだったけど、文面をそのまま伝えるのは教育上よろしくなさそうだし。

「……ありがとう。参考にさせてもらおうよ」

「お役に立てたら何よりです！ それではー」

絵葉書を返しながらお礼を言うと、紬は手を振りながら去っていった。変に引き延ばしてもボロが出そうだし、この話は早めに切り上げておこう。

「……それじゃあ羽未、虫取りを始めようか」

「うんー」

紬のツインテールが石段の先へ沈んでいくのを見送った後、羽未を連れて神社の裏手へと移動する。この辺りには木や草藪もあるから、蝶やバッタをはじめとした様々な昆虫を見つけることができるし。

「たくさんつかまえるー」

隣の羽未はすでに虫取り網を構えて、やる気満々だ。

「……ほら羽未、あそこにちょうちよがいるよ」

「よーし……えいー！」

その時、さっそく目の前を一匹のアゲハチョウが飛んでいた。羽未はひらひらと舞うそれに狙いをつけて、虫取り網を思いっきり振り下ろす。

「あ、にげられた……」

「羽未、惜しかったぞ。ほら、今度はクロアゲハがこっちに来た。もう一度だ」

「……えいー！」

同じように飛んできた別の蝶に向けて、もう一度網を一振り。しかし、ひらりとかわされてしまった。

「うー、むずかしい……」

羽未は余裕綽々で飛ぶ蝶に視線を送りながら、悔しそうな顔をして

いた。

ゆつたり飛んでるように見えて、飛んでる蝶を捕まえるのは難しかった気がする。今度、蒼に虫取りのコツとか教えてもらおうといいかもしれない。あそこの父親、昆虫学者って話だし。

「えいー… やーー！」

しばらくして蝶の捕獲を諦めた羽未は、今度は草むらから飛び出してぴよんぴよんと跳ねまわるバツタの後ろを必死に追いかけていた。どちらも必死なんだろうけど、なんというか、ほんわかする。

「にげられた……」

境内の向こうの方まで追いかけていったけど、結局逃げられたみたいだ。もうちよつとだったんだけどなあ。

「羽未、今度は蝉を狙ってみよう」

というわけで、再び獲物を変えてみることにした。蝉なら木に止まって動かないし、大きな声で鳴いてるから居場所もすぐにわかる。

「……ほら、あそこにいたよ」

鳴き声を頼りに周囲を探すと、ちょうどお堂の陰になった木の幹に大きな蝉が止まっていた。見た感じ、アブラゼミかな。

「えいー！」

羽未は思いつきり手を伸ばして網を振るけど、あとちよつとのところで届かない。蝉はそんな羽未をあざ笑うかのように、幹の上の方でみんみん鳴いていた。

「うー、おとーさん、つかまえてー」

余りに悔しいのか、羽未が涙目になりながら俺に虫取り網を差し出してきた。

しろはの教育方針で、できるだけ自分でやらせることにはしてるんだけど……。

「よーし、おとーさんにまかせろ」

せっかく娘が頼ってくれたんだ。今回ばかりは、父親の威厳をみせてやろう。

俺は羽未から虫取り網を受け取ると、目線より少し高い位置にいる蟬に狙いを定める。既に射程圏内だ。

「とうー！」

狙いすまして網を振るうけど、すんでのところで気づかれてしまった。蟬はくるくると回転しながら、青空へと逃げていった。

「うわ、ぺっぺー！」

そしてよりによって、アブラゼミはその去り際に俺に黄金の水をかけていった。

「おとーさん、ぼっちいー」

「ぼ、ぼっちくないぞー！　うう、父親の威厳が……」

その後も父娘で協力して頑張ってみたけど、虫は一匹たりとも獲れなかった。しまった、これは予想外だ。

「うー」

こういう日もあるんだろうけど、羽未は空っぽの虫かごを見ながらむくれていた。水筒の水をヤケ飲みしていたし、これはなんとかして機嫌を直してもらわないと。

「そうだ羽未、そろそろいい時間だし、休憩がてら駄菓子屋に行ってみない？」

「いくー！　かきごおりたべたい！」

ぱあつと笑顔の花が咲く。うんうん。表情がころころ変わるのも見てて楽しいな。

「それじゃ、駄菓子屋に向けて出発！」

「しゅっぱーっ！」

一気に元気になった羽未に続いて、神社を後にする。もう少しでお昼だけど、休憩がてら少し寄り道して、駄菓子屋で自由研究のネタを探してもいいかもしれない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださーいなー」

「あ、いらつしやいませー」

羽未と一緒に駄菓子屋へと足を踏み入れる。すると、すぐに二代目看板娘の堀田ちゃんが出迎えてくれた。

「あれ、今日は蒼はいないんだ?」

何年か前に腰を悪くしてしまったおばーちゃんの代わりに、今は蒼がこの駄菓子屋を切り盛りしている。バイトを雇っているとはいえ、いつもは店にいるはずだけど。

「蒼ちゃんは奥の部屋で着替えています。もうすぐ出てくるとは思いますが」

声が出た方を見ると、藍がカウンターの奥で弁当箱を片付けていた。

「藍、今日もここで昼を食べてるのか」

「はい。蒼ちゃんの仕事っぷりを眺めながらお昼を食べる。毎日の日課です」

大きな目の三つ編みにまとめられた髪と、すっかり見慣れたスーツ姿。藍は現在、島の小学校で教師をしている。

先生としての評価も高いらしいけど、昼休みになると学校を抜け出して、この駄菓子屋でお昼を食べている。

一応羽未の担任なわけだし、大人としてもう少し子供の模範になるような行動をしてもらいたいところだけど。

「あいせんせー、こんにちはー」

「羽未ちゃん、こんにちは。今日もかわいいですね」

「えへへー」

藍はカウンターから出てきて、羽未と視線が同じになるように屈みながらその頭を撫でてくれる。

「せんせーはなつやすみなのー?」

「残念ながら不是吗。大人ですから」

「せんせー、かわいいそう……」

藍が普段と同じ格好をしているのを見て、子供心にそう思ったんだろう。心底悲しそうにそう言つて、うなだれる。

「羽未ちゃんたちにきちんと教えられるように、先生たちもお勉強が必要なんです」

「せんせーもベンキようするの?」

「そうですよ。今日は心理学を学びました」

「……??」

先生は夏休み中も会議や研修がある……って以前聞いたことがあるけど、羽未にいきなりそれを言っても分からないと思う。

「例えば、羽未ちゃんが駄菓子屋に来た理由を当ててすることもできますよ。ずばり、かき氷ですね」

「あたり! せんせい、すごい!」

見事に考えを当てられて、羽未は目を丸くしていた。

羽未の視線はずっとかき氷器に釘付けになっていたし、簡単にわかるだろうけど……それって心理学関係あるのかな。

「……さすが、先生も板についてきたな」

「羽依里さんに褒められても嬉しくありませんよ。それより堀田ちゃん、私と羽未ちゃんにかき氷ください」

「いいですけど、藍さんは休み時間、まだ大丈夫なんですか?」

「心配はいりません。夏休みで授業もありませんし、窮屈な職員室に籠っていても息が詰まるだけですから」

「……おいおい」

ため息をつきながらも堀田ちゃんは冷凍庫に向かい、そこから氷の塊を取り出す。

「……まあいいですけど。それでお二人とも、何味にします?」

そして慣れた手つきで氷をかき氷器にセットして、羽未と藍に尋ねる。

「私はレモンでお願いします」

「えつと、いちご!」

「わかりました。ふたつで200万円です!」

「……ほら、おとーさん、200円だそうですよ」

「え、もしかして、藍の分も俺が払うの?」

「そうですよ。さすが、羽未ちゃんのおとーさんは優しいですね」

「うん。やさしい」

藍は羽未の肩を抱くようにしながら、顔を並べて笑顔を向けて来る。羽未は純粋な笑顔なのに対し、藍は何か含みのある笑顔だった。

「仕方ないな……ほい。2000円」

「あ、199万9800円足りませんよ。」

駄菓子屋伝統のお約束をして、堀田ちゃんに代金を手渡す。不満はあるけど、この際藍の分は授業料だと思って我慢しよう。下手に反発したら、後が怖いし。

「はーい。かき氷、お待たせしましたー」

「ありがとうー!」

しばらくして、堀田ちゃんが大盛のかき氷を持って来てくれた。羽未はそれを受け取ると、ベンチに座って嬉しそうに食べ始める。

「クーださーいなー」

「あ、夏海さん、いらつしやーい」

その時、夏海ちゃんがやってきた。麦わら帽子にTシャツ姿で、首にタオルを巻いている。この暑い中、畑仕事でもしてたのかな。

「ほっちゃん、チューベください!」

「はい、30万円ですよー」

注文を聞くと、すぐにアイスクリームストッカーからチューベを取り出していた。さすが手慣れている。

「夏海さん、今日も畑仕事ですか?」

「うん! 暑いけど、草取りだけやっとうと思っただの!」

代金の代わりに青色のチューベを受け取った夏海ちゃんは、被っていた麦わら帽子を取りながら堀田ちゃんと談笑していた。

あの二人は年も近いし、仲が良いみたいだ。夏海ちゃん、堀田ちゃんにはタメ口だし。

「あ、羽依里たち、いらつしやーい」

……そんな二人を見ていたら、店の奥から蒼が出てきた。

「良い所に来てくれた。蒼に相談があるんだけどさ」

「へっ、相談？」

ようやく店主が出てきたところで、俺は自由研究について聞いてみることにした。ここなら教材になりそうなものがありそうだし。

「んー、自由研究ねー」

「ああ、こういうのって早い方がいいと思ってさ。駄菓子屋にそれっぽいのが、売ってないか？」

「そうねー。昆虫採集セットとかならあるけど？」

蒼が奥の棚を探しながら、そう提案してくれる。昆虫採集か……。

「さすがに羽未にさせるのはまだ早いと思う。その、ぐろいしき」

「え、あたしとか子供の頃、けっこう平気でやってたけど」

「そ、そこはほら、昆虫学者の娘だしさ」

俺は羽未が嬉々として昆虫に注射針を刺してる場面を想像してる。うん。絶対無理だ。

なにより今日の虫取りの成果を見ていたら、素材集めすら難しそう。虫を捕まえられないと、標本にもできないし。

「昆虫採集より、浜辺で貝殻を集めて工作してみるのはどうですか？ 実際に写真立てとかを作ってくる女の子は多いですよ」

その時、藍がかき氷を食べながらそう教えてくれた。実際に子供たちとふれあう先生の意見だし、参考になるけど……。

「何か違うんだよな。もっとうこう、夏休みの思い出になるようなものにしてあげたい」

羽未にとって初めての夏休みだし。うまく説明できないけど、それを見るだけでその夏休みを思い出せるようなものに……。

俺は頭を掻きながら店内を見渡す。何かないかな。

「あの、羽依里さん。さっきから何の話してるんですか？」

そんな俺の様子を見てか、夏海ちゃんが食べかけのチューベを持ってきたま聞いてきた。

「ああ、羽未の自由研究のネタ探しをちよつとね」

「自由研究ですか？ うーん」

気になったんだろうか。夏海ちゃんがきよろきよると店の中を見渡しながら、何か探してくれている。

「あ、これなんかどうですか？」

そう言いながら彼女が棚から取り上げたのは、一冊の絵日記帳だった。

「なつちゃん、それなに？」

自分の話題が出ていることに気づいたんだろうか。そのタイミン
グで、ベンチでかき氷を食べていた羽未もこっちにやってきた。

「絵日記帳ですよ。ここにその日の出来事を文字で書いて、その上に
絵を描くんです」

「えにつき、なつちゃんもかいたことあるー？」

「ありますよー。毎日、夏の思い出を書き残してたんです。夏休みの
終わりには、すごくいい思い出になるんですー！」

「……うみもやってみたい！」

真つ白いページを見つめていた羽未が、決意を込めてそう口にして
いた。これは、自由研究は絵日記で決まりみたいだ。

「わかった。蒼、この絵日記帳もらえるか？」

「いいわよー。他ならぬ羽未ちゃんのためだし、特別に半額サービス
にしたげる」

「え、蒼さん、突然そんな。仕入れの関係もあるのに」

「そんな細かい事いいのよ！ もってけドロボー！」

「おいおい……」

突然の値引き発言に堀田ちゃんは後ろを向いて頭を抱えていた。
それにしてもいきなり半額にしてくれるなんて、いくらなんでも悪い
気がするな。

「でも、絵日記書くにはこっちのクレヨンセットか色鉛筆セットが必
要よねー？」

「うっ」

蒼は笑顔で右手にクレヨンセット、左手に色鉛筆セットを持ってい
た。やけに気前がいいと思っていたけど、そういうことか。さすが商
魂遅しい。

「安くしとくわよー？」

「……じゃ、じゃあ、色鉛筆セットもらおう、かな……」

「まいどありー」

もちろん、色鉛筆セットは定価だった。合わせてみると結構な出費になったけど、これも羽未のためだ。

俺はそう思うことにして、お昼まで駄菓子屋で過ごした。絵日記の書き方は、夜にでも教えてあげることしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー」

「おかえりなさい。すぐお昼ごはんにするから、二人とも手を洗ってきてね」

「はーいー！」

加藤家に帰宅すると、ちょうど12時。出迎えてくれたしろはに言われた通り、羽未と一緒に洗面所へと向かう。

手洗いを終えて居間に戻ると、食卓の上にめんつゆの入ったガラスの器が三つ置かれていた。

「おお、今日のお昼はそうめんなのか」

「そう。羽依里の家からお中元でもらったやつだよ」

台所にいるしろはが背中を向けたままそう返してくれた。そういえば昨日、うちの実家からお中元が届いていた気がする。中身はそうめんだったのか。

「うちの親、もつと気が利いたもの送ればいいのに。岡山なんだから果物とか、ホルモンうどんとかさ」

「羽依里、もらいものに文句言っちゃいけないよ？ それに、そうめんは色々を使い道があるんだから」

思わず愚痴をこぼしていると、しろはが器に盛られたそうめんを運んできてくれた。上に乗った氷が涼しげで、すごくおいしそうだ。

「おいしそうー」

「薬味も色々用意してあるから、二人ともたくさん食べてね」

「よし羽未、たくさん食べような」

「うん！ いただきます！」

しろはが席に着くのを確認してから、家族三人一緒に食事を始めた。

「おかやまばーばのそうめん、おいしかったー」

食べ過ぎたのか、お腹を押さえる羽未を微笑ましく見ながら、食休みをする。薬味のミョウガが美味しくて、俺もつい食べ過ぎてしまった。

「そういえば、お昼からは鴎が羽未と遊んでくれるらしいぞ」

「そうなんだ。鴎、島に来てるんだね」

「ああ。恒例のサマーキャンプやるって、意気込んだ」

「きつと他にも色々なイベントを企画してくれてるんだと思うよ。鴎、本当にそういうの得意だし」

「期待の若社長……じゃない。団長だもんな」

「そうそう。鴎団長」

以前のイベントで、船長のコスチュームを着てノリノリで口上を述べていた鴎の姿を思い出して、二人で笑う。あれはあれですごく似合っていた。

「羽未ちゃん、むかえにきたよー」

「ウミさーん、遊びに行きましょー」

……噂をすればなんとやら。その鴎団長が迎えに来てくれたみたいだ。一緒に紬の声もした気がするけど、ビラ配りは終わったのかな。

「ほら羽未ちゃん、お友達が来たよ。お出迎えしないと」

「はーいー」

しろはに促されて、座っていた羽未が元気良く立ち上がって玄関へと向かう。

羽未も同級生の友達がいなわけじゃないんだけど、俺の友人たち

とも年齢関係なく一緒に遊んでいた。

皆が島のおにーさん、おねーさんとして羽未の相手をしてくれるおかげで、俺たちも民宿の仕事に集中できるわけだし。皆には感謝しかない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……今日のお客さんは夕飯希望だったよね。それじゃ、買い出しに行ってくるから」

「ああ。よろしくな」

……羽未が出かけるのを見送った後、俺としろはは手分けして仕事に取りかかる。

料理担当のしろはが買い出しをしてきている間に、俺はお客さんの風呂とトイレ、洗面所の掃除をする。

家庭的な雰囲気溢れる、一日一組限定の小さな民宿……つてのがコンセプトだけど、さすがにこの辺りは俺たちと共用にするわけにはいかなかったし。加藤家を改装した時に新しくシャワートイレ付きの立派なユニットバスを設置した。

でも、これはあくまでお客さん用。俺たちは相変わらず、ハイテクかローテクかわからないお風呂を使っていた。

「……よし、だいたいこんなもんかな」

水回りの掃除を終えて、今度は客室の掃除に取りかかる。

玄関から見て左側の、曲がりくねった廊下を抜けた先にある部屋。そこが客室だった。

「この部屋の掃除も簡単なもんだよな」

ここは以前俺が下宿していた部屋だし、掃除も手慣れたものだった。掃除機を使うまでもなく、ほうきとちりとりだけであったという間に終わってしまった。

「鷹原、いるか？」

そして掃除用具を片付けていると、玄関から天善の声がした。出てみると、家の前に軽トラが横付けされていた。

「頼まれていた扇風機の修理が終わったから、持ってきたぞ」

「え、もう終わったのか。天善、さすがだな」

先日、壊れた扇風機がいくつも出てきたから、天善に修理を依頼していたんだけど。家業の修理屋を継いだけあって、さすが仕事が早い。

「全部で三台だったな。客室の方に運んでおけばいいか？」

「ありがとう。玄関に置いてくれれば、後で片づけるよ」

「わかった。もし不具合が起こるようなら、また電話してくれ」

そう言いながら、天善は軽トラの荷台から扇風機を運び入れてくれた。

加藤家はクーラーがついていないし、暑がりなお客さん用に扇風機は多めに用意しておきたかったから、修理が間に合ってよかった。

「そういえば紬から聞いたぞ。静久がもうすぐ島に来るんだってな」

修理代金を支払いながらそんな話をする。天善と静久は結婚してまだ一年も経っていないんだけど、静久は芸術家という仕事の関係か、なかなか島に戻って来れない。

「確か、6月に一度帰ってきて以来だよな。天善も待ちに待ったんじゃないか？」

「ふっ、毎日かかさず電話はしているし、別に寂しくなどないさ」

天善はそう言うけど、言葉の端々に嬉しさがにじみ出ているのがわかる。

「もし俺がしろはや羽未と何ヶ月も離れて暮らすことになったら、寂しくて死んじゃうけどなあ」

「た、例え二人の距離は離れていても、混合ダブルスの結束は揺るがないさ。それではな」

天善は突然の卓球例えで茶を濁すと、そのまま足早に軽トラに乗り込んで走り去っていった。話していて、急に恥ずかしくなったらし

い。

「……天善君、すごく慌ててたみたいだけど、何かあったの？」

「ああ……しろは、おかえり」

そんな軽トラを見送った直後、同じ方向から買い出しを終えたしろはが帰ってきた。

「扇風機の修理が終わったらしくくてき。持って来てくれたんだ」

「もう修理できたんだ。さすがだね」

そう言うしろはは、両手に大きな袋を持っていた。食材が入ってるんだらうけど、重そうだ。

「しろは、台所まで荷物持とうか？」

「ううん、大丈夫。それより、庭の草取りと玄関前の掃除をお願いできるかな。お客さんを迎えるのに、あの庭はどうかと思うし」

そう言いながら横目で庭を見る。確かに、ちよつと草が伸びてるかも。

「わかった。すぐにやっておくよ」

「うん。よろしくね」

しろはは俺に少しだけ微笑んだ後、台所の方へ向かっていった。相変わらず、若女将は手厳しい。軍手、どこかにあったかな。

「ちーっす」

「お邪魔するぞ」

結局軍手は見つからず、素手のまま庭の草取りをしていると、今度は良一とのみきがやってきた。

「あれ？ 二人とも、どうしたんだ？」

「デートのついでに寄った」

「ち、違うぞ。良一が魚を獲りすぎたから、おすそ分けに来たんだ」

笑みを浮かべる良一とは対照的に、のみきは顔を真っ赤にしながらそう説明する。言われてみれば、良一の手にはビニール袋が握られていた。

「おお、いつもありがとうな。直接受け取りたいんだけど、手がこんな

だからさ。今、しろはを呼ぶよ」

俺は土にまみれた両手を見せる。さすがにこの手じや受け取れない。俺は家の中に向かって、しろはの名を呼ぶ。

「あれ、どうしたの？」

「しろはと羽未ちゃんにおすそ分けだ」

そして出てきたしろはへ、良一が言いながら袋を手渡していた。なんか、俺の名前が入っていない気がするけど。

「今日のみきも一緒なんだね。珍しい」

「良一とデートなんだってさ」

「だ、だから違うぞ！ たまたま、方向が同じだったただけだ！」

俺が話に乗つくと、のみきはもう一度否定してきた。この二人も結婚して結構経つんだけど、いつまでも恋人同士のノリだ。見る方としては楽しいけど。

「そうだ。二人とも、ちょっと待つてて」

そんな中、しろはは受け取った袋を持って家の中に戻り、すぐに別の袋を持って戻ってきた。

「今朝、たくさんの野菜をもらったんだけど、少し持って帰らない？」

「キュウリやカボチャなんだけど」

「お、サンキュー。のみきがカボチャ好きですよー」

もらった魚のお返しにと、しろはも野菜をおすそ分けしたみたいだ。二人はそれを受け取ると、嬉しそうに帰っていった。

「……思わぬ貰い物だったな。のみき、カボチャ好きだもんな」

「べ、別に取り立ててカボチャが好きというわけじゃないぞ。お前の作るカボチャコロツケが好きなだけだ」

「コロツケが好きとか、相変わらずお子様舌だよなー」

「う、うるさい」

去っていく二人から、そんな会話が漏れ聞こえた。うん。相変わらずラブラブみたいだ。

「……さて、俺も草むしりを終わらせないと」
そんな二人の背中が門の向こうに消えるまで見送ってから、俺も草むしりを再開した。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「すみませーん！」

「あ、はーい！」

……やがて時間が過ぎ、16時。今日のお客さんがやってきた。
草むしりを終えて、台所のしろはを手伝っていた俺は、急いで玄関へ出迎えに行く。

「お待ちしていました。加藤家へようこそ」

「おおー、良い感じの古民家だねえ。瑚太郎君」

「ああ、わびさびがあるよな」

「天王寺瑚太郎さま、2名でよろしいですか」

「そうです。お世話になります」

玄関に出てみると、そこには一組の男女が立っていた。女性の方は茶色い髪の一部を三つ編みにした特徴的な髪形をしていて、男性の方にべったりくっついていて。男性の方はというと、女性より少し薄い髪色で、優しそうな目をしていて。苗字が同じだし、夫婦なんだろう。

「本日は観光ですか？」

「ええ、ちよつと新婚旅行で」

「そこまで正直に言うやつがあるかい……ていつ！ 癒し拳！」

「おうっ」

当たり障りのない会話をしようとしたら、そう口にした男性の顔に女性が笑顔でパンチをお見舞いしていた。対して痛そうには見えなかったけど、男性は緑色の光に包まれながら倒れ込んだ。なんだろう今の。目の錯覚かな。

「ちゃんと回復してるから平気。そのうち復活すると思うから、先にお部屋に案内してほしいな」

そう言って、女性は何事もなかったかのように男性の荷物を手に取る。

「は、はい。お部屋はこちらになります」

俺はその笑顔に謎の恐怖を感じながら、客室へと案内することにした。

「……おお、イメージ通りだねえ。良き良き」

「へえ。昔のばあちゃん家とかこんな感じだよな」

二人を部屋に案内して、設備やトイレの場所、お風呂の時間など諸々の説明をする。

その間も、二人は興味津々に室内を見渡していた。どうやら喜んでくれているみたいでよかった。

ちなみに女性の言う通り、男性はすぐに復活してきた。心なしか元気になってる気がするし、本当に回復したのかな。

「それでオーナーさん、ごはんは何時？」

「18時を予定しています。お部屋にお運びしますので、それまでごゆっくりお過ごしください」

基本、お客さんが3人までなら夕食は部屋で食べてもらうことになっている。4人以上だと部屋に配膳しきれないから、しろは食堂を使ってもらうことになっている。

その食堂も民宿を始めた時に一度閉じてしまったんだけど、しろはの思い出が詰まった場所ということもあって、最近はなにかと理由をつけて使うようにしていた。

「島といえば、新鮮なお魚だよねえ。風祭には海がないし、お刺身楽しみ」

……その時、そんな女性の呟きを俺は聞き逃さなかった。なるほど、女性の方はお刺身希望か。あとでしろはに伝えておこう。

「それでは、失礼します」

俺はそう考えながら二人に頭を下げ、部屋のふすまに手をかける。

「あ、オーナーさん」

「え？　なんでしよう？」

そのまま部屋を後にしようとしたら、女性の方に呼び止められた。「晩ごはんまでもう少し時間があるし、近場のスポット巡りをしたいんだけどさ」

女性はその手に、港で配られている鳥白島観光協会のパンフレットを持っていた。

確かあのパンフレット、鴫とのみきが監修して何年か前に新しくしたやつだ。表紙には静久が作ったオブリジェや、紬の灯台が大きく載っている。

「このパンフレットに載ってる静久先生のアート作品は大体見て回ったんだけど、このおっぱい岩つてのだけ場所がわからなくて見れてないの。ここの近くにあるらしいんだけど、オーナーさん、わかる？」

「お、おっぱい岩ですか？　一応、この民宿を出た道路の向かいにそれらしいものがありますよ」

そういえば加藤家前の通りにいある岩に、静久がそんな名前を付けていたような気がする。言われて思い出したけど、あれ、パンフレットに載ってるんだ。

「小鳥、そんなの見なくていいだろ」

「瑚太郎君、おっぱいを笑う者は、おっぱいに泣くんだよ？　しっかり押んで、お賽銭に入れとこう。無論、小銭で」

女性は握りこぶしを作っていた。俺からしてみればただの岩だし、そこまで気合い入れて見るものかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ほらほらいくよ瑚太郎君！」

「そ、それじゃ、夕飯までには戻ってきます」

「はい。いつてらっしゃい」

次の行き先が決まると、二人は荷物を置くだけおいて、大した休憩も取らずに出かけていった。

男性の方、なんだかんだで女性に振り回されてる気がする。今も手を繋いでいたし、夫婦仲は良いみたいだけど。

「おとーさーん!」

そんな二人を見送った直後、反対側の道から羽未の声がした。そろそろ17時近いし、帰ってきたみたいだ。

「ああ、羽未、おかえり……」

「おとーさーん! たいへーん!」

出迎えてあげようと声のする方へ顔を向けると、切羽詰まった顔をした羽未がこつちに走ってきた。

「え、大変?」

「いきだおれー!」

行き倒れ???

「緊急搬送だよ——!」

羽未の言葉の真意を計りかねていると、その羽未に続くように鴉がスーツケースを押してきた。

その上には突っ伏すように、一人の女の子が乗っていた。ぐったりしている。

「鴉、その子どうしたんだ?」

「さつき、そこで拾ったの!」

犬猫じゃないんだから、その表現はやめてあげて。

「うう、食べ物……」

その時、赤髪の少女はスーツケースに突っ伏しながらそう呻いた。その言葉に合わせる様に、身につけた着物の裾が僅かに振れる。今時着物? 珍しいな。

「ちよ、ちよっと待つてろよ!」

って、今はそんなことを気にしている場合じゃない。俺は家の中へ飛び込むと、そのまま台所のしろはに声をかける。

「しろは、何かすぐに食べられそうなものがないか」

「え？ 急にどうしたの？」

「ちよつとわけありみたいでさ。頼むよ」

「……わかった。ちようどご飯が炊きあがったし、おにぎりにするね」
俺の様子を見て只事ではないと悟ったのか、しろはそれ以上言及することなく炊飯器の蓋を開けると、まだ熱いであろうご飯を素早く握っておにぎりにしてくれた。さすが、手慣れたる。

「できたよ。これをどうするの」

「ありがとう。行き倒れがいるんだ！」

俺はおぼんに乗ったおにぎりを受け取ると、そのまま玄関へと引き返した。

「おーい、大丈夫か。このおにぎりを食べる」

俺が戻ってみると、鴎が肩を貸したのか、着物の少女はスーツケースを降りて式台の所に座っていた。

「お、おお……おむすびじゃないか」

少女はそのおにぎりを見るや、目を大きく見開いてわなわなと震えていた。おむすび？ おにぎりじゃないのか？

「……いただきますー！」

そしてその場で正座をして、きちんと手を合わせてからおむすびにかじりついた。

「はむっ。むぐむぐ。もぐむぐ……」

「いやー、すごく美味しそうに食べるねえ」

俺の隣に立つ鴎が言う通り、見事な食べっぷりだった。まだ熱いはずなのに、それをものともせず口へ放り込んでいく。

「そのおむすびはしろはが作ったんだ。後でお礼を言うんだぞ」

「もぐ……しろはっ」

「俺の妻だよ。ここで一緒に民宿をやっていて、たまたまご飯があったんだ」

俺は奥の台所を指差しながら、そう説明する。少女はおむすびを頬

張ったまま、視線だけをそちらへ向けていた。

「なるほど。つまり、キミとしろはさんの繋がりが、僕の命を繋いだということだね……むぐ」

「え？ いや、そんな大袈裟なことじゃないと思うけど……」

「いやいや、このおむすびに込められた愛情という名の隠し味。しかと感じたぜ？」

「愛情？ おむすびに？」

「そうさ。おむすびはお米で人と人を結ぶものだしね……ごちそうさま」

そう熱弁を振るいながらも、少女はしろはが用意した3つのおむすびをあっという間に平らげてしまった。なんて早さだ。

「いやー、食べた食べた。ありがとう。おかげで助かったよ」

着物の少女はお腹を押さええながら、満足そうな笑みを浮かべる。あれだけおいしそうに食べてもらえれば、お米としても本望だろうな。

「ねえねえ。ところで、どうしてキミは道端に倒れてたの？ 私、びっくりしちやつただけだよ」

少女が空腹を満たしたのを見計らって、鴉が一番にそう聞いていた。言葉からして、道端に倒れているのを最初に見つけたのは鴉みただし、その経緯は気になるところだろう。

「どうしてって、お腹が空いていたからに決まってるじゃないか」

この子もそう胸を張って言わなくても。というか、お腹が空いていても普通行き倒れにはならないと思う。

「それに、僕の名前はキミじゃないよ。 識さ」

「シキ？ どんな字を書くの？」

「知識の識さ」

「識……変わった名字だな」

もうこの島に住んで長いけど、聞いたことのない名字だった。

「いや、識は名前さ。名字は神山って言うんだ」

「あ、そうなのか」

神山識。どちらにしても名字は聞いたことがなかったし、たぶん本土からやってきたんだろう。

「それで、君たちは？」

「私は久島鷗。よろしく、シキシキ！」

「ぶえっ!？」

鷗は本人の許可も得ず、さっそくあだ名で呼んでいた。相変わらずマツハで距離を詰めていくやつだ。

「俺は鷹原羽依里。さっきも言ったけど、妻のしろはこの民宿を経営しているんだ」

「鷗先輩と羽依里くんだね。覚えてぜ」

「か、鷗先輩……!？」

よくわからないけど、そう呼ばれた鷗の瞳がキラキラと輝いていた。

ところで、どうして俺はくん付けなんだろう。別に先輩呼びしてもらいたいわけじゃないけど、識の方が随分年下に見えるのに。

「じー……」

その時、視線を感じた。思わず振り返ると、いつの間にか家の中に入っていたらしい羽未が、おずおずとこちらを見ていた。

「ああ、羽未。ちよつとこつちに……」

「あれ? うみさんじゃないか。やつと見つけたぜ！」

「……?」

そんな羽未をこつちに呼ぼうとしたら、先に識が嬉しそうに声をかけていた。

一瞬、二人は知り合いなのかとも思ったけど、声をかけられた羽未は首をかしげていた。もしかして、識が一方的に知ってるだけなのかな。

「羽未ちゃん、ちよつとお手伝いしてほしいんだけど」

「うんー」

そんな折、台所のしろはに呼ばれて羽未の姿が奥に消えた。その場に残された俺たちの間には、何とも言えない空気が流れる。

「えーつと、今のは俺の娘だけ……識は羽未を知ってるのか?」

「いや……どうやら、人違いだったみたいだぜ」

そう言つて、何とも言えない笑みを浮かべていた。なんとなく、腑

に落ちないのかな。

「それより、キミ達は僕の命の恩人だ。お礼になんでも一つ、願い事を叶えるぜ?」

「え、なんでもいいの!?!」

識の言葉を聞いて、鴟の目が輝いた。そういうの、好きそうだな。

「ああ、なんでもいいぜ?」

「じゃあまず、その願い事を三つに増やしてほしいんだけど!」

「……鴟先輩、強欲は身を滅ぼすぜ?」

……鴟は自信満々にそう頼んでいたけど、どうやら駄目みたいだ。某千夜一夜物語の魔人もその手の願いには厳しいし。

「じゃあ、私と友達になろう!」

「それならお安い御用さ!」

願い事を増やす願いが却下された鴟は、続けてそうお願いしていた。これは即了承されたらしい。

「ありがとう! それで、羽依里はどうするの?」

「そうだなあ……じゃあ俺の願いだけど、少しまいいから民宿の手伝いをしてくれないか?」

俺は少し考えて、そう口にしていった。

夕食の準備をしているしろはは、羽未の手も借りたいくらい忙しいみたいだし。識に手伝ってもらえば少しは楽になるかもしれない。

「お、鬼だ……」

「え?」

「対価に労働を課すなんて……まさに鬼の所業」

識は涙ぐみながら、何か言っていた。

「いや、識は先におむすび食べただろ? その対価ってことで……」

「うぐっ……ひっく……」

うまく意図が伝わらなかつたのかと思った俺は、もう一度丁寧に説明する。しかしその間にも、識はその顔を歪めていく。

「ぶえええええー! 羽依里くんの鬼……!」

そして識は俺の言葉に耳を貸すことなく、泣きながら走り去って行ってしまった。

「あーあ、羽依里が泣かした」

「え、俺が悪いのか……?」

予想外の行動に呆気にとられていると、鴎がそう呟いていた。それにしても、ものすごい足の速さだった。

「……それじゃ、そろそろ私も帰るね。羽未ちゃんによろしく」

「ああ。鴎、羽未の面倒を見てくれてありがとうな」

「ううん。私も楽しかったし」

俺たちは敢えて何も見なかったことにして、別れの挨拶を済ませる。これが大人の対応ってやつだ。

「また羽未ちゃんにパリンキー劇場見せてあげるって伝えて。それじゃー」

鴎は元気に手を振りながら去っていった。ところで、パリンキー劇場ってなんだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……うん。完成」

……その後はしろはの元へ行き、夕食の準備を手伝った。

俺は未だまともに料理はできないけど、家族で同じ作業に取り組むこの時間が好きだった。

「しろは、今日のメニューは?」

「メインは良一からもらった魚の煮つけと、お刺身だね。山菜のおひたしに、夏海ちゃんが持って来てくれた野菜もサラダにしたよ」

「よし、それじゃ、運ぼう」

天王寺夫妻も少し前に帰ってきたみたいだし。いい頃合いだろう。「失礼します。夕飯をお持ちしましたー」

「い、いらっしやいませ」

俺を先頭にして、家族で食事を運ぶ。

「こちらが料理を担当している家内です」

「ど、どうも……」

だいぶ慣れてきたけど、しろはは時々人見知りが発動する。島民相手なら大丈夫なんだけど、民宿のお客さんは基本初対面だしなあ。

「おお、お刺身！ 美味しそうー！」

「夕方揚がったばかりの魚ですので、新鮮ですよ」

「どうぞ、めしあがれー」

「こっちは娘です。ほら、挨拶して」

料理の説明もしつつ、一緒に家族も紹介する。これがいつもの流れだった。

「一時間ほどしたら器を下げに来ますので。それでは、失礼します」

最後にそう伝えて、静かにふすまを閉じる。

「……この魚、美味しいねえ」

「このおひたしもシャキシャキして最高だぞ」

去り際、ふすまの向こうからそんな会話が聞こえた。

直接感想は聞けないんだけど、お客さんがしろはの作った料理を美味しく食べてくれている。それがわかるだけで嬉しかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おしようゆとつてー、おとーさん」

「ほら。辛くなるから、あまりお刺身につけすぎちゃ駄目だぞ」

「うんー」

お客さんに食事を提供した後は、俺たちも自室で夕食を済ませる。作る手間を考えて、お客さんがいる時は基本お客さんと同じものだ。

どうしても魚料理が主になるけど、お客さんによっては夕飯は外で食べるから不要という人もいるし。毎日というわけじゃない。

「……ごちそうさまでしたー。いやー、おいしかったよー」

食休みをしていると、女性の方がわざわざ部屋から食器を運んできてくれた。

「あ、奥様、わざわざすみません」

俺は慌てて立ち上がって、それを受け取る。

「おおう……奥様なんて呼ばれ慣れてないから、心臓に悪い」
「え？」

「オーナーさん、ここは小鳥さんと呼んでおくれ」

「は、はあ……わかりました」

よくわからないけど、本人がそう呼んでくれというんだし。そうすることにしよう。呼ぶ機会があるかはわからないけど。

「それじゃ、食後の夕涼みに行つてきまーす」

「その間にお布団をご用意させていただきますね。お風呂は好きな時間に入って頂いて構いませんが、フロントの方は20時までです。で、よろしくお願ひします」

「わかりましたー」

玄関の方へ向かう二人にそう声をかける。加藤家ではお風呂をセルフで沸かしてもらおう代わりに、入浴時間は特に決めていない。時間指定とかされると、のんびり入れなさそうだし。

「小鳥、風呂は一緒に入るのか？」

「入るかいつ」

「おうっ」

悪戯っぽくそう言った男性が裏拳でぽこんと殴られていた。また回復したのかな。

「……うーん。さすが新婚さんだなあ」

二人の姿が見えなくなつてから、俺は思わずそう呟く。

今思い返せば、俺としろはの新婚時代もあんな感じだった。まず最初は一緒にお風呂からよーって蒼からアドバイスをもらって、俺が何度もしろはに迫ったこともあったっけ。

……しつこく誘いすぎて、最後はどすこい言われたけど。

「……さて、変なこと思い出してないで、布団を用意しておかないと」
俺は蘇ってきた思い出を懐かしみながら、客室へと向かった。とり
あえず布団、二組で良いんだよな……？

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……やがて20時にフロントを閉鎖して、家族の時間になる。

一応、何かあったら呼んでくださいとお客さんには伝えているけど、実際に呼ばれたことは殆どない。一度、部屋に黒光りする虫が出たと呼ばれたくらいだ。

「しろは、今日もお疲れ様」

戸締りを確認して自室に戻ると、先に羽未と入浴を済ませたしろはは日課の家計簿と日記をつけていた。食材料費やお客さんの情報、それに、日々の暮らして気になったことなどを書いていっているらしい。

「料理だけじゃなく、書き物まで任せちゃって悪いな」

「曲がりなりにも食堂を経営していた経験があるからね。できたら羽依里にももつと頑張ってほしいけど」

「うーん、それなりに頑張ってるつもりなんだけどなあ」

昔から運動一辺倒だったせいかな、どうも机仕事は苦手だ。

「おとーさん、えにつっきー」

しろはから痛い所を突かれて頭を掻いていると、絵日記帳と色鉛筆を手にした羽未が笑顔で俺の膝にやってきた。洗いたての髪から、シャンプーの良い匂いがした。

「よしよし、おとーさんが書き方を教えてあげるからな」

そう言つて、俺は羽未と一緒に絵日記の最初のページを開いた。

「あ……羽未はもう寝ちゃったのか」

風呂から戻つてみると、部屋の明かりは小さくなっていて、隅に置

かれた机の卓上ライトだけが灯っていた。

「うん。絵日記を書き終えたら、すぐに寝ちやつたよ。余程疲れてたんだね」

少し書き方を教えたら、羽未はすぐに自分で書くと言って色鉛筆を握った。集中していたし、邪魔しちや悪いと思って俺は風呂に行っただけど、その間に書き終えてしまったらしい。

「今日も朝から神社で虫取りしたり、遊びまわってたしなあ。疲れたんだろうな」

しろはが敷いてくれた布団の中で、すやすやと眠っている羽未の頭を撫でてあげる。うっすらと笑ってるし、楽しい夢でも見てるんだろう。

「……あ」

すると、その枕元に置かれた絵日記帳が目についた。

「さて、羽未はどんな絵日記を書いたのかな……」

俺はおもむろに、そのページを開いてみる。

『7月25日 天気：はれ

きようは、かもめさんやつむぎさんとあそんだ。かえりみち、いきだおれのおねーちゃんをみつけた。おねーちゃんはかもめさんのスーツケースにのせられて、おうちにきんきゅーはんそーされた』

……そんな文章の上に、スーツケースに乗って目を回している識の絵が描かれてあった。できたらおとーさんとの虫取りについて書いて欲しかったけど、夕方の識との出会いのインパクトが強すぎたんだろう。

「おお、初めて書いたにしては、絵も文も上手じゃないか。さすがしろはの血筋だよな」

「……ちよつと羽依里、勝手に読んじやダメだよ」

その時、しろはからそう注意された。俺は反射的に絵日記帳を閉じる。

「ごめんごめん。最初だし、どんな風にか書いてるのか気になっちゃってさ」

「……ところで羽未ちゃんの自由研究、どうして絵日記にしたの？」

何か理由があるんだよね？」

そしてしろは書き物の手を止めて、俺の方に向き直る。ここは理由を話して置いた方が良くかもしれない。

「……うん。この絵日記を通してき、羽未に教えてあげたいんだ」

「何を？」

「……夏休みの過ごし方」

「夏休みの、過ごし方？」

「そう。ほら、誰でも一番楽しかった夏休みつてあるだろ？ 小さなころのき」

「うん」

——どんなに遊んでもやる事が尽きなかった、あの夏休み。

——ありふれた毎日の中で、大人になっていく中で、俺たちがいつの間にか忘れてしまった、あの眩しさを。

「初めての夏休みの過ごし方を、羽未に教えてあげたいんだ」

「……そういうことなら、良い考えかもね。絵日記」

「だろ」

意図を理解してくれたしろは、羽未の寝顔を見つめながら優しい表情を浮かべる。

「それでき。羽未のために、毎日イベントをしてあげようと思うんだ」

「え？ イベント？」

「そう。どんな小さなことでもいいんだ。何を絵日記に書こうか悩むくらい、毎日イベントを用意してあげたい」

羽未にとって初めての夏休みを、眩しい思い出でいっぱいにしてほしい。

それを手助けするのも、親の務めだと思うし。

「でも、私たちも忙しいんだよ？ 民宿もあるし」

「そこは、島の皆にも協力してもらってさ」

確かに俺としろはだけじゃ厳しいと思うけど、今の俺には頼りになる島の仲間たちがいる。

「皆も忙しいかもだけど、協力すれば……何とかなると思うんだ。駄目かな」

「……わかった。いいよ」

俺の熱意が伝わったのか、最初は驚いたような顔をしていたしろはも、次第に表情が緩んでいった。

「だけど、島の皆の説得は羽依里がしてね。あと、私もできるだけ手伝うけど、本業を疎かにするわけにはいかないし。そこは頑張ってね。おとーさん」

「ああ。しろは、ありがとうな」

「ううん。私も羽未ちゃんには楽しい夏休みを過ごしてもらいたいし」

「……よし。そうと決まれば、明日は朝から皆に相談して回らないとな」

「そうだね。なら、羽依里はそろそろ休まないよ。明日は早いよ?」

「朝早いのはしろはも同じだろ。明日はお客さんの分の朝ごはんも作らなきゃいけないだしさ」

「私はいいの。慣れてるから」

しろははそう言うのと、また机の方に向き直ってしまった。どうやら、ここは言われた通りにした方がよさそうだ。

「わかった。それじゃ、先に休ませてもらうよ。しろはも無理しないでくれな」

「うん。ありがとう。それじゃ、おやすみ」

「ああ。おやすみ、しろは」

俺はしろはに挨拶をして、布団に潜り込む。

……明日になったら、島の皆に話をしてみよう。

皆のことだし、きつと二つ返事でOKしてくれると思う。

俺は隣で眠る羽未の頭をもう一度だけ撫でてから、瞼を閉じた。

……きつと、楽しい夏になる。

第一話・完

第二話 7月26日

「羽依里さん！ 羽未さん！ 朝ですよー！」

……朝。今日も夏海ちゃんの声で目が覚める。

「ああ、おはよう。夏海ちゃん」

「しろはさんからこの時間に起こすように言われてたんですが、早かったですか？」

「いや、大丈夫だよ。いつもありがとうね」

俺はそうお礼を言っただけで身体を起こす。部屋の時計を見てみると、6時前。夏だから明るんだけど、なかなか早い時間だった。

「いつも思うけど、夏海ちゃんは本当に朝に強いよね」

横で気持ち良さそうに眠っている羽未を優しく揺り起こしながら、背後の夏海ちゃんにそう話しかける。

「えへへ、鏡子さんはもっと早いですよ。私が起きる頃には、もう畑に出て収穫作業してます」

朝獲れ野菜って新鮮そうだし、鏡子さんは本当にその手の仕事が向いているのかもしれないなあ。

「それじゃ、確かに起こしましたからー！」

そしてぱたぱたと廊下を走っていった。今日は野菜の入った袋を持っていなかったし、先にしろはに預けたのかな。

「しろは、おはよう」

「おはよー。おかーさん」

羽未と二人で身支度を整えて、台所へと向かう。そこではしろはが忙しそうに朝食の準備をしていた。

「おはよう。さっそくだけど、お皿出すの手伝ってくれるかな」

「わかった。このサイズでいいのかな？」

「うん。落とさないように気を付けてね」

「うみもてつだうー」

「それじゃ、羽未ちゃんには冷蔵庫から卵を出してもらおうかな」
「うんー」

お客さんがいる朝は、こんな感じに家族でお客さんの分も朝食を用意するのが通例になっていた。

ちなみに、この食事は別途料金を取っておらず、サービスだ。

正直、料金をもらった方が良いんだろうけど、そうすると断るお客さんもいるかもしれないし。

これには、朝ごはんは一日の活力だから、しっかりと食べてから出発してほしい……という、しろはの優しさが根底にあるらしい。

「……うん。完成」

やがて、お客さんの朝ごはんが完成した。炊きたてごはんは大根の味噌汁、卵焼き、作り置きしておいたきんぴらごぼう、野菜の浅漬け。本当に簡単なものだった。

「それじゃ、運ぼうか」

時計を見ると7時過ぎ。これくらいの時間なら、もうお客さんも起きているだろう。

「しろはさーん、お醤油借りていいですかー?」

そして、普段は俺たちの分の朝食も一緒に用意するんだけど、今日は夏海ちゃんが何か作ってくれるみたいだ。すごく香ばしい匂いしてる。

何を作ってくれるのか楽しみにしつつ、しろはと二人で朝食を持って客室へと向かった。

「おはようございます。朝食をお持ちしました」

俺が先頭に立って、ふすま越しにそう声をかける。

「あー、ありがとうございます！ 申し訳ないですが、そこに置いてお

「いえ、もらえますか？ 嫁がまだ寝てるんですよ！」

すると、ふすま越しに男性の声が返ってきた。あ、まだ寝てたのか。

「おーい、小鳥！ 起きろ！ 朝飯だぞー！」

起こす声と同時に、なんだか小銭の落ちるような音もしていた。よくわからないけど、置いておいてくれと言われたんだし。俺たちは食事をつすまの前に置いて、自室へと戻ることにした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「はい！ 羽未さん、おまたせしました！」

自室に戻ると、先に食卓についていた羽未に夏海ちゃんが朝ごはんを提供してくれていた。

「え、チャーハン!?」

「はい！ 朝チャーハンですよ！」

「やったー！」

鏡子さんを筆頭に、岬家の一族は偏食になる傾向があるんだけど……夏海ちゃんもその例に漏れず、彼女が作る料理は基本チャーハンだった。

でも羽未はチャーハン大好きだし、朝からチャーハンが食べられると知って嬉しそうだ。しろはは一汁三菜を基本としているから、朝からチャーハンなんてのはまずないし。

「夏海ちゃん、わざわざ作ってくれてありがとうね」

「いえ、フライパンで作ったので、しろはさんの味には到底及びませんけどー！」

「そんなことはないよ。美味しそうだし」

素直な感想を言いながら、俺としろはも羽未を挟むように食卓につく。夏海ちゃんは身体が小さくて中華鍋を扱う腕力がないからか、いつもチャーハンをフライパンで作っていた。本人は謙遜しているけど、このチャーハンにはこのチャーハンの良さがある。

「なつちゃん、たべていいー?」

そんな中、羽未は早くもスプーンを手にして、待ちきれない顔だ。

「羽未ちゃん、お行儀悪いよ? まずはきちんと挨拶しないと」

「あ、うん……」

しろはにそう注意されて、スプーンを置いて静かになってしまった。嬉しいのはわかるけど、まずは挨拶しないとね。

「それでは、いただきますしよう」

「いただきますーす」

それから改めて挨拶をして、食事を始める。

「んー、おいしいー」

いの一番にチャーハンを口に運んで満面の笑みを浮かべる羽未を隣に見ながら、俺も夏海ちゃんのチャーハンを一口食べる。

……なんだろう。お米の中に、シャキシャキとした変わった触感が混ざっている。

「あ、もしかしてこれ、枝豆が入ってる?」

「はい! 枝豆チャーハンです!」

卵とネギを従えて、夏野菜の代表格、枝豆が刻まれて入っていた。

これは食感が楽しい。

「あ、これはおいしいね」

しろはも枝豆チャーハンを食べながら、うんうんと頷いていた。どうやら合格点みたいだ。

「……でも食感はいいけど、素材の味が薄いからどうしても薄味になるよね。ここは、少しニンニクを入れてパンチを効かせてみてもいいかも」

「でも朝からニンニクを使ったチャーハンとなると、嫌う人がいるんじゃないですか?」

「あ。そうだね。それなら、代わりに味噌を入れてみるとか。味に深みが出るし」

「それもアリですね。後、食感を楽しむならウインナーを追加しても……」

それからしばらくの間、しろはと夏海ちゃんはチャーハン談議を楽

しんでいた。この二人のチャーハンへ対する情熱もなかなかだよなあ。

「いやー、ごちそうさまでしたー。卵焼き、甘くって美味しかったよー」

朝食を終えてお茶を飲んでいると、昨日と同じようにお客さん……小鳥さんが食器を下げに来てくれた。

「ああ、小鳥さん、わざわざすみません。前の廊下に出しておいてくれれば、後で取りに伺いましたのに」

俺は反射的にそう言ってお膳を受け取る。昨日はないと思っただけど、名前を呼ぶ機会、あったよ。

「え、小鳥さんって、もしかして、あの天王寺小鳥先生ですか!？」

……その時、夏海ちゃんが興奮した様子で立ち上がり、目を輝かせながら小鳥さんの方に詰め寄っていた。いったいどうしたんだろう。

「え、夏海ちゃん、もしかして知り合いとか?」

「違います!　もしかして羽依里さん、この人が誰か知らないんですか!？」

「え、知らないけど」

「天才ガーデナーの天王寺小鳥さんですよ!　これまで手掛けたガーデンや菜園は数知れず、国営放送でも冠番組を持つてるんですよ!」

夏海ちゃんは鼻息荒くそう話していた。え、この人、そんなすごい人なの?　

「この人は野菜に関する知識もすごくてですね!　私、毎週日曜のガチの園芸、鏡子さんと一緒にいつも見てるんですよ!　先生、握手してください!」

「いやー、照れるねえ〜」

夏海ちゃんに懇願されて、小鳥さんは照れ笑いを浮かべながら握手に応じていた。いや、改めて言われても、そんなすごい人には見えないうんだけど。

「私、リトルフォレスト723号が好きです!」

「あの果樹園と畑を融合させた奴だねえ。きちんとお手入れすれば、四季を通じて楽しめるのがウリなんだよ」

俺にはよくわからないけど、そんな話をしていた。そういえば、夏海ちゃんたちは畑をやってるんだもんな。そういうの、色々と参考にしているのかもしれない。

……もしかして、知らず識らずのうちにすごい人を泊めてしまったのかな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「どうも、お世話になりましたー」

それからしばらくして、天王寺夫妻は笑顔で加藤家を後にした。帰りの船の時間まで、港の方をゆっくり見て回る計画らしい。

昨日もそうだったけど、この島を楽しんでくれているみたいで俺たちも嬉しい限りだ。

「……ごめんなさい。つい、取り乱してしまっ

た。そんな二人を見送った後、夏海ちゃんはそう言って頭を下げている。

「いいいいいよ。小鳥さんも喜んでくれてたみたいだしね」

「そうですね！ 小鳥さんが泊まってくれたんですし、この民宿もきつと有名になりますよー！」

「はは、そうだといいね」

そういえば、この宿のことをブログにアップしてもいいかと聞かれたから、とりあえずOKしておいた。ところで、ブログってなんだっけ。

「……そうだ。夏海ちゃんに話があるんだけどさ」

「え、なんですか?」

「実はさ……」

そこで俺はちょうどいいタイミングだと思い、この夏に羽未にして

あげたいことについて、夏海ちゃんに話をした。

「……わかりました！ 私もできる限り協力させてもらいます！」

「突然な話だけど、いいの？」

「もちろんです！ 夏のイベント、私の時もしてくれてましたし、今度は私がお返しする番です！」

話を聞いた夏海ちゃんは握りこぶしを作って気合を入れていた。そういえば昔、夏海ちゃんのために皆でイベントを考えたことがあったっけ。その時のことを言っているんだろうか。

「それじゃ、他の皆さんにもお話しておきますね！ 羽依里さん、お邪魔しました！」

「え？ いや、それは俺が自分で皆に説……」

……って、もう走って行っちゃった。こういうのって自分でお願いして回りたいんだけどなあ。

まあ夏海ちゃんだし、そこまで一気に話が広がることもないだろうけど。

「……とりあえず、客室の片づけをするかな……」

夏海ちゃんも好意で言ってくれたんだし。それ以上は考えないようにして、俺は部屋の片づけをすることにした。

「よっこいせ……と」

片付けと言っても、部屋は綺麗に使われていたし、布団を外に干して、室内を簡単に掃除するだけだ。忘れ物もないみたいだし、もの30分ほどで終わってしまった。

「さて、夏海ちゃんに先を越されないうちに、俺も動かないとな……」
そんなことを考えながら居間へ行くと、朝食の片づけを終えたしろはが羽末の宿題を見てくれていた。

「ああ、今日はおかーさんに見てもらってるのか」

「うんー」

「ほら、よそ見しちや駄目だよ。最後まできちんと終わらせないと」
「うー」

「はは、おかーさんは厳しいな」

「きびしいー」

俺の言葉に思わず反応した羽未がしろはにそう注意されていた。

まだちゃんとした意味は解ってないんだろうけど、頬を膨らませる羽未を微笑ましく見ながら、俺はその隣に座る。

「それで羽依里、昨日のことだけど、具体的にはどうするの?」

俺が腰を落ち着けたのを見て、しろはがそう聞いてきた。昨日のこととは、恐らく羽未のためのイベントについてだろう。

「とりあえず夏海ちゃんには話をして、快諾してくれたよ。他の皆には、この後話をして回ろうと思う。バイクで島を回ればすぐだしさ」
「バイク!」

「ほら、羽未ちゃん。また」

「うー」

勉強しながらも俺たちの会話を聞いていたらしい羽未がバイクという単語に反応した。そして、また注意されていた。

「羽未、宿題が終わったら、今日はおとーさんとバイクででかけような」

「うん!」

「でも、宿題が終わってからだぞ?」

「……がんばる」

笑顔から一転、真剣な表情で頷いた。その後は集中して宿題に向かう羽未を、俺としろはは静かに見守っていたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ、出発!」

「しゅっぱーっ!」

無事宿題を終えた羽未を後ろに乗せて、俺はバイクを発進させた。夏海ちゃんはああ言ってくれたけど、やっぱり皆にはできるだけ自

分で事情を説明したいし。道中、皆に会えたらその都度イベントの話をすることにしよう。

「きもちいいー」

住宅地を抜け、太陽の光を受けてキラキラと輝く海を見ながら海沿いの道を進む。サイドミラーに映る羽未の笑顔も、そんな太陽に負けないくらい輝いていた。

「おとーさん、どこいくのー?」

「そうだなあ……羽未はどこに行きたい?」

俺は背中 of 羽未にそう聞き返す。皆に会うのも目的の一つだけど、せっかくだから、羽未のために時間を使ってあげたい。

「んー……みなとー」

港か……。神社や灯台は昨日行ったけど、港には行ってなかった気がする。少なからず人の往来がある場所だし、運が良かったら誰かに会えるかもしれない。

「よし、それじゃ、港に行こうか」

「うんー」

俺はハンドルを切り返し、一路港へと向かった。

一本道で何人かの観光客とすれ違いながら、港に到着する。

適当な場所にバイクを止めると、ちょうど船も出港したばかりなのか、港は静かなものだった。

「だれもいないー」

キョロキョロと周囲を見渡して、羽未は残念そうな顔をしていた。確かに向こうの日陰で野良猫が気だるげに寝そべっているくらいで、俺たちの他に人気はない。

「でも、せっかかく来たんだし。少し探検してみようか。ラムネ買ってあげるからさ」

「うんー」

というわけで、その辺の商店でラムネを買って羽未と二人で港を歩いてみることにした。

「……あれ。誰かいる」

港を散策していると、端の方で釣りをしている人がいた。浜辺とか漁港ならともかく、ここで釣りをするなんて珍しい。観光客かな。

「こんにちはー。つれますかー?」

そんなことを考えていたら、羽未が元気よくそう挨拶していた。

羽未はその釣り人さんに駆け寄って、近くに置かれていたクーラーボックスを覗き込む。

「ああ、お嬢ちゃん。残念ながらボウズだぜ」

「ぼーず?」

「その、魚が釣れてないってことだよ……どうも。娘がすみません」

「いやいや。事実だし、謝る必要はないさ」

小走りで駆け寄ってそう謝るけど、大きめの麦わら帽子をかぶったその男性は全く気にする様子もなく、ひらひらと手を振っていた。

「しかし、このままだとフィッシュ斉藤の名が廃るぜ……どうしたもんかな」

フィッシュ斉藤? よくわからないけど、そんな通り名で呼ばれる人なんだろうか。

「そうだ。お兄さん、この島の人だろ? 良い釣り場を知らないか?」

「え、釣り場ですか? そうですね……」

俺は少し考えて、漁港と浜辺を教えておいた。さすがに見ず知らずの観光客にしろはの釣り場を教えるのは憚られたし。

「なるほど。島の反対側にも港があったのか……よし、行ってみるか」話を聞いたその人は手早く釣り道具を片付けると、そのまま立ち上がって港から去っていった。

「……」

その背中を、羽未は何か言いたそうな顔で見つめていた。もしかして、一緒に釣りがしたかったのかな。

「……よう、羽依里に羽未ちゃん」

「珍しい所にいるな」

その時、名前を呼ばれた。声のした方を見ると、良一と天善が立っていた。

「二人とも、こんな所でどうしたんだ？」

「それはこっちの台詞だぞ。俺たちは静久を迎えに来たんだ」

「そういうえば、今日あたり島に戻ってくるんだっけか」

「ああ。10時過ぎの船で来るはずなんだがな」

そう言つて海の向こうを見やる天善は、やはりどこか嬉しそうだった。

「それで、俺は一人で出迎えるのが恥ずかしいという天善に付き添っているわけだ」

「べ、別に恥ずかしくなどない！」

良一が意味深な顔をしながら天善の肩を抱くと、天善はまるで照れ隠しのようにラケットを構えてポーズを決める。あのラケット、どこに持ってたんだらう。

「それより夏海から聞いたぞ。夏休みの間、羽未ちゃんのために毎日イベントを用意してほしいとな」

「え？」

なんでもうこの二人に話が伝わってるんだらう。夏海ちゃんと良一たち、そこまで接点ないはずなのに。なにより、バイクで移動するよりも噂が広まる方が早いとか、どうなってるんだらう。

「もう話が伝わってたのか。そういうわけなんだけど、頼めないかな」

「他ならぬ羽未ちゃんのためだしな。喜んで協力させてもらうぜ」

「同じくだ。断る義理はない」

改めてそうお願いするも、二人は快諾してくれた。本当、もつべきは島の仲間だ。

「そこでだ。今日の昼、静久の歓迎会を兼ねて浜辺でバーベキューをしようと思っているんだが、今日のイベントはそれでどうだ？」

「願つてもない話だけど、俺たちが参加しても良いのか？」

「ああ。元から声をかけるつもりだったからな。それに、静久も賑や

かな方が良いと思うしな」

「ありがとう。それじゃ、俺たちも参加させてもらおうよ。良かったな。羽未」

「うん！」

早速楽しみができたからか、羽未も嬉しそうだった。

「そうだ。せっかくだし、俺もバーベキューの準備手伝うよ」

ただお邪魔させてもらうのも悪いと思い、俺はそう提案していた。せめて、少しでも手伝いをしたい。

「気持ちありがたいが、昨日のうちにあらかたの準備は終わっている。荷物も浜辺に運んであるしな。鷹原たちは昼頃に来てくれればそれで良い」

手伝いを申し出たけど、笑顔の天善にやんわりと断られてしまった。準備に抜かりはないみたいだ。

「別に気にせず来てくれればいい。それじゃあな」

二人はそう言うと、港の建物の方へと歩いていった。感動の再会を邪魔しても悪いし、俺たちもどこか別のところに行くとしよう。

「あれ、羽依里？ こんな所にいるなんてめずらしーわね」

来た道を戻り、飲み終わったラムネの瓶を商店入口の箱に返却したところで、店の中から段ボール箱を持った蒼が出てきた。ケロケロ便？

「ちよつと羽未と一緒に島を巡っててさ。蒼は仕入れか？」

「似たようなものかしらねー。それより聞いたわよー。皆で羽未ちゃんにイベント用意するんだって？」

「そうだけど……その話、蒼も知ってるのか？」

「ここに来る途中、夏海ちゃんから聞いたのよー。羽未ちゃん、良かったわねー」

「うん！」

蒼にそう言われて、羽未は嬉しそうに返事をしていった。蒼まで知っていると、どこまで話が広がってるんだろう。

「さつそく今日のイベントってことで、静久の歓迎会を兼ねたバーベキューに招待されたんだ」

「今日のお昼よねー。あたしと藍も行く予定だから、よろしくね」

予想はしていたけど、空門姉妹も参加するのか。他にも何人か参加するんだろうし、これは賑やかになりそうだな。

「……あれ？ それじゃ、その段ボールの中身つてもしかして……？」
「バーベキューで使う食材よー。手ぶらで良いつて言われてるけど、少しは用意しとかないとねー」

当然のようにそう言っていた。蒼は良く気がつくし、やっぱりそういうの準備してるんだな。

「それじゃ、またお昼に会いましょー。羽未ちゃん、またねー」

そんなことを考えているうちに、蒼は荷物を持ったまま器用に羽未に手を振ると、港から去っていった。

……やっぱり、俺も何か食材を用意した方が良い気がする。

「羽未、少し早いけど家に帰ろうか」

俺はそう羽未に声をかけて、一緒にバイクに跨る。一度加藤家に戻って、しろはに相談してみよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おかーさん、ただいまー！」

「え？ もう帰ってきたの？」

予想以上に早く帰ってきた俺たちを見て、しろはは驚いた顔していた。

そんなしろはに、俺は天善たちからお昼のバーベキューに誘われた旨を話し、同時に家から持って行ける食材がないか聞いてみた。

「うーん、バーベキューの食材……めばしいものは昨日使っちゃったし。どうしようかな」

しろはは冷蔵庫を開けて中身を確認してくれていた。俺もそんな

しろはに続いて冷蔵庫を覗き込む。

「ほら、昨日良一からもらった魚の残りがああるじゃないか」

「……バーベキューにそれを持って行ってどうするの」

「え、駄目かな」

「駄目。釣りたてならともかく、日をまたいだ魚なんて人様に出しちゃ駄目」

「煮つけにしたりして、家では食べるのに？」

「それはそれ。これはこれ」

一蹴されてしまった。今朝方夏海ちゃんに貰ったらしい野菜もトマトとキュウリが主だったし。さすがにこれを焼いても美味しくない。

「何か、新鮮な食材があればなあ……」

思わずそう呟きながら水屋の中の乾物を漁っていると、一つ考えが浮かんだ。そうだ。新鮮な食材なら、バーベキュー会場のすぐ近くをたくさん泳いでるじゃないか。

「羽未、おとーさんと一緒に浜辺に行つて、魚釣りしない？」

「え？ するー！」

そう提案すると、羽未は両手を上げて喜びを全身で表していた。うんうん。港にいた頃から思ってたけど、やっぱり釣りがしたかったんだな。

「え、釣りをするの？」

「ああ。これなら新鮮だし、しろはも構わないよな？」

「それはいいけど……今の羽依里に釣れるの？ 島の自然は甘くないんだよ？」

「だ、大丈夫だって」

確かに釣りはご無沙汰だけど、俺だってこの島に住んで長いんだし、きつと行けるさ。

「それじゃ、おとーさんは釣り竿を用意するから、羽未はおかーさんから帽子や水筒を用意してもらって」

「わかったー」

羽未の返事を確認してから、俺は一人家を出て、蔵へと向かった。

「えーっと、確かこの棚の上に置いてたはず……」
蔵にやってきた俺は記憶を頼りに釣り竿を探す。

この蔵は加藤家に古くからあるもので、俺が学生時代に中身を整理してからは、その一部を物置として使っていた。

「お、あったあった。これだ」

しばらく棚の上をまさぐって、俺は折り畳み式の釣り竿と、細々した釣り道具が入ったツールボックスを引っ張り出す。

最近使ってないけど、元々しろはが使っていたものだし、手入れは行き届いているみたいだ。

「おとーきーん！ でんわー！」

……その時、半開きになっていた蔵の扉から、羽未の元気な声が飛び込んできた。

「え、電話？」

「おきやくさんからー！」

お客さんからの電話？ それなら、あまり待たせるわけにはいかない。

「ああ、羽未、ありがとうな」

俺は足早に玄関まで戻り、置かれていた受話器を手取る。しろはの姿がないし、もしかして、羽未が電話に出てくれたのかな。

『はい。もしもし』

『ああ、民宿加藤家というのはそちらで合っているかな？』

『はい。お電話ありがとうございます。加藤家です』

『急な話ですまない。明日なんだが、部屋は空いているか？』

『空いていますよ。何名様でご利用でしょうか』

『妹と二人だな』

『女性お二人ですね……』

俺は受け答えをしながら、電話の近くに置いてある台帳に予定を書き込んでいく。

「……あ、電話だったの？」

ちょうどその時、麦わら帽子を手にしたしろはが俺の視界に入った。どうやら、ちょうど部屋に羽未の帽子を取りに行っていて電話に出られなかったみたいだ。

じゃあ、やっぱりこの電話は羽未が出てくれたのか。ちゃんと受け答えできたんだな。羽未、えらいぞ。

『……ところで、そちらの宿はペットの持ち込みは可能か？』

『え、ペットですか？』

『ああ、小型犬なんだが……その、変わった声で鳴くんでな。頭も良いし、大人しいといえれば大人しいんだが』

『しよ、少々お待ちください』

ペット持ち込みとか想定になかった。俺は電話を一旦保留にして、目の前のしろはに相談してみることにした。

「え、ペット？」

「そう。犬らしいんだけどさ」

「うーん……どうしようかな」

しろはは口元に手を当てて考え込む。確かに鳴き声とか大きいと近所迷惑になるし、判断に困るところだ。

『……羽依里はどう思う？』

少し考えて、しろはは俺の意見も聞いてきた。そうだなあ……。

「俺は良いと思う。そういう人たちにとつて、ペットは家族同然だつて言うし。近所迷惑になるかもしれないけど、一晩だけだし。予めご近所さんにも話しておけば大丈夫なんじゃないかな」

『……わかった。羽依里が良いと思うのなら、それでいいよ。でも家の中には入れちゃ駄目だからね。料理だつて出すんだし、そこは衛生的に譲れないから』

「わかった。そういう決まりになってるつて伝えてみるよ」

そこまで話を詰めてから、俺は電話の保留を解除して、うちの宿には広めの庭があること、そこであればペットも大丈夫だと言うことを伝えた。

『ああ、別に座敷犬というわけではないからな。外でも全く構わない。佳乃、大丈夫らしいぞ』

そう言う電話の後ろで『良かったねー！ 一緒に行けるよ、ポテトー！』みたいな会話が聞こえた。どうやら、喜んでくれてるみたいで良かった。

『ところで、代表者のお名前をいただいてよろしいですか？』

『私は霧島聖という』

『霧島……聖様ですね。チェックインは16時以後となりますが、夕飯の方はいかがなさいますか？』

『そうだな。頼むでしょう』

『了解しました。それとですね……』

……その後、細かい予定を聞いて受話器を置いた。

『明日、女性二人の宿泊予定が入ったよ。夕飯希望だつてさ』

『わかった。用意しておくね』

それから改めて、予約の内容をしろはに伝えた。夕食希望の上にペット同伴だけど、女性二人なら食事は部屋で良いだろうし、いつもと同じ準備で良さそうだ。

『ところで、ペットの分もご飯を用意するべきなのかな……？』

しろはが小さな声で何か言っていた。専用の餌とか用意してくれるかもしれないし、そこまで気合い入れて作らなくても良いと思うけど。

『それじゃ、私が電話番号をしておくから、羽未ちゃんと二人で楽しんできてね』

そう言うしろはに見送られて、俺と羽未は釣り道具を持って加藤家を後にする。

鳥白島は未だケータイの電波があまり届かないし、いつ予約の電話がかかってくるかわからないから、なるべく誰かが加藤家にいるようにしている。どうしても家族で島外に外出をする必要がある時は、鏡子さんに電話番号をお願いしたりとかしてるけど。

『おかーさん、いっしょにいけないの？』

『お仕事だからね。おとーさんと羽未ちゃん、どっちがたくさんお魚

を釣れたか、後で教えてね」

「うん！ おとーさんにまけない！」

羽未は一瞬だけ寂しそうな顔をしたけど、すぐにそう言って対抗心を燃やしていた。お、俺だって負けないぞ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「よーし、釣るぞー」

「つるぞー！」

15分ほど歩いてバーベキューの会場となっている浜辺に移動した俺と羽未は、早速釣りを始めることにした。

良一たちが言っていた通り、浜辺近くの岩陰には既にバーベキューコンロや炭、日よけのついた簡易テーブル、椅子が置かれていた。本当、後は食材だけ用意すれば良い感じだ。

「羽未は何が釣りたい？」

「まぐろー」

「さすがにそれは無理だなあ。アジくらいにしておこうか」

「うんー。おさしみ、たべたいー」

「うんうん。バーベキューとは関係ないかもだけど、お刺身もいいよね」

羽未とそんな話をしつつ、捕まえておいた虫を針につける。これが餌になるわけだけど、俺は正直この作業は苦手だった。だって虫だし。動いてるし。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

俺が悪戦苦闘する中、羽未は鼻歌混じりに虫を針につけていた。以前しろはが教えたのか、子供特有の感覚によるものなのかわからないけど、手慣れたものだった。

「ヒットー！」

「おお、アジだ。羽末、すごいぞ！」

「やったー！」

餌の付け方が良いのか、羽末は釣り糸を垂らしてすぐにアジを釣り上げていた。そこまで大きくはないのだけど、宣言通りだ。

「またつれたー！」

新しく餌をつけなおして、もう一度仕掛けを投入すると、すぐにまたアジが釣れた。さっきより小さいけど、早くも二匹目だ。羽末も、俺譲りで魚が好きな匂いでも出してるのかもしれない。

……おっと。感心ばかりしてないで、俺も釣らないと。昨日の虫取りじゃさっぱりだったし、今日こそ父親の威厳を示さないと。

そういうわけで、俺も釣り糸を垂れる。すると、直後に手ごたえがあった。

「よし、ヒットー！」

力を込めて竿を上げると、魚の代わりに穴の開いたバケツが上がってきた。なんだこれ。

「ばけつ……」

そんな俺の釣果を見て、羽末が何とも言えない表情をしていた。その顔、しろはにそっくりだ……なんて現実逃避しないで、気を取り直してもう一度だ。

俺は新しい餌をつけて、もう一度仕掛けを投じる。

「……よし、ヒットー！」

「ながぐつ……」

今度は漫画みたいに、底の抜けた長靴が釣れた。

「おとーさん、へたくそー」

「うう、昔はおかーさんがびっくりするくらい釣れてたんだけどなあ」
これは憶測だけど、俺が持っていた魚釣りのスキルは、羽末の方に移ってしまったのかもしれない。

……そんなことを考えながらも一度竿を入れてみると、今度はナマコが釣れた。

「おとーさん、これ、たべれるの？」

「食べられるはずだけど……今すぐつてのは無理かなあ」

釣りの仕掛けでどうしてナマコが釣れたのか不思議だけど、こういうのって下処理が必要なはずだし。帰ってしろはに渡すまで、生かしておける自信もない。

……というわけで、泣く泣くりリースすることにした。今回は見逃してやる。

「……どんまい」

直後、羽未にそう慰められた。もう、父親の威厳も何もあつたもんじゃない。

「……って羽未、引いてるぞー！」

「え？」

その時、何の気なしに羽未の竿を見るとウキが大きく沈んでいた。

「ヒットー！」

俺の言葉でそれに気づいた羽未が慌てて竿を上げようとするけど、大きくしなるだけでビクともしない。

「お、おもいー！」

「よし、おとーさんも手伝うぞ。羽未、しっかり持ってろよ」

「う、うんー！」

俺は自分の竿を置いて、羽未を後ろから抱きかかえるようにして一緒に釣り竿を握る。これなら、羽未もバランスを崩したりしないはずだ。

「……あれ、これは」

竿を持った瞬間に分かった。この手ごたえはアジじゃない。もつと大きな魚だ。

「おとーさん、だいじょうぶ？」

予想以上の大物に、羽未の声色にも不安の色が混ざっていた。

「ああ。大丈夫だぞ。羽未、おとーさんと力を合わせて釣り上げような」

「うんー！」

「それじゃいくぞ！ いっせーのー！」

「えーいーいー！」

羽未と二人、息を合わせて竿をあげる。次の瞬間、桜色をした魚体が俺たちの前に飛び出した。

「おお、鯛だ」

陸に上げられてからも、元気よく跳び跳ねるそれを何とか押さええる。サイズはそこまでないんだけど、まさか鯛が釣れるなんて。

「おかしらつきー」

「ああ、尾頭付きだぞ」

羽未は興奮冷めやらぬ様子でそんなことを口走っていた。どこでそんな言葉を覚えるんだろう。でもせっつかくだし、これはバーベキューで焼いてもらってもいいかもしれない。

「……お。お二人さん、釣れてるみたいだな」

その時、背後から声をかけられた。聞き慣れない声と思って振り返ると、午前中、港で釣りをしていた人だ。確か、フィッシュ斎藤さんだっけ。

「へえ。立派なアジと……真鯛までいるじゃないか」

「すごいでしょう。娘が釣ったんです」

「やるねえ。釣り人の才能あるんじゃないか？」

魚がひしめく羽未のバケツを見て驚いていた斎藤さんだったが、続く俺のバケツを見て表情が曇る。

「あー……父ちゃんの方は調子悪いみたいだな」

「おとーさん、ぼうずー」

うう、さっそく覚えた言葉が使われてしまった。手元にあるのは穴の開いたバケツと長靴だけだし。ある意味坊主以下かもしれない。

「このままだと父親の面目丸つぶれだな。どれ、ちよつくら助け舟を出してやろう」

斎藤さんはそう言いながら、自分のクーラーボックスを開ける。中にはたくさんの釣果が入っていた。すごい数だ。

「すごいですね」

「あんたが教えてくれた釣り場のおかげで、色々なものが釣れたんだ。ほら、これやるよ」

そんな中から、俺のバケツにウニやサザエといった海産物を入れて

くれた。

「うにー！ おじさん、すごいー！」

「え、悪いですよ。さすがにもらえせん」

どれも高級食材だし、さすがにこれを受け取るのは気が引ける。

「いやいや、これはあんたのおかげで釣れたようなもんだし、気にしないでくれ。それに漁業権の関係で、俺が持って帰るわけにもいかないんだ」

斉藤さんは麦わら帽子の上から頭を搔きながら苦笑していた。漁業権。そう言えば以前、良一からそんな話を聞いた気がする。勝手に獲つちや駄目だとかなんとかか。

「ところでこのサザエとか、釣れたんですか？」

「ああ。理由はわからないが、釣れたんだ。フィッシュ斉藤の名に懸けて、決して潜つて獲つたんじゃない」

そう弁解するけど、海に潜るような格好じゃないのは明らかだった。これは信じて大丈夫そうだ。

「あんたもこの島の住民なら、漁師の友達とか居るだろ？ そいつに話してみるとか、内々に処分するとかしてくれよ。どちらにしても、観光客の俺が持っているよりはマシなはずだ」

「そういうことでしたら、遠慮なくいただきます」

そこまで言われて無下に断るわけにもいかないので、俺はそのバケツを受け取る。それを見届けると、斉藤さんは釣り道具を担いで浜辺から去っていった。

「うにー。かわいいー」

その背中を見送っていると、羽未はバケツからウニを取り出して、手のひらで弄んでいた。元気に動いてるよ。うにうにって。

「でも、おとーさん、すごいね」

「え？ ああ、これだけのウニやサザエを釣るなんて、あの人はすごいな」

「ううん。おとーさんがすごいー！」

「え、俺が？ なんで？」

「だって、おとーさんがつりばおしえてあげたから、このうに、もらえ

「たんだよね?」

「あー、一応、そういうことになるのかな」

「だから、おとーさんすごい!」

「あはは、ありがとうな」

羽未は右手にウニ、左手にサザエを持って嬉しそうだった。釣りの成果はからつきしだったけど、予想外のところで父親の威厳を保てたみたいだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「お? 二人とも随分と早いな」

「そんなにバーベキューが待ちきれなかったのか?」

斉藤さんが帰った後も、羽未とのんびり釣り糸を垂らしていると、食材を持った良一とのみきがやってきた。二人とも、まさかのペアルックだった。

「わ、私は別に着たくなかったんだが、良一から是非と言われてな。私は別に着たくはなかったんだぞ」

「……俺、別に何も言っていないんだけど」

二人を交互に見る俺の視線に気づいたのか、のみきがそう弁解していた。よほど動揺したのか、同じことを二回言っていた。

「そ、それより、鷹原たちは釣りをしていたのか?」

「ああ。時間があつたしさ。羽未と釣りをしながらバーベキューの食材を集めてたんだ」

必死に話題を変えようとするのみきに苦笑しながら、俺は二つのバケツを見せる。どちらの獲物もまだまだ元気動いていた。

「おお、でかい鯛だな! 羽依里が釣ったのか?」

「いや、こっちは羽未だよ。後で調理頼めるかな」

「いいぜ。一通り調理道具は持って来てるし、調味料もあるからな」

良一はそう言つてサムズアップしてくれた。やっぱりこういう時、

現役漁師は頼もしい。

「……ところで鷹原、こっちのバケツのウニやサザエはどうしたんだ？」

その折、のみきがもう一つのバケツを覗き込みながら訝しげな顔をしていた。さすが役所務め。気付いたらしい。

「それなんだけどさ、釣りをした観光客からもらったんだ。針にかかったんだってさ」

「これだけの数が針にかかったのか？ 偶然にしては出来過ぎているが……まさか、密猟者じゃないだろうな」

「その辺は大丈夫だと思うよ。どう見ても海に潜る格好じゃなかったしき。本人も気にしてて、こうして俺に全部渡していったんだ」

「うーむ、鷹原がそう言うのなら、信じるが……」

「ま、いいんじゃないか？ せつかくの高級食材だ。俺が獲ったことにしておいてやるよ。俺は漁協から鑑札も買ってるからな」

どことなく腑に落ちない顔のみきに対し、良一はそう言って笑顔だった。そう言えば、良一はこの島周辺の漁業権を持っているんだっけ。

なんにしても気にせず食べられるのなら、それに越したことはないよな。

俺はそう考えながら、バケツを両方とも良一に渡す。この際、下ごしらえも任せてしまおう。

やがて釣りはお開きとなり、俺と羽未はバーベキューの準備を手伝うことになった。

俺はのみきと手分けして、まとめて置かれていた簡易テーブルやイスを組み立て、バーベキューコンロに炭をおこす。

「よーし、羽未ちゃん、アジのウロコの取り方はわかるな？」

「あいあいさー」

一方で羽未は良一と一緒に魚の下処理をやっていた。しろはが何度か教えていたし、羽未も小さい魚の下処理くらいはできる。さすが

しろはの娘。正直、俺より上手いくらいだ。

「良一もさすが漁師。魚は任せろって感じだな。羽未と一緒に料理が
できない俺としては、悔しいくらいだよ」

「安心しろ。私も悔しい。ああ見えて、良一は私よりも料理が上手な
んだ。魚料理だけじゃなく、ハンバーグやカレーも絶品なんだぞ」

ぱたぱたと団扇で炭をおこしながら、遠巻きに下ごしらえをする二
人を見る。ここからでもわかるくらい、良一の包丁さばきには迷いが
なかった。いつの間にか上半身裸になっているのが気になるけど、浜辺
だからのみきも無反応なのかな。

「お、やってるわねー」

「お手伝いに来ましたよ」

良い感じに炭が赤くなってきた頃、空門姉妹がやってきた。どちら
も両手いっぱい食材を持っている。

「おお、二人も来てくれたのか」

「静久さんの歓迎会も兼ねてるしねー。手伝わないわけにはいかない
わよー」

笑顔を見せる蒼の段ボールには、保冷剤と一緒に大量のお肉が詰
まっていた。

「すごい量だな」

「蒼ちゃんが港の商店で仕入れてくれたんですよ。たくさんあります
が、格安です」

「せっかくのバーベキューだし、魚介ばかりじゃ飽きちゃうしねー」
やっぱり今朝蒼が持っていたのはバーベキュー用の食材だったら
しい。今思えば、朝見たのと同じケロケロ便の箱だ。

「それじゃ、あたしたちはお肉の下ごしらえをするわねー。藍、ちゃん
と紙皿とか用意してくれた？」

「はい。学校の家庭科室から拝借してきましたよ。焼肉のタレもきち
んと用意してます」

家庭科室から拝借？　なんか、聞こえてはいけない台詞が聞こえた

ような。

「二人が来てくれたのは嬉しいんだけど、駄菓子屋は無人販売にでもしてるのか？」

「夏は稼ぎ時だし、かき氷もあるしねー。今日は堀田ちゃんと夏海ちゃんに店番任せてきたの。あの二人仲良いし、イナリもいるから大丈夫でしょー」

確かに仲良いけど、お店を任せてきちやっただってことはバーベキューには参加しないってことだ。それはそれで可哀想な気もするけど。

「それでこれ、夏海ちゃんからの差し入れ。お肉だけじゃなく、野菜もバランスよく食べてください！ だって」

そう言つて蒼から渡された袋には、トウモロコシやカボチャ、ピーマンといった夏野菜が入っていた。なるほど。これならバーベキューの食材として申し分ない。

「……ところで家庭科室がどうか言っていたが、藍は仕事中に抜け出してきたのか？」

手際よく肉や野菜の下処理を始めた二人を見ながらバーベキューコンロに網をセットしていると、のみきが藍にそう聞いていた。

言われてみれば、藍はジーパンにTシャツといったラフな格好だった。いわゆる教師スタイルじゃない。

「私は親友の歓迎会があると言つて、少しばかり長めの昼休みを取っただけです。午後から有給取ったみきちちゃんに言われたくないですね」

「藍、どこからその情報を……？ だが、有給休暇は労働者に与えられた当然の権利で、その……」

「そうですね。バーベキューの後、余った時間で良一ちゃんといちゃらぶするのも当然の権利ですよね」

「う、ううう……そ、そんなんじゃないやあい……」

必死に弁解を試みたのみきだったけど、あつという間に藍に丸め込まれて、ごによごによ言いながら黙ってしまった。相変わらず、藍には太刀打ちできないみたいだ。

「ちよつと藍、のみきで遊んでないで、野菜切るの手伝いなさいよ！」
「わかつています。今行きますよ」

のみきを軽く丸め込んだ藍は、余裕顔で妹の方へ歩いていった。仕事の関係で一度島を出た経験があるせいも、藍はその仕草一つとっても、すごく大人びた気がする。

「皆、今日はお招きありがとうございます」

食材の準備が整った頃、主賓である静久を連れて天善と紬がバーベキュー会場にやってきた。

「静久、久しぶりだな」

「本当ね。パイリ君も元気だった？」

皆が続々と挨拶する中、俺もそう声をかける。静久は芸術家として多忙な日々を送っているみたいだけど、俺たちに見せる姿は相変わらずだ。

むしろ、芸術家としての一面をあえて見せないようにしている気さえする。静久も島にいる間は仕事を忘れたいだろうし、俺たちもできるだけ自然に接するように心掛けている。

「……それじゃ、静久さんとの再会を祝して！ かんぱーい！」

「かんぱーい！」

やがて飲み物がいきわたったところで蒼が乾杯の音頭を取り、歓迎会を兼ねたバーベキューが始まった。

「よーし、こつちの肉は焼けたぞー」

「こつちの海老も良い感じだぞ」

皆が談笑する中、肉焼き係の俺と良一は焼きあがった食材を次々と紙皿に乗せていく。

「ほら静久さん、主賓なんだから遠慮せずに食べて」

「ありがとう。それじゃ、このお肉をもらおうね」

そんな焼きたての食材が乗った紙皿を両手に持って、蒼が皆の周りを練り歩く。こういう時、蒼のフットワークの軽さは本当に助かる。

「紬ももらったら？ 牛肉はおっぱいに良いのよっ」

「アオさん、たくさんください！」

静久に言われて、袖が勢いよく紙皿を差し出していた。本当に効果があるのか定かじやないけど、静久が言うのと妙に説得力がある。そのおっぱいも、ますます存在感を増している気がするし。

「蒼ちゃんも配ってばかりいないで食べてください」

そんな折、両手が塞がっている蒼の元へ藍が箸を持ってやってきた。その先には良い感じに焼けたイカが挟まれていた。

「言われなくても、あとでちゃんと食べるわよー」

「後と言わずに。ほら、あーん」

「よし、しょーがないわねー。あーん……」

……蒼は顔を赤くしながらもそれを受け入れた。うーん、相変わらず仲が良いな。

「おとーさんもたべてー。あーん」

そんな姉妹のやりとりを見ていたのか、羽未が同じように俺に箸を向けてきた。すぐ目の前に焼きたてのシイタケが見える。

「あ、あーん」

一瞬、皆からすごい笑顔を向けられたけど、俺はおとーさんスキルでスルーした。愛娘からの要望を無下にできるはずがない。シイタケ、めちやくちや熱かつたけど。

「よし、私も食べさせてやろう。ほら良一、口を開けろ」

「あ、あふっ!? う、うふあいぞー!」

立て続けにそんなやりとりが行われたもんだから、のみきも感化されたんだろうか。良一の口に焼きたてのカボチャが放り込まれていた。あれは熱い。

「さすがラブラブねー」

良一の口の中が大変なことになっていることに気づかないのか、蒼はからからと笑いながら茶化す。のみきも今更ながら自らの行為に気づいたのか、顔を真っ赤にしていた。うん。いつもの流れだ。

「よし、サザエとウニも焼けたぞ。さあ皆、食ってくれ」

その時、別網を使って調理していた天善がそう言う。同時にサザエに醤油が注がれて、良い香りが広がる。

「じゃあ、ウニをもらっていいかな」

俺は焼きうにを受け取って、一口食べてみる。これは味が濃厚だ。美味い。

「これだけ味が濃いと、ごはんが欲しくなるよな」

「そうそう。皆に食べてもらおうと思つて、おにぎりを用意したの。すっかり忘れていたわ」

思わずそう口にする、静久は思い出したかのように重箱を取り出した。蓋を開けると、中にはおにぎりがぎっしりだった。

「やつぱり、ご飯があつたほうが良いと思つて。この二人にも手伝ってもらつたのよ」

「ああ、微力だがな」

「手伝いました！」

三段重ねの重箱を簡易テーブルの上に並べながら、紬と天善は揃つて笑顔だった。さすが静久、気配り上手だ。

「静久さんと紬のおにぎりをさっそくいただきたいところだが、三分の一の確率で天善のおにぎりになるのか……！　ぐぬぬ……！」

おにぎりに手を出しかけた良一がその手を止めて、重箱の前で唸っていた。ぱつと見、どれも同じ三角形のおにぎりだし。これはわからない。

……まあ、俺は気にしないけど。

未だに悩んでいる良一を尻目に、俺はおにぎりを一つもらう。かじってみると、中には昆布が入っていた。ウニとは海産物同士だし、美味しかった。

「お、良い感じに鯛も焼けたぜー」

おにぎりや焼きウニを楽しんでいると、羽未の鯛が焼きあがったみたいだ。

「おかしらつきー！」

「おう、熱いから気をつけろよー」

良一がそう言いながら、鯛の身をほぐして羽未の紙皿に乗せてくれ

た。さすが良一だ。綺麗に焼けてる。

「あつちつち……」

羽末は勢いよくかじりついて、その熱さに悶えていた。

「羽末、焼きたては熱いから、ふーふーして冷まさないとね」

「うん……してやられた……」

くびくびと水筒の麦茶を飲んでから、今度はゆっくりと鯛に取りかかっていた。それくらい楽しみにしてたんだな。

「んー、おいしいー!」

そして全身で喜びを表現する。うんうん。自分で釣った魚だし、喜びもひとしおだと思う。

「みんなもたべてみてー」

そして他の皆にも鯛を勧めていた。ちゃんと配慮もできてるし、偉いぞ。

「そういえば今日、鵜は来てないんだな」

羽末の釣った鯛を皆に配っていると、今更ながらそんなことに気がついた。こういうイベント、一番に参加しそうなのに。

「もちろん声をかけたんだが、今日はサマーキャンプの打ち合わせがあるらしい。ちようど時間が被ってしまったらしくてな。心底悔やんでいたぞ」

「ああ、そういうことか」

すると、のみきがそう教えてくれた。地団太を踏んで悔しがってる鵜の姿が容易に想像できる。

「……ん?」

ところで、夏海ちゃんや堀田ちゃんに加えて、鵜もいないとなると……この量、食べきれんのだろうか。

なんとなく会場を見渡してみれば、元々良一たちが持って来てくれた食材に加えて、羽末の釣った魚と、俺が貰ったサザエにウニ。

蒼たちが持って来てくれた大量のお肉に、夏海ちゃんからの差し入れの野菜、静久たちが用意してくれたこれまた大量のおにぎり……かなりの人数が集まっているとはいえ、食材はまだまだ残ってる。ちよつと厳しいかもしれない。

「じー……」

……その時、不意にたくさん視線を感じた。その出所を探してみると、バーベキューの匂いに誘われたのか、何人もの子供たちが遠巻きに俺たちの方を見ていた。

「……」

それに気づいたのか、羽末も食べる手を止めて、子供たちの方をじっと見ていた。

「……なあ静久、相談があるんだけどさ」

そんな羽末の表情を見て、俺は察した。足早に静久の元へと行くと、そう声をかける。

「パイリ君、みなまで言わないでいいわ。あの子たちにも入ってもらいましょう?」

すると笑顔でそう言葉を返してくれた。さすが静久、すぐに俺の意図をくみ取ってくれた。

「そうねー。皆、こっちにいらつしやーい」

「一緒に食べましょー」

了解が出たのを確認して、蒼と紬がそう声をかける。子供たちはその言葉を待っていたとばかりに駆け寄ってきて、紙皿と割り箸を手取る。

「イカもーらい!」

「ガーディアン、お肉ちよーだい!」

「待て待て。まだまだたくさんあるから順番だ。小さい子からだぞ」

そしてそのまま焼き網の方に群がってくる。ちなみに、何故か俺は子供たちからガーディアンと呼ばれている。なんでガーディアンなんだろう。ギギギ。

「あんたたち、お肉ばかりじゃなくて野菜も食べなさいよー?」

「えー、やーだー!」

「ピーマンきらいー」

「好き嫌い言ってんじやないのー。大きくなれないわよー?」

そんな抗議の声が響くけど、蒼はそんなのおかまいなしに、焼きたての野菜を子供たちの紙皿にドサドサと入れていく。

蒼って時々おかーさんみたいなこと言うよな。肝っ玉母さん……
みたいなき。

「皆さん、好き嫌いをしていると良一ちゃんみたいになりますよ」

「えー、良一にーちゃんになるのやだー!」

「パージ大王ですわー!」

蒼に続いて、藍が子供達たちをそう論していた。直後、皆すごく嫌
そうな顔をしながらピーマンやニンジンをお口に放り込んでいた。例
えが問題ある気もするけど、ここは気にしないことにしよう。

「にんじん、あまくておいしいー」

そんな中、羽未は美味しそうにニンジンを食べていた。しろはの教
育の賜物なのか、本当に羽未は好き嫌いないよな。

「えー、この魚、うみがつつたのか!」

「すげー! うみすげー!」

「えへへー」

羽未が鯛を釣った経緯を聞いたのか、子供たちが羨望のまなざしを
羽未に向けていた。

普段、大人たちの中でも全く物怖じしていない羽未だけど、やつぱ
り同年代の子達と一緒にいた方が楽しいみたいだ。

……その後、食事を済ませた子供たちは元気に浜辺で遊び始めた。

俺はその中に混じる羽未を遠目に見守りつつ、皆との雑談に花を咲
かせていた。

その中で羽未のイベントについて相談しようとしたら、この場にい
る全員がすでに知っていた。さすが、光回線もびつくりの島の情報
ネットワークだ。

「皆、本当に手伝ってもらって良いのか?」

「当たり前よ。あたしたちも羽未ちゃんには楽しい夏休みを過ごして
もらいたいしねー」

「ああ。その日の絵日記に何を描くか迷うくらい、たくさんのイベン
トを用意してやるさ」

皆、そう言って笑顔を向けてくれる。本当に彼らは最高の友人だ。「それで、さっそく提案なのですが」

その時、紬が挙手する。まさか、さっそく何かイベントを提案してくれるんだらうか。

「ウミさんの夏の思い出に、一緒にパリングルスでベランダを作るというのはどうでしょうか」

「……もしかして紬、まだベランダを作る夢を諦めてないのか?」

「トーゼンです! 来るべき日に備えて、パリングルスの空き容器を灯台資料館の倉庫にちまちまとため込んでいたりします!」

紬は立ち上がって、高らかに宣言していた。もしかして、虎視眈々とチャンスを狙っていたのかもしれない。ここまでくると、もはや執念のようにも思える。

「是非、皆さんでベランディングしましょう!」

「紬……夢を追い求めることは大事よ。例え、どんな夢でも。それでもね……」

「むぎゆ……でも……」

静久はそんな紬の肩を優しく抱きながら、必死になだめていた。パリングルスのベランダも良いけど、夏の思い出になるかは微妙な所だ。

「そ、そういうえば、静久はいつまで島に居られるんだ?」

先のみきじやないけど、俺はわざとらしくも話題を変える。このままだと、本当にベランディングをすることになりかねないし。

「そうね。時々本土に行くことはあると思うけど、基本夏休みの間は島に滞在することになると思うわ。ちよつとやりたいこともあるし」「え、やりたいこと?」

島に新しいアート作品を設置する……とかじやなさそうだ。先も言ったけど、島にいる間は静久も仕事は忘れたいだらうし。

「……この浜辺から少し離れたところに、古い海の家があるでしょう?」

……言われてみればそんな建物があった気がする。風対策で窓も扉も全部板で打ち付けられていたから、てつきり古い漁師小屋か何か

と思っていたけど。

「あー、そういえばあったわねー」

「懐かしいよなー。俺はガキの頃、あそこのカレーが大好きだよー」
海の家と聞いて、蒼と良一が懐かしそうにそんな話をしていた。海の家といえはカレーだよな。

「やっぱり皆知っていたのね。実はあのお店、ずっと昔に私のお爺さんがやっていたの。それをこの夏限定で再開させようと思っ
てね」

蒼たちの反応を見ながら、静久が嬉しそうに言う。お爺さんがやっていた海の家。まさか静久とこの島に、そんな縁があったなんて。

「じゃあ良一の言うカレーも、静久のお爺さんが？」

「ええ。一応名物になっていたみたい。レシピも残っているから、海の家と一緒にそのカレーも復活させるつもりよ」

「おお、それは楽しみだな」

「それで……時間がある時でいいから、皆にもその開店準備を手伝ってほしいの。お願いできないかしら」

そこまで話して、本当に申し訳なきように静久がそう提案してきた。

「俺からも頼む。さすがに二人だけで準備しては、夏が終わってしまうからな」

静久に続いて、天善もそう言って頭を下げる。確かに二人で海の家
の開業準備をするのは無理がある。

「他ならぬ二人の頼みだし、もちろん手伝うよ」

だから俺はすぐにオーケーしておいた。正直、その名物カレーとやらも気になるし。

「もちろん、わたしもお手伝いしますー！」

「時間がある時は、あたしたちも手伝うわよー？」

「蒼ちゃんに同じくです」

「ああ。断る義理はない」

俺に続いて、他の皆も次々と手伝いを申し出ていた。俺も仕事があるから毎日……というわけにはいかないけど、時間を見つけて手伝う

ことにしよう。

「ありがたい。詳しいことは追々知らせるから、その時はよろしくね」
皆が手伝ってくれることが決まったからか、静久は安堵の表情をしていた。

それこそ羽未も誘って、一緒に開店準備をしてもいいかもしれない。皆で海の家をやるとか、滅多にできる経験じゃないし。これは良い夏の思い出になるかもしれない。

「おとーきーん！」

噂をすれば、向こうで遊んでいたはずの羽未がこっちに走ってきた。どうしたのかな。

「いきだおれー！」

「え、また!？」

「うん！ こっちー！」

焦る羽未に引っ張られるようにして砂浜を移動すると、少し離れた岩陰に識がうつ伏せで倒れていた。

「え？ ちょっと識。大丈夫か……？」

恐る恐る声をかけると、本人の代わりに腹の虫が応えてくれた。どうやら生きてるっぽい。

よく見ると砂の上を這ったような跡がある。近くで一度倒れた後、バーベキューの匂いにつられてこの場所まで這って来て、力尽きたみたいだ。

「しようがない奴だな。よっこいせ」

いつまでもここに寝かせておくわけにもいかないし。俺はそんな識を背負って、皆の元へ戻ることにした。

「え、その子誰？」

俺が砂にまみれた少女を連れて戻ってきたのを見て、さすがの皆も驚いた顔をしていた。

「俺の知り合いなんだよ。天善、ちょっと椅子を用意してくれないか」
「ああ、簡易テーブルの椅子を使うといい。ひさしもあるから、涼しい

ぞ」

適当に俺の知り合いだと説明をして、天善が用意してくれた椅子に識を座らせる。ここなら直射日光も当たらないし、涼しいと思う。

「この子、なんでこの暑いのに着物なんて着てるのかしら？」

「こんな格好ですし、熱中症ですかね？ お水あげましょうか」

すると、すぐに空門姉妹が駆け寄って介抱してくれる。やっぱりこの二人はフットワークが軽い。

「いや、たぶんお腹が空いてると思うんだ。何か残り物があったらあげてほしいんだけど」

「残り物？ そうね……」

続く俺の言葉には静久が反応してくれ、浜辺を見渡しながら目ぼしい物がないか探してくれる。

あれだけたくさんあった食材も、子供たちがほとんど平らげてしまったし。何かあったかな。

「シズク、これがあります！」

その時、紬が重箱の蓋を開けて、中に残っていたおにぎりを見せてきた。数もそれなりにあるし、これなら大丈夫そうだ。

「おーい識、食べ物だぞ。起きろ」

「た、食べ物!？」

着物についた砂を落としてやりながらそう声をかけると、おにぎりの匂いを感じ取ったのか、識が目を覚ました。

そして目の前のおにぎりをがっしと掴む。たぶん、ほぼ無意識の行動だろう。

「これ、もらっていいのかい!？」

「お腹が空いてるのなら、食べていいわよ。あまりものだしね」

「……いただきます！」

静久から了解が出たのを確認して、きちんと挨拶をしてから食べ始めた。ここは相変わらず礼儀正しい。

「はむっ。むぐむぐ……」

その清々しいまでの食べっぷりに、俺たちは元より、識を見つけた子供たちも皆目を見張っていた。

「五臓六腑に染みわたるぜ……やっぱり、おむすびの具は梅干しだよ……」

そんな大袈裟な感想まで口にされる中、三つのおにぎりはあつという間に識の胃袋へと消えていった。

「……ごちそうさまでした」

最後に両手を合わせて、識は食事を終える。その顔を見るに、満足していただけたみたいだ。

「ありがとう！ おかげで助かったよ。キミたちは僕の命の恩人だ！」

識は俺たち全員の顔を見渡しながら、そうお礼を言う。

「助けてくれたお礼に、キミたちの願いを一つだけ叶えるぜ！」

……へじゃぶ。

一方、一連のやりとりに俺はものすごいへじゃぶを感じていた。もしかして識、助けてもらう度に同じようなことをしているのかな。

「え、えーつと……その願いについてはよくわからないが、まずは君の名前を覚えてもらえないか？」

一瞬戸惑うような顔をしたのみきだったが、すぐに大人の対応をしていた。

「お安いご用さ！ 僕は神山識っていうんだ。こう見えて、鬼なんだぜ」

鬼？ よくわからないけど、変わった自己紹介だった。

「おねーちゃん、おになの？」

「そうだぜ？」

「すごい」

直後、羽未を筆頭に子供たちからは羨望のまなざしで見られていた。

きつと、今の自己紹介は子供たちと仲良くなるためのきつかけみたいなものなんだろう。それなら納得だ。

「俺は三谷良一だ。こう見えて、漁師なんだぜ」

「わたしは紬・ヴェンダースです！ こう見えて、灯台の管理人をしています！」

「あたしは空門蒼よ。こう見えて、駄菓子屋の店長をしてるの」

……そして他の皆も識のやり方に倣って自己紹介をしていた。こう見えてって、良一はどう見ても漁師なんだけど。

「良一先輩に紬先輩、そして蒼先輩だね。覚えたぜ！」

「ぐおっ!？」

「むぎゆ!？」

そして、何故か揃って先輩呼びされていた。なんで先輩？

「藍先輩は蒼先輩の双子のお姉さんなんだね！なるほど、そっくりだぜ！」

「はうっ……何かしらこれ。胸がきゅんとなるわね」

「あ、蒼ちゃん、一旦落ち着きましょう」

この姉妹も先輩呼びされて、揃って動揺していた。藍なんか今にも識に抱きつきそうだ。耐えろ藍先生。子供たちの前だぞ。

「よろしく、のみき先輩！」

「こ、これは……色々な意味で危ないな」

のみきもこれまで『先輩』と呼ばれたことがないだろう。のぼせたような顔をしていた。

「私は慣れてるから平気だけど、他の皆は大変そうね」

静久だけがそう言って笑顔だった。確かに静久は先輩と呼ばれ慣れてそうだし。

……結局、識が叶える皆の願いは『名前を覚えてくれ』に統一されてしまったらしい。その後はすっかり打ち解けて、話の輪に加わっていた。

識の物怖じしない性格もあるんだろうけど。不思議なもんだ。

「ところで識、昨日に続いて今日も行き倒れになつていたのか？」

友人たちに続いて子供たちに質問攻めにされていた識に、俺はそう声をかける。

「あ、鬼だ」

すると、自称鬼に冷めた口調でそう言われた。これまたずいぶんな

言われようだ。

「いや、鬼はお前だろ……というか、ちゃんと家でご飯食べてるのか」「いいや。今朝、とある家の庭先から緋衣草の蜜を失敬した以外は、今の今まで飲まず食わずだぜ？」

どうして自信満々に言えるんだろう。花の蜜とか、いくら吸ったところで腹の足しにはならないと思う。蜂や蝶じゃないんだからさ。

「ところで、おにのねーちゃん！ おになら、オレたちとおにごっこしようぜ！」

その時、ガキ大将っぽい男の子がそう提案していた。鬼だから、おにごっこ。子供らしい発想だった。

「いいぜ。鬼の恐ろしき、思い知らせてあげるよ！」

子供たちからの提案を聞いて、識がにやりと笑う。もしかして足に……いや、腕に覚えがあるんだろうか。

「じゃあ、ねーちゃんが鬼な！ ちゃんと10秒数えてから追いかけるんだぜ！」

「よーし、につげろー」

「おー！」

あつという間にルールが取り決められ、子供たちが一斉に浜辺へと散っていった。羽末も一緒だ。うん。微笑ましい。

「……ひふみよいむなやことっ！」

その刹那、識が一瞬で10秒数え終えた。は、早い。しかもなんか、数え方が古い。

「いつくぜー！ー！ー！ うつきよおおー！ー！ー！」

そして識は妙な声をあげながら、もの凄い速さで子供たちを追いかけていった。

「うわああああ!! もう来たー！ー!!」

……昨日も思ったけど、識つてめちやくちや足速くないか？ 子供たちじゃ全く勝負になっていない。

「そらそら、捕まえたぜー！ー！」

「ひええー！ー!!」

「うわー！ー！ー！」

「やーらーれーたー!」

やがて子供たちは全員捕まってしまった。ところでおにごっこつて、タツチしたら鬼が変わるルールじゃなかったっけ? なんて識が一人で全員捕まえてるんだらう。

「うわーん、おにのねーちゃん、つよすぎー」

「のみき姉、助けてー」

「え?」

その時、識に圧倒された子供たちが一斉に俺たちに助けを求めてきた。

「藍せんせー!」

「蒼ねーちゃん!」

中には半分泣いてる子もいる。さすが鬼。怖かったのかもしれない。

「でも、子供の遊びに大人が混ざるのもなあ」

「おとーさん、おねがい」

「よし、相手になってやろう」

一瞬悩んだけど、羽末に懇願されて気持ちが固まった。俺は袖をまくりながら識の方へと向かう。

「りよういちにーちゃん、がんばれー!」

「よーし、大人の力つてのを見せてやるぜ!」

「つむぎゆ姉、がんばって!」

「頑張りますよー」

「おっぱい姉さんも、ファイトー!」

「任せて。おっぱいの名にかけて、負けないわ!」

それぞれ子供たちに応援されながら、他の皆も俺の後に続いていた。

気がつけばその場にいた大人全員、計8人で識の相手をする事になった。大人げないと言われるかもしれないけど、たくさん声援をもらってるし、今更後には引けない。

「今度は羽依里くんたちが相手になってくれるのかい?」

「ああ、なりゆきだけだな!」

「いいぜ。それじゃあ、今から四刻半の間、この中の一人でも僕から逃げきってごらんよ！ ひふみよいむなやことっ！」

そうルールを説明すると、またすごい早さで数を数えていた。あらかじめ間合いを広げておく時間なんてなさそうだ。

「覚悟しておくれよ！ うつきよおおおー！」

そして数え終わった識は、砂煙をあげながら一直線に俺に向かってきた。着物姿なのに、なんであんなに足が速いんだ。

「うおおっ！」

俺は身をかがめながら横に転がって識から逃れる。そのまま立ち上がって走り出そうとするけど、砂に足を取られて素早く動けない。くそ、こうなるとわかっていたら、サンダルなんて履いてこなかったのに。

「良一先輩、捕まえたぜ！」

「うおおおー！？」

そして開幕の攻撃で俺を仕留めきれなかった識は目標を変えたのか、同じくサンダル履きだった良一を速攻で捕まえていた。

「天善先輩に、静久先輩も捕まえたぜ！」

「きやあっ!？」

「し、しまった……！」

その軽い身のこなしで方向転換し、識は続けざまに天善と静久を仕留めていた。特に静久は本土から来たばかりだし、動きにくい服装だったのが災いしたみたいだ。

「むぎゅ！ シズクの仇は必ず取ります！」

紬はそう宣言していたけど、残された俺たちにできることは逃げる事だけだ。おにごっこだし。

「藍先輩も捕まえた！」

その後は皆してしばらく逃げ回ったけど、ついに藍が捕まった。

「うう、無念です……」

台詞とは裏腹に、藍は嬉しそうだった。思いつきり識から抱きしめ

られているし、念願叶ったのかもしれない。

「のみき先輩、捕まえたぜ！」

「くっ……水鉄砲さえ持つていけば、こんなことには……！」

藍に続いて、識に負けない動きで逃げ回っていたのみきも捕まってしまった。だいぶ頑張っていたんだけど、さすがにスタミナが尽きてきたかもしれない。

「むぎゅ!？」

……その直後、逃げ回っていた紬が砂に足をとられて転倒した。砂の上だから痛くないだろうけど、万事休すだ。

「よし、紬先輩も捕まえた！」

その隙を突かれて紬も捕まってしまった。まさに鬼の所業。情け容赦ない。

「よし、残るは二人だね！ 蒼先輩、覚悟しておくれよ！」

次いで識は蒼に狙いを定め、一気にその距離を詰めていく。蒼は運動神経も良いし、普段からスニーカーを履いているから砂の上でも大丈夫そうだ。頼んだぞ。

……つてあれ、逃げない？

猛烈な勢いで識が迫る中、蒼はその場から動く気配がない。どうしたんだろう。

「おい蒼、早く逃げろ！ 捕まるぞ！」

「え、えーつと、そのねー……！」

思わず声をかけると、なんとも歯切れの悪い返事が返ってきた。もしかして、足でも怪我したんだろうか。

そんなことを考えながら蒼の足元を見ると、その足の下に何かがあった。半分砂に埋もれてるから良く見えないけど、あれってもしかして。

「なあ蒼、その足元にあるのってエロほ」

「ち、違うわよ——！ ほら、子供たちもいるし、万が一目に触れたら教育に悪いと思って隠してるの——！」

顔を真っ赤にした蒼はそんなことを口走りながら、その薄い本を必死に砂の中に埋めていた。俺、何も言ってないのに。

「蒼先輩、捕まえたぜ！」

そうこうしているうちに、蒼は捕まってしまった。まったく情けない。

「さて羽依里くん、残るはキミだけだぜ？」

「はっ」

そして気づけば、残っているのは俺だけだった。

「うつきよおおおー！ー！」

間髪入れず、識がまた変な声をあげながら猛然と突っ込んできた。笑顔なんだけど、なんか怖い。

「うおおおお、来るなああー！」

その矛先が皆に向かっている間に、俺は識からできるだけ距離を取るように努めていたんだけど、そんなアドバンテージなんてあつという間に無くなっていく。くそ、足元の砂さえなければ、もつと速く走れるのに！

「にへへー、羽依里くん、追い詰めたぜ！」

迫りくる識からなんとか逃れようとしているうちに、俺は波打ち際に追い詰められてしまっていた。

「残り時間、あと3分よー！」

いつの間にか時間を測ってくれていた蒼がそう教えてくれたけど、もうすぐ後ろは海。これ以上逃げ場はない。

「……そうだ。ここだ！」

俺はとつさに、その波打ち際を走る。この辺りの砂は寄せては返す波に常にさらされて水分を含み、すっかり硬くなっている。つまり、ここなら全力で走ることができる。

「やるじゃないか羽依里くん！」

それでも識は俺の足についてきた。いや、本気で速い。俺も全力なんだけど、最近身体がなまってるのかな。このままだと追いつかれる。

「ええい、ままよー！」

これは正攻法では勝ち目薄と判断した俺は、服を着たまま海へと身を投じる。

「ぶえ!？」

水の中なら俺に利がある。元水泳部は伊達じゃないぞ！

そう考えながら腰が浸かるくらいまでの場所まで進み、そこから全力で泳ぐ。いくら識でも、俺より早くは泳げまい……！

「……って、あれ?」

少し泳いで、識が追って来ないことに気がついた。思わずその姿を探すと、識は今にも泣きそうな顔で波打ち際に佇んでいた。

「うう……ひどいよ羽依里くん！ 僕は泳げないんだ！ それなのに、海に逃げるなんて反則だぜ！」

「え、泳げないのか?」

反則とか言われても……海禁止ってルールも聞いてない気がするし。

「うう……ひつく……ぶええええー……！ おにいいい……！」

……そして一瞬の間を置いて、識は泣きに泣きながら走り去っていった。

「ええ……」

取り残された俺は、何とも言えない気持ちで浜辺へと戻る。

「羽依里、あれは大人げないわよー」

「パイリ君、もっと考えてあげないと」

「サイテーです」

戻るや否や、皆から非難轟々だった。うう、そんなつもりじゃなかったのに。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……結果的に識もいなくなり、頃合いということそのまま解散と

なつた。

皆にお礼を言つて別れ、俺と羽未は釣り道具を持って加藤家へと帰宅する。玄関先の時計を見ると16時前。識や子供たちと遊んでいたとはいえ、結構長い時間浜辺にいたらしい。

「……バーベキューに行つたはずなのに、なんでびしょ濡れになつて帰ってくるの」

……帰りつくなり、しろはにしこたま怒られた。

「その、色々あつてき。帰り道でだいぶ乾いたから大丈夫……」

「そういう問題じゃないよ。早くお風呂入つて」

「はい……」

釣り道具を片付けるのもそこそこに、俺は風呂場へと追いやられてしまった。うう、しろは怖い。

「おとーさん、うみもはいるー」

とりあえず身体だけ洗おうと、お湯を張りながら服を脱いでいると、羽未が脱衣所の扉を開けて入ってきた。

「おお、羽未も入るのか？」

「うんー。おせなか、おながししましよー」

「嬉しいこと言つてくれるなあ」

……その後は羽未と一緒に早めの風呂を堪能した。

しろはには怒られたけど、久しぶりに羽未から背中を洗ってもらえたし、良しとしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……そして夜。夕飯を食べた後は、早めに布団を敷いた。

というのも、帰宅してからずっとバーベキューの思い出話をしてきた羽未が、先程電池が切れたみたいに寝てしまったため、早めに敷かざるを得なかつたんだ。

「……なんだかんだで、疲れちゃつたみたいだね」

風呂から上がってきたしろはがそう言いながら、布団で眠る羽未を見る。本当、気持ち良さそうに寝てる。

絵日記は何とか書き上げたみたいだけど、今日はお風呂も早かったし、一気に疲れが出たんだらうな。

「今日は本当に楽しかったみたい。羽依里、羽未ちゃんお相手、お疲れ様」

「いや、俺は大したことしてないよ。子供たちや皆のおかげだよ」

「……そう？　一緒に大きな鯛を釣ったって言ってたけど」

「まあ、あれが唯一の成果みたいなもんだけどさ……それより、しろはも昼からずっと留守番させて悪かったな」

「ううん。今日は鏡子さんやおじーちゃんが来てくれたし、退屈はしなかったよ」

「ああ、そうだったのか」

茶飲み仲間というわけじゃないけど、鏡子さんとじーさんは時々様子を見に来てくれていたみたいだ。ありがたい話だ。

「鏡子さんはお土産に新味のカップうどんを持ってきてくれたよ。台所の戸棚に入ってるから」

「わかった。いざという時の非常食だな」

基本、我が家の食事は毎食しろはが作ってくれるので食事に困ることはないのだけど、備えは大事だと思ふし。

「あと、おじーちゃんからは段ボール箱いっぱいのお菓子を持ってきてくれたよ。羽未ちゃんにだって」

「あの人も相変わらずだな……」

しろはのじーさんは定期的に羽未にお菓子をくれる。それ自体は嬉しいことなんだけど、その量が問題だ。とにかく多すぎる。

「羽未ちゃんに食べさせてあげるにも限度があるし、捨てちゃうのももったいないし」

「蒼に聞いた感じだと、たぶん通販代行使って本土からお菓子を仕入れてるんだと思う。そこまですてくれなくていいのにな」

「うん。気持ちは嬉しいんだけどね……」

しろははそう言いながら、机の上に日記帳を広げた。どうやら書き

物を始めるみたいだ。

これ以上会話を続けて邪魔をしても悪いと思い、俺は身体の向きを変えて、おもむろに羽未の絵日記帳を開く。

『7月26日 天気：はれ

きょうは、みんなとバーベキューをして、おにのおねーちゃんとおにごっこをした。おねーちゃんはものすごくはやかっただけど、おにごっこはたのしかった』

……そんな文章の上に、バーベキューをする皆や、鬼ごっこをする識が描かれていた。

できたら、おとーさんと釣りをしたことにも触れてほしかったけど、昨日に続いて識のインパクトが強すぎたもんなあ。

「……ほら羽依里。また羽未ちゃんの絵日記、勝手に見て」

「ごめんごめん。やっぱり気になっちゃってさ」

描かれた絵の中から自分の姿を探していると、俺が絵日記を盗み見しているのに気付いたしろはからそう注意された。

「それで、羽未ちゃんのイベントの話は皆にしてくれたの？」

「ああ、バーベキューの時に話したよ。皆、協力してくれるってさ」

「そうなんだ。羽未ちゃん、良かったね」

そう言って、眠る羽未の頭を優しく撫でる。

「うみゅ……」

しろはの言葉に応えるかのように、羽未は小さな声を出していた。本当、幸せそうだ。

明日はお客さんが来るけど、午前中は自由に動けそうだし。羽未に何をしてあげようかな。

しろはに続いて羽未の頭を撫でてあげながら、俺は明日の予定について思考を巡らせたのだった。

第三話 7月27日

「あれ？ 羽依里さん、今日はもう起きてるんですか？」

朝早くから庭で作業していると、いつものように野菜の入った袋を持った夏海ちゃんがやってきた。

「ああ、夏海ちゃん。おはよう。相変わらず早いね」

「おはよーございます……」

あれ、なんだか不満そうな顔をしてる。もしかして、俺の方が早く起きてるのが悔しいのかな。

「そ、そうだ。羽未はまだ寝てるんだよ。良かったら、起こしてあげてくれないかな」

「わかりました！ いつもの羽依里さんみたいに、優しく揺り起こしてあげますね！」

そんな姿を見ていられず、思わずそう提案すると、夏海ちゃんは俺に野菜の入った袋を俺に押し付けるように手渡した後、勇み足で家中へと入っていった。

「……相変わらず元気だなあ」

俺は渡された野菜を持って、台所へと向かった。

「しろは、今日も夏海ちゃんが野菜を持って来てくれたよ」

「わあ。いつも助かるね」

しろはが嬉しそうに袋を開けると、中にトウモロコシとがモロヘイヤが入ってるのが見えた。

「ところで、この野菜を持って来てくれた夏海ちゃんはどこ？ もしかして、帰っちゃった？」

「いや、まだ羽未が寝てるって話をしたら、起こしてあげるって言うてたよ。今頃、寝室じゃないかな」

「ええ……それで、任せちゃったの？ 大丈夫かな」

さっそく袋の中からモロヘイヤを取り出しながら、しろはが心配そ

うな視線を寝室へと向ける。

「夏海ちゃんと羽未は仲良いんだし、大丈夫じゃないか？」

「そうじゃないよ。理由はわからないけど、羽未ちゃんは私と羽依里以外に起こされたら、すごく機嫌が悪いから」

「あ」

……言われて思い出した。そう言えば以前、たまたま紬が起こしに来てくれたことがあったんだけど、その時も珍しくぐずっていた気がする。

「ちよ、ちよつと様子を見てこようかな」

「うん。そうしてあげて。それと、また野菜のお礼を兼ねて、夏海ちゃんにも朝ご飯を食べていってもらいたいんだけど」

「わかった。それも伝えておくよ」

そう答えて、俺はわざと腕まくりをしながら寝室へと足を向ける。物音一つしないけど、無事起こせたかな。

「……え、これどういう状況？」

半分開けられていたふすまから寝室を覗き込むと、そこには驚きの光景が広がっていた。

部屋の中央に敷かれた布団の上で、羽未が大の字になって眠っていて、その足元に夏海ちゃんの足だけが見えていた。

正確には、夏海ちゃんが羽未の眠る布団の下敷きになっていた。これは助けないと。

「な、夏海ちゃん、大丈夫？」

「……ふはっ」

その足を掴んで、多少乱暴に布団の下から救出する。同時に新鮮な空気を胸いっぱい吸い込んでいた。

「えーっと、何があったの？」

「わ、わかりません。普通に声をかけて身体を揺すっただけなんですけど、気がついたら布団の下敷きになってました」

えええ、なにそれ。

「なんか勝てる気がしないので、おとーさん、お願いします」

羽末に完全敗北した夏海ちゃんが、くしゃくしゃになってしまった髪を整えながら俺を見てくる。よし、熟年の技を見せてあげよう。

「おーい羽末、朝だぞー」

「うみゅー」

というわけで、羽末の隣に腰を下ろして声をかける。すごく眠そうな声が返ってきた。

「ほらほら、夏海ちゃんも来てくれてるよ。起きて起きて」

「んー、なっちゃんー?」

その小さな身体を揺すっていると、目を擦りながらその身を起さず。良かった。起きてくれたみたいだ。

「おとーさん、なっちゃん、おはよー」

「羽末さん、おはようございます! こんなに簡単に起こしてしまうなんて、さすがおとーさんですね!」

「はは。それほどでもあるけどね」

思わずそう答えて胸を張る。伊達に何年も起こしてないぞ。

「それじゃ羽末、顔を洗って、髪も梳かさないと。ほら、すごいことになってるよ」

普段しろはが使っている鏡台の前に羽末を立たせて、その姿を見てもらう。

「うー、ばくはつえんじょー」

羽末は髪が多いせいかな、なかなか悲惨なことになっている。

「羽末さん、動かないでくださいね。私が髪を梳いてあげますから!」

その時、ヘアブラシを手にした夏海ちゃんが羽末の背後に立ち、わっしやわっしやと羽末の髪を整えてくれる。さすが夏海ちゃんも女の子だ。手慣れている。

「そうそう夏海ちゃん。今日も朝ごはん食べていきなよ。野菜をくれたお礼に、しろはが腕を振るうってさ」

「ありがとうございます! それじゃ、ごちそうになりますね!」

羽末の着替えを用意しながら、夏海ちゃんにそう伝える。今日はお客さんもないし、ゆつくりと朝ごはんが食べられそうだ。

身支度を整えた羽未と三人で居間に行くと、しろはが朝食を配膳してくれていた。

炊きたてのご飯に、ネギと豆腐の味噌汁、メインのおかずは目玉焼きで、小鉢にモロヘイヤのおひたしがついていた。

「おいしいそうー」

一番に席についた羽未が、目玉焼きを覗き込むようにしていた。さすがしろはが作っただけあって、焦げ目ひとつない、完璧な目玉焼きだった。

「しようゆにひでんソースも用意してあるから、好きなのをかけてね。羽依里はケチャップもあるよ」

しろはが調味料セットを食卓に置きながら、笑顔でそう言ってくれた。ちなみに羽未はしようゆ派、俺はケチャップ派だ。

「それじゃ、いただきます」

「いただきますーす」

エプロンを外したしろはが席に着いたのを確認して、俺が朝の挨拶をする。他の皆も後に続き、朝食が始まる。

「どれどれ」

俺はさつそく目玉焼きにケチャップをかけて、半分に分ける。程よい感じの半熟の黄身を箸でつかむと、そのままご飯の上でバウンドさせてから口に運ぶ。

「……うん。うまい」

ご飯にケチャップ、そして卵。オムライスと全く同じ組み合わせだし、美味しくないはずがない。

「確か、夏海ちゃんも半熟の目玉焼きが好きだったよね」

「そうです！ さすがしろはさん、わかってますね！」

夏海ちゃんは満面の笑みで、しようゆが馴染んだ半熟の目玉焼きをご飯の上に乗せていた。あれも卵かけご飯みたいで美味しいよね。

「んー、おいしいー」

一方、羽未はしろはと同じく硬めの目玉焼きが好きみたいで、それ

にしようゆをかけて味わっていた。本当、幸せそうに食べるなあ。

「そういえば、今日のイベントはもう決めてるんですか？」

味噌汁を一口すすった後、夏海ちゃんがそう聞いてきた。

「いや、特に決めてないんだ。夕方からはお客さんが来るし、午前中に何かしてあげたいとは思ってるんだけどさ」

虫取り、魚釣りと楽しんだから、今日辺りまた駄菓子屋に行ってみるのもいいかもしれない。もしくは家族サービスを兼ねて、しろはの実家に行ってみるとかさ。

「あ、羽依里さん。それだったらですね……」

……夏海ちゃんが何か言いかけたその時、居間の電話が鳴った。こんな朝から誰だろう。

「はい。鷹原です」

一番電話の近くにいたしろはが電話に出て、すぐに俺に受話器を向けてきた。

「羽依里、静久さんからだよ。海の家の手伝って言うてるけど」

「ああ……昨日、浜辺でそんな話をしてさ。出るよ」

そういえば、昨日しろははあの場に居なかったから海の家のことには知らないんだった。それについては後で話すことにして、まず電話に出ることにした。

『代わりました。羽依里です』

『おはようパイリ君。朝早くにごめんなさいね』

『いえ。それより、海の家の手伝とか』

『そうなの。さっそくで悪いのだけど、今日の午前中は時間あるかしら』

『今日ですか？ 大丈夫ですよ』

そう答えた直後、羽未と目が合った。電話の内容が気になっているのか、食事の手を止めて俺を見ている。

……そうか。午前中に静久を手伝ったら、羽未との時間が取れなくなってしまう。本人もそれを心配しているんだろう。

『あの、もし良かったら羽未も見学に連れて行って良いですか？』

少し考えて、俺はそう静久に提案した。海の家設営とか滅多に見

れるものじゃないと思うし、俺が上手くやれば、これもいい思い出になるかもしれない。

『もちろん、大歓迎よ』

静久は悩むことなく、二つ返事でOKしてくれた。後は羽未の気持ち次第だな。

『羽未にも話をするので、少しだけ待ってもらっていいですか？』

『ええ。こっちが手伝ってもらうのだし、いくらでも待つわ』

そう言ってくれた静久との電話を一旦保留にして、俺は羽未の方に向き直る。

「羽未、今日はおとーさんと一緒に静久さんの海の家の開店準備を見にいかない？」

「うみのいえ？」

「そう。浜辺にカレーのお店をオープンさせるらしいんだ。今日は皆で、その準備をするんだよ」

「たのしそうー」

詳しい話を聞いて、羽未の目が輝いた。これは脈ありかもしれない。

……その後、しっかりと羽未の意志を確認してから保留を解除して、静久に参加の旨を改めて伝えた。

必要な道具は全部静久が用意してくれるらしく、俺たちが持って行くものと言えば水筒くらいだった。

『それじゃ、よろしくね。パイリ君』

『ああ、こっちこそよろしく』

……そして電話を切る。同時にその場にいた皆が何か言いたそうな目で俺を見てきた。

しろははもとより、夏海ちゃんも昨日のバーベキューに参加していなかったし。海を家の話を知らないのも当然だろう。

「あの、羽依里さん、海の家とかやるんですか？」

「そうらしいよ。どうやら、静久の思い出の場所を復活させたいらしい。

いんだ」

「……その辺の話、もうちよつと詳しく教えてほしいんだけど」

夏海ちゃんの問いに答えながら食卓に戻ると、しろはが間髪を入れずそう聞いてきた。せっかくだし、食事をしながら説明することしよう。

「海の家……そんなのあったね」

モロヘイヤのおひたしを食べながら、しろはがどこか懐かしそうに言っていた。昨日の良一や蒼の反応を見る限り、当時は結構な人気店だったみたいだ。

「しろはも行ったことがあるのか?」

「ううん。うちはおかーさんが絶対連れて行ってくれなかったから。あそこはカレー派閥の根城だって」

……ちよつと待って。カレー派閥? なにそれ。

「……でも、羽未ちゃんは行きたいんだよね?」

「うん!」

「そう……さすがに大丈夫だとは思うけど、羽未ちゃんが行きたいっていうなら、しょうがないよね」

俺が浮かんだ疑問を口にする前に、しろはは自分で自分を納得させてしまったらしい。

「……羽依里、もし危なくなったらすぐに連れて帰ってね」

危なくなったら……ってどういうことだろう。確かに開店準備で工具を使ったりはするだろうけど、羽未がやるわけじゃないし。何か別の意図があるんだろうか。わからない。

「あの、私も行ってみたいですか? 海の家とか、見たことないの
で」

その時、一足先に食事を終えた夏海ちゃんがおずおずとそう切り出してきた。

「うん。俺はいいと思うけど……」

言いかけて、思わずしろはの方を見てしまう。しろははすごく驚い

た顔で夏海ちゃんを見ていた。

「し、しろは。どうしたんだ?」

「……うん。静久さんがやるって手前、私は何も言えないけど、夏海ちゃんも気を付けてね。カレー派閥になっちゃ駄目だよ」

「は、はあ……?」

その口調は穏やかだったが、しろはの目は笑っていなかった。本当、なんなんだろう。

……その後、一度帰って準備をするという夏海ちゃんを見送って、俺は羽未の宿題を見ることにした。

「きょうは、さんすうー」

鞆から元気よく算数ドリルを引っ張り出して、席に着く。うんうん。やる気に満ち溢れているみたいだ。

「羽未ちゃん、頑張ってるね」

「うん!」

洗い物を終えたしろはも、そんな羽未の隣に控えている。今日は夫婦二人体制だ。頑張れ、羽未。

「うーん、うーん……」

算数の宿題はさらっと片付けた羽未だったが、その次に取りかかった夏の友で詰まっていた。

「どうした羽未、分からない問題があるのか?」

「うん。これー」

羽未は気だるげにとあるページを見せてくる。そこには『おとうさんやおかあさんから、こどものころのあそびをきいてみましょう』と書かれていた。

……ああ、こういう質問あるよなあ。もちろん、子供の教育のために考えられた設問なんだろうけどさ。

「おかーさんはこどものころ、なにしてあそんでいたの?」

「え」

羽未から唐突に質問されたしろはが固まった。

確か、子供の頃のしろはは意外と男の子っぽい遊びが好きだったと聞いたような。バノレタン星人のソフビ人形とか持ってたらしいし。

「おかーさん、おしえて?」

「お、おとーさんに教えてもらってね。おかーさん、忙しいから」

そう言っつてわざとらしく席を立ち、台所へ行っつてしまった。しろは、逃げたな。

「羽未、おかーさんはな。ふおふおふおで遊んでたんだ」

俺は両手でピースサインを作り、それを上下に揺すつて見せる。確か、こんなのだったよな。

「ふおふおふお?」

「遊んでないし!」

しろはが叫びながら台所から戻つてきた。どうやら聞こえていたらしい。

「羽未ちゃん、違うんだよ。おかーさんはその……つて、書いちゃ駄目! ふおふおふお書いちゃ駄目!」

「えー、しゅくだいなのにー」

直後、羽未が夏の友に鉛筆を走らせるのを必死に止めていた。そこまで嫌がらなくても。れいだんよりはマシだと思っただけだよ。

「じゃあ、かわりにおとーさん、おしえて」

「え?」

しろはの願いが通じたのか、羽未は書きかけの文字を消しゴムで消して、今度は俺に向き直つてきた。

「うんうん。教えて教えて」

「そ、そうだなあ……」

しろはも何食わぬ顔で羽未の隣に座つてるし、これは逃げられそうにない。何してたかなあ。

「うーん、ビーダマンとか、ミニ四駆かな」

「みによんく?」

「自分で組み立てて、電池を入れて走らせるおもちゃの車だよ。昔、流

行っただんだ」

「すごい！ おとーさん、くるまつくれるの!？」

「え？ いや、おもちゃだから……」

「すごい！」

瞳をキラキラ輝かせて、心から信じている様子だった。これは、今更否定できそうにない。

「ふふ、おとーさん、すごいね」

「うん。すごい！」

羽未は本当に嬉しそうに夏の共に鉛筆を走らせていた。しろはもうまい具合に逃げ切ったみたいだし、妙な噂が広がらないことを祈るばかりだった。

……それから小一時間ほどして、宿題を終わらせた羽未と一緒に海の家へと向かうことにした。

「それじゃ、二人とも気を付けてね。私は手伝えないけど、後で差し入れ持って行くから」

「ありがとう。それじゃ、行ってくるよ」

「いつてきまーす！」

麦わら帽子を被って、水筒を肩にかけた羽未と手をつなぎ、しろはに見送られながら加藤家を後にする。

表に出るとすぐに、空から降り注ぐような蝉時雨が聞こえた。今日も暑くなりそうだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

昨日バーベキューをした浜辺を海岸線に沿って歩いていくと、やがて一軒の建物が見えてきた。

建物そのものは綺麗だけど、潮風対策なのか、窓という窓は大きな木の板でふさがれている。入口と思われる場所にも二枚の板が打ち

付けられ、その間から大きな南京錠が見えていた。

「あ、来ましたよー」

「パイリ君、来てくれてありがとう」

そんな建物の前に、静久と天善を筆頭に、夏海ちゃんや蒼、良一、のみきと紬、鷗といった面々が集っていた。

「羽未ちゃんも来たのねー。もしかして、手伝ってくれるの?」
「うん!」

「羽未は見学だけだぞ。その代わりに、おとーさんが頑張るからな」

そう言つて、俺はわざとらしく腕まくりをする。皆の周りには工具箱が置かれているし、これは本格的な作業になりそうだ。

「……」

「……ところで皆、どうして水着姿なんだ?」

その場にいる俺と羽未、そして夏海ちゃん以外の全員が何故か水着姿だった。確かに浜辺だけど、今から作業するんじゃないだろうか。

「だって、この場所で作業をすると、谷間に汗をかくでしょう?」

「え?」

「あー、それ、わかるわー」

「すぐくよくわかるよー」

「わかりません」

静久が自身のその大きな胸を指差しながら言う。男の俺にはよくわからないけど、蒼や鷗は賛同していたし、そういうものなんだろう。

一人、紬が凄く寂しそうな顔をしていたけど。

「私も水着の方がよかったんでしょーか。谷間、ありませんけど」

そんな話を聞いてか、夏海ちゃんが複雑そうな顔で自分のウニクロTシャツを摘んでいた。別に気にしなくていいと思うけどなあ。

「そういうえば、今日は藍は来てないのか?」

「さすがに今日は仕事だつて言つてたわよー。研修で本土だつて」

「そうなのか。なんだかんだで、先生は夏休み中も忙しいんだな。」

「それじゃ、皆揃ったところで作業を始めましょうか。まずは窓や入口を塞いでいる板を外してしましましょう?」

「わかった。あの釘抜きを使えばいいんだな？」

こういう力仕事は男の役目だし、俺は良一や天善と一緒にあって、窓の板を外しにかかる。

「う、結構固い……」

潮風に晒された一部の釘は良い感じに錆びついていた。力任せにやって折れたりしたら面倒だし、慎重に釘を外していく。

「おとーさん、がんばれー!」

その時、背後から羽未の声援が聞こえた。

「おお、おとーさん、頑張るからな」

「小さな応援団ねー」

「そですな」

その声援に答えると、蒼や紬から微笑ましい目で見られた。ちなみに女性陣は室内の掃除を担当する手はずになっているらしく、掃除道具を準備して次に備えていた。

「よっこいせ……と」

最後に入口をふさいでいた大きな板を天善が外し、全ての板を外し終わった。

「それじゃ、開けるわね。何年も締め切られていたんだし、次は中の掃除をして、風通しをしなきゃ」

静久はそう言いながら、入口の南京錠を外し、扉を開けた。

……次の瞬間、建物の中からおびただしい数のフナムシが飛び出してきた。まるで黒い波のようだ。

「ひいっ!」

俺は情けない声をあげながらも、隣にいた羽未を反射的に抱きかかえる。直後、俺の足の足を無数のフナムシがぞぎぞぎと這っていく感覚があったけど、それどころじゃない。ここは羽未を守らないと。

「羽未、しっかり目をつぶっているんだぞ。おとーさんが良いって言うまで、開けちゃ駄目だからな」

「う、うん!」

羽未は俺の首に手を回し、抱きつくようにしていた。一瞬でも見てしまったんだろう。その身体が小刻みに震えている気がする。必死に安心させようとその背中をさするけど、そのあまりの光景に、その場にいた全員が言葉を失い、しばらく動けなかった。

「あー……今の、すごかったわねー……」

そんな虫の波が完全に過ぎ去ってから、蒼が口を開く。冷や汗をかいている気がするし、さすがに昆虫学者の娘でも今の光景はシヨックだったらしい。

「これは、バルザンを焚いた方がいいわね。もしもの時のために用意していたの、全部使いましよう」

冷静を装っているけど、静久はこっそり天善の手を握っていた。顔も青いし、さすがに刺激が強すぎたみたいだ。

「そ、そうだな。それは名案だ。数が足りそうにないなら、役所の倉庫に眠っているバルザンも出そう」

そう言うのみきは、良一にお姫様抱っこされていた。あれなら完璧に守れるけど。良一もやるなあ。

「ズ、ズクズクに賛成！　まずは虫を退治しないと！」

「そですね！」

「はい！　こんなの、とても近づけません！」

そんな中、鷗と紬、そして夏海ちゃんはスーツケースの上に避難していた。絶対狭いだろうけど、うまくバランスを取って乗っている。

「じゃあ、まずは虫退治か。羽未、もう大丈夫だよ」

フナムシがいなくなったのを確認してから、羽未を地面に降ろす。言いつけを守って、しっかりと両手で目をふさいでいた。えらいぞ。

「うー、フナムシでんぐく……」

そんな、少し前に魚屋で流行った歌みたいに言わないで。シヨックだったのはわかるけどさ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……これからバルザンを焚くとなると半日以上かかるということ
で、今日の作業はこれで終了となってしまった。

そのまま解散となり、やる事が無くなった俺と羽未は、同じ
く暇になった夏海ちゃんと一緒に駄菓子屋へと足を運んでいた。

「……フナムシ、こわい。こわすぎる」

買ってあげた氷イチゴにも手をつけず、羽未はベンチで震えてい
た。これ、トラウマになったらどうしよう。

このままだと、今日の絵日記は大量のフナムシに襲われる絵日記に
なってしまう。そんなの嫌だ。

「羽未さん、怖がつちやつてますねえ」

俺を挟んで、羽未と反対側の位置で氷メロンを食べていた夏海ちゃ
んが、心配そうに羽未を見ていた。

「これは、チャーハン作戦しかないかな」

「チャーハン作戦ですか？」

「うん。お昼にしろはにチャーハンを作ってもらって、その嬉しきで
恐怖を忘れてもらおうって作戦なんだけど」

「そのまんまですね……」

しゃくしゃくとかき氷を口に運びながら、何とも言えない顔をされ
た。良い作戦だと思うんだけど。

「それだと、羽未さんはお昼までフナムシのトラウマを引きずったま
まになるじゃないですか。可哀想ですし、もっと早く手を打ってあげ
ましょうよ」

「あげましょうよと言われても……堀田ちゃん、何か良い案ない？」
「えっ？」

俺は近くの棚で駄菓子の整理をしていた堀田ちゃんに声をかける。

「そうですねえ……ほら、他のことをして気を紛らわせるとか。うち
のおとーさんも、庭で土いじりしてる時が仕事を忘れられて一番幸せ
だっって言ってますし」

確か、堀田ちゃんのおとーさんは普通のサラリーマンだったと思うけど。庭いじりの趣味があるのかな。

「あ、そうですね！ 羽未さん、今から私の家に来ませんか？」

「え、なつちゃんのうち？」

「そうですね！ 正しくは鏡子さんの家ですけど！ 一緒に野菜の収穫作業をしてみませんか？」

「しゅーかく、さぎよー？」

「はい！ 私やおとーさんと一緒に、たくさんのお野菜をとりましようー！」

「うん！」

その話を聞いた羽未は嬉しかったのか、手に持ったかき氷がこぼれんばかりの勢いで立ち上がる。どうやら夏海ちゃんは海の家作業に代わるイベントを考えてくれたみたいだ。

「夏海ちゃん、気持ちは嬉しいけど、本当にいいの？」

「もちろんです！ 岬農園の一日体験ですよ！」

ほう。岬農園と来たか。確かに、夏海ちゃんは鏡子さんと二人で畑をしているみたいだし、あながち間違っではないみたいだけど。

「それじゃ羽未、かき氷を食べたらお邪魔しようか」

「しゅーかく、たのしみー」

急ぎかき氷を口に運ぶその顔には笑顔が戻っていた。どうやら、フナムシの思い出はすっかり消えたみたいだし、これは夏海ちゃんに感謝だな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……かき氷を食べ終えて、駄菓子屋を後にする。

そこから三人並んで住宅地を外れるように歩いていくと、やがて港へ向かう一本道の手前に大きな平屋が見えてくる。それが鏡子さんの家だった。以前何度かお邪魔したことがあるけど、この建物は日当

たりも良くて、家庭菜園をやるにはうってつけの環境だった記憶がある。

「きょーこさーん！ ただ今戻りましたー！ お客さんですよー！」
築年数こそ経っていきそうだけど、しっかりと整備された家屋の玄関をあけて、夏海ちゃんがそう叫ぶ。少しの間を置いて鏡子さんが出てきてくれた。

「あら、羽依里君に羽未ちゃん、いらっしやい。今日はどうしたの？」
そしていつもの変わらぬ調子で出迎えてくれた。本当、この人は何年経っても変わらない。

「羽未さんの今日のイベントとして、今から一緒に収穫作業をしたいと思うんです！ 確か、午後から採る予定になってましたよね？」

「ああ、二人も手伝ってくれることになったんだね。もちろんいいよ」
鏡子さんはすぐに状況を理解してくれたらしく、笑顔で了承してくれた。

「それじゃ、これが採ってきて欲しい野菜リストね。畑は暑いから、暑さ対策だけはしっかりね？」

「わかりました！ 羽未さん、こっちです！」

「うん！」

快く許可をくれた鏡子さんからメモ用紙を受け取り、夏海ちゃんは羽未を連れだつて畑へと向かつていった。

元から浜辺で作業するつもりだったし、暑さ対策は万全だ。俺は鏡子さんに改めてお礼を言ってから、そんな二人の後に続いた。

「ひろーいー！」

そして夏海ちゃんに案内された畑というのが、これまた広かった。家の敷地の倍以上はあるんじゃないかという面積に、色とりどりの野菜が栽培されている。

「……久しぶりに来たけど、広くなってない？」

「春先に鏡子さんが少し広げたと書いていました。この家、住宅地のはずれにあるので、草さえ刈れば道沿いにいくらでも開墾できると

言っていましたし」

先も言ったけど、ここは日当たりは良いし。しっかりと管理できれば収穫は見込めそうだ。

「今はこんな感じに夏野菜ばかりですが、今年の冬には広甘藍に挑戦してみたいと、鏡子さんも言っていましたよ！」

「え、ヒロカンランって何？」

「広島県の方で栽培されている、古来種のキャベツらしいですよ！すごく甘くて歯ごたえがあつて、キャベツチャーハンに最高なんですよ！」

「そうなんだ。それは楽しみだね」

……力説していた。聞いたことない名前だけど、古来種って言うくらいだし珍しいのかな。

「それじゃあ羽未さん、まずはネギの収穫をしましょう！ネギ、チャーハンに必須ですもんね！」

「うん、ひっすー」

そんな話をしながら、二人はネギが植わっている方へと向かっていった。俺も他の野菜を踏まないように注意しながら、その後を追った。

「ネギの次はピーマンです！羽未さんはピーマン好きですか？」

「うん。すきー」

「ピーマン、美味しいですもんね。ピーマンチャーハンとか、最高ですし」

二人は畝（うね）のところにしゃがみ込んで、そんな話をしながら笑顔でピーマンをもらっていた。ところで、さつきから夏海ちゃんの調理例が全部チャーハンなんだけど。さすがだ。

「そうでした。ニンジンも一本いつときましよう！」

次に、手にしたメモを見ながら夏海ちゃんがそう指示を出していた。まるで栄養ドリンクみたいない方だ。

「んー、ぬけないー」

ピーマンの近くに植わっていたニンジンの葉を掴み、羽未が力を込める。でも土が硬いのか、抜ける様子はない。

「おとーさん、てつだってー」

「よーし。おとーさんにまかせろ」

そして予想通り、羽未が助けを求めてきた。よし、今日こそきちんと父親の威厳を示さないと。

「よいしょ……うわっ!」

羽未を背後から抱きかかえるようにして、一緒にニンジンの葉を掴む。そのまま力任せに引き抜くと、思いのほか軽い力で抜けてしまった。

「あいててて……」

「おとーさん、だいじょうぶー?」

「だ、大丈夫大丈夫」

とつさに羽未は庇ったけど、その代わりに自分の身を守れなかった。

思いつきり尻もちをついて、ズボンが土まみれになってしまった。これは、しろはに怒られる。どうしよう……。

「ネギ、ピーマン、ニンジン……キュウリも採りましたし、後は……」

夏海ちゃんが鏡子さんのメモを今一度見ながら、採り忘れがないかチェックする。その足元のカゴには結構な種類の野菜が入っているし、量も十分だと思うけど。

「ねー。なっちゃん、あそこは?」

その時、羽未がある方向を指差す。俺も視線を運んでみると、畑の一番端の方、建物に近い場所に柵があった。ここの畑は基本害獣除けの柵とかないんだけど、珍しい。

「えっと、あの先は裏の畑になるんですけど、鏡子さん以外は立ち入り禁止なんです」

「え、そうなの?」

「はい。特別管理区らしいです」

どうしてそんな物々しい言い方なんだろう。あの先に、何があるの？

「……どうも、鏡子さんが変わった野菜を育ててるらしいんですが、マスターオブ裏庭がいるので危ないのかなんとか」

俺の顔色を見て、察してくれたんだろう。夏海ちゃんがそう説明してくれた。マスターオブ……？ 危ない……？

すごく気になったんだけど、夏海ちゃん表情から汲み取るに楽しい話題じゃなさそうだ。ここは触れないでおこう。

「……三人とも、そろそろ休憩にしない？」

リストにあつた野菜を大方収穫し終えた頃、鏡子さんがやってきてそう声をかけてくれた。

腕時計を見てみると、集中して作業をしたせいか結構な時間が経っていた。

「冷蔵庫で冷やしておいたキュウリがあるの。味噌をつけて食べると美味しいよ」

「ありがとうございます。ちょうど作業も終わったので、ごちそうになります」

俺はたくさんの野菜が入ったカゴを持ち上げながら、少し離れたところにいる羽未と夏海ちゃんに合図を送る。二人もすぐにそれに気づいたのか、先を争うように戻ってきた。

……その後、俺たちは縁側で鏡子さんが用意してくれた麦茶とキュウリを堪能していた。

「んー、おいしいー」

パキポキと歯切れのいい音が縁側に響く。味噌をつけただけなのに、すごく美味しい。やっぱり、新鮮なものもあるんだろうか。

そして羽未と一緒にキュウリをかじりながら、なんとはなしに広い畑を見渡す。羽未の顔ほどあるカボチャに、大きなナス、トウモロコ

シ、トマト……さつき、結構な量の野菜を採ったはずだけど、まだまだたくさん野菜が実っている。これは毎日夏海ちゃんが持つて来てくれてもなくならないわけだ。

「それで……そろそろいい時間だし、お昼ごはん用意してあげたいんだけど……」

「え？」

そんなことを考えていると、鏡子さんが申し訳なさそうにそう口にする。部屋の時計を見てみると、12時をとうに回っていた。

「あー……思わず長居してしまつてすみません。お構いなく」

「ううん。せっかくだし、食べていって。私の料理は人様に出せるものじゃないし、こんなものしかないけど」

そう言つて、カップうどんがどかどか出てきた。この期に及んで断るのも悪い気がする。

「じゃあ、ごちそうになります。羽未、どのカップうどんがいい？」

「どろりのコープタキムチー」

俺が問いかけるや否や、羽未は目の前のカップうどんを手を取つた。

「え、すごく辛そうなカップうどんだけど大丈夫？」

「……ちようせん」

そう言う羽未の目はやる気に満ちていた。一抹の不安はあつたけど、本人がそう言うならしょうがない。

「そうです！ なんなら私の育てた古代種野菜をトッピングしますか？ 甘いので、辛さを中和できるかもしれないし！」

夏海ちゃんはそう言うと、素早く靴を履いて庭に降りる。

「え、いいの？」

以前、古代種野菜は普通の野菜より手間がかかると聞いた記憶があるし、食べさせてもらつていいんだろうか。

「はい！ 丹精込めて育てたので、ぜひ食べてください！」

そう言うが早いか、止める間もなく畑の中に走つていった。

「もしかして夏海ちゃん、あの美馬太キュウリを食べてもらつつもりなのかしら」

「みまふと……そんなのがあるんですか？」

……名前からして太そうだけど、初めて聞く品種だった。

「もしかしてそれ、特別管理区に植えてあるんですか？」

だとしたら一人で行かせて大丈夫なんだろうか。マスターオブなにかかいるって言ってなかったっけ。

「違うよ。美馬太キウリが植えてあるのは畑の一番端の、道路脇のところ。あれだけは夏海ちゃんが頑張って育ててね。ちょうど食べ頃になってきたの」

カップうどん用のお湯をやかんで沸かしてくれながら、鏡子さんが嬉しそうに話す。

「……なんか夏海ちゃん、生き生きしてますね」

「うん。やっぱり、夏が好きみたいだし。楽しんでるみたいだよ」

以前、加藤家には夏海ちゃんがこの島で過ごした夏の思い出の品がたくさん置かれていた。

民宿へと改築する際に、その品物は全て鏡子さんが新居へと運んでくれたのだけど……。

俺は視線を隣の部屋へと向ける。するとまず、壁際に鎮座する巨大なアクリクのぬいぐるみが目についた。確かあれ、初めてこの島にやってきた夏に紬に貰ったんだっけ。

そしてその横の机には、鑑定大会の折に浜辺で拾ったさくら貝や、土で汚れた野球ボールが置かれていた。あの野球ボール、確かリトルバスターズとの試合に勝った記念のボールだったよな。最近は年賀状くらいしかやり取りをしてないけど、リトルバスターズの皆、元気かな。

……後、ここにはないけど、パリングルスでオルゴールも作ったよな。あれも天善がオルゴールキットを用意して、静久が譜面を書いてくれて……。

「あ—————！」

……そんな懐かしい夏を思い出していたら、夏海ちゃんの叫び声で現実に戻された。

「え、なに？」

視線を庭に戻し、夏海ちゃんの姿を探す。すると、すの姿はすぐに見つける事ができた。

例の美馬太キウリが植わっているであろう畝のところに、識と一緒に立っている。

「……………って、識?」

一瞬目を疑ったけど、あの着物は間違いない。識だった。どうしてあんなところにいるんだろう。

俺は不思議に思いながらも、靴を履いて夏海ちゃんの方へ駆け寄る。

「夏海ちゃん、どうしたの?」

「この人が私のキウリを食べちゃったんです!」

「え?」

言われて、彼女が指差す先を見てみると、識の両手には少しだけかじられた、ぶつといキウリが握られていた。

「ぶ、ごめんよ……………あまりにお腹が空いてしまって……………」

識はものすごく申し訳そうな顔をしていた。この様子だと、また昨日から今まで何も食べてなかったんだろうか。

「ごめんで済んだらケーサツはいりませんよ! 頑張って育てたのに……………」

夏海ちゃんは怒りながら、半分涙目だった。それだけ、あの野菜に思い入れがあったのかもしれない。

「ぶ、ぶえ……………」

……………その時、咎められていた識の瞳にも涙があふれてきた。あれ、この流れは。

「ぶ、ごめん……………ごめんよ……………ぶえええええ……………」

申し訳なさで一杯になり、居ても立っても居られなくなったのか、識は言葉を詰まらせながらに謝った後、そのまま全力で走って行ってしまった。

「まあ……………てえ……………」

……………そんな識を、夏海ちゃんがダツシユで追いかけていった。ええ、嘘だろ。

一人残された俺は、何とも言えない気持ちで振り返り、縁側の方を見やる。するとそこは羽未が座っているだけで、鏡子さんの姿はなかった。

「羽依里君、これ使って」

直後、背後から声があった。見ると鏡子さんが道路側にバイクを押しやってきていた。どうやら、わざわざ家のガレージから運んできてくれたらしい。

「あの、鏡子さん……このバイクは？」

「私が時々夏海ちゃんと使ってるの。ヘルメットも二つ入ってるから、使って？」

「は、はあ」

言われるがまま、バイクのキーとヘルメットを受け取る。

「羽未ちゃんは私が見ておいてあげるから、安心して二人を追いかけ」

「ありがとうございます。助かります！」

俺は鏡子さんにお礼を言うと、そのままヘルメットをかぶってキーを回す。学生時代、俺が乗っていたのと同タイプのバイクだ。乗るのは初めてなはずなのに、不思議と馴染む。

「アクセルオン！」

俺はどこかの人形使いみたいな台詞を口にすると、そのままバイクを発進させた。二人が走っていったこの道は港までほぼ一本道だし、バイクならすぐに追いつけると思う。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……二人とも、どこまで行っただろう……」

安全運転を心がけながら、港への一本道を進む。本当に一本道だから、逸れるような横道もない。道なりに行けば追いつけるはずだけど……。

「ぜーはー、ぜーはー」

すると、すぐに道の端で両膝に手をつけて肩で息をしている夏海ちゃんを見つけた。

「に、逃げられました……なんなんですか、あの子……」

識は恐ろしく足が速いし、さすがの夏海ちゃんでも振り切られてしまったみたいだ。

「識はああ見えて、足が速いからね」

「え、あの子のこと知ってるんですか？」

「うん、二回ほど行き倒れになつてるところを助けたんだ」

「はい？ 行き倒れ？」

「いや、なんでもないよ。とにかく識を追いかけよう。夏海ちゃん、後ろに乗って」

俺は一度バイクから降りて、座席下の収納スペースからもう一つヘルメットを取り出して夏海ちゃんに手渡す。

「ところで羽依里さん、このバイクどうしたんですか？」

「鏡子さんが貸してくれたんだ。それじゃ、出発するよ！」

「は、はい！」

説明もそこそこに再びバイクにまたがると、ほぼ同じタイミングで夏海ちゃんも後ろに乗ってきた。俺はそれを確認すると、もう一度アクセルを噴かした。

「……えええええ……」

……そして道なりに走ること数分。聞き慣れた鳴き声が聞こえてきた。

「ぶええええええー！ー！」

「いました！ あの子です！」

背中の夏海ちゃんが叫ぶ。あの着物に、あの赤髪。そしてあの足の速さ。間違いない。

「おーい識！ 止まれ！」

「止まってくださーいーい！」

「ふん！」

俺は走る識に並走するようにバイクの速度を落とす、夏海ちゃんと一緒にその声をかける。一瞬、時速28km/hでメーターの表示が見えた気がするけど、きつと気のせいだろう。

「うう、文明の利器を使うなんて、ひどいぜ……」

さすがにバイクからは逃げられないと悟ったのか、識はようやく足を止める。

それを確認して、俺と夏海ちゃんもバイクを降りて識を取り囲む。

「それで、あなたは誰なんですか？　うちの畑を荒らすなんて、フテェヤローですね！」

……怒りからか、夏海ちゃんの口調が変になっていた。

「僕は識さ。こう見えて、鬼なんだぜ」

「ふーん」

いつもの調子で自己紹介をした識を、夏海ちゃんは冷めた目で見ていた。うん、ここにも鬼がいる。怖い。

「……ごめんなさい」

さすがに空気を読んだのか、識は真摯に頭を下げた。

「……盗んだキュウリ、二本とも食べちゃったんですか？」

「ああ、そうだぜ……」

本当に申し訳なさそうに言う。思えば、走り去る時には両手に持っていたはずの美馬太キュウリがない。たぶん、逃げながら全部食べてしまったんだろう。

「あれ、珍しいキュウリなんですよ？　ようやく実ったので、一本残しておいて、明日のキュウリチャーハンに使おうと思っていたのに！　ひどいです！」

夏海ちゃんはそう言っただけで憤慨していた。もしかしなくても、怒りの原因はチャーハンだった。相変わらず、チャーハンの申し子だ。

「で、でも、そのキュウリのおかげで僕の命は救われたんだ。つまり、キミは僕の命の恩人だ！　お礼になんでも一つ、キミの願い事を叶え

るぜ?」

すごいへじやぶだ。このやり取り、もう何度目だろうか。

「……そんなこと言っても誤魔化されませんよ! 連行です!」

でも、夏海ちゃんには通用しないみたいだ。彼女は表情を変えることなく、識の着物の袖をがっしと掴む。

「え、連行つてどこにだい!？」

「お奉行さまのところですよ! そこで事情聴取ですよ!」

「お代官様、お慈悲を——!」

そして、まるで時代劇みたいなやりとりをしながら、三人で奉行所……じゃない。鏡子さんの家へ戻ることになった。

ぐいぐいと識を引っ張っていく夏海ちゃんの行動力に感服しながら、俺はバイクを押し込んだのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ふえてる……」

鏡子さんのところに戻ると、羽未がカップうどんを食べながら不思議そうな顔で俺たちを見ていた。

「羽未ちゃん、私たちは向こうの部屋でお話があるから、少しの間一人でカップうどん食べてね」

「うん」

鏡子さんは識を連れて帰ってきた俺たちを見て勘付いたんだろう。羽未に笑顔でそう告げると、俺たちを隣の部屋へと案内してくれた。

「……それで、この子が夏海ちゃんのキュウリを食べちゃったんだね」
「ぶえ……あのキュウリはなぜか懐かしい感じがして、思わず手に取らずにいらなかったんだ。本当にごめんよ」

そして隣の部屋で尋問を始めると、さすがに観念したのか、識は土下座でもしそうな勢いで謝ってきた。

「あの……この子、俺の知り合いなんですけど、本当に腹が空いていた

ただだと思っんですよ。今回だけは許してやってくれませんか」

その姿を見ていられなくて、俺はそう助け舟を出す。

「むー」

そんな中、夏海ちゃんは識の真正面に座り、口をへの字に曲げている。夏海ちゃんでもあんな顔するんだ。

「ご飯、ずっと食べてなかったんですか？」

「ああ、昨日のお昼に浜辺でおむすびをもらって以来、今まで飲まず食わずさ」

夏海ちゃんの問いかけに、識はそう答えていた。先日も行き倒れになっていたし、彼女の言葉に偽りはないように思えた。浜辺の話も、昨日の出来事と合致がいくし。

「お前、昨日も行き倒れていたよな。きちんとしてご飯食べないと駄目だぞ」

「そ、それはわかっているつもりさ……けど、今の時期は、筍（たけのこ）も独活（うど）も生えていなくて……緋衣草の蜜で飢えを凌ぐのが精一杯なんだよ」

「あの、ひごころもそう……って何ですか？」

……その時、夏海ちゃんがそう聞いてきた。思えば、普段は使わない名前な気がする。どうして俺は知ってるんだろう。

「サルビアのことよ。懐かしい呼び名ね。昔、おばーちゃんたちが言っていた記憶があるわ」

「え。もしかして、花の蜜で飢えをしのいでいたんですか？」

鏡子さんの説明を受け、識の壮絶な食生活を悟った夏海ちゃんが愕然としていた。

「そんな理由があったなんて……それなら、キュウリくらい食べたくなりますよね」

「え？」

そう言われると同時に、識のお腹が大きな音を立てた。どうやらキュウリで補給したエネルギーは逃走に使いきってしまったらしい。

「しようがないですよ。お腹が空くの、辛いですもんね」

気づけば、今度は逆に夏海ちゃんが申し訳なさそうに頭を垂れてい

た。

「……これは、許してもらえそうな流れになってきたかもしれない。……でも、人の畑のものを勝手に食べるのは良くないわ」

「お奉行さま、お慈悲を——！」

けど、そんな流れを鏡子さんが笑顔で一蹴していた。識は畳に額を擦りつける勢いで土下座しているし。もう、どっちが鬼かわからない。

「あの、鏡子さん、許してあげましょうよ。困ったときはお互いさまって言うじゃないですか」

その時、夏海ちゃんがなだめる側に回ってくれていた。良かった。どうやら夏海ちゃんには人の心が残っていたみたいだ。

「うーん……生産者の夏海ちゃんが許すって言うならいいけど……」

どこか腑に落ちない顔をしていた鏡子さんだけど、そこは大人の女性。夏海ちゃんの提案を聞き入れてくれ、今回、識はお咎めなしということになった。

「はい！ カボチャ入りのカップうどんですよ！」

「夏海先輩、ありがとうございます！」

……無事無罪放免となった識は改めて二人に自己紹介をし、羽未を交えた五人で食卓を囲んでいた。

ちなみに羽未は鏡子さんに諭されたのか、普通のきつねうどんを食べたらしい。さすがに豚キムチは早かったみたいだ。

「羽依里さんのカップうどんもできましたよ！ どうぞ！」

「ああ、ありがとうね」

そして俺が受け取ったカップうどんには、大量のニラが乗っていた。俺、この後仕事があるんだけど、口の匂い大丈夫かな。

「識ちゃん、お腹空いてるみたいだし、カップうどんだけで足りる？ 良かったら、おむすびでも作ってあげましょうか？」

「いいのかい？」

「駄目です！」

直後、俺と夏海ちゃんの声がハモった。気持ちはありがたいけど、鏡子さんに料理させるわけにはいかない。たとえば、おむすびであつても。

「鏡子さんの手を汚させるわけにはいきません！ お腹空いてるのなら、野菜のトッピング増やしてあげますから！ はい！ 追いカボチャですよ！」

確かにおむすびを作ったら手が汚れるけど、それとこれは意味が違う。夏海ちゃん、相当テンパってるな。

識の器にカボチャを追加投入している夏海ちゃんを横目に、俺は自分のカップうどんをすすった。うん。フレッシュだった。

「あ、もうこんな時間か」

昼食を終えると、14時近くになっていた。そろそろ帰って仕事をしないと、しろはに怒られてしまう。

「そういえば、今日はお客さんが来るんでしたね」

「うん。今日のお客さんはペット同伴らしいから、民宿の方も念入りに準備をしておこうと思ってさ」

「ということは羽依里さん、これから忙しくなるんですね」

「まあ、それなりにね」

「……なら民宿の準備、識さんにも手伝ってもらったら良いんじゃないですか？」

「ぶえい！」

我関せずといった様子で羽未とテレビを見ていた識が、突然話題を振られて素っ頓狂な声を上げていた。どこからそんな話が出てきたんだろう。

「識さん、さっきのお願い事の話、まだ生きてますよね？」

「な、何の話だい？」

「ほら、命の恩人だから、何でもお願い事を一つ叶えるっていう話です」

不思議に思っていると、夏海ちゃんがそう続けた。そういえば、ま

だ識から願いを叶えてもらっていない気がする。

「えーっと、それはもちろん生きています。でも……」

言った本人はすっかり忘れていたんだろうか。時折言いよどみながら目を泳がせている。

「……あら、そんな約束をしていたの？」

その時、それまで静観していた鏡子さんが会話に入ってきた。

「そうなんです！ 識さんを助けたお礼に、どんな願いも一つだけ叶えてくれるという約束をしたんです！」

「で、でも夏海先輩、僕のお願いは叶えられないんだ」

「そんな言い訳は駄目です！ 識さん、今から羽依里さんの仕事を手伝ってあげてください！」

「ほ、本気かい!?!」

「本気です！」

「対価として僕に労働を課すなんて、夏海先輩は鬼だ！」

「鬼でも悪魔でもいいです！ なんでも叶えるぜって、言ってたじゃないですか！」

「そ、それはそうだけど……」

「識ちゃん、嘘は良くないわ」

「ぶえ!?!」

そんな押問答をしている最中、鏡子さんが笑顔を崩さずに、良く通る声でそう言う。

「約束は守らないとね？」

「で、でも、その」

「識さん、嘘つき鬼さんなんですか？」

「嘘つきは良くないわ」

「うそはだめー」

いつの間にか羽未まで混ぜっていた。まるで、さつきの尋問の続きみたいになっていた。うちも鬼の手……じゃない。猫の手も借りたいほど忙しいってわけじゃないから別に良いんだけど、とても断れそうな雰囲気じゃない。まいったな。

「ぶ、ぶええ……」

……やがて、がつくりとうなだれながら識が折れた。この勝負、岬一族の勝ちらしい。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「きよーこさーん、なっちやーん、ばいばーい！」

「三人とも、気を付けて帰ってね」

「また来てくださいねー！」

全てが解決した後、俺と羽未、そして識の三人は鏡子さんたちに見送られながら帰路についた。

「ぶええ……」

道中、識は着物の裾が地面に着きそうなくらい肩を落として歩いていた。足取りも重く、これから先のことを考えているんだろう。

「識、いい加減諦めろ。なんでも願いを叶えると宣言したお前が悪い」「わかってはいるさ……でも、羽依里くんは宿場を営んでいるんだろう？ 宿場と言えば料理だ。僕の料理は人様に出せるものじゃないぜ？」

鏡子さんみたいなこと言わないでほしい。というか、何日か前に話した内容、覚えてたんだ。にしても宿場って。随分古い言い方だな。「なにも、一から食事を作れってわけじゃない。店には俺の妻もいるから、羽未と一緒にその手伝いをしてくれるだけでいい。下ごしらえとかなら、できるだろ？」

「それならお安いご用さー！」

識の表情が明るくなった。もしかして謙遜してるだけで、腕に覚えがあるのかもしれない。

「おねーちゃんといっしょー」

羽未も識と一緒に嬉しのか、ニコニコ顔だった。しれっと手を繋いでるし、やけに仲良くなっている気がする。

「識が逃げないように、しっかりと捕まえておくんだぞ」

「うん！」

羽未が掴んだその手をぶんぶんと振りながら、元気よく答える。まあ、見た感じ大丈夫だとは思うけど。識を連れて帰ったら、しろはも驚くだろうな。

「……連絡もしないで、どこに行ってたの。差し入れを持って海の家に行っても、誰もいないし」

加藤家に帰宅すると、しろはは驚くどころか、大変怒ってらっしゃった。そういうえば、鏡子さんの家に行くことを伝えていなかった気がする。

「もしかして中にいるのかなって思って扉を開けたら、煙だらけだったし」

言われてみれば、しろはは朝と服装が違っていた。どうやら害虫駆除用のバルザン攻撃をまともに食らって、服が汚れてしまったらしい。

「ごめん。色々あって今日の作業は中止になってさ。夏海ちゃんに誘われて、鏡子さんの家に行っていたんだ」

「それならそうと、電話の一本でも欲しかったんだけど。お昼ごはんだって用意してるんだから。それに……」

「わ、わかったわかった。次からは連絡入れるから」

玄関口で腰に手を当てて、しろははご立腹だった。こんなことになるなら、どこかの家で電話でも借りて、連絡を入れておけばよかった。「……とところで、後ろの子は？」

一通り俺に文句を並べ終わった後、俺の後ろに隠れるようにしていた識に気がついたみたいだ。

「ああ、こいつは小間使いだ」

「ぶえ!? ここに来るまでの間に、僕の身分はそこまで下がってしまったのかい!？」

「それは冗談だけど、色々あって民宿を手伝ってくれることになったんだ。夏海ちゃんからのご使命だし、好きに使ってくれ」

「よくわからないけど、今日はお客さんが来るし、手伝ってくれるんなら助かるよ。えつと……」

「ああ、僕は識だよ」

今更ながら自己紹介をしていなかったことに気づいたのか、識が名乗る。さすがに、鬼の下りは使わなかった。

「私は鷹原しろは。よろしくね」

「あれ、キミがしろはさんなのかい？」

「え？」

「しろは先輩、キミの作ったおむすびは最高だったよ！」

「え、先輩ってどういうこと？」

「これだけ美味しいおむすびを作れるんだ。是非先輩と呼ばせてくれ！」

「べ、別に先輩じゃないし……わ、わわわ、わわわ」

嬉しさが爆発したのか、識はしろはに駆け寄ってその手を取ると、そのままくるくると回り始めた。そういえば、先日識の命を救ったのは、しろはの作ったおむすびだった気がする。

「たのしそうー」

羽未はそう言うけど、たぶん回されてるしろははそれどころじゃないんじゃないかな……。

「はう……」

……数分間回されたのち、しろははようやく解放された。

「じゃ、じゃあ、識と羽未ちゃんは私と一緒に料理の下ごしらえね」

「ああ、了解したよ」

「がんばるー」

さすがに目が回ったんだろう。しろはは頭を軽く振りながら、識と羽未を先導して家の中へと消えていった。

「……それじゃ、俺も仕事に取りかかるかな」

その場に一人残されてしまった俺は、軽く頭を搔いてから、浴室へと足を運ぶ。まずは水回りの掃除から取りかかることにしよう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……よし。これで浴室の掃除も終わったし、あとは客室だな」

タワシや洗剤を片付け、次はほうきとちりとりを持って客室へと向かう。そこまで広い部屋じゃないし、すぐに終わると思う。

「……ほら、こうすると籠ができるんだ」

「すごい！ ライオンもできる!？」

「それはできないけど、変わった花ならできるぜ？ ほら、こうして、

こうだ」

「すごい！」

慌ただしく動き回っていると、居間の方から羽未と識のそんな会話が聞こえてきた。

一度はしろはの手伝いに行った二人だけど、どうやら食材がまだ揃っていないらしく、少しだけ自由時間ができたらしい。二人はその時間を利用して、折り紙をしてるみたいだ。

「……やっぱりキミは、僕の探しているのとは別のうみさんなのかい
?」

「?」

本当、仲が良いよな……とか思っていたら、なんだか不思議な会話が聞こえた。なんだろう。識の知り合いにも羽未って子がいるのかな。

まあ、漢字こそ違えど『うみ』って名前の子はたくさんいるだろうし……。

「ほら羽依里、ぼーっとしてる時間があつたら、早く高橋さんの所に行かないと。使つてない犬小屋、借りるんだよね」

……そんな折、しろはから呆れ顔でそう言われた。そうだった。犬小屋を忘れていた。

「部屋の掃除は私がしておくから、お願いね」

「ああ。ごめん。お願いするよ」

俺は持っていた道具をしろはに手渡すと、玄関へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ふう。まさか、こんな立派な犬小屋だとは思わなかった……」

背負うようにして運んできた犬小屋を、どすつと庭に置く。貸してくれて高橋さん曰く、ずいぶん昔に飼っていた大型犬用の小屋だとか。

大は小を兼ねるといふし、小さいよりかはいと思ったけど……さすがに重たかった。朝のうちに綺麗に掃除してくれたらしく、それ以上の手間はかからなかったけど。

「部屋の掃除も終わってるみたいだし……次はどうしようかな」

一応客室を見てみたけど、さすがしろは、完璧だった。手持ち無沙汰になった俺は、台所へ行ってみることにした。

……台所に顔を出してみると、しろはは鍋に向かっていた。

少し離れたところでは、羽未がひげ猫エプロンをつけて一生懸命山菜の皮をむいていた。うんうん。ちゃんとお手伝いをして、えらいぞ。

「しろは先輩、こつちの魚も下ごしらえ終わったぜ」

「うん。ありがとう」

一方、識はそれとは別の場所で魚を捌いていた。見た感じ綺麗にできていて、やっぱり料理をしたことがあるんだろう。

「それにしても、すごい量の食材だね。これ、全部夕餉に使うのかい？」

「ああ、お客さんの夕飯だけじゃなく、俺たち家族の分も一緒に作ってるからさ。結構な量になるんだよ」

「なるほど。だからこれだけ沢山の材料があるわけだね」

俺が説明すると、識は感心したようにテーブルに並んだ食材を見て回る。山菜に魚、野菜。どれも島で手に入るものばかりだ。

「……あれ？ しろは先輩、これはヤブガラシかい？」

「そう。よく知ってるね。おひたしにしようと思って、水に浸しているの」

そんな中、すでに下処理が終わった別の山菜の前で識が足を止めた。どうしたんだろう。

「……これ、中にいくつか違う草が混ざってるぜ？」

「えっ？」

識は山菜が入ったボウルの中に手を入れて、そのうちの一つをつまみ上げる。

「似てるけど、これはアマチャヅルだぜ。薬として飲まれる場合もあるけど、結構な苦みがあるんだ。おひたしには向かないんじゃないかい？」

そう言いながら、その山菜をしろはに見せる。俺には全然違いが分からない。

「あ、本当。これは違うね」

「アマチャヅルは節々が赤紫色だから、そこで見分けるといいぜ」

「教えてくれてありがとう。吉原さんからもらったものだから、安心してきっていたよ」

しろははお礼を言った後、一旦鍋の火を小さくして、識と一緒に山菜の選別を始めた。

「識は山菜に詳しいのか？」

「ああ、それなりの知識はあると思うぜ？」

慣れた手つきで山菜をより分ける識にそう聞いてみると、元気な答えが返ってきた。手の動きに迷いが無いし、本当に自信があるみたいだ。

それから数分もしないうちに、数本のアマチャヅルを見つけ出すことができた。

許可をもらって、試しにアマチャヅルを一口かじってみたけど、本

当に苦かった。これを知らずにお客さんに提供していたと思うと、背筋が寒くなった。下手したら、お店の信用問題にも発展するところだ。識のおかげで助かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……その後、皆で夕飯の準備を終えた頃、今日のお客さんがやってきた。

「お待ちしていました。加藤家へようこそ」

いつもの感じで来客対応をする。玄関に出てみると、整った顔立ちの女性が二人立っていた。

年齢こそ少し離れているようだけど、どちらも同じ青色の髪。どうやら姉妹っぽい。

「霧島聖さま、二名でよろしいですか」

「うむ。世話になるぞ」

「お世話になるのだー」

「ぴこぴこー！」

「え？」

そしてそんな二人の足元に、謎の毛玉がいた。思わず二度見してしまふ。小型犬とは聞いていたけど、もしかしてこの毛玉がそうなのかな？

「ポテトは犬だよお。お泊りを許してくれて、ありがとう！」

混乱していると、ショートカットの妹さんの方が満面の笑みで俺の手を握ってきた。その手には黄色いバンダナが結ばれている。何か怪我でもしてるんだろうか。

「その、座敷犬ではないと聞いていたので、庭の方に犬小屋を用意させていたのですが、よろしかったですか？」

「全然大丈夫！ 良かったねー。ポテト！」

「ぴっこり！」

飼い主の言葉にしつかりと受け答えしているように思えた。ポテトと呼ばれているこの毛玉犬、もしかして頭が良いのかな。

「それでは、お部屋にご案内します。こちらにどうぞ」

「よろしく頼む。ああ、ポテトはここで待っているんだぞ」

「ぴんぴんー！」

まあ、この島には人語を理解してポンと鳴く青いキツネだっているんだし。本土にピコと鳴く毛玉犬がいたって不思議じゃないのかもしれない。

俺は頭に浮かんだ疑問を棚上げにして、二人を客室へと案内するこ
とにした。

ところで、妹さんのバンダナもそうだけど……聖さんの服装が気になる。どうして通天閣Tシャツを着てるんだろう。大阪の人なんだろうか。

「……えーつと、本日は観光ですか？」

「それもあるが、ちよつと下見にな。なかなか良い島だな」

「ありがとうございます」

部屋に荷物を置いてもらいながら、場つなぎ的にそんな話をする。
下見って何だろう。

「お姉ちゃん見て。立派な犬小屋があるよお」

その時、妹さんが客室向かいの庭に設置した犬小屋に気づいた。

「一応、こちらでご利用したのですが、いかがでしょう？」

知らずに用意したとはいえ、あの毛玉犬……ポテトが使うにはは
かなり大きい。気に入ってもらえるだろうか。

「元々、外で寝かせるつもりでいたからな。わざわざ用意してくれて
ありがたいくらいだよ。佳乃、さっそく入ってもらったらどうだ」

「そうするね！　おーい！　ポテト——！」

「ぴんぴんー！」

飼い主がその名を呼ぶと、家の外を經由してポテトが庭にやってき
た。小屋と並んでみると、ますますサイズ差が気になる。

「今日はここがポテトのお宿だよ！」

「ぴっぴー！」

そんな俺の気持ちとは裏腹に、ポテトは嬉しそうに小屋の中で飛び跳ねていた。むしろ、広い寝床に喜んでるように見えた。

「うんうん、ポテトも嬉しいみたいだよ。お兄さん、ありがとう！」

また笑顔で俺の手を取って、ぶんぶんと振る。天真爛漫というか、本当、感情を隠さない子だ。

「……そうだが主人。明日は朝早くに出ようと思っいてな。朝食は結構だ」

「かしこまりました。料理担当の者にそう伝えておきます」

その時、聖さんが思い出したようにそう口にした。あくまで朝食はサービスなんだけど、後で忘れずにしろはに伝えておこう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……うん、これで完成。羽依里、お客さん用の夕食できたよ」

「よし。それじゃ運ぼう。識と羽未も手伝ってくれな」

しばらくして夕食時。いつものように家族総出で食事を客室へと運ぶ。

ちなみに今日のメニューは、先程良一から仕入れた新鮮な魚の刺身の盛り合わせと天ぷら、吸い物、島野菜を使ったサラダに煮物、そして山菜のおひたし等、島の恵みを存分に生かした献立だった。

「失礼します。夕飯をお持ちしました」

「どうぞ、めしあがれー」

「こつちは娘です。ほら、挨拶して」

俺を先頭に入室した後、いつもの流れで料理の説明をし、家族の紹介をする。

「こちらが料理を担当している家内です」

「い、いらつしやいませ。本日は、お犬様のお食事も用意してございま

する」

しろははそう言いながら、おずおずと別の器に入った料理を差し出す。お客さんの前だからか、緊張して変な敬語になっていた。

「ポテトの分も用意してくれたんだね！　ありがとう！」

佳乃さんはしろはからその器を受け取ると、そのまま縁側のところにいるポテトへと持って行った。めちやくちや尻尾を振りながら食べているし、きつと喜んでもらえたんだろう。

「ほう？　このおひたしは変わっているな」

「その山菜はヤブガラシというんだ。僕も食べてみたけど、美味しかったぜ」

「む？　ご主人は随分若く見えるが、その方も娘さんかな？」

「あ、いやその、この子は親戚の子で」

とりあえず、そう誤魔化しておいた。識も料理を運んでくれていたし、家族だと思うのが自然だとは思うけど。

「このお刺身も、おいしそうだよお」

「ああ、見事に魚の組織を破壊せずに切られている。メスも使わずに見事だな」

「え、メス？」

「ああ。こう見えて、私は医者でね。調理にはメスを使うんだ」

そう言つて、どこからか医療用のメスを取り出した。えええ、嘘だろ。

「つまり、キミはお医者様なのかい！　女性なのに、それはすごいことだよー！」

その時、俺たちのやりとりを聞いていた識が興奮気味に話に入ってきた。女医さんって、今時珍しいことでもないと思うけど。

「ほら識、お客さんの食事の邪魔になるから、そろそろ戻るぞ。それでは、ごゆっくり」

識はもつと話したそうな顔をしていたけど、それによってせっかくの料理が冷めてしまっても悪いし。多少強引だけど会話を打ち切って、部屋から退散することにした。

そして自室に戻ると、俺たちも夕食をとることにした。

「しろは先輩、この天ぷらは最高だよ！」

「ありがとう。島の塩をつけて食べると美味しいよ」

そんな家族の食事に、当然のように識が混ざっていた。特にしろはと識は今日出会ったばかりのはずなのに、不思議と受け入れていた。

「おお、このおひたし美味しいな」

俺の斜め向かいに座る識を横目で見ながら、山菜のおひたしを口に運ぶ。程よい苦みと独特の風味が口いっぱいには広がる。

「うみさんが丁寧に皮をむいてくれたから、筋が残らずにおいしくできただ。ここはうみさんを褒めるべきだぜ？」

「そうなのか。羽未、ありがとうな」

「がんばったー」

隣の羽未の頭を撫でてあげると、嬉しそうに目を細めていた。

基本、お客さんのいる日は俺たちも慌ただしい夕食になるのだけど、こういう家族の時間はできるだけ大切にしたい。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……どの料理も見事なお手前だった。しろはさんにお礼を言っておいてくれ」

「ごちそうさまー！」

「あ、わざわざありがとうございます」

そして、ちょうど俺たちが食事を終えた頃、部屋のふすまを少しだけ開けて、霧島姉妹がお膳を下げに来てくれた。

「それでは、少し夕涼みに出てくる」

「わかりました。お留守の間に、お部屋へお布団を用意いたしますね」

「ああ、よろしく頼む」

「ポテトー！ ご飯食べたし、お散歩行くよー！」

「ぴっぴー！」

直後、庭の方からポテトの元気な声が飛んできた。あの見た目だし、散歩に行ったら子供たちが新種のペケモンと勘違いされるかもしれないな。

元気に表へと向かっていく二人と一匹を見ながら、俺はそんなことを思ったのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……よし、こんなもんでいいかな」

客室の押し入れから畳まれたままの布団を出して壁際に並べる。ひとまず、布団の準備はこれで完了だ。

「……この部屋、見覚えがある気がするよ」

「え？」

外出中とはいえ、お客さんが使用中の部屋だし、用が済んだらさつさと退散しよう……なんて考えていたら、背後から声がした。

振り向いてみると、いつの間に来てきたのか、識が部屋の入口に立っていた。

「見覚えがあるって、以前泊まりに来たことがあるのか？」

「いや、そういうのじゃないんだ。何かこう、懐かしい感じがする」

そう言うけど、この民宿は今年始めたばかりだ。これだけ印象的だし、識みたいな子が来ていれば覚えてると思うんだけど。

「そういえば、成り行きでこんな時間まで手伝ってもらったけど、識も親御さんが心配してるんじゃないか？」

船の時間を気にしている風もないから、島のどこかに泊まる予定ではあるんだろうけど。そろそろ外も暗くなってくる時間だし、泊まってる場所によっては送ってあげた方がいいかもしれない。

「神山って名字はあまり聞かないし、どこか親戚の家でもあるのか？」

「親戚か……もしかしたら、いるかもしれないね」

なんの気なしにそう聞くと、識は少し愁いを帯びたような表情を見せた。その言い方も、どこことなく含みのある言い方だった。

「……あのさ。識ってもしかして、訳ありなのか?」

「ここ数日、何度か行き倒れになっている識を助けたけど、このご時世、余程のことがないと行き倒れにならない。もしかして、何か家に帰りたくない理由があったりするんじゃないだろうか。」

「理由によっては、しばらくこの家に置いてもらえるようにしろはに頼んでやってもいいぞ?」

「本当かい!?!」

俺の言葉を聞いて識の顔が輝いた。それにしても、どうして俺はそんなことを口走ってしまったんだろう。

「ああ。だから理由を話してみろ」

「……正直に言うと、僕には記憶がないんだ」

「え?」

一瞬冗談かと思ったけど、そんな考えは識の表情を見て霧散した。さつきと打って変わって、真剣な目をしていたから。

「自分のことで覚えているのは、神山識という名前くらいさ」

「……それは記憶喪失、ってやつなのか?」

「恐らくそうなんだと思う。他に覚えているのは『ずっとすみさんを探していた』ということくらいさ」

羽未を探す? よく意味がわからない。

確かに以前、羽未を知っている風なことを言っていたけど、当の本人は知らないみたいだったし。

「ちよつと待って。記憶がないってことは、宿は?」

「宿は毎日神社の軒下を借りていたぜ?」

「神社!?!」

あの神社、確か無人だったはずだけど。そこに寝泊りだった?

「ああ。この島に来て数日が経つけど、ずっと神社で寝泊まりしてるんだ。この時期なら風邪をひくこともないし、屋根だつてあるしね」

「じゃあ、その間の食事は!?!」

「それも鏡子さん家で一度話したじゃないか。緋衣草の蜜を吸ってい

「ただよ」

「そういえば、そんな話をしていた。そんな食生活をしていたからこそ、行き倒れてしまったわけだろうけど。」

「後は、海からハマグリやサザエを失敬したりね。しっかりと焼けば、美味しく食べられるし」

「いやいや、それって密猟だから。」

「そ、そんな生活は駄目だぞー！」

「ぶえ!?!」

「ちよつと来い!」

「思わず叫んだ俺は識の腕を掴むと、そのまま自室のしろはの元へと引っ張っていく。」

「もしかして家出なのかな……くらいに軽く考えていたけど、識の置かれた状況は俺の予想の斜め上をいつていた。まさか記憶喪失だなんて。これは、俺の手に余る。」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……というわけらしいんだ」

「そして俺はしろはの元へ赴き、識の置かれた状況について話して聞かせた。記憶喪失については伝えただけど、それ以外の部分はうまく誤魔化しておいた。」

「……」

「しろはその一部始終を黙って聞いて、やがて口を開く。」

「……急に記憶喪失とか言われても、正直信じられないけど。確かにその生活は良くないね。特にご飯は、しっかり食べないと」

「だろ? それでしろはに相談なだけでさ……」

「……じゃあ、少しの間、この家で暮らす?」

「次にしろはの口から出たのは、まさか俺が言いだそうと思っていたことだった。まさか、しろはの方からその提案が出るなんて。」

「いいのかい!？」

「うん。いいよ。悪い山菜を教えてもらった恩もあるし、羽未ちゃんも懐いているみたいだから。困ったときはお互いさまだよ」

「ありがとう！　しろは先輩は、僕の命の恩人だ！」

そう言いながらがっしりとしろはの手を握る。

困ったときはお互いさま……しろはの言うことはもっともだけど、今日出会ったばかりの子をここまですんなり泊めてあげるなんて、我が妻といえど、予想外だった。

「……でも、問題は寝る場所だよね」

「えっ？」

しろはの心意気に感心していると、その表情が唐突に曇る。どうしたんだろう。

「識の寝る場所。南の部屋を使ってもらおうかと思っていたけど、あの部屋、半分物置になってたよね」

「あ……そうか」

言われて思い出した。元々はたくさん部屋があった加藤家だけど、民宿に改装した今は部屋数に余裕はない。

しろはの言う部屋も、春先に冬の荷物を詰め込んでしまっていた。さすがに、すぐに使うのは厳しいかもしれない。

「識、今日のところはこの部屋で俺たちと一緒に寝てもらってもいいか？　しろはや羽未もいるからさ……」

「何を言ってるんだい？　寝る場所なら、庭に立派な建物があるじゃないか」

「え、庭？」

「ああ、あれだぜ？」

そう提案したところ、識がふすまを開けて廊下越しに見える庭を指さす。そこには、もう長いこと使っていない蔵が見えた。

「あれは蔵だし、それこそ物置みたいになってるんだ。汚れてるし、さすがに悪いよ」

「僕は全然構わないぜ？　自分で掃除するから、道具を貸しておくれよ」

渋る俺に対して、識は笑顔でそう言っていた。元より神社の軒下で眠るとまで言っていたんだし、雨風をしのげれば十分という考えなのかもしれない。

「おかーさん！おふろわいたー！」

その時、羽未がふすまを開けて部屋に入ってきた。姿が見えないと思ったら、お風呂を沸かしてくれていたのか。

「ありがとう。それじゃ、後でおかーさんと入ろっか」

「んー、おにのおねーちゃんとはいりたいー」

「え、識と？」

「うんー」

……しろはが驚くのも無理はない。普段、羽未はしろはと一緒にいるお風呂が大好きだから。

「きようはおねーちゃんがいいー」

そう言う羽未は識の着物の裾を掴んで笑顔だった。

「……そういうことらしいんだけど、識、いいかな？」

「ああ、僕は構わないぜ？」

「じゃあ、蔵の掃除は俺がしておくから、識はその間に羽未と一緒に風呂に入ってあげてくれないかな」

「え、羽依里くんが掃除してくれるのかい？」

「ああ、羽未も一緒に入りたがってるみたいだしさ。それじゃ、行つてくるよ」

俺はそう言つて立ち上がり、一人蔵へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……大体綺麗にはなつたと思うけど」

蔵に向かった俺は、天井に設置された明かりを頼りに、時間をかけてほうきとちりとりで床を掃除した。場所が場所だけに埃っぽさは消えないけど、一晩寝るくらいならなんとかなると思う。

「羽依里くん、さすが手馴れているね」

その時、自分の布団を手にした識が蔵にやってきた。風呂上がりのせいか、埃臭かった蔵の中に石鹸の良い香りが流れ込んできた。

「一通り掃除したけど、本当にここでいいのか？」

「ああ、十分だよ。不思議と落ち着くんのだ。宿泊を許してくれたしろは先輩に感謝だね」

「困ったときはお互い様だからな」

俺はしろはの言葉をそのまま口にする。

「ありがとう。羽依里くんは優しいね」

「お、俺を誉めても夜食のおむすびは出ないぞ」

受け売りの言葉だったせいか妙に恥ずかしくなってきた。そうお茶を濁す。

「いくらなんでも、そこまで凶々しくはないさ。でも、こういうことは一家の大黒柱たる殿方が決める事じゃないのかい？」

「その、うちの場合は違うんだよ」

「……なるほど。羽依里くんはしろは先輩の尻に敷かれているわけだ」

「そ、そういうわけじゃないぞー」

なんだろう。年は結構離れてるはずなのに、このやりとりを自然に感じている自分がいた。

「もちろん冗談だよ。羽依里くんは立派な宿場の主人さ」

動揺する俺を見ながら、識は蔵の真ん中に持ってきた布団を敷く。

そしてその上にちよこんと座って、悪戯っぽい笑顔でこつちを見てきた。

お風呂上がりでお客さん用の浴衣を着ている上に、髪を結っていないのもあって、一瞬だけ妙な色気を感じている自分がいた。当の本人に自覚はないのだろうか。

「それじゃ、僕はそろそろ休むよ。あまり家族の時間を邪魔するのも悪いしね」

次の瞬間、そう言って手を挙げる識を見て我に返った。我ながら何を考えているんだろう。

「そ、そっか。明かりのスイッチはあそこにあるから。それじゃ、おやすみ」

「ああ、しろは先輩にもお礼を言っておいてくれ。おやすみだ」

俺は恥ずかしさを必死に隠しながら、識に就寝の挨拶をして、蔵を後にした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……自室に戻ると、羽未は敷かれた布団の上で寝息を立てていた。

「あ、羽未はもう寝ちゃったんだな」

「うん。絵日記を書き終わったら、すぐに寝ちゃったよ」

「そっか……今日も畑仕事を手伝ってたし、疲れたんだろうな」

気持ち良さそうに眠る羽未の近くに腰を下ろす。部屋の明かりはついたままだけど、羽未はお構いなしに眠っていた。

「ずいぶん集中していたみたいだから、フロントの消灯作業やっておいたよ」

「え?」

いつものように机で書き物をしていたしろはに言われて時計を見ていると、21時近かった。予想以上に長い間、蔵に籠っていたらしい。

「うっかりしてたよ。ありがとう」

「頑張ってたみたいだし、いいよ。ところで、識は?」

「家族の時間を邪魔したくないから、もう休むってさ。しろはにお礼を言っていたよ」

「もう。気にしなくてもいいのに」

そこで会話が途切れる。羽未の小さな寝息と、虫の音が聞こえる以外は、静かな夜だった。

例えば、昨日懸念していた鳴き声による騒音も今のところない。もつとも、あのポテトにピコピコと鳴かれたところで、逆に癒されそ

うな気もするけど。

「……ところでしろは、識をこの家に泊めるの、よく了承してくれたな」

眠っている羽未の頭を撫でながら、俺は小さな声でしろはにそう聞いてみた。

「どうしてか、羽未ちゃんも懐いてたしね。どこかで会ったことがあるのかな」

昨日、浜辺で一緒に遊んだくらいだと思うけど。今思えば不思議だった。

「羽未を探していた……か」

「え、なに？」

思わず呟くと、しろはが机から顔を上げた。なんとなくだけど、この話はしろはにはしないほうがいい気がした。

「いや、なんでもないよ。それより、しろはも識と予想以上に早く打ち解けていた気がするぞ。普段、知らない人相手だと人見知りするのにさ」

「そ、そうかな。自分ではそんなことないと思うんだけど」

自分の頬をぱんぱんと叩きながら、どことなく恥ずかしそうにしていた。識についてなのか、人見知りについてなのかはわからないけど。

「……それに識を泊めてあげたのは、理由があるからだよ」

「理由？」

「……うん。ずっと昔ね。同じように記憶喪失の人が家にやってきたの。どんな人だったかは忘れちゃったけど、その時もおじーちゃんが泊めてあげてた」

しろはは目を閉じて、昔を思い出すようにそう口にしていた。

「そんなことがあったのか」

「うん。だから、あの子も泊めてあげることにしたんだよ。困ったときは助け合わなきゃ」

島民の間に強く残っている、互助の精神。しっかりとしろはにも受け継がれているみたいだ。

「……でも、やっぱりお客さんを蔵に泊まらせるなんて、民宿としてどうかと思う」

「別に料金もらってるわけじゃないし、本人もこの雰囲気落ち着くって言ってたし、いいと思うけど」

「それでも、蔵はないよ……今度からは予備の部屋も確保しておかないか……」

何かぶつぶつ言ってるしろはを見ながら、俺は近くに置かれていた絵日記へと視線を移す。今日の絵日記はどんな感じかな。

『7月27日 天気：はれ

きょうは、きょうこさんやなつちゃんやさいのしゅうかくをした。そのあとたべた、きゅうりのはいったカップうどんがおいしかった』

今日の絵日記には夏海ちゃんと一緒に畑仕事をする様子が書かれていた。良かった。フナムシじゃない。

そしてそんな文章の上に、両手にキュウリを持った羽未と夏海ちゃん、奥の方にはカップうどんを持った鏡子さんの姿も小さく描かれていた。今日は登場人物がいっぱいだ。

……ちなみに俺は遠くで、バイクっぽい物に乗って識を追いかけていた。うん。ここに書かれている誰よりも小さい。

「くそー。絵日記の主役の座、夏海ちゃんに先を越されたか」

「あ、また勝手に読んでる」

その時、しろは視線だけをこっちに向けて、そう注意してきた。「いや、いつ俺を書いてくれるのかと思ってさ」

「車が作れるかっこいいおとーさんの絵日記じゃなくて、残念だったね」

「う、そのネタ、まだ覚えてたのか」

一瞬、どうしてしろはが絵日記の内容を知っているのか疑問に思ったけど、これだけの登場人物だし、たぶん書くときにしろはがアドバイスをしたんだろう。

「わ。羽依里つてば、よく見たらすごく汚れてるし。早くお風呂に入ったほうがいいよ」

……言われてみてみれば、蔵の掃除をしたせいで全身くまなく汚れてしまっていた。これは一刻も早く風呂に入らないと。

「そうだしろは、せつかくだから一緒に入る？」

「残念。もう入りましたですよ」

冗談半分にそう誘ってみるけど、すまし顔で断られてしまった。口調は思いつきり動揺していたけど。

思えば寝巻きに着替えているし、識や羽未に続いて入浴を済ませたんだろう。最近一緒に入ってないから、久しぶりに入りたかったんだけどな。

「変なこと考えてないで、早く入ってきて。お湯も冷めちゃうし、洗濯機だつて回せないんだからね」

「わ、わかったわかった。行ってくるよ」

どことなく顔の赤いしろはから押し付けられるように着替えを渡されて、俺は部屋から追い出されてしまった。

「……ちよつと、お姉ちゃん！いきなり触つちやダメだよお！」

そして一人、浴室へ続く廊下を歩いていると、なんか声が聞こえた。明らかに霧島姉妹の声だった。ここ、壁が薄いから聞こえちゃうのかな。

「そう言うな。これは触診と言って立派な医療行為なんだぞ」

「お姉ちゃん、エロエロ星人だよお！」

え、エロエロ？

なんか色々聞いてはいけない単語が聞こえた気がして、俺は足早にその場を離れ、脱衣所へと駆けこんだ。

「れいげんいやちこなれ……」

そして浴室に入つてすぐに頭から水を被り、霊験あらたかな言葉で

お清めをするのを忘れなかった。煩惱は打ち消しておかないと。

「ふう……」

それからゆっくりと湯船に浸かる。そこまで広い風呂じゃないから、思いつきり身体は伸ばせないけど。

「今日の疲れは今日のうちに取っておかないと。疲れてる暇なんてないしな」

……明日からはラジオ体操も始まるし、お客さん二人も朝早くに出発すると聞いている。朝食はいららないらしいけど、朝から忙しくなりそうだ。

それに海の家の開店準備もできたら手伝いたい。さすがに虫の駆除、今日中に終わってるよな……。

窓の外に見える星空を見上げながら、俺はそんな風に、頭の中で明日の予定を反芻していたのだった。

第三話・完

第四話 7月28日（前編）

「……羽依里くん、うみさん！ 朝だぜ！」

……朝。今日も夏海ちゃんの声で起こされる。

って、声の感じが全然違う。思えば、お客さんがいる朝は夏海ちゃんも起こしに来ないんだった。

「……識？」

「やっと起きたかい。おはようだぜ」

そんなことを考えながら、うつすらと目を開ける。開け放たれたふすまと、昇ったばかりの朝日をバックに識が仁王立ちしていた。

「あ、ああ。おはよう」

「しろは先輩に頼まれて起こしに来たんだ。今日からラジオ体操が始まるから、早く起こしてくれとね」

「ふあ……そうだった。おーい羽未、朝だぞー」

俺はあくびを噛み殺しながら身体を起こし、隣で眠る羽未に声をかける。

「うみゅー」

……相変わらず眠そうだけど、頑張つて起きてもらわないと。初めてのラジオ体操、初日から遅刻させるわけにはいかない。

「……ところで羽依里くん、その、らじお体操ってのはなんだい？」

「え、識はラジオ体操を知らないのか？」

やっとこさ上半身を起こした羽未の髪を手櫛で梳いていると、識がそんなことを言ってきた。今時珍しいな。

「じゃあ、識も羽未と一緒にラジオ体操に参加したらいいよ。今日から参加すればログボももらえるしさ」

「よくわからないけど、羽依里くんがそう言うなら参加してみることにするよ」

識はまっすぐな笑顔を返してくれた。この島のラジオ体操は少し変わっているけど、健康に良いらしいし、朝ごはんは美味しくなる。

おまけにログボももらえるとなれば、参加しない手はないと思う。「準備ができたら声をかけるからさ。識もでかける用意はしておいてくれよ」

「ああ、了解したぜー」

元気な返事を残して廊下の先に消えていく識を見送って、俺と羽未も出かける準備に取りかかった。

「……ほら羽未、急いで急いで」

「いそげー！」

「……ご主人。忙しいところすまない」

羽未と一緒にバタバタと家の中を走り回っていると、帰り支度を整えたらしい霧島姉妹から声をかけられた。

「ああ、すみません。朝から騒々しくて」

「いや、我々の方こそ朝早くから動いてすまないな。ところで、宿代を支払いたいのだが」

「お支払いですね。こちらでお願いします」

羽未の支度をしろはに任せて、お客さんを玄関口へと案内する。そこにはしろは食堂から運んできたレジスターが置いてある。

「夕食代込みまして、お二人で10000円になります」

「ああ、これで頼む」

「はい。ちようどお預かりします」

俺は慣れた手つきでレジを操作して、代金を受け取る。食事代込みでこの金額は安すぎると言われることもあるけど、食材のほとんどは貰い物だし、民宿はこれくらいの値段がちようどいいと思っている。

「じゅんび、かんりよー！ おとーさん、はやくいこー！」

ちようどレジ処理が終わった時、準備を終えたらしい羽未が元気に表に飛び出していった。

「今日は何かあるのお？ うみちゃん、すごく嬉しそうだねえ」

「ぴんぴんー」

ポテトと一足先に表へ出ていた佳乃さんが、そんな羽未を見ながら

不思議そうに首をかしげていた。

「特に特別なイベントがあるわけではないんですが……今日から島のラジオ体操が始まるんですよ」

「え？ ラジオ体操がそんなに楽しみなの？」

「そうなんでしょうね。あの子にとって、初めてのラジオ体操ですから」

初めての夏休みの、初めてのラジオ体操。楽しみじゃないはずがない。

「……ふむ。その気持ち、理解できるな。佳乃も初めてのラジオ体操の時は、あの子と同じようにはしゃいでいたものだ」

「えー、そうだったかなあ？」

話を聞いていた聖さんが口元に手を当てながら、どこか懐かしむようにそう言っていた。

「あの頃の佳乃はかわいくてな。いや、今も十分にかわいいが。はやる気持ちを抑えきれずに、まるで子犬のように私の周りをくるくると回っていたものだ」

「も、もう！ 恥ずかしいから昔話はやめてよお！」

話を聞くうちに佳乃さんも昔を思い出したんだろう。赤面したまま、バンダナのついた右手をぶんぶんと振り、必死に話を遮っていた。

「それじゃ、しゅっぱーっ！」

朝一番の船に乗るといふ霧島姉妹を見送った後、俺は羽未と識を連れ立って神社へと向かう。朝から蝉が空を叩くように鳴いているし、今日も暑くなりそうだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ついたー」

「おお……さすが皆、揃ってるな」

石段を登って境内に辿り着くと、そこには島の子供たちの他、良一やのみきといった俺の友人たちが集まっていた。

「羽依里さん、おはようございますー!」

「今日がラジオ体操の初日ですからね。皆、気合入ってるみたいですよ」
一番に挨拶してくれたのは、夏海ちゃんと堀田ちゃんだった。その手には既にスタンプカードが握られている。

「あ、もうスタンプカードを配ってるんだね」

「はい! 今年は藍さんが配ってくれてみたいですよ!」

夏海ちゃんが指差す先、子供たちに囲まれている藍の姿があった。

「ああ、今年は藍が配っているのか」

「……そうなんだ。例年なら役所が配るんだが、今年は学校側に負けてしまったんだ」

……その時、背後から声があった。思わず振り返ると、明らかに意気消沈したのみきが立っていた。

「学校には今年の春、新しいプリンターが入ったらいいからな。くう……やはり、最新機種には勝てない……」

のみきは悔しそうに肩を震わせていた。その肩を良一が優しく抱く。

この島のラジオ体操では初日にしかスタンプカードがもらえない決まりになっているんだけど、もしかしてそのスタンプカードも学校と役所で出来栄を争っているのかな。なんか大変そうだな。

「確かに綺麗なスタンプカードなんですよね。ほら、見てください」

そんなことを考えていると、夏海ちゃんが持っていたスタンプカードを見せてくれた。ひげ猫やスイカバー、かき氷といった色鮮やかなイラストが描かれた、可愛らしいスタンプカードだった。

「もしかしてこれ、藍の手作りなのかな」

「そうですよ。はい。どうぞ」

そのスタンプカードを手にとって覗き込んでみると、藍がこっちにやってきて羽未にスタンプカードを渡してくれた。

「藍ってば、昨日は夜遅くまで学校に残ってこれを作ってたのよー。」

大事に使ってあげてねー」

「あ、蒼ちゃん……！ それは秘密にしておいてくださいと言ったのに……」

「あれー？ そうだったかしらー」

恥ずかしそうな姉を尻目に、蒼はイタズラっぽい笑みを浮かべていた。よく見れば、藍の目の下にはうっすらとクマができてきている気がする。

「わざわざ残って作ってたのか、先生は大変だな」

「せっかく最新機種があるんですから、使わない手はありませんよ。ところで、識ちゃんもラジオ体操に参加するんです？」

「ああ、そのつもりだけ？」

「そうですか。でしたらスタンプカードをどうぞ」

「藍先輩、ありがとう！」

藍から差し出されたそれを、識は両手でしっかりと受け取っていた。

「それで、これはどう使うんだい？」

「ああ、これはね……」

……受け取ったスタンプカードをしげしげと眺めていた識に、俺はその使い方を教えてあげる。ラジオ体操が初めてということは、スタンプカードも初めてなんだろうし。

「……つまり、この台紙に判子を押してもらえば、その日の景品がもらえるわけだね！」

「そういうことだな。ちなみに、その景品を用意するのは……」

「……鷹原に藍、ちよつといいか？」

識にスタンプカードの説明をしていたその時、のみきから声をかけられた。

なんだろうと思いついていくと、そこには青年団の皆が集まっていた。

「お、羽依里も来たか」

「ラジオ体操好きさんが来る前に、話を詰めるぞ」

そう言う良一と天善は、どこか気乗りしていない感じがした。

「これ、何の集まりなんだ？」

「何って、ログボ担当の割り振りに決まってるじゃない」

不思議に思いながら聞いてみると、集まりの中心にいた蒼がさも当然のような顔で言う。

「あ、そうか。それがあつたな……」

……羽末のことばかり気にして、そつちを完全に忘れていた。

この島のラジオ体操で参加賞として配られるログインボーナス……通称ログボは、青年団の俺たちが毎回用意することになっている。

しかも、当番制。下手なものを用意すれば、純粋な島の子供たちから容赦ないダメ出しを食らうわけだ。

かつて何も知らずにラジオ体操に参加していた頃は、誰が毎日このログボを用意してくれるのか不思議だったけど……実はそんなからくりがあつたなんて。

「こういう時、藍や蒼はいいよな。駄菓子屋のお菓子を横流しするだけで良いしょー」

「横流しってアンタ、言い方が悪いわね……」

「むぎゆ？ 横流ししていいのなら、わたしも漂着物を横流ししたいのですが」

「紬、それは駄目よ。たとえ賞味期限が大丈夫な缶詰でも、それは駄目」

良一と蒼の会話を勘違いしたらしい紬がそんな案を出していたけど、静久が笑顔で止めていた。ログボが漂着物。色々と問題がある気がする。

「ちゃんとした品物を用意してくれるのであれば、是非紬にも参加してほしい。ログボの準備要員は多ければ多いほどいいからな」

「わかりました！ せっかくなので、シズクも一緒にログボを用意しましょうー！」

「そうね。紬に誘われたら断れないし、私も協力するわ。早朝のラジオ体操だし、しぼりたて牛乳とかどうかしら」

確かに子供たちは喜びそうだけど、しぼりたて？ 一体どこから手

に入れるんだろう。島のどこかに、酪農をやってる人でもいるんだろうか。

「ねえねえ。私もログボ、用意していいかな？」

その時、静久の背後から鷗がひよつこりと顔を覗かせた。彼女は青年団には所属していないんだけど、どうやらログボに興味津々みたいだ。

「いいのか？ 鷗は渡りの人なのだから、気にしなくていいんだぞ？」

それを聞いたのみきが驚きの声をあげる。ちなみに渡りの人というのは、島に長期滞在する人を指す島の言葉だ。現状だと、主に鷗と夏海ちゃんがそれにあたる。

「硬いこと言いつこなし！ 島の子供たちにはお世話になってるから、お返ししたいの！ のみきさん、お願い！」

のみきの手を取りながら、鷗はそう懇願する。恐らく、純粹にお返しがしたいんだろう。あの性格、いつまで経っても変わらないな。

「そうか……それなら、お願いするでしょう。先も言ったが、ログボを提供してくれる人間は多いほどいいからな」

「まかせといて！ たくさんの三角形の秘密を用意してあげる！」

提案が了承されて、鷗は嬉しそうだった。のみきも何やらメモを取っているし、この計画の元締めはのみきなんだろう。

「あの一、私もログボ、用意していいですか？」

……直後、俺たちの輪の外から小さな手が上がってそんな声が飛んできた。この声は夏海ちゃんだ。

「え、夏海ちゃんも？」

「はい！ 鏡子さんと作った野菜がたくさんあるので、おすそ分けしたいんです！」

うちも毎日のように野菜を分けてもらっているし、岬農園はあの広さだ。ログボを用意するくらい、造作もないのかもしれない。

「わかった。それじゃ夏海ちゃんや鷗も提供者リストに加えておこう。詳細はまた追って連絡させてもらうよ」

「よろしくお願ひします！」

やる気満々の夏海ちゃんを見ながら、のみきは先程と同じようにメ

モに何やら書き込んでいた。たぶん、後々役所の方で順番をまとめてくれるんだろう。

「……ところで、俺はどうしようかな」

提供してくれる人数にもよるけど、ひと夏の間大体2〜3回は口グボの順番が回ってくる。

去年は確か、良一から回してもらった魚の干物とか、しろはが作った漬物とかを出したんだけど、子供たちの反応は微妙だった。

正直駄菓子屋の品物が一番喜ばれるんだけど、お金をかけすぎるのもどうかと思うし……。

「羽依里くん、さつきから何の話をしているんだい？」

ああでもないこうでもないと考えを巡らせていると、識が俺たちの方を覗き込んできた。

「いや、ラジオ体操のログボの話を……って、そうだ識、ちよつとこっちに来て」

「ふんふん」

そんな識の顔を見た時、頭に一つの考えが浮かんだ。俺は識の手を取ると、そのまま皆の前へと誘う。

「皆にちゃんと伝えておきたかったんだけど、識は俺の親戚になる子でさ。この夏の間、うちで預かることになったんだ。よろしくお願いするよ」

俺は昨日の一件を踏まえて、改めて識を皆に紹介する。ちなみに識が記憶喪失だということは秘密にしておいた。皆に必要以上に心配をかけないようにと、しろはを含めた三人で取り決めたことだ。

「……なるほどな。ここ数日島でよく見かけると思っただけだが、そういうことだったのか」

「鷹原の親戚ということなら、この島に少なからず縁があると言うことだ。識、改めてよろしく」

「識、よろしくねー」

少し無理があるかなとも思ったけど、どうやら杞憂だったらしい。皆は笑顔で識を島の一員として迎え入れてくれていた。

「……よーし！ お前ら、一年ぶりだな！ 今年もラジオ体操を始めるぞ——！」

胸をなで下ろしていた矢先、ラジオ体操大好きさんがやってきた。スタンプカードも子供たちに行き渡ったみたいだし、今年もラジオ体操が始まる。

「第一の体操！ 耳介筋の鍛錬！」

「……羽依里くん、ジカイキンってどこだい？」

「耳の辺りらしいぞ。ほら、羽未がやってるみたいにやるんだ」

初めての体操に識が困惑する中、羽未は識の隣で、ぴくぴくと耳を動かしていた。

「よしゆー、ばっちり」

そして誇らしげな顔をする。羽未もラジオ体操に参加するのは初めてのはずなただけ。学校で上級生にでも教えてもらったんだろうか。

「第二の体操！ 横隔膜の振動だ！ うるあああああー！」

「うるるああああー！」

「第三の体操！ 一秒間！ 真剣な目！」

「じー……！」

……若干の内容変更はあるものの、島のラジオ体操は俺が初めて参加した頃からあまり変わっていない。

これまでもログボを用意する傍ら、何度も参加しているし。すっかり慣れたものだった。

「よーし、今日のラジオ体操はここまで——！」

「ありがとうございますましたー！」

「さあ、スタンプはこっちだぞー」

やがて今日のラジオ体操が終わり、子供たちがスタンプとログボを受け取っていた。

「おとーさん、みてー！」

一番にスタンプを押してもらった羽未が嬉しそうに走ってきた。記念すべき、第一号スタンプだ。

「羽未、良かったな」

「うん！」

「こんな感じに台紙を判子で埋めていくんだね。全て埋まったら、さぞかし壮観だろうね」

跳ねるようにしてやってきた羽未に続いて、識が自分のスタンプカードを眺めながら戻ってきた。

「めぎせ、スペシャルスタンプ！」

羽未がスタンプカードを頭上に掲げながら、そう意気込んでいた。

ちなみにスペシャルスタンプとは、15個のスタンプを溜めると押してもらえる、ビッグサイズのスタンプのこと。皆勤賞を目指すにあたって、最初の目標とも言えるスタンプだ。

「ログボ目当てに通っていれば、おのずと溜まっていくよ。二人とも、皆勤賞を目指して頑張れ」

「うん！」

「もちろんさー！」

揃って笑う。どうしてか、不思議と姉妹みたいに見えてしまった。

「あ、うみさんに識さん、ログボを忘れていますよ！」

二人を見ながら温かい気持ちになっていると、夏海ちゃんが両手に黒い小瓶を抱えてやってきた。なんだろうあれ。

「夏海ちゃん、それ何？」

「小林さんお手製の海苔の佃煮らしいです！ 美味しそうですね！」

「それは私が頼んで用意してもらったんだ。おにぎりの具にすると絶品なんだぞ」

いつの間にかのみきがすぐ近くにやってきていて、そう教えてくれた。小林さんはなんでも手作りしてしまうすごい人なただけで、佃煮まで作っているのか。これは、しばらくはんの友には困らなそう

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

スタンプもログボも受け取り、良い感じにお腹も空いた。そろそろ頃合いだと思った俺たちは、三人並んで家路に就く。

「おなか、ペーペー」

「もう少しで家だぞ。運動した後のごはんは美味しいんだ。頑張れ」「うん！」

そう鼓舞すると、両手に握りこぶしを作って気合いを入れていた。それで力が入ったのか、羽未のお腹がクーと可愛い音を立てた。

「うみゆ……」

「はは、もう少しだから頑張って」

お腹を押さえて顔を赤くする羽未を慰めながら、俺は今日の予定について考える。

……今日は宿泊の予約は入っていないから、朝食を済ませたらまずは客室の掃除だろう。ポテトが使った犬小屋も洗って返さないといけないし、午前中は忙しくなりそうだ。

そうそう。忘れずに羽未のイベントも用意してあげないと。やるとしたらお昼からだけど、何をしようかな……。

……その時、羽未とは反対方向から少し大きな腹の音が聞こえた。

「ぶええ……」

「識もお腹空いたのか」

「そ、そりやそうさ。慣れない体操をしたからね」

識は視線を外しながらそう言う。やっぱり女の子だし、恥ずかしいんだろう。

「そうだ識、朝ごはん食べ終わったら、昨日みたいに民宿の仕事を手伝ってくれない？」

思えば、今日からは識が居たんだ。料理の腕前は昨日見せてもらったし、もしかしたら掃除や洗濯もお願いできるかもしれない。識が手

伝ってくれるんなら、午前中からでも羽未のために動けるかも。

「……悪いけど、お断りするよ」

「え？」

「確かに、一宿一飯の恩は返さなきゃならない。けど、僕は働きたくないんだ！」

高らかにそう宣言されてしまった。良い返事を期待していただけに、面食らってしまう。

「ええ……昨日は手伝ってくれたのに」

「昨日は夏海先輩からのお願いだっただからさ。仕方なくだよ」

……そうだった。そういう取り決めになっていたのを忘れていた。じゃあ、民宿の仕事はお願いできかないわけか。弱ったなあ。

「え、私がどうかしたんですか？」

そのタイミングで夏海ちゃんが会話に入ってきた。どうやら、すぐ後ろを歩いていたらしい。

「ああ、夏海ちゃん。実はね……」

……俺は識との会話をそっくりそのまま夏海ちゃんに話して聞かせた。

「……むう。識さん、私の願い事、ちゃんと叶えてくれないと困ります！」

その話を聞いて、夏海ちゃんは不満そうな顔をしていた。

「夏海先輩、ちよつと待っておくれよ！ その願いは昨日で終わったはずだよ!!」

「……あれ？ 私、昨日だけって言いましたっけ」

「ぶえ?!」

「あー、言われてみれば……」

……俺は昨日の夏海ちゃんの台詞を思い返してみる。

——識さん、今から羽依里さんの仕事を手伝ってあげてください！

……確かにあの時、夏海ちゃんは識に俺の仕事を手伝うようをお願いしただけで、特に期間とか決めていなかった気がする。

「それじゃあ、改めて期限を決めましょう！ 識さんはこの夏の間、羽依里さんの仕事を手伝ってあげてください！」

「お、鬼だ……夏海先輩、キミは鬼だよ……！」

笑顔の夏海ちゃんにそう言われて、自称鬼の子はがっくりと肩を落とした。いつものようにぶええ言いながら走り去らないところを見ると、走り去ったところでどうにもならないと理解しているんだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー！」

「あ、三人ともおかえり」

住宅地の途中で夏海ちゃんと別れて、加藤家の門をくぐる。それと同時に味噌汁のいい匂いが漂ってきた。

「おかーさん、みてー！」

羽未は玄関で靴を脱ぐと、そのまま台所のしろはの元へ向かい、もらったばかりのスタンプカードを見せていた。よほど嬉しかったんだろう。

「あ。スタンプ、しっかりと押してもらってきたんだね」

「うん！」

「これは羽未ちゃんが頑張った証だから、しっかりと続けなきゃ駄目だよ」

「えへへ、がんばるー」

しろはは調理する手を止めて、羽未と目線を合わせてそう言い、優しく頭を撫でてあげる。羽未もとろけそうな笑顔を見せていた。

俺と識はそんな様子を微笑ましく見ながら、母子の時間を邪魔しないように、静かに洗面所へと向かった。

……それから手を洗って居間に戻ってくると、食卓には朝食が用意されていた。

ご飯に卵焼き、かつお節の乗った山菜のおひたし、シイタケとキャベツが入った味噌汁。相変わらず美味しそうだ。

「ところで、この黒い瓶は何？」

最後に急須と湯呑みを運んできたしろはが、食卓に置かれた瓶を不思議そうに見ていた。

「今日のログボだよ。海苔の佃煮だっけさ」

「もしかして、小林さんちの佃煮かな。おいしそう」

……正解だった。さすがしろは、瓶を見ただけで作った人までわかるのか。我が妻ながら恐るべし。

「おかずはたくさんあるけど、少し食べてみない？」

俺はそう言いながら、小瓶の蓋を開ける。市販の佃煮とは全く違う、濃厚な磯の香りが広がった。

「おかーさん、おにぎりがいい！」

「え？ おにぎり？」

その直後、一度は食卓に着いていた羽未が立ち上がってそう口にしてた。急にどうしたんだろう。

「のみきさんが、おにぎりになると、さいこーだっけ」

……そういえば、そんなことを言っていた気がする。のみきはおにぎりが大好きだし、小林さんの佃煮、さぞかしお気に入りなんだろう。「じゃあ、僕がおむすびにしてあげるぜ！ しろは先輩、台所を借りるよー！」

言うが早いか、識は佃煮の入った小瓶と羽未のお茶碗を持って台所へと消えていった。

突然の出来事に俺としろはが呆気に取られていると、数分と経たないうちに綺麗な三角形に握られたおにぎりを持って戻ってきた。

「へえ、うまいもんだな」

「にへへー、おむすびは得意料理だからね！ うみさん、さっそく食べ

てみておくれよ！」

「いただきまーす！」

羽未はできたてのおにぎりを受け取ると、きちんと挨拶をしてから、勢いよくかじりついた。

「んー、おにぎり、おいしいー！」

「うみさん、僕が作ったのはおにぎりじゃないぜ。人と人を結ぶ、お結びや！」

「おむすび、おいしいー！」

思わず飛び跳ねて、全身で喜びを表現していた。どうやらお気に召したみたいだ。

「羽未ちゃん、嬉しいのはわかるけど、落ち着いて食べないと。ほら、ちゃんと座って」

「うんー！」

羽未はきちんと座りなおして、もう一度おむすびにかじりつく。その様子を見ながら、俺たちも各々挨拶をして食事を始めた。

「んー、おいしいー！」

羽未は味噌汁を一口すすった後、満面の笑みでおむすびを頬張る。

ほっぺに米粒がつくもの気にせず夢中で食べている羽未を見ると、こっちまでおむすびが食べたくなってくる。

「そうだ。せっかくだし、羽依里くんのご飯もおむすびにしてあげようか？」

「えっ？」

その時、まるで心を見透かされたようにそう言われたけど、すでに自分のご飯は半分以上食べてしまっていた。

「今日はほとんど食べちゃったから、明日にでもお願いしようかな」

「おねーちゃんのおむすび、まいにちたべたいー！」

俺がそう言うと、羽未が間髪を入れずにそう付け足してきた。本当、識のおむすびが気に入ったみたいだ。

「うみさんがそう言うなら、毎日作ってあげるぜ！　しろは先輩、構わ

ないかい?」

「え? うん、いいけど……」

そう提案する識は嬉しそうだった。確かに羽未みたいに喜んで食べてくれたら、作り甲斐もあるというものだろう。

……そんな光景を見ながら朝食を堪能していると、居間の電話が鳴った。こんな時間に誰だろう。

『はい。もしもし』

『あの、加藤家さんですか?』

『あ、はい。民宿加藤家です。お電話ありがとうございます』

……どうやら、宿泊予約の電話らしい。本格的な夏休みに突入したこともあって、電話も多くなってきた気がする。

『7月29日なんですけど、空いてますか?』

『はい。空いてますよ。何名様でしょうか?』

『3人なんですが、構わないですか?』

『最大で5人まで泊まれますので、大丈夫ですよ。では、代表者さんのお名前をどうぞ』

『芳野です。芳野公子といますっ』

『芳野……公子様……三名様ですね。当日、お夕飯はどうされますか?』

「お姉ちゃん、ヒトデの島にいけるですか?」

『ちよ、ちよつとふうちゃん、まだ電話中だから。それに、ヒトデの島じゃないからね』

……なんか電話の向こうで声がしてる。ヒトデの島?

『……失礼しました。夕食なんですけど、用意してもらえますか? 夕方には行けると思いますので』

『かしこまりました。それでは、お越しをお待ちしています』

そして電話を切る。電話の女性はおしとやかな感じだったけど、その向こうでやけに賑やかな声があった。聞いていた感じ、妹さんかな。

「しろは、宿泊の予定が入ったよ。明日の夕方に三名様。夕飯希望だつて」

「わかった。用意しておくね」

しろはも近くに置いてあったメモを手にとって、さらさらと要点を書き記していた。

「……あれ？」

それを横目に見ながら食卓に戻ると同時。また電話が鳴った。今日は忙しいな。

『もしもし』

『おはようございます。民宿加藤家はそちらですか？』

『はい。民宿加藤家です。お電話ありがとうございます』

「どうやら、また予約の電話みたいだ。続けてなんて珍しい。」

『今月の29日なのですが、宿泊の予約をお願いできませんか』

『あ、申し訳ありません。その日は既に先約が入っています』

『そうですか……でしたら、31日はどうでしょう？』

『その日なら空いていますよ。何名様でのご利用でしょうか？』

『5人です。そのうち、女性が4人、男性が1人です。相部屋で構いません』

『承りました。代表者のお名前をいただいでよろしいですか？』

『水瀬秋子といます』

『水瀬……秋子様ですね。当日ですが、夕飯はどうされます？』

『そうですね。お願いしましょうか。夕方までにはそちらに行きますので』

先程と同じように、しっかりと事前情報を聞いておく。男女混ざつてゐるらしいけど、相部屋でいいところからして、たぶん家族なんだろう。

『それでは、お越しをお待ちしています』

……電話を切る。今度の予約は5人か。夕飯希望だし、31日は忙しくなりそうだ。

「……この宿場、大人気だね」

再び入った予約の詳細をしろはに伝えていると、識がニコニコ顔で

そう言ってきた。

「夏休みだし、今日はたまたまだよ」

急に気恥ずかしくなって、俺はひらひらと手を振りながらそう誤魔化しておいた。この宿、まだそこまで知られていないはずなのに。

……そういえば、先日の天王寺先生のブログとやらはどうなったんだろう。俺はコンピュータは詳しくないし、今度のみきや藍にでも聞いてみようかな。あの二人、よく仕事で使うって言うし。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……朝食を済ませた後、しろはに羽未の宿題を見てもらいながら、俺は客室の掃除に向かった。

シーツを洗濯に出して、布団を干した後は、畳をほうきで簡単に掃く。例によつて綺麗に使われていたので、大した時間はかからなかった。

それからは庭に出て、ポテトが使った犬小屋を洗い、ある程度乾いたところで高橋さんの家へ返しに向かった。

「おかげで助かりました。これ、大したものじゃないですけど」

「ボロボロの犬小屋を洗ってくれるだけでもありがたいのに、わざわざ野菜までもらっちゃって悪いわねえ」

「いえ、せめてものお礼です」

そして犬小屋と一緒に、しろはから託された野菜を手渡す。今朝は夏海ちゃんが来ていないから、採れたて新鮮……とはいかないけど、せめてもの気持ちだ。

「それじゃ、俺はこれで」

「あ、ちよつと待って。空門さんちの蒼ちゃん、また若い男の人と歩いてたって聞いたんだけど本当かしら？」

「え、どこからそんな話が？」

思わぬところで知った名前が出てきて、俺は思わず足を止める。
「ウチの旦那が港で見かけたらしいのよー。いかにも観光客っぽい人と歩いてたんだって」

「ああ……」

それは多分、普通に観光客を道案内してただけだと思う。蒼って強く頼まれたら断れない性格だし。

「蒼ちゃん、美人でしょー。あたしや、変な虫がつかないか心配でねえ……」

「それはその、藍がいる限り大丈夫だと……」

「そのお姉さんが心配するのも分かるのよー。小さい時から一緒にいるのを見てきたからね。でも思うの。空門の家を守るつても大事かもしれないけど、一番はあの子の幸せよ。羽依里くんもそう思うわよね？」

「え、ええ。まあ……」

「良い感じの知り合いがいれば紹介するんだけどねえ……そうそう。幸せといえば、灯台の紬ちゃん。誰かとお付き合いしてるって話聞かないかい？ あれだけ良い子なんだし、そろそろ良い男性が見つかったも良いと……」

……しまった。高橋さんがお喋り好きなのをすっかり忘れていた。
逃げるタイミングを完全に逃した俺は、しばらくの間、高橋さんとの世間話に付き合う羽目になったのだった……。

「……はあ。犬小屋を返しに行っただけなのに、予想以上に時間を食ってしまった……」

へろへろになりながら加藤家に戻って来た時には、家を出てから一時間以上が経過していた。うう、本来なら、この時間には庭の掃除を含めて、全部終わらせておく予定だったのに……。

「おとーさん、おかえりー」

「羽依里くん、戻ったのかい」

そんなことを考えながら庭の片づけを続けていると、羽未と識が蔵から出てきた。どうやら識は宿題が終わった羽未を連れだつて、もう一度蔵の掃除をしていたらしい。

「……あれ？ 識、その格好はなんだ？」

見ると識は制服に着替えていた。朝は着物姿だったはずだけど、いつの間に着替えたんだらう。

「着物姿じゃ、さすがに島でも目立つしね。しろは先輩が昔使っていた制服を貸してくれたんだ」

そう言つて俺の前でぐるっと回つてみせる。制服の上に羽織つた花柄の着物がふわりと舞う。

「すごく動きやすいよ。その、少し大きい所もあるけどね」

「ああ……」

俺は思わず識の胸を見やる。しろははああ見えて、着やせするタイプだったから。

「……羽依里くん、どこを見てるんだい？」

「え？ いや、ごめん」

それこそ鬼のような鋭い目で睨まれてしまった。そんなつもりじゃなかったのに。

慌てて視線を外すと、識の首から下げられた袋のようなものが目についた。

「……あれ、その首から下げてるのは？」

「よくぞ聞いてくれたね。これはおむすびポーチさー！」

気付いてほしかつたんだらうか。先程までの不機嫌そうな顔が一転、笑顔になった。

「これにおむすびを入れておけば、いつでもおむすびが食べられるんだぜー！」

「かつきてきー」

見ると、羽未も同じものを持っていた。おむすびポーチ？

「そんなの、どこにあったの？」

「蔵の中さ。今朝、掃除していたら見つけたんだ。しろは先輩に聞いたら、自由に使つて良いと言われたよ。うみさんとお揃いだぜ」

「おそろいー」

羽末も同じものを大事そうに持っていた。どっちも似合うなあ。

「しーろーろーはーはー……うーみー……」

……その時、玄関の方から声がした。この声はもしかして。

「ひーひーひー！」

その声を聞いた羽末が玄関へ走っていった。俺もそれに続くと、玄関にしろはのじーさんが立っていた。

「ひーひーひー、おはよー！」

「おお、羽末ひーひー！」

勢いよく飛びついた羽末をがっしりと受け止めて、そのまま持ち上げる。相変わらず、すごい力だ。

「おじーちゃん、おはよう……って、その箱は何？」

少し遅れて、家の中からしろはがでてきた。直後、その足元に置かれた段ボール箱に視線を送る。俺も気にはなっていたけど。

「ああ、羽末にまたお菓子を買ってきたんだ」

「そうなんだ。羽末ちゃん、またひーおじーちゃんがお菓子持ってきてくれたよ。お礼を言つてね」

「うん！ ひーひーじ、ありがとー！」

「おーおー、たくさん食べて、大きくなるんだぞー」

普段は強面のじーさんがデレデレだ。本人は気づいていないんだろうけど、あの表情は羽末にしか見せない。

「……でも、そろそろお菓子は勘弁してほしい、かな……」

胸元まで持ち上げた箱を覗き込みながら、そう呟いたしろはの言葉を俺は聞き逃さなかった。

つい先日も大量にお菓子をくれたらしいし、はっきり言って供給過多になってると思う。羽末も素直に喜んでるし、俺たちとしてもありがたいだけに、難しい所だ。

「……それで、おじーちゃんはわざわざ羽末ちゃんに会いに来てくれたの？」

「それもあるが、山に行く用事があってな。その途中に寄ったんだ」

「え、山？」

「ああ。今日の昼、役所前で流しそうめんをやるそうじやないか。その準備をしようと思つてな」

流しそうめん？ 初耳だ。ラジオ体操の時も、そんな話はしていなかった気がするけど。

「じゃあ、今から竹を切りに行くの？」

「そうだ。三谷のせがれに車を出すように言つてある。今から準備すれば、昼に間に合うだろう」

「……つまり、竹取の翁になるわけですか。頑張ってください」

それまで聞き役に徹していたけど、そこで思わずそう口にした。た。

今は昔、竹取の翁といふものありけり……つて見出しの物語があつた気がする。まさにそのまんまだ。

「……何を言っている。お前も来るんだ」

「え、俺もですか？」

さも当然のように言われた。今ここに、竹取の羽依里といふもの爆誕。

「竹取り、面白そうだね。僕もついて行っていいかい？」

その時、それまで俺の後ろでやりとりを拝観していた識が唐突に口を挟む。

「む？ お前は誰だ」

「僕は識さ」

「わしは小鳩という。なるほど。加藤の家に昨日から居候している鬼の娘というのはお前か」

じーさんは識を見ながら、納得したように頷いていた。ところで、いつの間に識の情報がじーさんの耳に入ったんだろう。俺、誰にも話した覚えがないんだけど。

「その通りさ。よろしく、小鳩先輩！」

一方の識はそんなことを気にする様子もなく、元気にじーさんに挨拶していた。そしてまさかのタメ口。これは怒られるかも。

「……ふっ。先輩……か。実に懐かしい響きだ。死んだばーさんも、初めはそう呼んでいた」

……あれ？ 怒ってない。むしろ、気に入られたような気がする。
「だが、女子供に山は危険だぞ？」

「心配してくれているのかい？ 大丈夫さ。山は得意なんだ」

「大層な自信だが、野生の猪を前にしても同じことが言えるのか？」
「こう見えて、この島に古くから伝わる武術の心得もあるのさ」

……これまた初耳だ。武術？ 識は華奢な身体だし、合気道みたい
に相手の力をいなすのかな。

「ほう。それは頼もしいな。では、龍神岩砕波の発動に置いて注意す
べき体の部位は？」

……りゆうじんがんさいは？

「そんな技は知らないよ。竜神破岩衝ならわかるけどね」

……りゆうじんはがんしょう？

「……どうやら、ハツタリではなさそうだ。いいだろう。一緒に来る
がいい」

俺には全く意味不明な単語が並んでいたけど、どうやら二人はそれ
だけでわかり合えたみたいだ。

「うみもいくー！」

「駄目だ」

「えー」

その場の流れを見て、羽未もその小さな身体全体で参加を表明する
けど、さすがにじーさんに一蹴されていた。

「うみさん、山の中は危険なんだ。もし野生動物に襲われたらどうす
るんだい？」

「うー……」

続いて識が優しく論じていた。さすがに野生動物と遭遇すること
は稀だろうけど、竹が生えているような山奥となると足場も悪いだろ
うし。こけて怪我でもしたら大変だ。

「……だから、入口まで一緒に行こう。羽未さんはそこで、僕たちが無
事に戻ってくるのを待っていてくれないかい？ 小鳩先輩も、それな
ら構わないだろう？」

「……そうだな。入口までなら良しとしよう」

「やったー！ー！」

……急転直下。同行の許可をもらえた羽未は嬉しさを爆発させていた。

先の話によると、良一たちもいるらしいし。入口までなら大丈夫だろう。識も自称鬼なのに、優しいじゃないか。

「……それじゃしろは、行ってくるから」

「うん。いつてらっしゃい」

「いつてきまーす！」

その後、急いで軍手や水筒を用意して、じーさんを含めた四人で山へ向けて出発した。

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

皆とのお出かけが嬉しくてたまらないのだろう。羽未は俺と手を繋ぎながら、島に伝わる童謡を口ずさんでいた。

その歌に合わせるかのように、首から下げられたおむすびポーチが踊る。その中には、これまたしろはが急いで用意してくれたおむすびが入っている。

「おむすび、たのしみー」

本来の目的は竹切りなんだけど、羽未にとってはピクニックのようなものなんだろう。足取りも軽やかだった。

「……島の古武術は本来、水中で使用した際に最も威力を發揮できるようにしてあるはずだよ？」

「それだと、万が一上陸を許した後が困る。竜神破岩衝・改はその点を補う」

……ちなみに俺たちの前に行く識とじーさんは、ずっと武術の話で盛り上がっていた。なんだろう。単語だけ聞いても、古傷をえぐられるような妙な感覚がした。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

住宅地を抜けて山に入る。秘密基地のある場所から少し道を逸れて進むと、ひらけた場所に出た。そこには一台の軽トラックが止まっている。

「すまん。少し遅れた」

「いえ、鳴瀬翁。私たちも今来たところですよ」

その軽トラックの近くにはのみきと良一の姿があった。良一は既に軍手をはめ、準備万端といった感じだ。

「おつ、今日は羽未ちゃんも一緒か？」

「うん！」

「小さな現場監督って感じだよな。今日はよろしく頼むな！」

「あいあいさー！」

良一にそう呼ばれて、羽未は嬉しそうに敬礼のポーズをしてから、そのまま近くにあった切り株にちょこんと腰を下ろす。元より森の入口までの予定だったし、羽未にはこの辺りで待っていてもらおう。

「そうだ二人とも、羽未なだけどき……」

そして俺は改めて、その旨を良一たちに伝える。

「……なるほど。そういうことなら了解した。羽未ちゃん、おとーさんたちが戻ってくるまでの間、私と水鉄砲で遊ばないか？」

「するー！」

それを聞いた羽未は座ったばかりの切株から元気良く立ち上がる。のみきはそんな羽未に、子供用の小さな水鉄砲を手渡していた。

その様子を微笑ましく眺めていると、のみきの背中に巨大な水鉄砲が背負われている事に気がついた。見間違えるはずがない。あれはハイドログラディエーター改だ。

「その水鉄砲、久しぶりに見たな」

「ああ……長い間、秘密基地にしまい込んでいたが、久しぶりに持ち出してしまった」

俺が指摘すると、のみきはどことなくばつが悪そうな顔で笑う。服装こそ違うけど、やっぱりハイドロはのみきが持ってこそじっくり

る。

「……って、まさかその水鉄砲を羽未に向けたりは……」

「するわけがないだろう。これはあくまで護身用だ。森の近くだし、何が出てもおかしくないからな」

のみきはそう言つて、背後の森を見やる。あのハイドロ、中に聖水でも入ってるんだろうか。もし森からゾンビの軍団とか出てきたりしたら、すごく頼りになりそうだけど。

「……む？」

「……はっ」

……その時、一番森に近い所にいたじーさんと識が何かに反応した。

「え、二人ともどうしたの？」

「……獣のにおいがする」

「うみさん、羽依里くんの後ろに隠れているんだぜ」

二人が森から視線を外さずに言った直後、近くの草藪がガサガサと音を立てた。

「……やれやれ。早急にこれを使うことになるのかもしれないな」

俺の隣にいたのみきも、ため息混じりにそう言いながらハイドロを構える。じーさんは持っていたナタを握りなおし、識は見たことのない構えをしていた。まるで漫画の真人の拳だ。さすがにゾンビは出ないだろうけど、何か野生動物がいるのかな。

俺は背中にくっついてきた羽未の背中を後ろ手でさすりながら、音がする茂みを凝視する。

「ゴフゴフー」

「ポーン！」

……緊張感が頂点に達したその時、草をかき分けて二匹の動物が現れた。巨大なイノシシと、青いキツネだ。

「……なんだ。お前たちか」

「驚かせおって」

その正体を確認したのみきとじーさんが気の抜けたような顔をし

ながら、それぞれの得物を下ろす。

「え、どういうことだい!？」

一方、識だけは妙な構えを解かず、ひたすらに困惑していた。俺はそんな識を見かねて、説明をしてやることにした。

「識、心配しないでいいぞ。こいつらは人に慣れてるし、襲ってきたりはしない」

「そ、そうなのかい？ てつきり、僕のおむすびを狙ってきたのかと思っただよ」

「はは、こいつらはそんな事しないよ。むしろ、農作物を荒らす悪い動物を追い払ってくれるんだ。な？」

「ゴフゴフ！」

「ポポーン！」

俺の近くに寄ってきた猪と狐が元気よく返事をしてくれた。うんうん。相変わらず元気そうだ。

「こつちのイノシシはナベって呼ばれてるんだ。見た目は大きいけど、すごく優しい奴なんだぞ」

こいつは俺が学生の頃、ウリボウだったのを偶然拾ったんだ。

親とはぐれたウリボウは単独じゃ生きていけないということ、イノキングの沢田さんがしばらく面倒を見てくれた後、ナベは山に放された。

でも、小さい頃に人間から受けた恩を忘れずにいて、今ではイノシシの視点から、島の治安を守ってくれているんだ。

「それで、この青い動物は狐なのかい？」

「そうだぞ。キツネのイナリだ。昔はよく蒼と一緒にいたんだ。すごく頭が良いんだぞ」

「ポーン！」

「ほ、本当に狐なのかい……?？」

種としてのアイデンティティー捨てた鳴き声に識が首をかしげているけど、今やイナリはナベと並んで島の動物界の頂点に君臨する存在だ。

屈指の攻撃力を持つイノシシと、知能の高いキツネ。この二匹が

タツグを組めば、島内では向かうところ敵なしだと思う。

「……ところで、お前たちは島のパトロール中か？ 俺たちは竹を取りに来たんだ。ちよつと森にお邪魔していいかな？」

「ポーン！」

「ゴフー！」

俺が二匹の頭を撫でながらそう伝えると、力強く返事をしてくれた。どうやら了承してくれたらしく、直後に二匹は道を譲ってくれた。

「山の主の許しがもらえたのなら、先に進むとしよう」

それを見て、じーさんが山の中へと歩みを進める。良一も遅れないように、その後をついていった。

「それじゃのみき、羽末の相手、よろしく頼むな」

「ああ、任されたぞ」

羽末に渡したのと同じく、子供用の水鉄砲を取り出しながら、のみきは頷いてくれた。

「そうだ。せつかくだし、イナリとナベも羽末と遊んでやってくれよ」

「ポーン！」

「ゴフゴフー」

こつちからも『まかせといてー』という声が聞こえた気がした。羽末はイナリもナベもお気に入りだし、これだけ友達がいれば寂しくないだろう。

「ほら羽依里くん！ 早くしないと置いていくよー！」

少しの間だけ、待っていてくれな……とか思っていたら、先に森へ分け入った識が振り返って俺の名前を呼んだ。

「ああ、今行くよー！」

俺もそんな識に遅れまいと、慌てて森の中へと分け入ったのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……森に入ってしまったら歩く歩くと、無数の竹が生えた場所に到着した。島の中にこんな場所があったのか。

「よし。ここら辺でいいだろう。今から切るのは、これくらいの太さの竹だ。できるだけまっすぐのがいい」

立ち止まったじーさんが目の前にあった竹を指し示しながら、そう教えてくれた。大体、直径15センチってところか……。

「じーさん、俺にもナタを使わせてくれよ！」

周囲に広がる竹藪の中から手頃なサイズの竹を探していると、良一がそう頼み込んでいた。

「駄目だ。ナタは素人では扱いが難しい。お前たちはこの竹引き鋸でゆっくりと切れ。四本もあれば事足りるだろう」

じーさんはそう言うのと、見慣れないのこぎりを俺たちに渡してくれ。万が一にも怪我をしないようにとの、じーさんなりの心遣いなんだろう。

「あと、識は細い竹を切って集めておけ。これくらいのでいい」

「それは構わないけど、こんな細い竹、何に使うんだい？」

「組み合わせて、流しそうめんの台にするんだ。知らないのか」

「流しそうめんはやったことがないからね。そういう使い方もあるんだね」

識は感心したように頷きながら、じーさんからナタを受け取っていた。

「あれ？ 今しがた、ナタは素人には扱いが難しいって言ってたのに」「理由は簡単だよ。僕は鉋を使い慣れているのさ」

言うが早いのか、識は細い竹をさくさくと切り始めた。本当に手際が良い。

「……上手いもんだな」

「にへへー。鉋を扱うのに力は必要ないぜ。必要なのはコツだけさ」

少し照れたような顔をしながら、識は竹切りを続ける。羽織っている着物だけを見ていると、それこそかぐや姫っぽいのに。

「……ところで羽依里くん、この島には変わった蝶がいるのかい？」

さつきから、ひらひら飛んでるのが見えるんだけど」

そんなことを考えていると、識が手を動かしながらそう聞いてきた。

珍しい蝶？　大きなアゲハチョウとかなら見たことがあるけど、そんな話は特段聞いたことがない。

「変わった蝶って、どんなの？」

「それはね……」

「おーい羽依里！　識とばかり一緒にいないで、こつちを手伝ってくれ！」

そんな折、良一が声を荒らげていた。

「あ、ああ。悪い！　今行くよー」

識の話も気になったけど、それを打ち切って俺は良一の元へと向かう。今の俺は竹切りの羽依里なんだ。務めは全うしないと。

「……そういえば今日、天善は来てないのか？」

竹切りの最中、少し気になったので聞いてみた。こういうイベントの時は、天善は一番に呼び出されてそうだけど。

「ああ。今日は静久の海の家を手伝ってるよ」

「あ、そうなのか」

……そうだった。竹切りの用事が入らなければ、当初は俺もそれを手伝うつもりだったんだ。

「久しぶりに静久さんと一緒に過ごせてるんだ。そつとしておいてやるのが友情つてもんだぜ」

良一はそう言っただけ目を閉じていた。さすが、長年の付き合いといったところだろう。

「……そんじや、そろそろ頃合いだし、脱ぐか」

せっかく感心していたのに、良一は至って自然にTシャツに手をかけた。全く、何が頃合いなのかわからない。

「おい。脱いだらまたのみきに撃たれるぞ」

「だって作業してたら暑くなっちゃってよー。この竹藪ならバレない

ぜ？ 羽依里も一緒にどうだ？」

「……仲間が欲しそうな目で俺を見るな！ 俺は脱がないぞ！」

一見安全そうに見える竹藪でも、脱いだらのみきにどこからともなく狙撃されるに決まってる。同じ穴の貉にはなりたくない。

「んんーパーパーージー！」

その刹那、良一は上着を脱ぎ捨てて上半身裸になった。やめろ、血迷ったか!?

「……って、あれ?」

すぐにでも水弾が飛んでくると思ってたけど、そんな気配は微塵もなかった。いくら結婚しているとはいえ、のみきが裸になった良一を見逃すはずがないんだけど。一体どうしたんだろう。

「ほら。やっぱり竹藪は安全地帯なんだ。羽依里も一思いに脱いで、解放感に浸ってみろよ。しろはや羽未ちゃんの前だと気軽に脱げないし、窮屈な思いしてんだろ?」

「いや、窮屈な思いなんてしてないから。そんな目で俺を見るな」「そう言うなって。男同士、裸の付き合いつて大事だろ?」

良一はそう言いながらにじり寄ってきて、俺の上着を脱がしにかかると。裸同士の付き合い……それ、意味が違うから！ やめて！ 脱がさないで！

「羽依里くん、こっちの作業は終わったぜ……ぶえ!」

……その時、両手いっぱい細い竹を持った識がこっちに走ってきて……俺たちの姿を見るや、固まった。

「い、いやその、識、これはだな」

「……みなまで言わなくていいよ。そういう趣向の人がいるのは知っているさ。僕は何も言わないぜ」

どこか優しさを含んだ口調でそう言い、識は静かに背を向ける。

……そして無言で走り出した。

「待って！ 誤解だから！」

慌ててその後を追ったけど、ここは足場の悪い山の中。俺の足で識に追いつけるはずがなかった。

やがてじーさんと話す識の元に追いついた時には、時すでに遅し。

識は事の端末を全てじーさんに話してしまっていた。

「……まったく最近の若い者は。真面目にやらんか」

ものすごく複雑そうな顔をしたじーさんに、そう怒られてしまった。うう、俺、何も悪くないのに。

「告げ口されたか……どうやら、子供には刺激が強すぎたみたいだな」
そんな中、服を着た良一はほくそ笑んでいて、全然反省の色が見えなかった。

くそ、竹藪で服を脱いでいたこと、あとでのみきに言いつけてやるからな。

……それから気を取り直し、良一と二人で四苦八苦しなから竹を切り倒した。

一方のじーさんは涼しい顔をしながら、一人で二本の竹を切り倒していた。本当、80歳を超えているというのが信じられない。

「……よし。それでは戻るとしよう」

そして切り倒した竹はその場で枝を落とした後、森の入口まで運び出されることになった。

じーさんと良一がそれぞれ二本ずつ、両脇に抱えるようにして竹を持つ。俺はというと、識と一緒にその後ろを歩いて歩いていた。

さすがにじーさんに二本も運ばせるのは悪いと思い、俺も一本持ちたいと申し出ただけ……両脇に一本ずつ持って運ぶ方がバランスがいいらしく、あっさりと断られてしまった。

「……識、その竹、俺が持つよ」

さすがに何も持たないというのもあんまりなので、識が持っていた細い竹をひったくるようにして持った。せめて、これくらいはしないと。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ぶわっ!? ひゃあっ!? やめろっ……やめてくれっ……!」

……森の入口まで戻ってみると、そんな悲鳴が聞こえてきた。

何だろうと思つてよく見ると、のみきが羽未に水鉄砲で撃たれまくっていた。

というのも、羽未はナベの背中に器用に乗つて、縦横無尽に走り回りながら水鉄砲を乱射していた。

のみきも反撃を試みていたけど、相手は機動力で勝る野生動物。完全に振り回されしまつていた。

「ま、まいった。降参だ」

「うちとつたりー!」

やがて、のみきは手にしていた水鉄砲を投げ捨てて、降参の意を示していた。既に全身びしょびしょだし、俺たちが戻ってくるまで遊んでくれていたんだろう。ありがとう。のみき。

「ほら羽未、竹を切つてきたぞー!」

運搬用の軽トラックへと向かいながら、じーさんが羽未に竹を見せていた。広い場所で改めて見てみると、羽未の身長は何倍もありそうな大きな竹だった。

「おつきいー! ひーじーじ、すーいー!」

「そうかそうか、ひーじーじはすごいか」

心なしか、俺の方を見て言っているような気がしないでもない。

「えー、おとーさんの竹、ちっちゃいー」

続いて、俺の持つ小さな竹を見ながら率直な感想を述べていた。こ、これは違うんだぞ。ちゃんと役目があるんだからな。

心の中でそんな言い訳をしていると、全身ずぶ濡れになったのみきがかこつちに歩いてくるのが見えた。

「うう……多少腕が落ちているとは思っていたが、ここまでボコボコにされてしまうとはな……!」

心底悔しそうにしながら、濡れたTシャツの端を絞っていた。なるほど。こうなるまで真剣に羽未と遊んでくれていたから、良一は竹藪で脱いだ時も撃たれなかつたわけか。

「その……のみき、ごめんな」

「気にするな。この暑さだし、すぐに乾くだろう」

俺としては申し訳ない気持ちでいっばいだったけど、のみきは腰に手を当てながら笑っていた。

「だが……その、あまりじろじろ見ないでくれると嬉しい。こうなるとは思わず、白いTシャツを着て来てしまったからな……」
「え？」

俺は思わず、もう一度のみきの全身を見やる。水に濡れたシャツの下に、肌と薄緑色の下着が透けて見えていた。

「だから、見るなど言っているだろう。向こうを向いている」

直後、のみきは自分の身体を抱くようにしてそれを隠し、顔を赤くしながら俺を睨みつけてきた。俺も慌てて視線を逸らす。のみき、色々と見ちやつてごめん。

……その後、切り出した竹はトラックの荷台にしつかりとロープで固定されて、慎重に役所へと運ばれていった。

竹が途中で落ちたりしないように、じーさんが荷台での見張り役を買って出たので、残された俺と羽未、そして識の三人は歩いて役所へと戻ることになった。

その道中、たくさん運動してお腹空いたので、おむすびポーチに入っていたおむすびを三人で分けて食べた。おむすびポーチ、本当に画期的だった。

第四話・完

第五話 7月28日（後編）

俺と羽未、識の三人で役所に辿り着くと、そこには竹を積んだ軽トラックの他に、もう一台別の軽トラックが止まっていた。

「おお、鷹原たちも来たのか」

誰のだろうと思っていると、その荷台から機材を降ろしている天善から声をかけられた。ああ、このトラックは天善のだったのか。

「羽依里、三谷のせがれと一緒に竹を裂け。加納の小僧はわしと一緒に台を作るぞ」

その時、俺の姿を見つけたじーさんから早速指示が飛ぶ。有無を言わず道具を渡された俺と良一は、トラックの荷台から降ろされた竹へと近づいていく。手持ち無沙汰になった羽未や識も、なんとなく俺たちに続いていった。

「こんな大きなの、俺と良一だけで割れるのか？」

「これは俺もやったことがあるぜ。端から鉦を打ち込んで、金づちで叩きながら裂いていくんだ。ど真ん中からじゃなく、少し上から切り込みを入れるのがコツだな」

「どうして少し上からなんだ？ 真ん中からやったほうが綺麗に割れそうだけど」

「これは流しそうめん用の竹だぞ？ 純粹な半円にしてしまうと、そうめんを流すときに水が零れやすいんだ」

「なるほど、そういうことなのか」

経験があるという良一に教えてもらいながら鉦を当て、金づちで叩いていく。竹を割ったようとはよく言ったもんだ。数分としないうちに、竹は本当に綺麗に割れた。

「すーいー」

俺たちの後ろで羽未が歓声をあげる。竹を切るところは初めて見るんだろうし、驚くのも無理はない。

「この後は中の節を取り除かないといけないんだが……そうだ。羽未

「ちゃんもやってみないか？」

次の作業に移ろうとした矢先、いつの間にか近くに来ていたのみきがそんな提案をしていた。めつたに体験できることじゃないし、良い思い出になるかもしれない。

「らしいぞ。羽未、やってみるか？」

「うん！」

「金づちでこの所を思いっきり叩くんだ。こうだぞ」

駆け寄ってきた羽未に、のみきがお手本を見せてくれる。そこまで力を入れていないようだったが、簡単に割れていた。

「わかったー」

羽未はそれを見て頷くと、のみきから金づちを受け取って、両手でしっかりと握る。

「えい！」

そのまま勢いよく振り下ろすと、ぱきん。と軽快な音がして、竹の節が割れた。

「おお、上手だな」

「羽未ちゃん、次はこっちだぞ。順番に割っていくんだ」

「うん！」

ぱきん。またいい音がした。

「おもしろーい！」

羽未の力でも面白いように割れている。これは見ている方も気持ちがいい。

「ストレス、はっさんー」

え、羽未、その年にして既にストレス抱えてるの？ それなら金づちで発散する前に、俺たちに相談してほしいんだけど。

「ほら、鷹原はこのノミを使って残った節を取り除いてくれ。綺麗に仕上げないと、そうめんを流した時に引っかかってしまうからな」

「わかった。任せてくれ」

……それからは羽未が叩き割った節の残りを俺がノミで丁寧に取り除く作業が続いた。

羽未は純粹に楽しんでいるだけなんだろうけど、俺としては娘と共

同作業をしているようで、どこか嬉しかった。

ちなみに、天善とじーさんが俺たちの作業と並行して立派な台を作ってくれていた。竹とロープだけでこれが組めるとか、さすがの二人は手先が器用だった。

……その後、全ての処理が終わった竹は一度水で洗われて、日当りのいい場所に干されていた。食品を乗せる関係上、汚れを落とす上でしつかりと乾かしておく必要があるらしい。今日も陽射しが強いし、昼までには乾いてしまおうだろう。

「えーつと……」

後はお天道様に任せるにしても、俺たちは急に手持ち無沙汰になってしまった。これからどうしようかな。

何か手伝えることがないかと周囲を見回すも、青年会館の方に人が出入りしているくらいだった。きつと流すためのそうめんを準備しているのだろうか、俺の出る幕はない。

「鷹原、これから海の家を手伝いに行こうと思うんだが、鷹原たちも一緒に来ないか？」

考えあぐねていたその時、天善が軽トラックに荷物を乗せながらそう誘ってくれた。

「それじゃ、お願いしていいかな」

「ああ。すぐに出発するから、荷台に乗ってくれ」

そう言つてトラックの荷台を指し示す。俺は先に荷台へ上がり、続いて羽未と識を引き上げる。

「それじゃ天善、安全運転で頼むぞ」

「ああ、心得ている。識もそうだが、大事な親友の一人娘が乗っているのだからな」

天善は運転席のドアを開けながらそう言っていた。彼のことだし、きつと本心からの言葉なんだろう。

「羽未と識もきちんと座つて、縁の所を掴んでいるんだぞ。落ちたら危ないからな」

「うん！」

「もちろんさー！」

二人のそんな声とほぼ同時に、軽トラックのエンジンが始動した。

……役所前を出発した軽トラックは住宅地を抜けて、海沿いの道を海の家に向かって進む。

時々揺れるけど、しつかりと舗装された道だし、快適なドライブだ。

「これは爽快だね」

「かぜ、きもちいいー」

荷台の後ろの方に座る俺に対し、識と羽未は前の方でくつつくようにながら、荷台から見える景色を楽しんでいた。

同時に風も当たって涼しい。これはバイクで風を切るのとは、また違った気持ちよさだ。荷台に乗るのは危ないと言われるけど、少しくらい良いよな。

「荷台の三人、この先にカーブがあるから気をつけろよー！」

ハンドルを握る天善がそう叫んだ直後、左右に揺さぶられる感じがした。

「ジエットコースターー！」

「よ、よくわからないけど、これはすごいね」

俺は堪らず縁を持って体を支えたけど、前の二人は思いのほか大丈夫らしく、楽しそうな声が聞こえた。

「もうしばらくカーブが続くぞー！ チョレローイー！」

天善は懐かしのワードを口ずさみながらカーブを抜けていく。もしかして、彼はハンドルを握ったら性格が変わるタイプだったりするのだろうか。

いやむしろ、最近の仕事が忙しくてあまり徹卓をできていないと聞くし、ラケットをハンドルに持ち替えて、ストレスを発散しているのかもしれない。

「お次はヘアピンカーブだ！ しつかり掴まれ！」

「すごいー！」

「ぶええええー!?」

こ、これはなかなか怖い。島の縁を進んでいるのだからカーブが多いのは仕方ないと思うけど、もう少しスピードを落として欲しい。振り落とされるようなことはないだろうけど、変な影響を受けて、羽未が将来走り屋になったらどうしてくれるんだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あ、テンゼンさんが来ましたよー!」

海沿いを走り抜け、軽トラックが海の家近くに止まると、それに気づいたららしい紬が声をあげた。

「来てくれたのね。ありがとう」

「少し遅れたが、手伝いに来たぞ」

俺が荷台から羽未を降ろしていると、天善はさっそく静久と話をしながら、大きな機材を砂の上に降ろしていた。

「天善、荷台に乗ってるときから気になってたんだけど、それなんだ?」

「これは床を磨くやつだ。そろそろ、海の家片片付けも佳境らしいからな」

そう言う天善が示す先では、大量のゴミ袋や廃材を前に、軍手をはめた蒼が腰に手を当てて、満ち足りた表情で立っていた。どうやら内部の片づけはあらかた終わってしまったみたいだ。

「あ、羽未ちゃんも来てくれたんですね。いらっしやいませ」

「あいせんせー、こんにちはー!」

蒼と同じように片づけをしていた藍を見つけると、羽未は元気よくその胸に飛び込んでいった。羽未を抱きしめる藍は心底幸せそうだ。

「天善ちゃんの運転、怖くなかったですか?」

「ピンポンドライブ、たのしかったー」

変に語呂が良いけど、そんな漫画でもあるのかな。

「ところで静久先輩、この建物は何なんだい？」

「ここは私のおじいさんがやっていて海の家なの。長い間使っていなかったのだけど、今年の夏に再開させようと思っていてね。今はその準備中なのよ」

興味津々で聞いてきた識に、静久がそう教えてあげていた。こうして見ると、海の家もわずか数日で見違えるように綺麗になった気がする。

「あ、識ちゃんは制服着たんですね。似合ってますよ」

海の家全景を上げしげと眺めていると、羽未を解放した藍が今度は識を抱きしめていた。いつの間に識の背後の回り込んだらう。

「あ、藍先輩、苦しいぜ」

「良いじゃないですか。減るもんじゃないですし」

「背中に色々なものが当たって、虚しい気持ちになってしまっただよ……ぶえ……！」

識は半べそを描いていたけど、藍はなんだかんだ理由をつけて、ずっと抱きしめていた。

「羽未ちゃんだけじゃなく、識ちゃんの成分を補給できるなんて最高ですね」

識の成分ってなんだろう。なんとなく、できたておむすびの香りを想像してしまった。

「……なあ、相変わらず、藍はかわいい女の子大好きなのか」

「みたいねー。なんか識って、小動物みたいな感じがするし」

軍手を外しながら歩いてきた蒼にそう聞いてみると、からからと笑いながらそんな言葉が返ってきた。藍の女の子好きは今に始まったことじゃないけど、その……色々大丈夫なんだろうか。特に藍は羽未の担任なんだし。節操は守ってほしい。

「……パイリ君たちもわざわざ来てくれたのに、ごめんなさいね」

ぶえぶえ言う識を幸せそうに抱きしめる藍を眺めていたら、首にタオルを巻いた静久がやってきた。汗だくで働くその姿は、とても新進

気鋭の芸術家には見えない。

「何か手伝えることないかと思つて来たんだけど、もう終わった感じ？」

「ええ。虫さえ駆除してしまえば、後はこつちのものよ。一気に制圧してやったわ」

そう言う静久の手には虫よけスプレーが握られていた。殺虫剤だとその場に死骸が残ってしまうし、虫よけスプレーって所がミソだ。やっぱり昨日のアレ、トラウマになつてるのかな。

「掃除もあらかた終わったし、後は風通しして、今日はおしまい。水道やガスも問題なく使えたし、明日は材料をそろえて、実際にカレーを作ることができそう。良かったら、お昼にでも食べに来てね」

「わかった。楽しみにしておくよ」

どんなカレーなのかわからないけど、島の名物だったつて言うくらいだし、きつと美味しいんだろう。

……それから俺は天善と協力して、荷台に廃材やゴミ袋を積み込んでいた。

「気合い入れて来たのに、これくらいしか手伝えなくて悪いな」

天善がそう言う通り、少し来るのが遅かったらしい。俺たちに出来ることは、本当にこれくらいだった。

「なんだかんだで、掃除はあたしたちの方が得意だし。集めたゴミを回収してくれるだけで十分よー」

黒いゴミ袋なので何が入っているのかはわからないけど、荷台に置いた時にガチャガチャと音がしていた。なかなか重い。

「そーいえば、お昼に役所前で流しそうめんがあるのよー。もちろん羽未ちゃんも来るわよね？」

俺たちが竹切りを手伝ったの知らない蒼が、道具の後片付けをしながらそう聞いてきた。

良いタイミングだと思ひ、俺は今の今までその準備を手伝っていたことを伝えた。

「ああ、既に知っていたんですね。久しぶりの流しそうめんですし、私たちも楽しみですよ」

「え？ 流しそうめん、蒼たちも参加するの？」

「当たり前でしょー。もちろん子供たちが先だけど、子供たちが終わった後は大人の時間。大人のそうめん流しよ」

……大人のそうめん流し。蒼がそう言うのと急にエロく感じてしまうのはなぜだろう。

「しろはや鷗も準備に行ってくれてるはずだけど、会ってないの？」
「いや、会ってないけど」

役所周辺は流しそうめんの準備でバタバタしていたし、全然気づかなかった。もしかしたら、厨房のある青年会館の方にいたのかもしれない。

……その後、荷台に積んだゴミを集積場へ持っていくという天善を見送り、俺たちは役所前に戻ることにした。

役所まで少し距離があるけど、流しそうめんの前にお腹を空かせるにはちようどいいと思う。波の音でも聞きながら、のんびり歩こう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「これは賑やかだね……！」

「すごいー！」

そして役所に到着してみると、そこは多くの大人たちが集まっていた。

一方で天日干しにされていた竹も見事に組まれ、一本の立派な流しそうめん台が完成していた。

竹を切り出すのは大変だったけど、瞳を輝かせている羽未や識を見ていると、その苦勞が報われた気がする。

「あの竹、パイリ君が用意したの？ まるで、竹取のパイリね」

「そうですね！」

「いやあ、それほどでもないよ」

静久と紬が広い役所前に設置された流しそうめん台を見ながらそう言ってくれる。実際はほとんどじーさんが切ったんだけど、ここは俺の手柄にしてしまおう。

「あ。羽依里がいるよ!」

「ちようどいいところに。ちよつと来て」

……その時、役所に隣接した青年会館の方から声をかけられた。見ると、その入口に割烹着姿のしろはと鷗が立っていた。この二人、本当に役所にいたんだ。

「え、どうしたの?」

「この器、流しそうめん台の方に持って行って! ほい!」

思わず出した手の上に、鷗から大量のガラスの器が乗せられた。なんだろうこれ。

「落とさないでよー? それ、子供たちが使うんだから!」

「ああ、めんつゆを入れる器なのか」

「そう! 涼しげでいいよね!」

鷗は笑顔で言うけど、こういう時は竹で作った器を使うんじゃないんだろうか。もしくは、子供が使うんだからプラスチック製の割れない器とかさ。

俺は心の中でそんなことを考えながら、慎重にガラスの器を運ぶ。

「この暑い中、ご苦労なことだな。器はそこに置いといてくれ。落とすなよ」

流しそうめん台の近くへ行くと、下流の方で徳田が作業をしていた。

「徳田も来てたのか。他に何か手伝うことがないか?」

「もう大体の準備は終わった。その器をそのこのテーブルに置いたら、子供やカミさんの所でも行ってろ」

俺に背を向けたまま、徳田はひらひらと手を振る。俺は指示された場所に器を置くと、軽く言葉を交わして、その場を離れた。

……徳田は大学を出た後に島に戻り、家業を継いで徳田スポーツの若社長になった。

同じ島に住むようになっても不思議と縁がなかったんだけど、羽未が小学校に入学した今年の春、突然ピカピカの自転車をくれた。

さすがに俺もしろはも遠慮したんだけど、彼は『パーツまで完全手作りの、オーダーメイド自転車だぞ！ 本来ならお前らが容易く手を出せる代物じゃないが、同じ島民のよしみでくれてやる！』と言って、強引に押し付けてくれた。しかも、羽未が小学校の間は無料のアフターサービスまでつけてくれたし、ぶつきらぼうで口下手だけど、いい奴だ。

「鷹原、すまないが少し手伝ってくれないか」

……しろはの指示を仰ごうと青年会館へ向かっていると、今度はのみきから声をかけられた。

見ると、彼女は流しそうめん台の上流でゴムホースを手に四苦八苦していた。

「いいぞ。何をすればいい？」

「このホースをスタート地点に固定してほしい。その、この島の流しそうめん台は結構な高低差があるから、私の背では厳しくてな」

言われてみれば、この流しそうめん台はスタート地点が俺の目線と同じくらいの位置にあって、なかなか急勾配だ。水を流すためのホースも役所の脇から伸びている普通のものだし、安定してそうめんを流すため、水に勢いをつける必要があるんだろう。

「確かにこの高さだと、のみきじゃ厳しいよな……よし、任せろ」

俺はのみきからホースを受け取ると、竹の端に持っていく。

「えーつと、この辺か？」

「ああ、そこでもいい。あとは、この防水テープで固定してくれるか？」

のみきは俺と流しそうめん台の隙間に潜り込むようにして、そこからちようどいい大きさに切った防水テープを渡してくれる。

「よしきた」

それを受け取っては、しっかりとホースを固定していく。そして近くでのみきが動いたび、その髪が揺れていた。

「……のみき、少し気になったんだけど、最近髪伸ばしているのか？」
「わかるか？ 良一から少し伸ばしてみないかと言われたんだ。夏の間は少し暑いけど、冬には良い防寒になりそうだよ」

嬉しさを隠すことなく、のみきはそう笑っていた。ショートカットがトレードマークのみきが髪を伸ばすなんてどういう風の吹き回しかと思っていたけど、やっぱり良一が関係していたのか、本当、この二人はいつまでもラブラブだな。

……やがて流しそうめんの準備が整った頃、続々と子供たちが役所にやってきた。

「よーっし！ 今年こそはチャンピオンを目指すぞー！」

「オレだってー！」

やってきた子供たちはやる気に満ち溢れていた。ところで、チャンピオンってなんだろう。

「しろは、チャンピオンって何」

「え、羽依里、知らないの？」

少し気になったのでしろはに聞いてみると、すごく驚いた顔をされた。

その後の説明によると、この島の流しそうめんは単なる食事にあらず。れっきとした勝負の場であり、年齢によってクラス分けされたり、きちんとしたルールがあるらしい。

「流れてくるものによって得点も違うんだよ。羽依里もしっかり配点を覚えないと、スコア計算できないよ」

得点？ スコア計算？ しろはは何を言ってるんだろう。今から始まるの、流しそうめんだよな？

「それじゃ皆、集まってー。今からのみきがルール説明をするわよー！」

俺が状況を飲み込めずにいると、蒼が大きな声でそう言う。それを

合図に、子供たちも輪になって集う。

皆が皆、闘志むき出した。どう見ても和気あいあいと流しそうめんを楽しむ雰囲気じゃない。

「は、羽依里くん、これから何が始まるんだい？ 皆、殺気立っているじゃないか」

識が泣きそうな顔で俺を見て来るけど、俺だって困惑してる。

「きよーごーぞろいー」

そんな中、羽未は両手に握りこぶしを作り、やる気に満ち溢れていた。朝のラジオ体操じゃないけど、どんな内容なのか上級生に聞いて知っているのかもしれない。

「皆、今年も鳥白島流しそうめん大会の日がやってきた。毎年のように言うが、フェアプレーを心掛けるように」

やがて、そんな子供たちの中心でのみきが挨拶をし、ルール説明を始めた。

「まずは配点についてだ。流れてくる普通のそうめんを食べた場合、1点。時々流れてくる赤いのが混ざったそうめんは2点。稀に流れてくるブドウは3点だ」

……なるほど。しろはの言っていたスコアってのはそういうことらしい。つまり食べた量より、総合得点を競うらしい。

「同じく流れてくるキュウリは4点、ミニトマトはなんと5点だ」

のみきの説明が続く。どうして野菜は高得点なんだろう。子供たちからも当然のようにブーイングが飛んでいた。ミニトマトとか、掴みにくいイメージはあるけどさ。

「静かにしろ。特に男子はトマト、女子はキュウリが嫌いな子が多いと聞く。優勝したければ、好き嫌いせずに野菜を食べるんだ」

……そういうことか。嫌いな野菜ほど高得点。たぶん、子供たちの好き嫌い克服の意味も兼ねてるんだろう。

「……ちなみに、流れてくるブドウはなんと巨峰だぞ？ 徳田が提供してくれたんだ。皆、お礼を言うように」

のみきがそう言うと、大きな拍手が徳田に送られる。皆と少し離れた場所に立っていた徳田は、恥ずかしそうに顔を背けていた。

ルール説明が終わり、まずはファーストクラスの競技の準備が進められていく。小学生のクラスらしく、羽未はどうやらここになるらしい。

「競技に熱中するあまり、めんつゆこぼすなよー？ 服汚したら、かーちゃんに怒られるぞー？」

良一がそう言いながら、流しそうめん台の前に整列した子供たちにめんつゆの入った器と箸を配っていた。この光景を見ると、いよいよという感じがしてくる。

「はい。羽依里もこの数取器を持って」

そんなことを考えていると、しろはから突然数取器を渡された。これって、交通量を調べたり、カウント999を目指してバトルするアレだよな。

「え、これで何するの？ バトルランキング？」

「違うよ。子供たちは食べるのに集中するから、大人の私たちがこれで得点を数えてあげるの。羽依里は佐藤さんのお孫さんをお願いね」

「あ、ああ。了解したよ」

どうやら、そんなルールがあるらしい。俺は先程のみきが言っていた配点を思い出しながら、数取器を手にスタンバイするのだった。

「それじゃ、始めるわよー。準備はいいー？」

「おー！」

「やったらー！ー！」

「あおねーちゃん、かもーん！」

……そして、流しそうめん大会（ファーストクラス）が始まった。そうめんを流すのは、脚立に乗ってスタート地点に立つ空門姉妹。最初は小学生の子供たちということもあり、そうめんの流れも緩やかだ。

更にハンデということで、低学年の子は上流で優先的にそうめんを

掴めるように配置されていた。つまり、羽未が一番にそうめんを掴むチャンスがあるわけだ。頑張るんだぞ。

「……えいー！」

すると、羽未は流れてきたそうめんを華麗にキャッチしていた。さつそく1点。流しそうめんは初めてのはずなのに、上手だった。

「んー、おいしいー！」

すくったそうめんをめんつゆにつけて、ちゅるちゅるとすすする。すごく幸せそうだった。

「よいしょー！」

俺が担当になった佐藤さんのお孫さんも、上手にそうめんをすくつて口に運んでいた。うんうん。さつそく1点だね。

「もらったー！」

「くっそー！」

そんな二人から下流になると、高学年の男の子たちが熾烈な戦いを繰り広げていた。まさに群雄割拠だ。

「ミニトマト、いくわよー！」

「ゲッターー！」

蒼が無数のミニトマトを流すと、これも羽未が見事にキャッチしていた。しろはの教育と料理のおかげか、羽未は野菜の好き嫌いはないし、これ見よがしに野菜をスルーしていく下流の子供たちとは裏腹に、おいしそうに食べていた。

「……お前たち、野菜をスルーするんじゃない。しっかり食べる！」

ちなみに流しそうめん台の1ゴール地点には、最後まですくわれることなく落ちてきたそうめんや野菜を受け止める竹製のザルが用意されていた。そこまで落ちてきた野菜たちは徳田がサルベージして、子供たちに公平に配分される。

「げー、キュウリいらないー！」

「トマトきらいー！」

そして、一様に嫌な顔をされていた。

「文句を言うな。この巨峰もつけてやるから、しっかりと食べるんだ！」
徳田は少し困ったような顔をして、どこからか巨峰を取り出して子

供たちの器に入れてやっていた。やっぱりいい奴だ。

「とくだのおじちゃん、ありがとー！」

「おじっ……」

徳田は何か言いたそうな顔をしていたけど、子供たちの手前、何も言わずに引つ込んだ。

「……なあ鷹原、俺とお前は同じ年のはずなんだが、どうして俺はおじちゃん呼ばわりされるんだ？」

……と思つたら俺の方にやってきて、小さな声でそう聞いてきた。たぶん、徳田はひげを生やしてるのもあって、年上に見えるんじゃないかな。俺は『うみちゃんのおとーさん』って呼ばれることが多いけど。

「おなかいっぱいーいー！」

「まんぞくー」

最初こそ争うようにそうめんを食べていた子供たちだけど、どんどん流れてくるそうめんを食べているうちに皆満腹になったみたいだ。一人、また一人と流しそうめんの台から離れていき、やがてファーストクラスの競技が終了した。

結果、羽未は40点を獲得して3位。さすがに高学年の男の子には勝てなかったけど、野菜好きが功を奏して、得点を荒稼ぎしたみたいだ。

「んー、おなかいっぱいー！」

俺が担当した子も椅子に座ってお腹を押さえ、満足そうだった。この子の得点は33点。順位は中程といった所だけど、好き嫌いもなく良く食べていたと思う。

「よし。続いてセカンドクラスの競技に移ろう。少し準備をするから、待っていてくれ」

のみきがそう言うと、天善が子供たちから使用済みの器や箸を回収して回っていた。天善、いつの間に戻ってきたんだろう。

「ほら羽依里、ぼーっとしてないで手伝って」

「この器と箸、持って行って！」

そんな天善を何気なく見ていたら、しろはと鷗にそう指示をされた。言われるがままに食器を受け取って流し台に戻ると、そこにはセカンドクラスに参加するらしい堀田ちゃんと夏海ちゃん、識の姿があった。

「あれ、参加するのは三人だけ？」

「みたいです。元々、このクラスに参加するのは中学生から高校生までなので、私も特例みたいですけど」

先程に比べるとあまりに参加人数が少ないので不思議に思っていると、夏海ちゃんからそんな答えが返ってきた。確かに、二人だけだと盛り上がりがないと思う。

「そうなんだ。頑張ってるね」

「はい！」

「箸さばきなら自信があるぜ！」

俺は三人に器を手渡した後、再び数取器を手にしながらそう声援を送っておいだ。

「セカンドクラスですから、水量も増やしますよ。良一ちゃん、お願いします」

参加選手全員の準備が整っているのを見て、スタート地点に立っていた藍が蛇口近くにいた良一に指示を送る。すると、先程に比べて明らかに水量が増した。

「……ところで蒼、堀田ちゃんや夏海ちゃんもここにきてるけど、駄菓子屋の店番はどうしてるんだ？」

「店はコイナリに任せてるわよー」

「ああ……」

コイナリというのはイナリの子供で、昔のイナリそっくりなキツネだ。母親に似て賢い。

「あいつが賢いのは知ってるけど、店番が務まるのか？」

「これも社会勉強よー」

キツネが人間社会の勉強をして役に立つのかわからないけど、店番の心配がいらぬのならそれに越したことはない。

「まあ、普段買物に来る子供たちのほとんどがこの会場に集まってくるから、お客さん自体来ないだろうけどねー」

そう言ってからからと笑う。確かにその通りなんだろうけど、それを言っちゃおしまいな気がする。

「……そうそう。言い忘れてたけど、セカンドクラスは時間制限があるの。勝負は10分間よー!」

そしてその時、蒼が思い出したようにそう付け加えていた。なるほど。子供たちの時と違って、時間制限まであるのか。

「それでは、セカンドクラスの競技を始めます。三人とも、準備はいいですね?」

「はいー!」

「いつでもいいですよー!」

「いざ尋常に、勝負だぜ!」

最終確認をする藍に対し、識たちも大きな声で応えていた。さつきより難易度が上がったとはいえ三人だし、何より知った顔ばかりだ。もしかしたら、さつきより微笑ましい戦いになるかもしれない。俺は担当になった堀田ちゃんの前に立ちながら、そんなことを考えていた。

「……鷹原、ぼーっとしている暇はないぞ。ああ見えて、堀田ちゃんは前回大会のチャンピオンなんだ。気を抜くとカウントし損ねるぞ!」

「え、そうなの?」

「ああ。去年は年上の男子が二人いたんだが、その二人を圧倒してしまったんだ。来年は彼女もオープンクラスにやってくるから、強敵だぞ」

……待つて。堀田ちゃん、そんなに食べるの? すごく華奢な体してるし、とてもそんなふうには見えないんだけど。

「それでは、競技スタート!」

俺の一抹の不安をよそに、セカンドクラスの競技が始まった。

「よーし、食べますよー!」

「お供するぜ、夏海先輩!」

前回優勝者のハンドレの意味合いもあるのか、上流から夏海ちゃん、

識、堀田ちゃんの並び順。水の流れが速いのもあって、始まってみれば結構な迫力だった。

「ほったねーちゃん、がんばれー!」

「いっけー! 流しそうめんクイーン!」

「流しそうめんクイーン言うなあ——!」

子供たちの声援にそんな叫びを返しつつ、堀田ちゃんがそうめんをすくう。これ見よがしに赤いのが混ざってるのを選んでいく。

「キュウリにミニトマト、いくわよー」

そうめんの白い波が収まると、続けて野菜が流される。

「あー!」

「ぶえっ!?!」

すると、水の色に対応できないのか、識や夏海ちゃんがミニトマトを取りこぼす。

「はい、キャッチー!」

下流の堀田ちゃんは、そんな二人の取りこぼしを残らずかつさう。そしてある程度器に溜めておいて、流れるものが途切れたタイミングで一気に食べる。戦略的にも見事だった。前評判通りの展開。さすが、そうめんクイーンは強かった。

……終わってみれば、セカンドクラスは123点を荒稼ぎした堀田ちゃんの圧勝だった。

識は勢いは良かったものの、そうめんをメインに食べていたせいから総合得点は低めだった。夏海ちゃんもそれに同じ。

堀田ちゃんも得点差が開いてからは、それこそ流していた気がする。流しそうめんだけに。

「か、完敗でした〜」

「うう、そうめんクイーン、恐るべしだぜ……」

優勝賞品のメダルを受けとる堀田ちゃんの横で、夏海ちゃんと識はお腹を押さえてぐったりしていた。

悔しそうにしているけど、二人ともそれなりに楽しんでたみたいだ

し、ここは良しとしよう。

「……さて、最後はオーブンクラスだな」

「え、なにそれ」

「蒼が言っただけだったか？ これからは、大人の流しそうめん大会だ」
天善が新しい器を大量に持ってきながら、あっけらかんと言う。
すっかり忘れてたけど、そんなことを言っていた気がする。つまるところ、せつかく苦勞して用意した流しそうめん台を、子供たちが使っただけで崩すのはもったいない。大人たちも楽しもう……というこ
とらしい。

「よし、今年は頑張っちゃおうよ！」

「キャプテン、がんばれー！」

「のみき姉、負けるなー！」

そんなことを考えていると、見知った顔が続々と集まってきた。子供たちも応援してくれているし、なんか盛り上がり上がった。

「皆さん、きちんと並んでくださーい！」

「めんつゆと箸はこつちですよー」

そしてどうやら、空門姉妹に代わって夏海ちゃんと堀田ちゃんがそうめんを流してくれるらしい。どちらもそうめんの入った大きな器を持ちながら、嬉々として脚立に登っていた。

「そうそう。男性陣にはハンデとして、もれなくワサビがつきますよ。忘れずに受け取ってくださいね」

堀田ちゃんからめんつゆの入った器を受け取っていると、藍がそんなことを言いながら俺の器にチューブのワサビをこれでもかとおし
ていった。ちよつと、なにしてくれちゃってるの。

「一年振りだし、腕が鳴るわねー」

「蒼ちゃん、頑張らましよう」

そう言う空門姉妹を先頭にして、流しそうめん台を挟んで鷗と紬、
しろはとののみき、俺と良一、静久と天善の順で並ぶ。徳田はさつきま
でいたはずだけど、いつの間にか姿が見えなくなっていた。

……ちなみに、オープンクラスの制限時間はセカンドクラスと同じ10分。そしてスコアは自分たちで数え、後で自己申告するらしい。大人なんだから、ズルなんてしないでだろうという判断だ。

「それではオープンクラスの競技を始めますよ！ ほっちちゃん、バルブ全開！」

「はい！」

夏海ちゃんの指示で、堀田ちゃんが水道の蛇口を限界まで開ける。するとみるみる水量が増え、流しそうめん台の上は激流と化した。

ゴール地点に用意されているザルもその水量に耐えられるよう、竹製から鉄製に変えられた。この水流に乗ってくるそうめんや野菜を掴むのは、いくら俺たちでも至難の業かもしれない。

「オープンクラスでは、これまでの食材に加えてワカメも流します！これを掴めたら、10点ですよ！」

夏海ちゃんがボウルに入ったワカメを高々と掲げる。小さく切られてはいるようだけど、あれはもしかして天善からの差し入れだったりするのだろうか。すごくその、生々しい。

「それでは、まずは普通のそうめんから流しますよー！ 競技スタートですー！」

……そして、オープンクラスの戦いが始まった。

「二人とも、あたしたちが食べるペースなんて考えず、思う存分流していいわよー」

「はいー容赦なく行きますー！」

そう言うが早いか、激流が真っ白に染まるほどのそうめんが流されはじめた。

「よし、もらったー！」

俺はそんなそうめんの中から、できるだけ赤いのが混ざったやつを選んで口に運ぶ。

「ぶっ!? げっほっほ」

そうめんを口に含んだ直後、たっぷりのワサビが鼻に来た。うおお、駄目だ。とても素早くなんて食べられない。

「ぐわあああ!?!」

「のおおおお!？」

近くにいた良一と天善も同じように苦しんでいた。このハンデ、かなりきつい。

「カモメさん、おいしいですね!」

「うん! ツムツム、たくさん食べようね!」

そんな俺たちを尻目に、女性陣は流しそうめんを楽しんでいた。中でも鷗はスーツケースに座って優雅にそうめんを食べている。こういう時便利だな、あのスーツケース。

「巨峰、流しますよー」

「わーい!」

そうめんに続いて、堀田ちゃんが巨峰をばらばらと放り込む。本当、怒涛の勢いだ。

でも、巨峰ならワザビの影響を受けないし、食べやすそうだ。

「……見えた! チョレーーイ!」

そう言っただけで箸を構えた矢先、俺より一つ下流にいるはずの天善の箸が伸びてきて、目の前の巨峰をかつさらった。

「……さすが天善、ピンポン玉のように丸い物に目がないな」

「ああ。高級フルーツでもあるしな」

「……あ」

勝ち誇った顔で巨峰をほおぼる天善を見ていたら、隣にいたしろはがそうめんを取りこぼした。さすがに流れが急すぎたみたいだ。

「オープンクラスとはいえ、流れが早すぎるよな……ほれ」

それを見た俺は、すかさず別のそうめんをすくってしろはの器に入れてやる。

「あ、ありがとう……」

それを受け取ったしろはは、恥ずかしそうに顔を赤くしながら、ちゆるちゆるとそうめんをすすった。

「相変わらず仲が良いわねー」

「……そうです。ここはルール変更をしましょう。しろはちゃんは羽依里さんに食べさせてもらったなら、スコアが三倍ということだ」

「え」

思わず、俺としろはの声が重なった。なにその妙に恥ずかしいルール変更。

「大人の流しそうめんですから、そういうのもアリですよ。さ。思う存分どうぞ」

いや、どうぞと言われても。

俺としろはは思わず見つめ合ってしまう。この大勢の人が見ている中で、あーんをしろと？

「はは、しろはもとんだ災難だな」

「うう、他人事だと思つて……」

そんな俺たちの気持ちなどつゆ知らず、のみきはしろはの向かいでそうめんをすすっていた。

「思えば、確かにフェアじゃないですね。では、みきちちゃんも良一ちゃんに食べさせてもらったらスコア三倍でいいですよ」

「な、なんだと!?!」

「俺たちもかよ!?!」

……直後、のみきたちにも矛先が向いた。ふふ、これで俺たちは同じ穴の貉だな。

「し、しろは、あーん」

やむなくルール変更を受け入れた俺は、高得点を目指すべくしろはにあーんをする。

「あ、あー……つて、できないし! 恥ずか死ぬし!」

しかし、しろはは俺の箸先にあるミニトマトと同じくらい顔を真っ赤にしながらそれを拒否した。お、俺だって死ぬほど恥ずかしいんだぞ。

「まったく、何年夫婦してるんですか。不甲斐ないですね」

「こんな公開処刑みたいなことできるかあ!」

俺は思わず叫ぶ。俺も箸先が震えて、まともに食材を運べないし。落としちゃったら勿体無いし。

「何言ってるんです? 良一ちゃんたちを見てください。普通にやつ

てますよ」

「ええー……」

藍の指差す先を見てみると、顔を赤くしながらも良一から食べさせてもらっているのみきの姿があった。あのふたり、やるなあ……。

「なにしているのー?」

その時、羽未が純粹な目をしながらこっちにやってきた。こ、この状況を見られるのはまずい。

「うみさん、ストップだぜー!」

「わー!」

……間一髪。識が羽未の目をふさいでくれた。

「向こうで他の子達と一緒に鬼ごっこをしているんだ! うみさんも一緒にやろうよ!」

そして羽未半ばを抱きかかえるようにしながら、俺たちから引き離していった。おかげで助かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……やがて、オープンクラスの競技が終わった。

優勝は350点のスコアをたたき出したのみきだった。藍が下した特別ルールの元、良一に食べさせてもらったのだから当然だ。ミニトマトひとつで15点。わかめに至っては、一口で30点だ。破格も良い所だ。

ちなみに俺はというと、なんとかしろはに食べてもらおうと頑張っていたこともあり、競技中にはほとんど食べられなかった。

というわけで、片づけのために誰もいなくなった流しそうめん台で、俺は一人寂しくそうめんをすすっていた。

そうめん余ってるからちようどいいけど、一人で食べてると何か空しい気分になってくる。

「うう、はじゆかしかった……」

そんな折、首から優勝メダルをかけたのみきが、未だ顔を赤くしたままこつちにやってきた。

「あ、やっぱり恥ずかしかったのか」

「と、当然だろう。夫婦になったとはいえ、あんなこと……人前でやったことがないからな」

……つまり、二人つきりの時はやってるんだな……なんて感想が浮かんだけど、敢えて口には出さなかった。

「そ、それより、鷹原も無理して食べずに持って帰るといい。今、青年会館の厨房からビニール袋をもらってきてやる」

のみきは笑顔でそう言うと、青年会館の方へと歩いていった。どうやら、残ったそうめんが勿体無いから、俺が無理して食べていると思われたらしい。確かに量は多いけど、腹は全然空いてるから別に良かったのに……。

「あれえ。これってもしかして、流しそうめんかなあ」

そんな感じにのみきの背中を見送った直後、聞いたことのある声が聞こえた。

「あれ、聖さんに佳乃さん？」

声のした方を見ると、霧島姉妹が不思議そうな顔をして立っていた。この二人、まだ島にいたんだ。

「民宿のご主人。これは何かのイベントなのか？」

聖さんも俺の姿に気づいたらしく、こちらに近づいてきながら聞いてきた。

「ああ、島の子供たちと流しそうめんをやっていたんですよ」

「竹でできてるなんて、本格的だよねえ」

抱いていたポテトを地面に降ろして、佳乃さんが興味津々に流しそうめん台を覗き込んできた。

……その時、佳乃さんのお腹から良い音が聞こえた。

「うひゃー、恥ずかしいー……」

彼女は反射的にお腹を押さえる。もうお昼もだいぶ過ぎてるんだけど、もしかしてまだお昼ごはん食べてないのかな。

「あの、良かったら食べていきます？。そろそろ終わろうかと思って

いたんですけど、そうめん、まだ余ってるんですよ」

俺は器に残っているそうめんを指し示しながら、そんな提案をしてみろ。

「いや、気持ちはありがたいが……さすがにそれは……」

「ん？ 鷹原、こちらの方々は？」

聖さんが躊躇していると、ビニール袋を手に戻ってきたのみきが、遠慮がちに声をかけてきた。

「ああ、この二人はうちの宿泊客だったんだよ。どうやらお昼を食べ損ねたらしくてさ。せつかくだし、余ってるそうめんを食べてもらおうと思うんだけど」

「なるほど。そういうことなら、もう一度流しそうめんというじゃないか。大勢の方が賑やかだろうし、皆を呼んでくるぞ」

俺が理由を話すと、のみきは笑顔で了承してくれ、そのまま方向転換をして皆を呼びに行った。

「……というわけですから、遠慮せずに食べてください」

「……すまないな。まさか昼食までご馳走になるとは」

「助かったよお。昨日お邪魔した港のご飯屋さん、今日は臨時休業になってたし。お腹ペコペコ星人になるところだったよお」

「ぴんぴん」

隣でやりとりの一部始終を見ていた霧島姉妹とポテトが、そろって頭を下げる。

そういえば港の食堂、今日は休むって話を高橋さんから聞いたような気がする。まあ、島ではよくあることだ。

「へー、姉妹で観光なんて珍しいわねー」

「通天閣Tシャツ……大阪の人ですか？」

そんな会話をしているうちに、のみきから話を聞いたらしい皆が続々とやってきた。

「あたしは霧島佳乃！ よろしくねー！」

「ぴんぴんー」

見るからに人懐っこい性格の佳乃さんを筆頭に、二人と一匹がそれぞれ自己紹介を済ませる。

この姉妹はあくまで旅行者だし、この場限りの出会いとなるのだけど、誰もが自然と受け入れてくれていた。

「それで、もう一度流しそうめんをするのねー。器とめんつゆは新しいの用意してきたし、さっそく始めるわよー」

……それから再び流しそうめんが始まった。

今度はスコアも競わない、普通の流しそうめんだった。食事の途中だった俺も霧島姉妹に混ぜてもらったけど、同じそうめんのはずなのに、こうやって皆と食べると美味しく感じるのはなぜだろう。

「カノカノはそうめん好きなんだ？」

「好きだよお。夏ーって感じがするしねえ」

そしていつの間にか、佳乃さんの隣に鳴が座っていた。なんかこの二人、似てるよな。

「まあ、霧島さんはお医者様なのね。すごいわ」

「大したことはない。親の跡を継いだ、しがない町医者だよ」

その隣では、聖さんが静久と話をしていた。この二人も、どこことなく似ている気がする。

「むぎぎぎぎぎぎー……」

「ぴっぴっぴー……」

そんな二人のまた隣では、紬がポテトを今にも触りたそうな目で見ていた。あの見た目だし、やっぱりぬいぐるみコレクターとしての血が騒ぐんだろうか。

「あの、この子を抱いても良いですか？」

「いいよお。ポテト、お手柔らかにねえ」

「ぴっぴー」

……許可が出た瞬間、紬はポテトをむぎゅーっとしていた。

元々姿形が似てると思っていていたのに、紬が抱いていると大きなワタアメを持っているようにしか見えなかった。見事な擬態だった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それでは、何度も世話になったな」

「ばいばいだよおー！」

「ぴこぴこー！」

霧島姉妹はたっぷりと流しそうめんを堪能した後、15時の船で帰ると言って去っていった。

それを見送った後、俺は日陰に腰を下ろし、まったりと食休みをしていた。

「よーし！ 僕が鬼だぜ！ 一人残らず捕まえてあげるよ！」

「うわー！ー！ くるなー！ー！」

時間は午後二時。一番暑い時間帯だというのに、識は羽未と一緒に子供たちに混ざり、元気に鬼ごっこをしていた。

鬼ごっこ、さつきもしてなかった。識は本当に元気だなあ。

「うみさん、捕まえたぜ！」

「うみやー！ー！」

……そんな識の目の前にいた羽未が速攻で捕まっていた。どうやら、一緒に遊んでいた上級生たちに押し出される形で、たまたま識の前に出てしまったんだろう。

「今度は羽未が鬼だぜー！」

「皆、逃げろー！」

そう言うと、上級生たちは一目散に逃げていった。さすが、島の子は足が速い。羽未も運動はできる方だけど、さすがに追いつけそうにない。

「よーし、うみさん！ 僕と一緒に一緒に皆を捕まえよう！」

「うん！」

すると、その様子を見た識がそう言っていた。つまり、羽未を捕まえても識は鬼のままというわけだ。

「げー、そんなのありかよー！」

「ふえおについて鬼ごっこさ。さあ、鬼の仲間には引き込んであげるよ！」

うつきよおおおおー！ー！」

「うつきよー！ー！」

「うわああー！ー！　にげろー！ー！」

そして、羽未と識は同じような叫び声をあげながら子供たちを追いまわし始めた。ゲーム中にこの手のルール変更は良くあることだけど、おかげで羽未も楽しそうだ。

「……識は鬼ごっこになると、本当に生き生きとしているな」

そんな様子をぼんやりと眺めていたら、のみきがいつの間にか隣にやっつけてきていた。

「ところで鷹原、ものは相談なんだが……今夜、しろは食堂で歓迎会をしようと思っているんだ。参加してくれるか？」

「え、歓迎会って誰の？」

「誰って、鷗や夏海ちゃんに決まっているだろう。彼女たちは渡りの人だぞ」

思わず聞き返してしまったけど、言われてみればそうだった。特に鷗は夏休み以外にもちよくちよく島にやっつけてきているし、全然旅人つて感じがしないんだけど。

「そういうことなら、もちろん参加するよ」

「鷹原ならそう言ってくれると思っていた。今回はその二人に加えて、識の歓迎会も兼ねようと思っている。彼女にもぜひ参加するように伝えてくれ」

子供たちに混ざって元気に駆け回っている識を見ながら、のみきがそう言う。

「わかった。識にも伝えておくよ」

「……そういうわけだから、羽依里も歓迎会の準備、手伝ってね」

そのタイミングで、しろはが会話に入ってきた。普段の格好に戻っているし、流しそうめんの片づけは終わったみたいだ。

「ああ、料理はできないけど、食材の運搬や掃除は任せてくれよ」

宿泊客が多い時はしろは食堂で食事を提供したこともあるし、普段からある程度の掃除はしている。この後使うにしても、軽く掃除をするだけで使えると思う。

「そーいうことなら、羽未ちゃんのごことはあたしたちに任せといてー」
「鬼ごっこで遊び疲れたら、駄菓子屋でかき氷でもごちそうしてあげますよ」

そんなしろはに続いて、空門姉妹がそう言ってくれた。この二人に任せておけば安心だろう。

「わかった。二人とも、羽未をよろしくな。何かあったら、しろは食堂にいるからさ」

「りよーかい。しろはも、たまには夫婦水入らずで楽しみなさいよねー?」

「べ、別に、普通に準備するだけだし!」

笑顔の空門姉妹にそう茶化されながら、俺たちはしろは食堂へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……食堂の鍵を開けた後、俺はしろはからさっそく食材の買い出しを頼まれた。

思えば歓迎会なんだし、相当な人数が集まる。食材もそれ相応の量が必要のはずだ。

「えーっと、これで全部だよな……?」

しろはから渡されたメモを片手に、漁港や港の商店を回って買い物を済ませる。その荷物をバイクの荷台に取り付けたカゴに全部詰め込んでから、しろは食堂へと舞い戻った。

店の脇にバイクを止めて、運んできた荷物を両手に抱える。

思わず顔を上げると、墨文字で書かれた『しろは食堂』の文字が目に見え飛び込んできた。

この看板は随分前にしろはのじーさんが作ってくれた奴らしいけ

ど、さすが墨。何年経つてもその迫力は色あせない。むしろ絶妙な色落ち加減で、力強さを増してる気さえする。

この食堂も以前のように毎日開けているわけじゃないけど、今日みたいな日は積極的に使ってもらうことにしている。

食堂は人がいてこそだと思うし、何より、ここはしろはと両親の思いが詰まった場所だから。

「しろは、戻ったよ」

「いらっしやい、羽依里！」

「羽依里くん、いらっしやいませだぜ！」

両手に荷物を持ったまま、器用にその扉を開けると……何故かメイド服を着た鷗と識にお出迎えされた。

「……ごめんなさい。お店間違えました」

俺はそう言つて、再び器用に扉を閉めた。

「ええっ、ちよつとちよつと！ 待ってよ！」

直後、扉の向こうから叫ぶ声が出て、がらがらと扉が開け放たれた。

「いや、どうして二人がいるのかわからないんだけど。それになんてメイド服？」

「お手伝いに来たら、しろしろが服が汚れるから駄目って言うんだもん。だから、着替えてきたの！ カモメイドだよ！」

「オニメイドだぜ！」

二人してそう口にして、笑顔で迫ってくる。いや、似合ってるけどさ……。

「ごめん……手伝いたいってしつこいから、そんなに手伝いたいならメイド服でも着て来てって言ったの。そしたらまさか、本当に着てるなんて」

俺が視線を泳がせていると、二人の背後にいたしろはが申し訳なきようにそう言っていた。この島にメイド服なんてないと思つての発言だったんだろうけど。一体誰が持つてたんだろう。

「もしかしたら駄菓子屋さんに売ってるかもって思つて行つてみたら、レンタルがあったんだよ！」

「ほう。レンタル」

どう考えても空門姉妹の私物だろう。特に、姉の方の。

「ところで羽依里くん、この『めいど服』とやらはどういった時に着る衣装なんだい？ 見かけの割に動きやすいけど、名前からして仏教の装束なのかい？」

冥土服……ってか。急にオカルトな雰囲気か漂ってきた。

「まあ、お手伝いさんの着る服……かな」

「なるほど。奉公人の仕事着ってわけか。それなら、動きやすいのも納得だね！」

奉公人？ 少し意味合いが違う気がするけど、本人が納得しているようだし、気にしないことにしよう。

……そして、俺としろはにメイド二人を加えた四人で、歓迎会の準備を進めることにした。

「それじゃ、鶯は鶏肉を切ってくれるかな。床と調理場の掃除は先に終わってるから、羽依里はカウンターを拭いて。識はお座敷の掃除をお願い」

しろはが的確に指示を出してくれ、俺たちはそれぞれの持ち場へ散る。カウンターは隅に埃がたまりやすいし、念入りに拭き上げておかないと。

「鶯、鶏肉を一口サイズに切ったら、このタッパーに入れてね。特製ダレに漬けて込んで、冷蔵庫に入れておくから」

「うん！ しろしろの作る唐揚げって味がしみてて、おいしいよねー」

「本当なら一晩は漬けてみたいところだけど、今日は時間がないし。本格的に調理に取り掛かる前に、先に下ごしらえだけやっておこうと思ってる」

「……ところでその特製ダレ、配分が気になるんだけど」

「教えてあげないよ」

「ううっ……私の台詞が……！」

布巾でカウンターの上が掃除していると、厨房の方から鷗としろはのそんなやりとりが聞こえてきた。

「あれ、この鶏肉、筋が多いのかな。なかなか切れない……よいしょ」
そして、どうやら鷗は久々の料理にてこずっているらしかった。

「……ぐわあ。おのれ鷗、同族の癖にこの仕打ち……ぐわああゝ」
「ちよつと羽依里、やめてくれますか」

その様子を見ていたら急に悪戯心が芽生え、同族の鷗に切られる鶏の気持ち表現してみたりした。

「羽依里、遊んでる暇はないんだよ。カウンターの掃除が終わったら、次は識を手伝ってあげて。お座敷は広んだから。ほら、早く」

「わ、わかってるから、ちよつと待って」

直後、しろはに怒られてしまった。うう、ほんの悪戯心なのに……。

「……メイド服、ようやく見つけました！　しろはさん、手伝いに来ましたよ！」

カウンターの掃除を終えて識を手伝っていると、開け放たれていた入口から夏海ちゃんが走り込んできた。

「あれ、もしかして夏海ちゃんも手伝いに来てくれたの？」

「はい！　鷗さんに誘われましたー！」

満面の笑みでそう答えてくれたけど、その格好は言わずもがな、メイド服だった。

来てくれたのは嬉しいけど、ここにいる三人が三人とも、今日の歓迎会で歓迎される側なんだけど。いいのかな。

「ところで夏海ちゃん、そのメイド服どうしたの？」

「鏡子さんが持ってたので、借りてきました！　昔は蔵に置いてあったそうですよ！」

そう言っつてスカートの端を掴みながら胸を張る。出会った頃と身長はそこまで変わらないのに、胸は大きくなっちゃってまあ。

「あー……見つけて来ちゃったんだ……ど、どうしようかな」

一方、少し古めかしいメイド服に身を包んだ夏海ちゃんを見て、し

ろはは困った顔をしていた。これは先の二人と同じような理由をつけて、一度追いつ返したに違いない。

「じゃあ、食堂の前をほうきで掃いてくれる？　もう少ししたら本格的に料理の準備を始めるから、その時になったらまた呼ぶね」

「わかりました！　ほうきはこれですね！」

夏海ちゃんは室内に立てかけられていたほうきを掴むと、意気揚々と表に出ていった。

彼女が来たことで、さらにメイドが増えたし。こんな場面を観光客に見られたら、鳥白島にメイドカフェができたとか誤解されそうで怖いんだけど。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……やがて夜。

全ての準備が整い、三人の歓迎会が始まった。

「ようこそ、鳥白島へ——！」

そんな掛け声とともに、クラツカーや紙吹雪が舞う。渡りの人の歓迎会では、もはやおなじみの光景だ。

お座敷の一番奥、上座の位置に鳴と識、夏海ちゃんが座り、その対面に静久と紬が座っている。

その隣のテーブルには良一と天善がいて、その向かい……一番入口に近い所には俺と羽未が座っていた。

座敷から離れたカウンター席にはのみきと空門姉妹、そして堀田ちゃんが座り、奥の厨房にしろはがスタンバイ。合計13人。なかなかの参加人数だった。

「それでは、まずは三人に簡単に挨拶をしてもらおうとしよう。まずは夏海ちゃんからだ」

「はー」

司会のみきがそう促すと、座っていた夏海ちゃんが元気良く立ち

上がる。

「えつと、岬夏海です！ 今年もまた大好きな鳥白島に来ることができました！ 皆さん、今年もお世話になります！」

夏海ちゃんはそう元気に挨拶をして、頭を下げた。一年振りに島にやってきたはずなのに、早くも島に馴染んでいる気がする。

「夏海ちゃんは鏡子さんの姪ということで、夏休みの間は鳥白島に滞在することになる。皆、よろしく頼む」

のみきがそう補足するけど、既に皆が知っている事ばかりだった。送られる拍手に何度も頭を下げてから、夏海ちゃんは着席した。

「続いて、鴫の番だが……すでに有名人だし、挨拶は不要かもしれないな」

「のみきさん、それひどい！ 私も挨拶したい！」

笑顔で流そうとしたのみきだったけど、鴫は全力でそれを制してから、立ち上がる。

「久島鴫です。今年も鳥白島の皆に最高の夏を届けに来たよー！」

そう言つて拳を突き上げる。ノリノリだった。本当に元気だなあ。

「鴫も夏休みの間、島に滞在することになる。サマーキャンプをはじめ様々なイベントでお世話になると思うから、皆もよろしくな」

返事の代わりに、これまた大きな拍手が送られる。それを見て、鴫は満足げな顔をして席に着いた。

「それでは、最後に識だな」

「神山識さ。よろしくお願いするよー！」

識は先の二人と同じように立ち上がった、そう挨拶をした。

「彼女は鷹原の親戚になるとのことと、この夏の間、加藤家に滞在することになった。識も困ったことがあったら、なんでも相談してくれて構わないぞ」

「ああ、先輩方、頼りにしてるぜ！」

識は俺たち全員の顔を見渡しながら、満面の笑みを浮かべていた。きつとお世辞でもなんでもなく、識の本心からの言葉なんだろう。

「……それでは、乾杯の音頭を年長者である静久さんをお願いしようと思う」

「ええ。光栄だわ」

三人の挨拶が終わり、そう指名された静久がグラスを手に立ち上がる。

「……そういえば、静久先輩も島は久しぶりのようだけど、彼女は挨拶しないのかい？」

その様子を見て、識が近くのみきにくっそりと聞いていた。

「彼女は天善の妻だからな。既にこの島の住民だ。住民が挨拶するのは変だろうか？」

「言われてみればそうだね」

「ふふ、あえて自己紹介をするなら、私は芸術を愛するおっぱいよ。それじゃ、三人がこの島で過ごす夏が素晴らしいものになることを願いつつ……乾パイ！」

この面子を前に硬い挨拶なんて不要だと判断したんだろう。静久は冗談を交えながら、グラスを掲げた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それじゃ皆、たくさん食べてね。おかわりはたくさんあるから」

乾杯の後は、しろはと堀田ちゃんが中心となって料理を配膳してくれた。ちなみに、なぜか堀田ちゃんはメイド服姿だった。

話によると、歓迎会で配膳のバイトをするにあたって、夏海ちゃんから借り受けたらしい。

「堀田ちゃん、しろは食堂の新制服、似合ってますね」

「それは制服じゃないし！」

カウンターに頬杖をつきながらそんな言葉をこぼす藍を、しろはが全力で否定していた。

「ほら、羽未も遠慮してないで、しっかり食べるんだぞ」

「うん！」

普段あまり集まらない人数に少し緊張しているらしい羽未の小皿にポテトサラダと唐揚げを取り分けてあげると、嬉しそうにポテトサラダへ箸を伸ばした。

「羽未はおかーさんのポテトサラダ、好きだもんな」
「すきー」

口いっぱいポテトサラダを頬張って満足そう。唐揚げより先にポテトサラダを選ぶ辺り、やっぱり羽未は野菜が好きなんだろう。

「……おお、この唐揚げは絶品だぞ。しろは、ますます腕を上げたな」
そんな俺たちの向かいに座る天善は唐揚げに舌鼓を打っていた。俺も試しに一つ小皿に取って食べてみる。うん。安定のうちの唐揚げの味だ。

「こっちの魚は俺が獲ったやつだ。このホウボウの刺身なんか、絶品だぜー？」

良一からは刺身の盛り合わせを勧められる。言われるがままに醤油とワサビをつけて食べてみると、噛めば噛むほど身の旨味があふれてきて美味しかった。しっかり小骨も処理されているようだし、さすがしろはだ。

「そうだ。ママカリのお寿司もあるから、食べたい人は言ってるね」

「しろはさん！ 私欲しいです！」

「あたしももらえるー？」

カウンターの奥に戻りながら、しろはがそう言う。直後に夏海ちゃんと蒼が手を挙げていた。

ちなみにママカリというのはこの地方でよく食べられる魚で、正式名称はサツパというらしい。小骨が多いから酢漬けにして、アジ寿司のようにして食べるのが定番だ。

「んー、しろしろ、このだし巻き卵おいしい！」

一方、鵬はだし巻き卵がお気に入りみたいだ。俺と羽未にしてみればどの料理も食べ慣れた家庭の味なんだけど、それを皆が美味しいと言ってくれる。これ以上の喜びはなかった。

「堀田ちゃん、揚げ出し豆腐と枝豆が用意できたから、鷗たちの席に持って行ってくれる?」

「りよーかいです!」

……しばらくすると、皆お酒が入り始める。同時に提供されるメニューも居酒屋っぽくなり、賑やかになってきた。

「羽依里くん、このお店はお酒も置いてるんだね」

「ああ、民宿の方から運んできたんだ。元々出る数は少ないけど、時々飲みたいて人もいるしさ」

そんな時、自分の小皿に料理を乗せた識が俺たちの席にやってきた。識は当然未成年だろうし、酒の席から逃げてきたみたいだ。

「羽依里くんもお酒を飲むのかい?」

「時々飲むけど、今日は飲まないよ。羽未もいるしね」

「わきまえているわけだね。うみさん、楽しんでるかい?」

「たのしいー」

羽未はオレンジジュースを飲みながら、羽目を外す大人たちを楽しそうに見ていた。その様子は、どこか達観しているようにも思えた。

「……ところで羽依里くん、ここの島民は旅人を迎える度、こうして宴を催すのかい?」

羽未と同じように店の中を見渡して、識が呟くように言う。

「毎回ってわけじゃないけどね。皆、なにかしら理由をつけて騒ぎただけだからさ」

……そう口にして、ずっと昔に蒼から同じことを言われたの思い出した。自然とこの言葉が口から出るあたり、俺もすっかり島の人間になっただけだ。

「……シキシキ、こんなところにいた!」

「ぶえ!」

心の中でどこか嬉しい気持ちになると、識の頭上から声が降ってきた。思わず視線を向けると、そこには顔を赤くした鷗が立っていた。どう見ても、酔っている。

「せっかく私がピンクのテントの話をしていたのに、こんなところに

来て！ ほら、話を続きをするよ！」

「か、鷗先輩、放しておくれよ！ ぶ、ぶええええ……」

識は懇願していたけど、鷗にがっしと着物の襟首を掴まれ、スーツケースのごとく引っ張って行かれた。突然こっちにやってきて不思議に思っていたけど、酔った鷗から逃げてきたのか……。

……俺はよもやと思いなながらも、店の中を見て歩くことにした。

「ささ、のみきさん、どぞどぞ」

「良一、どうした？ 急に腰巾着みたい態度になって」

「いやー、のみきさんにはいつもお世話になってますからー」

さつきまで俺の向かいに座っていたはずの良一の姿がないと思っ
ていたら、いつの間にかカウンターの方で、のみきのコップになみな
みとお酒を注いでいた。お酌をする良一の方が顔が赤いし、多少飲ん
でいるんだろう。というか、のみきは甘え上戸らしいけど、飲ませて
大丈夫なのかな。

「ささ、蒼ちゃん。ぐっと」

「さも当然のように飲ませようとしても駄目だから。あたしがお酒弱
いの知ってるくせに」

そんなのみきたちの隣では、藍が蒼にお酒を勧めていた。そのラベ
ルには『清酒・蒼殺し』と書かれていた。日本酒っぽいけど、どんな
お酒なんだろう。

「堀田ちゃんや羽未ちゃんもいるんだから、恥ずかしい姿見せられな
いわよ」

「残念です。酔った蒼ちゃん、かわいいですよに」

藍はそう言いながら、残念そうに自分のコップに口をつける。双子
なのに、藍の方はお酒に強いのかな。

……そして店の一番奥。上座の方では鷗がすごく騒がしくしてい
た。あいつ、あまり強くない癖に飲みたがるんだよな。

「ほらズクズク！ コップが渴いてるよ！」

「あら、それじゃ少しだけいたただこうかしら」

そんな鷗に合わせるように、静久はたしなむ程度に飲んでたぶん、仲間内では一番場数を踏んでいるだろうし、要領が分かっている感じだった。

「ほら、ツムツムも！ もっとむぎゆ焼酎飲んで！ 二階堂だよ！」

「はい！ エンリヨなくいただきます！」

そんな静久の隣で、紬は鷗に薦められるがまま、麦焼酎をごくごく飲んでいた。ほんのり顔が赤い気がするけど、全然酔ってる感じはない。やっぱり、ドイツ人のハーフだからお酒には強いのかな。

「紬さん、すごいですね……」

そんなズツ友の様子を見ながら、夏海ちゃんは言葉を失っていた。ちなみに夏海ちゃんは識と一緒にしろは特製のミックスジュースを飲んでいた。あれもあれで、美味しそうだけど。

「……それじゃ、そろそろ良い頃合いだな」

じわじわとお酒が回り、場の收拾がつかなくなってきたその時、良一が含みを持たせながら立ち上がる。

「え、頃合いって何が？」

「そりやもちろん、かくし芸大会さ！ んんん……パー……ジ！」

そしてそのまま座敷から土間に降り立つと、勢いよく上着を脱ぐ。

「うわあああ……！」

酔った勢いとはいえ、何やってるんだ良一……！

その様子を見て、俺はさすがに教育に悪いと思い、とつきに羽未の視界を隠す。父親以外の男の裸なんて、まだ見ちゃいけません！

「の、のみき……！ 良一が裸に……！」

俺は反射的にのみきに助けを求めるけど、当の本人はカウンターに突っ伏して酔いつぶれているようだった。そ、そんな。

「はっはっは…… のみきも良い感じに酒が入っているようだし、今日は誰も俺を止められないぜ！」

良一は勝ち誇った顔でそう返す。歓迎会が始まってからずっとのみきに酒を勧めていたのは、全てはこの時のためだったのか。良一、なんて恐ろしい裸だ……。

「……ほう、まさかとは思ったが、そんな作戦を立てていたとはな」

……俺が絶望した直後、酔いつぶれていたはずのみきが素早い身のこなしで起き上がり、一瞬で良一の背後に立っていた。位置的に見えないけど、良一の動きが止まったところからして、その手には携帯用の小型水鉄砲……ハイドロカリバー零式が握られているんだろう。

「……の、のみきさん、すっかり酔われていたのではないのですか……？」

「酒が入ればお前の本性が現れると思って、飲んだふりをして見張っていた。ほら、両手を挙げたまま、表に出ろ」

「た、たばかったな……」

そしてひきつった顔のまま、良一は表へと連行されていった。

「……ぎやーーーーー……」

数秒後、良一の断末魔が響き渡ったけど、誰も気にしている様子 wasn't なかった。まあ、これも島の日常だよな。

「……そうだ。余ったごはんを使っておむすび作るけど、食べたい人いるっ……」

……宴もたけなわになってきた頃、厨房の奥からしろはのそんな声が飛んできた。

「おむすびかい!?!」

そして『おむすび』というキーワードに識が一番に反応した。さすが、おむすびの申し子だ。

「うん。具材は鮭、昆布、梅干しにしようと思うんだけど。どれがいい？」

「全部一つずつお願いするよー!」

「え、そんなに食べるの?」

しろはが驚くのも無理はない。俺が見ていただけでも、識は結構な

量の料理を食べていたはずだ。もしかして、おむすびは別腹とでも言うんだらうか。

「もちろんさー！　しろは先輩のおむすびは最高だからね！　うみさんも食べようぜ？」

「たべるー」

「え、羽未ちゃんも食べるの？」

「うんー！」

しろは再び驚いていた。この祭りのような雰囲気がそうさせるのか、羽未は普段以上に食べている気がする。これ以上はさすがに食べ過ぎる気もするけど。

「うーん……それじゃあ、小さいの一つね。具は何がいい？」

「んー、こんぶー！」

渋々了承し、具材のリクエストを受ける。それを皮切りに、のみきや鷗、天善、紬からもおむすびの注文が入った。さながら、おむすびパーティーの装いを呈してきた。

「五臓六腑に染みわたるぜ……やっぱり、日本人ならお米を食べるべきさー」

その後、心から幸せそうにおむすびを食べる識を見ながら、俺もおむすびをかじっていた。

ちなみに、俺のは梅干し入り。きちんと種が取られていて食べやすく、ちようどいい酸味が口の中の油を洗い流してくれるようだった。

「全く、識は大袈裟だよ……あ、おむすびやおかず、残ったのは持って帰っていいからね」

しろははそんな識を困ったような笑顔で見つめつつ、たくさんのおむすびを用意してくれていた。良い時間だし、そろそろ歓迎会もお開きだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……やがて歓迎会が終わり、俺は皆と一緒に家路に就いた。

「羽未ちゃん、疲れて寝ちゃったみたいねー」

「はは、俺も驚いたよ」

そんな俺の背中には、気持ち良さそうに寝息を立てる羽未がいた。おむすびを食べた直後、まるで電池が切れたかのように眠ってしまったんだ。

思えば、朝からラジオ体操に竹取り、流しそうめんに鬼ごっこで全力で楽しんでいたし、お腹がいっぱいになったことで限界が来たみたいだ。

「あの、本当に片づけをしろはさん一人に任せて良かったんでしょーか」

「大丈夫だと思うよ。一応、皆でお皿は洗ったんだし、あの食堂は元々しろはが使っていた場所だから、誰よりも慣れているはずさ」

顔は少し赤いけど、口調からして素面っぽい紬がそんな心配をしていた。本当、紬はお酒に強いんだな。

「それに帰ったら羽未を起こして、お風呂に入れる役目を仰せつかっちゃったしさ。羽未は一度寝たらなかなか起きないから、大変なんだよ」

「……でも、今は羽未ちゃんが寝てくれて手助かったかもねー。あはは……」

そう言うのは、俺の少し後ろを歩く蒼だ。羽未の寝顔越しに視線を送ると、顔を真っ赤にした藍に抱きつかれながら歩いていた。

「えへへー、蒼ちゃん……」

藍はそれなりに酔ったみたいで、素面の蒼に幸せそうに頬ずりしていた。

「こんな藍の姿、見せられないしねー」

「そうだな。大好きなあいせんせーだもんなあ」

「ふあ？ 羽依里さん、何を言ってるんれふか。私、酔ってないですよ。……はらですな」

「酔ってるやつは皆そう言うんだよ……せめて、自分の足で歩ける程度に酔いを醒ましてから言ってくれ」

「本当よねー」

蒼は藍に肩を貸しながら、苦笑いを浮かべていた。俺も何度か酔ったしろはを介抱したことがあるけど、あれって本当に大変なんだよな。それでいて、翌日になったら本人は何も覚えてないからたちが悪い。

……まあ、島の夜風が良い感じに酔いを冷ましてくれることに期待しよう。

「鴟、今年の夏こそ、島民全員参加の卓球大会……島ポンファイトの開催を所望する！」

「ええつ、卓球大会……!?!」

その時、俺たちの前を歩いていた天善と鴟がそんな話をしていた。どちらもだいぶお酒は抜けているようだけど、熱く熱く語られた鴟は明らかに引いてる。最近、天善の卓球熱も落ち着いてきたかと思っただけだ。

「あら、始まったわね」

よくあることなのか、そんな天善の隣を歩く静久は笑顔でを崩さずにいた。

「楽しそうだけど、島民皆が参加するには卓球台が圧倒的に足りないよ。いきなりは無理じゃないかな……」

「そこでパリングルスの卓球台だ。軽くて持ち運びもしやすい。この際、島中に普及させよう。確か、紬が灯台資料館の中に大量のパリングルスの空き容器をストックしている。それを……」

「……あなた。紬のものに手を出すのは私が許さないわよ?」

「は、はい……失言でした……」

そこまで威勢よく話していた天善だったけど、笑顔の静久に一睨みされて、急に委縮してしまった。さすがの静久も、親友に危害が及ぶとなると黙っていないみたいだ。

「……もう。卓球がしたいのなら私がいつでも相手になってあげるから。変な考えはやめてね」

……お酒が入って本音が出やすくなってるんだらうか。直後、静久の口からそんな言葉が漏れていた。うん。なんだかんだでこの二人もラブラブみたいだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「うみさん、見ておくれよ！ 石鹸の泡で作ったおむすびだぜ！」
「すごいー！」

……風呂場の方から、二人のそんな楽しそうな声が聞こえる。
羽未は帰宅と同時に目が覚めて、今は識と一緒に風呂に入っている。

居間に一人残された俺は特にすることもなく、風呂場の方から聞こえてくる声に耳を傾けていた。

あの二人は昨日も一緒に入っていたし、自然な流れだとは思うけど……久しぶりに羽未とお風呂、入りたかったなあ。ゆくゆくは一緒に入ってくれなくなるんだしき。

「……そのうち、お風呂の残り湯に入るのも嫌がられたりして。はは」
言って、なんだかもの悲しくなった。いつかどこかで、そんな光景を見たことあるような気さえしてくる。

「おねーちゃんのかみ、ながーい」

「そうかい？ 島の女性は皆、髪が長いと思うけどね」

「おかーさんとおなじくらいー」

センチメンタルな気分になっていると、そんな会話が聞こえてきた。確かに識は髪が長い気がする。しろはとどっちが長いかな。

「でも、おっぱいはおかーさんのほうが大きいー」

「そ、それは仕方のないことだよ。僕のはまだ、その、成長期さ」

「さわらせてー」

「えっ、ちよつとうみさん、それは駄目だよ!？」

「どーん！」

「ひゃああつ!？」

「……」

……その後の展開を予想した俺は無言でテレビをつけて、そのボリュームを上げたのだった。

「羽依里くん、良いお湯だったぜ！」

「きもちよかったー」

しばらくして、二人が風呂から出てきた。識は昨日と同じように浴衣を着ている。

「……あれ？ 羽依里くん、顔が赤いぜ？」

「な、なんてもないよ。きつと、歓迎会で他の皆の酒気にあてられたんだ」

思わず視線を逸らしながら、そう誤魔化す。あんな会話が聞こえたせいか、識を直視できなかった。

「おとーさん、えにつきー」

その矢先、パジャマ姿の羽未が絵日記帳と色鉛筆を持って膝の上に飛び乗ってきた。小さな重さと同時に、石鹸のいい匂いがした。

「よーし、今日はおとーさんが見てやるぞ。何を書くのかな」

「えーつとねー」

羽未は真っ白なペー지를開いて、まずは鉛筆を握る。うまく誘導して、今日こそおとーさんの絵を描かせてやるぞ。

「いや、羽依里くんはお風呂に入ってきてきなよ。その間、うみさんの宿題は僕が見るからさ」

「えっ？」

識が笑顔を浮かべたまま近くに寄ってきた。その拍子に、まだ乾ききってない赤髪から羽未のものはまた少し違う香りがした。

「早くしないと、しろは先輩が帰ってきて『まだお風呂入ってないの？』って怒られるぜ？」

「おこられるぜーっ？」

右から下から、同じように覗き込まれる。というか羽未、識の口調を真似しないで欲しいんだけど。

「で、でもさ……」

「ほらほら、早くお風呂に入りなよ。しろは先輩が帰ってくる前にさ」
「う、うん……わかった、よ……」

……結局、俺はその二人の勢いに圧されるように風呂場に向かったのだった……。

そして入浴を済ませて戻ってくると、既に絵日記は書き終えられていて、羽未は識と座卓について、折り紙に夢中になっていた。

居間を見渡してみるけど、しろははまだ帰ってきていないみたいだった。俺はそれを確認して、こっそりと絵日記を開く。

『7月28日 天気：はれ

きょうは、おにのおねーちゃんやひーじーじたちと、たけとりをした。そのあとのながしそうめんがたのしかった』

……そんな文章の上に、皆で流しそうめんをする様子や、天を貫か
んばかりに巨大な竹を両手に持ったしろはのじーさんが描かれてい
た。じーさんの持つていた竹は、それだけ羽未にとってインパクトが
あつたに違いない。

それ以外には、ナベとイナリらしい動物も描かれていたけど、また
しても俺は書かれていなかった。

「うう、動物たちや、しろはのじーさんにまで負けた……」
がつくりと肩を落としながら、俺は絵日記帳を閉じる。夏休みは長
いし、まだまだチャンスはあるだろうから、いいけどさ。

俺は一つ息を吐いた後、入浴で火照った身体を冷ますために縁側に
出た。

「おお、いい風だ」

沓脱ぎ石（くつぬぎいし）の上に置いてあつたサンダルに足を乗せ
て、夜風を受ける。加藤家の周囲を覆っているのは竹塀で、ほどよく
風が通る。俺はその涼しい風を感じようと、自然に目を閉じる。

「……ほら、こうすると籠ができるんだ」

「すごい！ おねーちゃん、うにも作れる？」

「う、うにかい？ さすがにそれは作ったことがないよ」

「じゃあ、お花はー？」

「ああ、花なら作れるよ。こうして、こうさ」

「すごい！」

すると、庭からは夏虫の音が、背後からは識と羽未の音が聞こえた。

まるで姉妹のような会話に耳を傾けながら、夏の夜は更けていった。

第五話・完

第六話 7月29日（前編）

「羽依里さん！」

「うみさん！」

「朝ですよ！」

「朝だぜ！」

……朝。元気な二つの声と共に、部屋のふすまが左右同時に開かれる。

一緒に差し込んできた朝日を感じて目を開けると、そこには識と夏海ちゃんが立っていた。

「ああ……おはよう。二人とも早いね」

上半身を起こしながら、そう挨拶する。

「ああ、鬼の朝は早いんだぜ！」

「農家の朝も早いですよ！」

二人は笑顔で寝室に入ってきたと思うと、仲良く羽未を起こしにかかると。

どうやら、数日前に夏海ちゃんだけで起こせなかったから、今日は識も連れてリベンジに来たみたいだ。

「うみさん！ 朝ですよ！」

「早く起きて、ラジオ体操に行こうじゃないか！」

「やー」

「ぶえっ!？」

揺り起こされて顔を上げた羽未だったけど、すぐく眠たそうに呟いて、顔面から枕にダイブした。うん。相変わらず朝は弱いみたいだ。

「うう、二人掛かりでも駄目でした……」

今日は自信があったんだろう。夏海ちゃんがかつくりと肩を落とすしていた。

……仕方ないな。ここはおとーさんの出番か。

「おーい羽未、起きてラジオ体操に行くよー」

「うみゅー」

俺は夏海ちゃんたちと交代して羽未の体を揺するけど、羽未は枕を全力で押さえて、頭をぐりぐり。眠たいんだろうなあ。

「頑張つて起きないと、さっそくスタンプ逃しちゃうぞー?」

「それも、やーあー……」

そう言うと、羽未は頭をもたげながら、ゆっくりと起き上がった。よし。なんとか成功だ。

「それじゃあ羽未さん、顔を洗いに行きましょう!」

「うん……」

まだ眠そうに目をこすりながら、羽未は夏海ちゃんに連れられて洗面所へと消えていった。

「相変わらず、おとーさんは上手だね」

「はは、もう何年もやってるからね」

俺は自分と羽未の布団を畳みながら、そう答える。ちなみにしろははいつも朝が早いので、布団を畳むのは俺の仕事だ。

「……ところでさ。俺もそろそろ着替えたいんだけど」

そして布団を押し入れにしまった後、パジャマの端を摘みながら識に視線を送る。

「ぶえっ……ご、ごめんよ! 玄関で待っているぜ!」

その意図を理解したのか、識は顔を赤くしながら部屋から出ていった。

「どこかかと人の部屋に入ってきたと思つたらこれだもんな。微妙なお年頃だなあ」

俺はそんなことを口にしながら開け放たれたままのふすまを閉めて、ズボンを脱いだ。

「おとーさん、きがえはー?」

……直後、閉めたふすまが勢いよく開かれて羽未が入ってきた。当然、その後ろには夏海ちゃんも一緒だ。

「きゃー!」

……そして、加藤家に俺と夏海ちゃんの声が響いた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……それじゃ、行ってくるよ」

「うん。いってらっしゃい」

エプロンをつけたしろはに見送られながら、俺たちはラジオ体操が行われる神社へと向かう。

ちなみに先の騒動の後、俺は年頃の女の子にあられもない姿を見せたと、時間ギリギリまでしろはに怒られていた。

お詫びに朝ごはんをご馳走するということで、その場は丸く収まったんだけど、ふすまに鍵はかけられないし、あれは事故だと思う。

「えーっと、夏海ちゃん、ごめんね」

「い、いえ。気にしないでください」

神社へと続く道を歩きながら、思わず謝る。夏海ちゃんはそう言うてくれたけど、どことなく目が泳いでる気がする。

「ししゅんきー?」

「?」

一方の羽未は笑顔でそんなことを聞いていた。そんな言葉、どこで覚えたんだろう。

「ところで識、その格好どうしたの?」

そんな中で、識の服装が気になった。今日の識は着物でも制服でもない、変わった服を着ていた。

「へへ、これかい? 夏海先輩から借りたんだ。この紅葉色が気に入ったんだぜ」

「似合ってるよ。その……オーバーオール?」

「羽依里さん、今はサロペットって言うんですよ! ファッションなんです!」

記憶にある服の名前を口にする、夏海ちゃんにそう怒られてしまった。思えば、夏海ちゃんも同じような格好をしていた。確か彼女

の実家は神戸にあるって話だし、しつかり流行を取り入れているのかもしれない。

「ごめんごめん。島に住んでいると流行とか疎くなるしさ」

すねの少し上あたりで揃えられた丈は涼しげで、なにより動きやすそう。鬼ごっこ好きの識だし、機動性を重視したのかもしれない。

……石段を登り、やがて神社に到着した。今日も相変わらず、いつもの皆が集まっていた。

「皆、おはよう」

「おはようございますー！」

「おはよう。パイリ君たち、ちようどいい所に来てくれたわ」

境内の一角に集まっていた皆にあいさつに行くと、静久から唐突にそう言われた。なんだろう。

「今日のお昼、海の家でカレーの試食会を開こうと思うの。良かったら、パイリ君たちも来てくれないかしら」

……そういえば、海の家準備も良い感じに進んでいて、今日くらいから実際に調理できると言っていた気がする。お昼はカレーか。夏っぽくていいよな。

「そういうことなら、お邪魔させてもらうよ。羽未も行くよな？」

「うん！」

そう尋ねると、羽未も元気な声で賛同してくれた。うんうん。カレーが嫌いな子なんていないよね。

「ところで羽依里くん、カレーってなんだい？」

「え？」

俺は一瞬耳を疑った。まさか、識は国民食のカレーを知らないんだろうか。

「よーしお前らー！ 今日も来てるなー！ ラジオ体操を始めるぞー！」

……その時、ラジオ体操大好きさんがやってきた。俺は頭に浮かんだ疑問を打ち明ける暇もなく、ラジオ体操へと身を投じたのだった。

「第4の体操！ 三半規管の鍛錬！ ぐるぐるぐる〜！」

ラジオ体操大好きさんが頭を振り回す。

「ぐるぐるぐる〜！」

俺たちもそれに倣って、頭を振り回す。うおお、久しぶりにやると目が回る。

「うう、気持ち悪いです……」

「世界が回っているよ……！」

夏海ちゃんや識も目が回っているみたいだ。その気持ち、わかるよ……。

「よしゆー、ぼっちり」

そんな中、羽未は平気な顔をしていた。この体操、予習してどうこうなるものじゃない気もするけど。

「よーし！ 今日の体操はここまで——！」

「ありがとうございますましたー——！」

「さあ、スタンプとログボはこっちだぞー」

やがて一連の体操が終わり、スタンプとログボが配られ始めた。

羽未たちが受け取っているのを見ると、どうやら今日のログボは梅ジュースみたいだ。

「安田さんお手製の梅ジュース、おいしいのよー」

そう言うのは蒼。何度かおすそ分けしてもらったことがあるけど、程よい酸味が癖になった記憶がある。クエン酸のおかげで疲労回復効果もあるし、夏にピッタリの飲み物だと思う。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……ラジオ体操を終えて、これまた四人で加藤家に帰宅する。

玄関をくぐると、いつものように良い味噌汁の匂いが鼻腔をくすぐる。

「おかえり。識、準備しておいたよ」

「ああ、しろは先輩、すぐに手伝うぜー!」

帰宅するや否や、識はそう言うしろはと一緒に台所へと消えていった。準備? 何の準備だろう。

それとなく夏海ちゃんに視線を送ってみるけど、よくわからない様子で首を傾げていた。まあ、そのうちわかるかな。

しっかりと手を洗ってから食卓につくと、同時に識が大きなおぼんに大量のおむすびを乗せてやってきた。

「お待たせ! 今日には鮭おむすびだぜ!」

「え、おむすび?」

おぼんをテーブルに置きながら、識は満面の笑みを浮かべていた。「すごい数ですね。これ、全部識さんが作ったんですか?」

「そうだよ。わざわざ私より早く起きて、土鍋でご飯を炊いていたの。ちようど港で大きな鮭をもらったから、具材に使ってもらえてよかった」

夏海ちゃんが目を丸くしていると、味噌汁と卵焼きを運んできたしろはがそう教えてくれた。ところで、鳥白島近海で鮭なんて獲れるんだろうか。東北や北海道の方で、熊が啜えているイメージしかないだけだ。

「さあ、冷めないうちに食べておくれよ!」

着席しながら、識が興奮気味にそう促す。余程自信があるんだろう。

「それじゃ、いただきますかな」

「いただきますーす」

俺たち家族に夏海ちゃんと識を加えた5人。皆で挨拶をして、今日も朝食が始まった。

「んー、おいしいー!」

一番におむすびにかじりついた羽未が、歓喜の声をあげる。

俺も一つ手に取ってみるけど、はみ出るほどに大きな鮭の切り身が丸々入った、豪勢なおむすびだった。コンビニとかで売っているような、鮭フレークじゃない。

「おお……これは美味しい」

一口かじってみると、焼き鮭の程よい塩気が口の中に広がる。この塩気があるから、おむすびそのものには塩を振ってないみたいだ。

「土鍋で炊いているからですかね。お米がおいしいです!」

俺の向かいに座る夏海ちゃんもご満悦みたいで、夢中になっておむすびを食べていた。確かに土鍋で炊いているからか、お米もふんわりしていて甘い。これはいくらでも食べられるやつだ。

「ところで、なんで今日はおむすびなんですか?」

もぐもぐと幸せそうにおむすびを食べながら、夏海ちゃんがそう質問してくる。

「昨日、うみさんが言っていたのさ。僕のおむすびを毎日食べたいからね」

ああ……言われてみれば昨日、羽未がそんなこと言っていた気がする。どうやら、その願いを叶えてくれたみたいだ。

「泊めてもらうお礼も兼ねて、これから毎日、おむすびを作るぜ!」

そして、識はそう高らかに宣言していた。これだけ美味しいおむすびなら、確かに毎日食べたいかもしれない。

「……ところで羽依里、今日の予定は?」

朝食を終えて、真剣な表情で宿題に向かう羽未を見守っていると、しろはがそう聞いてきた。

ちなみに、識と夏海ちゃんは台所で洗い物をしてくれている。

「今日は夕方にはお客さんが来るから、お昼からはその準備かな。午

前中は時間があると思うけど」

俺は宿泊予定表を見ながら、そう説明する。今日も午前中は羽未のために時間を割けそうだ。

「あ、そういえば、お昼なんだけどさ」

その時、ラジオ体操の場で静久に言われたことを思い出し、しろはに話して聞かせた。

「……カレーの、試食会？」

「そう。良かったら、しろはも一緒にどうかなんて」

せっかくなので、そんな感じにしろはも誘ってみた。毎食ご飯を作ってくれてるんだし、たまには楽をさせてあげたい。

「……試食会ってことは、タダなんだよね？」

「そうだと思うけど……どうして？」

しろはがお金のことを気にするなんて珍しい。俺は思わず聞いてみた。

「この島じゃ、チャーハンにお金を出しても、カレーにお金を出す人はいないから」

「え、そうなの？」

「……私も鏡子さんから聞いたことがあります。かつてこの島で、チャーハンとカレーを巡って壮絶な戦いが繰り広げられたとか」

その時、洗い物を終えた夏海ちゃんが神妙な顔で会話に入ってきた。

「あ、夏海ちゃんも知ってるんだね。島の暗黒の歴史を」

「はい。チャーハン派閥として、最低限知っておく知識だと言われました」

派閥？ 暗黒の歴史？ この二人は何の話をしているんだろう。

「でもそれ、昔の話なんだろう？ 今はそんなの誰も気にしてないんじゃない……」

「そんなことないよ。今も毎年8月8日の米の日には、島で大規模なイベントが催されて、優劣を争うんだから」

「あー……言われてみれば、そんなイベントあったような」

「料理ができない羽依里は毎年設営だけで、実際にイベントに参加し

たことないもんね。今年は夏海ちゃんもいるし、羽依里にもチャーハン派閥筆頭として、戦場に立つてもらおうから」

「あ、ああ……」

そう言っつて、しろはは真面目な顔で俺たちを見る。冗談で言っつてるようにも思えなくて、俺たちは黙って頷くしかなかった。

「しゅくだい、おわったー!」

それからしばらくして、夏の友に向かっていた羽未が顔を上げる。

「よしよし。おとーさんが見てあげるぞ」

俺は宿題を受け取って、中身をチェックする。どうやら今日の宿題は身近な生き物について書かれた文章を読んで、その感想文を書くやつみたいだ。開いたページには、チョウやアリ、バッタといった昆虫の生態について、子供にもわかりやすく書かれていた。

「うんうん。しっかり書けていると思うよ」

島に住む羽未にとつて、昆虫たちは身近な存在だし。その生態を知ることが良いことだと思う。

「ん……?」

そんなページの一番最後に『おうちのひとといっしょに、むしをさがしてみましよう』の一文もあった。なるほど。虫取りか……。

「羽未、今日の午前中、虫取りしない?」

「むしとり?」

「そう。この間のリベンジをしようよ」

「うん!」

その流れでそんな提案をすると、羽未は笑顔で了承してくれた。

「じゃあ、今日のイベント、虫取りにするんだね」

「ああ。この間は全く捕まえられなかったからさ」

「リベンジするー!」

言葉の意味が解っているのかいないのか、羽未は両手を突き上げてやる気に満ち溢れていた。

「きょうは、おかーさんもいっしょー」

「え、私も?」

「うん。いつしよにむしとりしたいー」

そして羽未はしろはに思いつき抱きつきながら、そんなことを口にしていった。この前は俺と二人だったけど、今度はおかーさんも一緒にがいいらしい。

「うーん……でも、私がお家を空けるわけにはいかないよ。いつ予約の電話がかかってくるかもしれないし、誰かが残っていないと」

「えー」

直後、しろはは少し困ったような顔をしながらそう口にする。確かに電話番号は必要だろうけど……。

「それじゃ、私が残ります!」

その時、夏海ちゃんが立ちあがって、そう申し出てくれた。

「え、そんなの、悪いよ」

「全然かまわないです! 私と識さんで電話番号しますので、家族で楽しんできてください!」

本人の知らぬ間に識も巻き込まれてる気もするけど、夏海ちゃんはそう言っただけを叩いてくれた。せつかくだし、ここは夏海ちゃんの厚意に甘えることにしよう。

「じゃあ、今日は家族で虫取り大会だな」

「やったー! なつちゃん、ありがとう!」

羽未はしろはに続いて、夏海ちゃんに抱きついていった。これは嬉しくてたまらないんだろうなあ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆さん、気を付けて行ってきてくださいー!」

「吉報を期待しているぜー!」

……それから準備を済ませて、俺たちは夏海ちゃんと識に見送られながら加藤家を出発する。目指すはリベンジの地。神社だ。

今朝も蝉は元気よく空を叩いているし、道すがらに見える家々の庭先ではアサガオが無数の花を咲かせている。今日も夏全開といった感じだ。

「♪♪♪♪♪」

そんな中、麦わら帽子を被り、両の手に虫取り網と虫かごを持った羽未は楽し気に鼻歌を歌っていた。仕事柄、家族そろってのお出かけなんて滅多にないし、羽未はご機嫌だった。

……程なくして神社に到着し、虫取りを始めることにした。

裏手に回ると、蝶やバツタ、蝉といった虫がたくさんいた。

「さあ羽未、頑張れ」

「応援してるからね」

「いちもーだじーんー!」

今日はしろはもいるということもあつてか、羽未は意気揚々と虫取り網を構えて、境内を駆ける。さあ、リベンジの時間だ。

「かんぜんはいぼく……」

……30分ほど頑張っただろうか。

羽未は先日よりも気合いを入れて蝶を狙い、バツタを追いかけ、蝉のいる木に飛びついたけど、一匹も捕まえることはできなかった。

惜しい場面は何度もあつただけだなあ。

「うー」

「羽未ちゃん、少し休憩しよう。冷たい麦茶を飲んだら、また元気が出るよ」

明らかに気落ちしている羽未を、水筒を持ったしろはがなだめる。周囲を見た限り虫はいるのに、何故か捕まえられない。どうなってるんだろう。

「……こうなったら、島のバタフライハンターに教えを乞うしかないな」

「え、そんな人がいるの？」

「ああ。たぶん近くにいだろうから、休憩がてらちよつと行ってみようか」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……というこどで、俺はしろはと羽未を引き連れて、駄菓子屋にやってきた。

「くーださーいなー」

「いらつしやいませ……つて、家族そろってどうしたんです？」

「あれ、藍？」

蒼か堀田ちゃんがいると思って声をかけると、商品棚のところに藍が立っていて、駄菓子の整理をしていた。

「ちよつと蒼に用事があるんだけど……」

「蒼ちゃんは奥にいますよ。そのうち出てくると思いますけど、何か食べて待ってますか？」

「そうだなあ……羽未、どれがいい？ 一つだけ買ってやるぞ」

藍の提案を受け、俺は羽未を連れて商品棚の方へ向かう。5円チョコからフライダーポテト、ビックリングラムといった駄菓子が並んでいて、賑やかだ。

「んーとねー」

そんな駄菓子たちを、羽未は瞳をキラキラさせて見つめていた。

「羽未ちゃん、こっちのお菓子がオススメですよ」

ちよつとそこの藍先生。しれつと高額のブルジョワチョコを勧めないで。確かに、売り上げには貢献できるかもだけどさ。

……ちなみに、しろははアイスクリームストッカーをじつと見つめていた。そういえば、最近しろはがスイカバーを食べているところを見た記憶がない。

元々入荷数も少ないし、買えていないのかな。

「これにするー」

そんなことを考えていると、羽未が駄菓子を選び終わったらしい。その手にはさくらんぼ餅が握られていた。

「おかーさんもたべよー?」

そして、同じ駄菓子をしろはにも手渡していた。せつかくだし、一緒に食べたいみたいだ。

「それじゃ、おかーさんもそれにしようかな」

しろははアイスクリームストッカーから視線を外し、笑顔で駄菓子受け取っていた。うん。さすがに諦めたみたいだ。

「じゃあ、おとーさんはうんまい棒にしようかな」

俺はそう言いながら、うんまい棒を適当に二本掴み、さくらんぼ餅と一緒に会計へ持つて行く。

「はい。ちょうど100万円ですよ」

「ほい。100円」

「……99万9900円足りませんよ」

いつものお約束をして、対応してくれた藍に代金を支払う。それから親子でベンチに座り、駄菓子を食べることにした。

「んー、おいしいー」

羽未は俺としろはの間に座って、もぎゅもぎゅと幸せそうにさくらんぼ餅を食べる。

そんな様子を見ながら、俺も自分のうんまい棒を口に運ぶ。うん。この水分をがつつり持つて行かれる感じが懐かしい。

「おとーさん、ひとくちちよーだい?」

その時、羽未が俺のうんまい棒を見ながらそう言う。

「いいけど、おとーさんのは明太子味だぞ。辛いぞー?」

「……おとなのあじ?」

「ぞ、そうだぞ。羽未に耐えられるかな?」

「……ちよーせん」

そう言うとう目をつむって、はむっと俺のうんまい棒にかじりつい

た。

「おいしいー!」

もぐもぐと口を動かしながら、おいしそうに食べていた。あれ、辛くないのかな。

「……そういえば羽依里さんたち、夏海ちゃんを見ませんでしたか?」

その時、藍が店の中からひよっこりと顔を覗かせた。

「夏海ちゃん? うちで電話番号してくれてるけど」

「え、どういうことですか?」

「いや、実はさ……」

……明らかに驚いた顔をする藍に、俺は朝の顛末を藍に話して聞かせた。

「……ああ、そういうことになったんですね。夏海ちゃん、うまく逃げましたね」

「え、逃げたって?」

どうも事の全容が飲み込めないので、詳しく聞いてみることにした。

「今日の駄菓子屋はメイドデーということで、堀田ちゃんにメイド服を着て接客してもらおう予定になっていたのですが……」

なに? メイドデー? 俺の聞き違いかな。

「残念ながら、堀田ちゃんは急な体調不良でお休みということで……代わりに夏海ちゃんに声をかけていたのですが、そういう事なら仕方ありませんね」

藍はそう言って肩を落としていた。二人は昨日もしろは食堂でメイド服を着ていたけど、まさか駄菓子屋でもそんな企画が持ち上がったなんて。

「まったく。なんでしろはちゃんの所では良くて、私と一緒に嫌なんですか。業腹ですね……あむあむ」

藍は不満そうに酔昆布を啜っていた。たぶん、下手に藍の前でメイド服なんて着たら襲われる危険性があるからじゃないかな。

「そうです。二人の代わりに、しろはちゃんにメイド服を着てもらいまじょうか」

「むぐっ!? げほっほ」

急に矛先を向けられ、しろはが盛大にむせていた。どうやら、飲み込んださくらんぼ餅が変な所に入りかけたらしい。藍、さすがに冗談だよな……?」

「あれ、家族で来るなんて珍しーわねー」

……やがて俺たちが駄菓子を食べ終わるのを見計らったかのように、蒼が戻ってきた。

「おお、待っていたぞ。バタフライハンター蒼」

「え、何その称号。かなり恥ずかしいんだけど」

明らかに引いている蒼に、俺は事情を説明する。今頼れるのは彼女しかない。

「……というわけで、羽未に虫取りを教えてほしいんだ。お願いできないかな」

「いいわよー。他ならぬ羽未ちゃんのためだし、あたしが一肌脱いであげるわ」

「おお、ありがとう。恩に着るよ」

快諾してくれた蒼に俺はお礼を言う。蒼がそう言うのと、なんか本当に脱ぎそうで怖いけど。

「……ちよつとおとーさん、なんか変なこと考えてない?」

「か、考えてない。考えてないよ」

……直後、蒼にジト目で見られた。どうやら顔に出てたみたいで、俺は慌てて訂正する。危ない危ない。

「……それじゃ、空門先生の虫取り教室、はじまりはじまりー!」

蒼は藍を連れだつて羽未の前に立ち、そう宣言してくれた。

「たのしみー」

羽未は拍手をしながら、前に立つ同じ顔の二人を見ていた。

「つて、虫取り教室を駄菓子屋の前でやるのか? どうせなら、早速実

戦形式で教えてくれてもいいんだけど」

「そう慌てないの。まずは座学。網の種類の話ね」

蒼はそう言うと、いくつもの虫取り網を取り出した。

「え、虫取り網ってそんな沢山種類があるのか？」

「そうよー。それで、まずはこの網なんだけど……」

「くーださーいなー」

蒼が説明を始めようとしたその時、紬がやってきた。

「あ、いらっしやーい。紬がこんな時間に来るなんて珍しーわね。

コッペパンでも買いに来たのー？」

「いえ、今日は福神漬けを買いに来ました！」

「へっ、福神漬け？」

予想外の注文だったんだろうか、蒼は聞き返していた。

「そです！ この箱に入るだけください！」

紬はそう言って、小さな段ボール箱を蒼の方へと向ける。

「袋に小分けしたやつならそれなりの数があるけど……何に使うの？」

チャーハンの添え物にしては多いわよね？」

「はい！ 海の家で使います！」

「あー、ということはやっぱり、カレーに使う、と……」

なんだろう。福神漬けの使い道を察した蒼は、どこか歯切れが悪そうだ。

「んー、使うのは構わないけど、うちで買ったってことは内緒にしといてね。あたしは構わないけど、良く思わない人も島には少なからずいるのよ。だから、これは本土で買ったってことで。OK？」

「フェ、Verstanden」

蒼は笑顔なんだけど、どこか怖かった。紬も俺と同じ心境みたいで、思わずドイツ語で返していた。フェアシユタンデン？

「……そ、それでは、お邪魔しましたっ」

段ボール箱いっぱい福神漬けを買った紬は、逃げるようにその場を立ち去った。しろはもそうだったけど、この島の住民のカレーに対

する嫌悪感みたいなのは何なんだろう。カレー、美味しいのにさ。

「ごめんねー。それで、虫取り網の話だっけ」

去っていく紬の後ろ姿を見送った後、蒼は何事もなかったかのように話を戻した。

「虫取り網って言っても色々あって、網の部分がナイロンだったり、木綿だったり、もしくは網目が荒かったり細かったり、竿の部分が竹だったりアルミだったりね。あ、伸縮するタイプもあるわよー」

続いて、饒舌に説明してくれる。すごく詳しい。

「全部うちのおとーさんの私物だけど、格安で譲ってあげるわよー?」

ああ、そう言えば二人の父親は昆虫学者だって言ってたっけ。しかも、蝶専門の。

「……って、勝手に売っちゃっているのか?」

「別にいいと思いますよ。おかーさんの許可は得ていますし、当の本人は今、新種の蝶を求めてネパールに行ってますから」

藍がそう補足する。ネパールってどの辺だっけ。確か、アジアのどっかだった記憶はあるけど。

「このアルミのとか軽いし、羽未ちゃんにおススメよー」

そう言って羽未にアルミ製の網を持たせる。確かに片手で持てているし、見かけの割に軽そうだ。

「これ、すごいー!」

羽未も嬉々としてその網をふるう。傍から見てもスイングスピードが明らかに違っていた。

「へえ、なかなかにすごいな」

「プロ仕様だけど、一度使ってるから今なら半額。おとーさん、どう?」

蒼は笑顔で電卓をたたいて、しろはでなくて俺に見せてきた。

「ほ、ほう……」

恐る恐る電卓を覗き込んだ俺は目を丸くする。中古とは言え、さすが昆虫学者ご用達の虫取り網。駄菓子屋にあるまじき値段だった。

「こ、こういうのは実際に使ってみないと。実戦投入したら、使いつらかった武器ってのも世の中には多々あるし」

「目が泳いでるわよー？ もう、正直に言っちゃいなさいな」
「レ、レンタルでお願いできませんか……？」

……というわけで、虫取り網はレンタルで使わせてもらうことになった。

「りべんじー！」

レンタル料だけで300円とかなりでかいけど、羽未が喜んでいならいいかな。

「それじゃ、次は実地演習よ！ リベンジの地、神社に行きましょう！」
「おー！」

「くーださーいなー！」

そんな羽未を先頭に、店番の藍を残して意気揚々と出発しようとした矢先、何人もの子供たちがやってきた。

「師匠ー！ 久しぶりに鑑定勝負しようぜー！」

「僕、とっておきのお宝を見つけたんだ！」

「オレも！ ばーちゃんが床下に隠してた壺！ お宝のおいがするぜー！」

男の子の一人は自信満々に壺を持っているけど、すごいラツキヨウの匂いがしていた。あれ、中身はラツキヨウなんだろうなあ。

……それにしても鑑定勝負か。懐かしいな。あれ、まだやってるんだ。

「あー、そう、ねー。鑑定勝負ね……」

そんな中、絶妙なタイミングでの来客に蒼は困った顔をしていた。駄菓子屋の店番としては藍がいるけど、子供たちが鑑定勝負をしたのは蒼なのだ。昔から、鑑定士役は蒼でないと務まらない。

でもこのままだと、せつかくの空門先生の虫取り教室が中止になってしまう。

「……そうだ。今日の鑑定勝負、昆虫鑑定大会にしない？」

「昆虫鑑定大会？」

その時、蒼がそんな提案をした。

「そう。制限時間以内に、一番立派な虫を捕まえてきた人が優勝。優勝者には島の駄菓子屋で使える商品券500円分と、第七代目虫キングの称号を与えるわよ!」

「商品券500円分!？」

「虫キングの称号!？」

最初は困惑していた子供たちだけど、優勝賞品と称号を聞いて一気に盛り上がる。商品券はわかるけど、虫キングの称号ってもらって嬉しいのかな。

「……むしキング!」

そんなことを考えながら隣を見ると、羽未も他の子供たちと同じように瞳を輝かせていた。ええ、羽未もその称号欲しいの？

「羽未ちゃん、これは一世一代の大勝負だよ。頑張つてね」

「うん!」

俺が困惑していると、しろはまでが羽未の手を取って、真剣なまなざしでそう告げていた。

「し、しろは……そこまで気合い入れるほどのものなの?」

「当然だよ。虫キングの称号はこの島において、イノキングの称号と並ぶ名誉あるものだし、子供にとっては最高位の称号なの」

思わず質問すると、熱意を込めた口調でそう返された。よくわからないけど、そういうものらしい。

「それじゃ、細かいルールを説明するわよー。皆、集まってる」

……その後、鑑定に出せる昆虫は一人一匹まで、制限時間は一時間といったルールが取り決められて、昆虫鑑定大会が始まった。

参加者の中で一番小さい羽未にはハンデということで、蒼が指南役としてつくことになったし、これは虫取り教室の方も無事開催されることになりそうだ。

一時はどうなることかと思っただけど、蒼の機転に感謝だ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

やがて子供たちは各自で道具を用意した後、こぞって神社へと向かっていった。

「さて、俺たちはどうしようかな……」

当初こそ、リベンジと称して神社に行くつもりだったけど、あれだけの子供たちに先に動かれてしまっただけは、今更神社というわけにもいかない。

「あれだけ一気に動かれたんじゃ、神社ってわけにもいかないわねー。山にでも行く?」

「どうやら俺と同じ考えだったんだろう。いくつもの虫取り網を手にした蒼が、山を指差しながら言う。

「そうだなあ」

俺も山の方へ視線を送る。確かに虫はたくさんいそうだけど、住宅地からは少し離れている。時間制限がある以上、移動時間は極力減らしたいところだけど……。

「……それなら、いい場所があるよ」

その時、しろはが口を開いた。

「え、いい場所ってどこ?」

「ため池。誰も行かない場所だけど、ここからそう遠くないし。水があるから、実は色々な虫がいるんだよ」

「おお、そうなのか」

「おかしさん、ものしりー」

しろはからの思わぬ情報に、俺と羽未は驚嘆の声をあげる。言われてみれば、池の周りに虫がいらないわけがない。

「よーし。それじゃ、ため池に向けて出発!」

「おー!」

羽未と一緒に拳を突き上げて、俺たち四人はため池に向けて歩き出した。

あそこで虫取りをした経験はないけど、こつちにはバタフライハン

ターの蒼だつてついてるんだし。称号と500円分の商品券はもらったようなもんだな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「まおーえんさつこーりゅーはー！ー！」

ため池に到着すると、テンションの上がった羽未がそんな言葉を口にしていた。なんだつけそれ。

「おかーさんもー」

「え、私も？」

「うん！」

そして、しろはにも無邪気な笑顔を向ける。

「そ、それじゃ……れいだーん！」

その瞳に射抜かれて、しろははおずおずと指鉄砲を作り、発射した。しろはのれいだん、久しぶりに見たな。

「おとーさんもー」

「え、俺も？」

続けて羽未は同じように俺を見てくる。駄目だ。あの笑顔で見られたら、全面降伏しかない。

「あっかんこうさつぽー！ー！」

そして俺は二本指をおでこにあてた後、前方に向けて高らかにそう宣言した。よし、決まった。圧巻だ。

「相変わらず仲が良いわねー」

そんな俺たちの背後で、蒼が腕組みをしながら笑っていた。しまった。恥ずかしい所を全て見られた。

……ここで見たことは他言無用だと蒼に念を押してから、気を取り直して虫取り教室を始める。

「蝶を捕まえる時は、蜜を吸ってる時に花ごと網をかけて、すぐその網をひっくり返すの。その時が一番油断してるから。他にも、蝶が好む花の色は……」

虫取り網を手に、蒼が動作を交えながら羽未を指導してくれていた。さすが昆虫学者の娘だ。動きも様になっていた。

蝶の捕まえ方が中心なのが気になったけど、のちのち他の昆虫にも応用できるかもしれないし、基本を教えてくれるだけで十分だった。

「……だいたいこんな感じ。わかったー?」

「はい!」

そして蒼のレクチャーを受けた羽未は、緊張した面持ちで返事をしていた。いつの間にか、背筋も伸びているし。

「せんせーみたいで、きんちよーする」

「緊張?」

気になっていると、羽未がそう言っただけで苦笑いを浮かべていた。

「ああ、やっぱり藍と似てるのかしらねー」

それを聞いた蒼は、ひらひらと手を振りながら笑う。まあ、双子だし。藍先生の授業を受けているような感じになったのかもしれない。

「それじゃ、さっそくやってみましょー」

「うん!」

今一度気合を入れて、羽未は網を構える。神社の時とは装備も変わったし、今度こそ成果を得たい。

「そうだ羽未、おとーさんと勝負しないか?」

やる気に満ち溢れる羽未を見ると、ふとそんなことを思いついた。

「しよーぶ?」

「そう。おとーさんと勝負だよ」

俺は蒼が予備として持っていた網を受け取りながら続ける。こういうのって、他人と競った方が上達が早いって言うしね。

「わかったー。おとーさん、ほえづらかかないでねー!」

「お、おう……」

直後、羽未らしからぬ言葉が飛び出してきた。島の男の子から聞い

たんだらうけど、意味は解っていないと信じたい。

「ふふ、どっちも頑張つてね」

そんな俺たちを、しろはは微笑ましそうに見ている。今日こそ父親の威厳を見せてやるからな。

「それじゃ始めるわよー。よーい、どん！」

……直後、蒼が戦いの始まりを告げる。俺は虫取り網を握りなおし、獲物を探して草藪に視線を巡らせる。

「つかまえたー！」

「なにっ」

俺が獲物を見つけるより早く、羽未は大きなアゲハチョウをゲットしていた。

……早い。さっきまで逃げられまくっていたのに。さすが蒼せんせー。どんな秘術を教えたんだ。

「おかーさん、みて！ ちょうちよ、つかまえた！」

「うん。すごいねー。見たたよー」

「えへへー」

羽未は捕まえた蝶を素早く虫かごに入れて、嬉しそうにしろはに見せに行った。しろははそんな羽未の頭を優しく撫でてあげていた。

「羽依里の負けだね」

「い、いや。こういうのは最後に大きいのを捕まえた方が勝ちだと思うし。まだ勝負は終わってないぞ」

「……大人げない」

しろはから冷たい視線を浴びせられたけど、俺は開き直って蝶を探し始めた。

「完全敗北……」

それから幾度となく蝶を見つけ、何度も網を振るったけど……何故か一匹たりとも捕まえられなかった。

「だ、だめだ。降参だ」

汗だくになった俺は早々に勝負を諦めて、蒼が座っている日陰に座

り込んだ。

「くそー、どうして捕まえられないんだ」

「羽依里、腕を振るのが遅いのよ。後、ちゃんと蝶の行く先を読まなきゃ」

隣の蒼がそうアドバイスをくれるけど、今更だ。この暑い中、もう一度立ち上がる力は今の俺には残されていなかった。

「えものはっけーん！」

「羽未ちゃん、走ったら危ないよっ」

……そんな俺とは裏腹に、羽未は新たな獲物を求めて元気に走り回っていて、しろははそんな羽未の後ろをおろおろしながら追いかけていた。うん。微笑ましい。

「子供が虫取り網持って走り回ってるのを見ると、夏休みって感じがするわねー」

隣に座る蒼も同じ気持ちだったらしく、そんな感想を口にしていった。

「あの二人、ああやって見てると本当の親子みたいねー」

「……本当の親子だけど？」

「……へっ？ あれ、あたし、なに言ってるのかしらねー」

……直後、蒼が変なことを口走っていた。慌てて取り繕っていたけど、暑さにもやられたのか？

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「あいせんせー、ただいまー！」

虫取りを堪能した羽未は、とっておきの蝶一匹を携えて駄菓子屋に戻ってきた。

するとそこに、先の子供たちに加えて、のみきと鷗の姿があった。

「あれ、二人ともどうしたんだ？」

「神社にいたら、やってきた子供たちに捕まっちゃったんだ。虫取

りを手伝ってくれとな」

「同じく……キャプテンって呼ばれたら、断れない……」

二人は各々そう口にして、がっくりとうなだれていた。どちらも暑
い中を子供達と一緒に動き回って、かなり疲れているみたいだ。

「それでは皆さん、捕まえた虫を持って来てください。私と蒼ちゃん
が公平に鑑定をします」

「よし、頼んだぞオオカマキリ！」

「オレのクワガタが優勝だー！」

そして藍に指示されて、子供たちが捕まえた昆虫を提出していく。
結果的に蒼が羽末に助力することになったため、どうやら藍も鑑定
士役として加わることになったらしい。

「どきどき……」

羽末も緊張した面持ちで大きなアゲハチョウが入った虫かごを渡
していた。良い結果が出るといいね。

「……蒼ちゃん、このクワガタ、どう思います？」

「ノコギリクワガタだし、もうちよつとサイズ欲しいわねー」

「こつちのカブトムシとどっこいどっこいですね。後は……」

姉妹は額を突き合わせ、真剣に鑑定をしてくれていた。子供相手と
は思えない熱心さだった。

割って入れる雰囲気でもなかったので、俺は羽末の相手をしろはに
任せつつ、鳴やのみきと話をしていた。

「あのカブトムシは木の上にいたのを、私が撃ち落として捕まえたん
だぞ」

今まさに鑑定をされているカブトムシを見ながら、のみきが得意げ
にそう言っていた。撃ち落としたというくらいだし、水鉄砲を使つた
んだろう。

「さすがのみき、腕は衰えていないな」

「良」よりも遥かに小さい分、狙いをつけるのが大変だったがな。子
供たちの手前、面目を保って良かったよ」

そう言つて満足げな顔をしていた。ところで、なん得的が良一基準なんだろう。聞くだけ野暮かな。

「ねえねえ。羽依里たちもお昼は海の家に行くの?」

その時、鷗がそう聞いてきた。

「ああ、ラジオ体操の時に静久に誘われたよ。二人も行くのか?」

「うん! 夏といえば、やっぱりカレーだよね!」

嬉々としてそう言う。まったく、鷗は食いしん坊だなあ。

「……羽依里、失礼なこと考えてない?」

「考えてないぞ。ほら、そろそろ鑑定結果が発表されそうだ。行こう」

俺は無理矢理話を切ると、蒼たちの元へと向かった。

……厳正な審査の結果、カブトムシを持ってきた男の子が僅差で優勝となった。本土の満天屋デパートの価格で1000円。立派な角を持った、大きなオスだった。

ちなみに羽未のアゲハチョウの鑑定価格は400円で、4位だった。けど本人は残念がつている様子もなく、満足げな顔をしていた。羽未は羽未なりに家族での虫取りを楽しめたみたいだ。良い夏の思い出になったみたいで、良かった良かった。

第六話・完

・第七話 7月29日（後編）

……昆虫鑑定大会が終わった後、ちようどお昼時になったというこ
とで、俺たちは海の家に向かった。

……はて。何か忘れているような。

「いらっしやいませー」

「パイリ君、来てくれたのね」

俺たち家族に鷗、のみき、そして空門姉妹を加えた7人で海の家
やってくる、何故か水着の上にエプロンをつけた紬と静久が出迎
えてくれた。

「やっぱり紬も手伝ってたんだ。今日は灯台資料館はお休み？」

「いえ、資料館はむりよーかいほー中です！」

なるほど、無料開放中ときたか。つまるところ、鍵だけ開けてきた
わけだね。

「おお、お前たちも来てくれたか」

「待ってたぜー」

そんなことを考えていた矢先、遠くのテーブルについていた天善と
良一が手を振って俺たちを呼ぶ。

室内は既にカレーのいい香りが充満していたけど、今日は試食会と
いうこともあって、他にお客さんの姿はなかった。

「好きな席に座っていて。もうカレーは完成しているから、すぐに用
意するわ」

「少々お待ちくださいませー」

俺たちにそう告げると、二人は厨房へと入っていった。完成してい
るということは、後は盛り付けるだけなんだろう。

「おとーさん、すわろー?」

羽未が始めて見る海の家に目を輝かせながら、俺のシャツを引っ張

る。

「ああ、先におかーさんと座っていいぞ。おとーさんは皆の分の水を用意してくるからな」

俺はそう言っつて、入口に設置されている給水機に向かう。運びやすいように近くにお盆も置かれていたので、人数分のお冷をそれに乗せて、皆の元へと運ぶ。

……そのタイミングで、改めて店の中を見渡す。

入口こそ土間のようになっているけど、そこから一段高くなって一面の畳張り。その上に背の低い折り畳み式のテーブルが並べられていて、俺たち全員が座ってもまだまだ余裕がある。これは結構な人数が入れそうだ。

そして壁にはスイカの形をしたビーチボールや浮き輪、時代を感じるポスターなどと一緒にいくつかのメニューが貼られていた。

その中にひとときわ目立つ文字で『鳥白島名物・チキンホワイトカレー』と書かれていた。つまり、静久が復活させようとしているカレーがこれなんだろう。

また、窓には全て簾（すだれ）がかけてあった。その簾が直射日光を遮ってくれているおかげか、冷房器具は扇風機くらいしかないというのに室内は涼しかった。

「皆、お冷持ってきたぞ」

「お、さんきゅー」

「さすが、民宿の亭主は気が利きますね」

「ふっ。藍、褒めても何も出ないぞ」

照れ隠しにそんなことを口にしながらお冷を配り終わると同時、静久と紬がカレーを持ってきてくれた。島の名物カレー、一体どんなのだろう。

「鳥白島名物、チキンホワイトカレー。おまちどおさま」

そんな風に期待していたけど、俺たちの前に置かれたのは至って普通のカレーだった。

「あれ、名前の割に白くないぞ?」

「ええ。使っているのは普通のカレー粉よ」

「ズクズク、チキンって名前がついてるけど、これって鶏肉入ってる?」

「入っていないわ。具材はシーフードよ」

俺と鷗が一番に疑問を投げかける。なんというか、名前と見た目のギャップが凄い。正直な所、鶏肉の入った白いカレーを想像していたのに。

「懐かしーな。これだよこれ」

「ああ、このイカの身。当時はピンポン玉のように思えたものだ」

一方、良一と天善は珍しく興奮していた。このカレー、島民にとっては思い出の味でもあるみたいだし、それが十数年ぶりに復活するとなれば、テンションが上がるのも分かるかもしれない。

「食べた後でいいから、良かったら感想をきかせてほしいの。きちんとおじいさんの味を再現できているか気になるし」

「ああ、お安い御用だ」

「それじゃ、いただきまーす!」

各々挨拶をして、チキンホワイトカレーを口に運ぶ。

……うん。しっかりとスパイスが効いていて、魚介特有の生臭さはない。むしろ、魚介の旨味が感じられて美味しい。

「んー、おいしいー!」

羽末もご満悦のようで、弾けるような笑顔でカレーを食べている。羽末には少し辛いかなとも思えるスパイス加減だけど、大丈夫みたいだ。

「これは敵情視察。敵情視察だし……」

そんな中、羽末の隣に座るしろはだけが浮かない顔をしていて、何か呟きながらカレーを食べていた。敵情視察? どういう意味だろう。

「ふー、食べた食べた。ごちそうさま」

「美味しかったわよー」

「ありがとう。レシピ通りに作ってみたのだけど問題点とかなかったかしらっ?」

「そーねー」

「……シーフードはきちんと下ごしらえできていたと思う。臭みとか全然なかったし」

「民宿で料理を出しているしろはちゃんにそう言ってもらえると嬉しいわ」

さつきは複雑な顔をしていたしろはだったけど、しっかりと味の評価をしていた。俺としても美味しかったし、皆の評価も上々のようだ。

「男の子としては、量はどうだったかしら」

「あー、俺はもうちよつと飯の量が多い方がいいかもしれないっすね」

良一があごに手を当てながら言う。

「そうなる……お米の仕入れ額が……6000円じゃ厳しいいわね……」

静久は近くに置いてあったノートを開き、うんうんと唸っていた。いくつも付箋がついているし、ずいぶんと使い込んでいるみたいだ。

「そうだ皆、忘れずにこれを飲んでいって」

そんなことを考えていると、静久が突然ノートを閉じ、俺たちにパックの牛乳を配ってくれた。

「静久、これは?」

「におい消しよ。カレー臭、気にする人もいるから」

加齢臭……確かに俺も少しは気になるけど、まだ大丈夫だと思いたい。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……その後、女性陣は改めてカレーの味付けについて討論を始め

た。スパイスや隠し味の話が出ていたし、料理のできない俺に口を挟む余地はなく、どことなく居心地の悪さを感じた俺は、パックの牛乳を持ったまま外に出ることにした。

「おとーさん、どこいくのー?」

同じように羽未も暇していたんだろう。外に出る俺を見かけると、すぐに追いかけてきた。

「ちよつと浜辺を歩こうかと思って。羽未も来るか?」

「いくー」

そう言つて自然に俺の手を握ってくる。嬉しいなあ。

……そして羽未と二人、牛乳を片手に浜辺を歩く。

陽射しが一番強い時間帯だけど、浜辺は海風が絶え間なく吹くので、そこまで暑さは感じない。

砂浜の一部には、マテ貝が空けたと思われる穴がいくつもあつた。以前、家族で獲りに来たことがあるけど、あの穴に塩を振りかけると潜んでいるマテ貝が驚いて飛び出してくるんだ。俺としても面白かつたし、また羽未を誘つてマテ貝取りをしてもいいかもしれない。

「あれ、だれかいるー」

そんなことを考えていると、羽未が声をあげる。見ると女の人が一、人、砂の上をうろうろしていた。星形のリュック背負い、ずつと下を見ている。何か探しているのかな。

「君、何か探してるの?」

下を向いたまま、俺の目の前までじわじわと移動してきたので、その声をかけてみる。顔はよく見えないけど見ない風貌だし、観光客だろう。

「……はっ」

……その時、目の前にやってきた少女が顔を上げる。目が合った。

「あ、ヘンな人です」

「なに??」

……直後、とても失礼なことを言われた。

「だって、小さな女の子をつれてますっ。きつと、変態誘拐魔ですっ

「！」
そう言つて騒ぎ立てる。ここが島だからいいけど、町中だったらえらい騒ぎになるところだ。

「おとーさんはへんたいじゃないー！」

羽未がすぐに否定してくれるけど、どつちかかっていうと誘拐魔つて方を否定してほしかった。いや、どつち残されても嫌だけどさ。

「じゃあ、誘拐魔なんですかっ。風子、誘拐されてしまいますかっ!？」

そう絶叫しながら頭を抱える。いちいちリアクションが大袈裟だ。

「俺は変態でも誘拐魔でもない。第一、この子は俺の娘だ。誘拐なんてあらぬ噂を立てるのはやめてくれ」

「……そうでしたか。風子、てつきり島のシティーボーイに声をかけられてしまったのかと思いました」

……いつの間にか誘拐魔の話はどつか行つていた。というか、島のシティーボーイつて既に矛盾しているから。

「それで、風子さんはここで何をしているんだ？」

「ど、どうして風子の名前を知っているのですかっ。やっぱりへんな人です！」

「さつきから自分で名前言つてただらっ！」

「……っ！」

思わず大きな声で突っ込んでしまった。少し怖がつてる気もするし、ここはひとつ、大人の対応をしないと。

「えーっと、怖がらせたならごめん。俺は鷹原羽依里。この島で民宿を経営しているんだ」

「へんな人が経営する、へんなお宿ですかっ」

「健全なお宿だ！」

思わず叫んでしまう。駄目だ。この子相手だと、妙なノリになつてしまう。

「はあ……それで、風子さんはさつきから何を探しているんだ？ 砂の上ばかり見てたし、何か落としたとか？」

理不尽なことこの上ないけど、気を取り直してそう質問をしてみる。何か探してるのなら、手伝いたい。暇だし。

「風子、こう見えて大人の女性なので落とし物なんてしません。風子が探しているのは、ヒトデです！」

探す？ ヒトデを？ 人を変な人呼ばわりしておきながら、この子も十分に変な子だった。

「探してどうするんだ？ 食べるのか？」

「食べないですっ！」

飛びつかんばかりの勢いで両手を上げて否定された。

「それじゃ、ヒトデを捕まえて何するの？」

「こうして、愛でるのです」

風子さんはそう言っただけで、たまたま砂の上に落ちていたヒトデを拾うと、まるで大切なもののように胸に抱く。

……直後、とろけるような表情になった。

「ええー……」

俺と羽未は、そんなポワポワな状態の風子さんをただ見つめていた。どう見ても可愛いとは思えないヒトデで、あそこまで幸せそうな顔になれるもんなんだ。

……それから数分経っても、風子さんは逝ってしまったままだった。最初は興味津々だった羽未も、すっかり飽きて今は浜辺で遊んでいる。

俺も放っておいて羽未と遊びたかったけど、俺の質問が発端だった気もするし、このまま場を離れるのは無責任な気がする。

「おい、そろそろ帰ってこーい」

さすがに身体に触れるのはまずいので、目の前で手を振ってみたり、耳元で大きな声を出したりするけど、反応がない。

……にしても、この幸せそうな顔を見ると、何かしないといけない気がしてくるな……。

そして俺は、手にしていたパック牛乳のストローの先を、風子さんの鼻に……！

「あ、ふうちゃん！ こんなところにいた！」

……その時、背後から女性の声がして、俺は慌ててパック牛乳を背中に隠す。お、俺は何をしようとしていた？

「……はっ」

それと同時に、風子さんも戻ってきたみたいだ。

「あ、お姉ちゃんです！ それではヘンなシティーボーイさん、さようなら！」

俺越しにその姿を見つけたのか、盛大に勘違いした台詞を残して走り去っていった。本当、いろいろな意味で変わった子だった

「おとーきーん！」

風子さんを見送った後、今度は羽末に声をかけられた。どうしたのかな。

「いきだおれー！」

「え!？」

続く言葉に驚いて振り向くと、砂浜の真ん中に識がうつ伏せに倒れていた。どうしてあんなところに。

「お、おい識、どうしたんだ」

俺は急いで駆け寄って、その身体を抱きかかえる。砂の上を這ってきたのか、夏海ちゃんから借りたらしい服は砂まみれていた。

「は、羽依里くんの声がするよ……」

うつすらと目を開けた識は、消え入りそうな声で言う。どうやら氣力を振り絞ってここまでやってきたらしい。

……直後、識の腹の虫が盛大な音をたてた。

「……もしかして識、お腹空いてるのか？」

「み、見ての通りさ……」

きゅ。

腹の虫も共鳴し、今一度大きな音を立てる。昨日もらったおむすびポーチはどうしたんだ。

「識、しっかりしろ」

俺はそんな識をお姫様抱っこして、とりあえず海の家へと向かった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「え、識ちゃんどうしたんです?」

「シキシキ、大丈夫!」

海の家に入った直後、仲間達が集まってくる。俺は識の服の砂を適当に払った後、靴を脱がせてテーブルに着かせる。

「静久、余ってるカレーを使っておむすびを作ってやってくれないか?」

「今日はあくまで試食用だったから、もうほとんど残ってないけど、おむすびの具にできるくらいはあるわ。少し待っていて」

俺の言葉を聞いて、静久は厨房へとすつ飛んでいった。自分で言うておいてなんだけど、わざわざカレーをおむすびにしてもらうってどうなんだろう。

「さあ識、カレーおむすびだぞ。食べる」

数分後、ほのかにカレーの香りが漂うおむすびが用意された。見た目は普通のおむすびだから、カレーは中に入っているんだろう。

「……いただきます!」

目を開けた識はきちんと挨拶をしてから、おむすびを口に運ぶ。

「むぐ……おお、変わった味だけどおいしいぜ!」

識は率直な感想を口にしながら、もぐもぐとカレーおむすびを食べる。具材のカレーがあふれ出すこともないし、良い感じに静久が水分を飛ばしてくれているみたいだ。

「おいしそうに食べてるけど……もしかして識、これでカレー派閥になつたりしないよね」

「わからないわよー。このカレー、美味しいのは確かだしねー」

「ちよつと蒼ちゃん、冗談でもそんな事言っちゃいけませんよ」

……おむすびを食べる識を眺めていると、しろはと空門姉妹がそん

な話をしていた。

「それ、何の話？」

「ほら、チャーハン派閥とカレー派閥の話よー。羽依里はやっぱりチャーハン派閥よね？」

「え？」

「まさか、今更カレー派閥だなんて言わないわよねー？ もしそうだったら島での立場もあるし、あたしはしばらく加藤家には近づかないようにするけど」

「羽依里はチャーハン派閥だし！ 絶対だし！」

しろはが立ち上がって語気を強めていた。思い出してみれば、学生時代の俺はしろはの作るチャーハンに惹かれたわけだし。チャーハンが俺としろはを、ゆくゆくこの島との縁を紡いでくれたようなものだ。なら、俺はチャーハン派閥ということになるんだろう。

「ウミさんもチャーハン大好きですし、ナツミさんも当然チャーハン派閥ですね！」

「後は、鵬と識がどちら側についてくれるかが問題」

……よくわからないけど、そんな話になっていくらしい。

現状、チャーハン派が蒼、藍、しろは、羽依里、羽未、夏海ちゃん、のみき。中立が鵬と識、良一で、カレー派が静久、紬、天善……って感じか。ぶつちやけ好みの問題だし、無理強いするものでもないと思うけど。

「これは、カレー派閥筆頭の静久としては厳しいな」

「そうね。だから基本、海の家のカレーは観光客相手の商売になるの。港の方には屋台が出るけど、お昼時に営業するお店はこちら側にはないから」

未だ論議をかわす皆を見ながら、静久が苦笑しながらそう言っていた。頭の切れる静久のことだし、全て計算の上なのかもしれない。「いやー、食べた食べた。静久先輩、このおむすびはなかなか美味しかったよ！」

そんな折、我関せずと言った様子でおむすびを食べていた識が食事を終え、器を静久の元へと返しに来た。ほっぺにご飯粒ついてるし、

夢中で食べたみたいだ。

「……ところで、識はどうしてここに？」

お弁当がついていることをやんわりと指摘しつつ、そんな質問を試みる。

「ああ、お昼になったから、呼びに来たんだよ」

「え、そうなのか？」

「お昼は海の家に行くと言っていたじゃないか。だから、ここに来れば会えると思ったんだ」

識はほっぺについた米粒を指で取りながら、当然のように言っていた。まあ、辿り着く直前で力尽きたみたいだったけど。

「そういうえば、電話番号をしている夏海先輩から、カレーを『ていくあうと』してきて欲しいって言われたんだけど『ていくあうと』ってなんだい？」

……屈託なく笑う識を見て、ようやく夏海ちゃん存在を思い出した。虫取りの関係で彼女に電話番号を頼んでいたの、すっかり忘れていた。のんきにカレー食べてる場合じゃない。

「静久、カレーをテイクアウトで！」

俺はそう口にしながらか立ち上がる。お昼はどうに過ぎてしまっているし、これはすぐに帰らないと。

「ごめんなさい。カレーはさっきのおむすびで使ったのが最後だったの」

……そうだった。鍋に少ししか残ってないのを、かき集めておむすびの具にしてくれたんだった。

「じゃあ……しろは、一緒に来てくれ。できるだけ急いで！」

「う、うんー！」

しろはも血相を変えて立ち上がった。派閥談義で盛り上がっていたとはいえ、しろはもすっかり失念していたみたいだ。

「羽未ちゃんはあたしたちが送ったげるから、安心しなさい」

「ああ、頼んだ！」

蒼のそんな言葉を背に受けながら、俺としろはは急ぎ加藤家へと戻ったのだった。

……そして加藤家の玄関を開けると、夏海ちゃんが目の前の廊下にうつ伏せに倒れていた。

「うわ、夏海ちゃん、しつかり」

「うう、チャーハン……」

思わず駆け寄って抱き起すと、そんなうわごとを言っていた。これは間違いなく、空腹で倒れたみたいだ。

「それじゃ、チャーハン作るね。羽依里、夏海ちゃんを居間に運んであげて」

「ああ、わかった」

俺は了承して、夏海ちゃんを抱きかかえる。それにしても、一日に二回も空腹で倒れた女の子を運ぶなんて。そうそうあることじゃないと思う。

「……空腹で倒れるまで我慢しなくても、何か作って食べてくれればよかったのに」

「いえ……家主さんの許可もなしに、勝手にチャーハンを作るわけにはいかなかったので……」

思わず聞いてみると、息も絶え絶えにそんな言葉が返ってきた。

朝の会話からして夏海ちゃんはチャーハン派なんだろうけど、なんとなくだけど、識にカレーのテイクアウトをお願いした経緯が見えてきた。

勝手に料理もできず、苦肉の策として識にカレーのテイクアウトをお願いしたんだろう。これは悪いことしちゃったなあ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それでは、お邪魔しましたー!」

「ごっちこそ、電話番号ありがとうね」

「いえ、久しぶりにしろはさんのチャーハンが食べられて、嬉しかったです！」

……その後、しろははお詫びの意味を込めて、夏海ちゃんにチャーハンを作ってあげた。

夏海ちゃんはしろはのチャーハンが大好きだし、完全復活してくれたみたいで良かった良かった。

……ちなみに、半日近く電話番号をしてもらったけど、特に予約の電話はかかってこなかったらしい。

一度電話が鳴って意気込んで取ったら「来々軒ですか？ ラーメンセット一つ！」と言われたらしい。まさかの間違い電話だった。

……夏海ちゃんを見送ってしばらくすると、羽未と識が蒼に連れられて海の家から帰ってきた。

そんな二人を出迎えた後、俺としろはは民宿の準備に取り掛かった。

「羽依里、そういえば今日のお客さん、どんな人たちなのかな。食べ物好き嫌いとか聞いてる？」

「いや、昨日の電話では、特には……」

しろはにそう質問されて、俺は昨日の通話内容を思い出してみる。特に何も言っていなかったと思うけど……。

「……そうだ。そのうちの1人はヒトデが好きそうだったから、ヒトデ料理とかどう？」

「え、ヒトデ食べるの？」

信じられないようなものを見る目で俺を見てきた。いや、俺に聞かないでほしいんだけど。

「ヒトデ……しろはなら料理にできそうな気がするんだけどさ」

「熊本の方だと食べることもあるらしいけど、基本は食べないよ」

「無理なら、ヒトデの形をしたチャーハンとかでもいいからさ。お願いできないかな」

「うーん、頑張ってみるけど……」

しろはは冷蔵庫を開けながら、うんうんと唸っていた。どんな料理ができるのかわからないけど、しろは、頼んだぞ。

「それじゃ識、俺たちは部屋の掃除をしよう」

「ああ、まかせておくれよー」

居間で暇そうにしていた識に声をかけると、意気揚々とほうきとちりとりを持ってくる。

「それもいいけど、たまには掃除機を使った方が早く綺麗になるぞ。ほら」

そんな識に、俺は倉庫から引つ張り出しておいた掃除機を手渡す。これは随分前に良一からもらった奴なんだけど、まだまだ現役だ。この部屋もたまには隅々まで綺麗にしてやらないと。

「それで羽依里くん、これはどうやって使うんだい？」

「えっ？」

識は掃除機の吸い込み口を覗き込みながら微妙な顔をしていた。型が古すぎるし、直感で操作できないのかな。

「こつちのコードをコンセントにつないで、本体の電源ボタンを押すだけだよ。古くて音もすごいけど、性能は問題ないはずさ」

俺は一度手本を示してから、識に掃除機を返す。少し間を置いて、識は俺を真似るようにたどたどしく掃除機をかけ始めた。

「お、おお……これは精密な操舵技術が必要だね」

まるで鷗みたいなおもちゃを言いながら、掃除機を床に滑らせる。でも、型が古くて操作が分からないって感じじゃない。掃除機そのものを初めて触るような、そんな感じだった。

「いつてきまーすー」

室内の掃除を識に任せて、俺が庭で作業をしていると、玄関から羽未の元気な声がした。

視線だけを玄関に送ってみると、羽未と一緒に金髪がちらりと見えた。どうやら午後からは紬が羽未と遊んでくれるらしい。俺たちは仕事柄、午後から忙しくなることが多いし。今日みたいな日は本当に

「もう少しスピードを落とすから、落ち着いてくれよ」

「ど、努力はするよ……」

それからは多少静かになったけど、識はしっかりと俺の腰に抱きついていたままだった。

時速20Kmも出てないし、落ちたりすることは無いと思うけど。

「なるほど。うみさんは虫取り大会で大きな蝶を捕まえたんだね」

「ああ、優勝こそできなかったけど、羽未も楽しそうにしていたぞ。識は虫取り、やったことないのか？」

「ないね。虫は苦勞して取っても、食べられないじゃないか。山菜なら見つけても逃げないしね」

「大事なのはそこなの……」

10分も走ると、識もバイクに慣れてきたのか、饒舌に話し始める。だけど、いつもより飛ばすことはしない。港までは時間かかりそうだけど、後ろに識が乗っているんだし、安全運転するに越したことはない。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……その後、商店で無事に買い出しを終え、足りない食材や調味料を手を帰宅する。それから識と二人でしろはを手伝っていると、羽未も帰ってきた。

「こんにちはー」

……やがて17時を回った頃、再び玄関から声がした。どうやら今日のお客さんがやってきたみたいだ。

「お待ちしております。民宿加藤家へようこそ」

「おまちしておりましたー！」

料理を担当しているしろはと識を台所に残し、俺と羽未でお客さんを出迎える。

「あらら、可愛らしい店員さんですねっ」

「こちら、娘の羽未です。芳野公子様他、三名様でよろしいですか？」

「はい。今日はよろしくお願いしますっ」

そこには二人の女性と一人の男性が立っていた。その中で栗色の髪をした女性がペこりとお辞儀をしてくれ、俺たちもつられてお辞儀を返す。

「ほら、祐くんたちも挨拶しないと」

「ああ、世話になる」

「よろしくお願いしますっ！」

その女性……公子さんに促されて、背後にいた男女も挨拶をしてくれた。

青い髪をした男性の方はすごくかっこいい人で、男の俺でも思わず二度見してしまった。その手に持ったスイカがすごく気になるけど。

「……あれ？」

そして……もう一人の女性の顔に俺は見覚えがあった。

「あ、へんな人です」

俺と目が合った直後に相手も気付いたようで、開口一番にそう言うてきた。どう見ても、お昼に浜辺でヒトデを探していたあの子だった。

「さ、最悪ですっ！　へんな人の経営する、へんなお宿に来てしまいましたっ！」

「ちよつと、ふうちゃんっ！　す、すみません。妹が大変失礼なことを」

「い、いえ……」

唐突に騒ぎ出した妹さんの代わりに、公子さんが謝っていた。隣の男性は止める気配はないし、俺もどう反応していいかわからず、視線を泳がせながらその場に立ち尽くす。羽未に至っては怖いのか、じわりじわりと後退している気までする。

「……はっ」

その矢先、騒いでいた妹さんの視線が羽未を捕えた。

「そこに、かわいい子がいますっ」

そしてどたどたと玄関を駆けあがると、そのままの勢いで羽未を抱きしめた。むぎゆつといい音がした。

「あなたはこの家の子ですかっ」

「う、うん」

「風子は風子といいます。お友達になりましょう」

「え、えー……」

羽未は大抵物怖じしない性格だけど、今回ばかりは少し……いや、かなり引いていた。どうしよう。助け舟を出すべきなんだろうけど……。

「……え。これ、どういう状況？」

……その時、玄関での騒ぎに気がついたのか、しろはがエプロン姿のまま台所からやってきた。

そして見知らぬ少女に抱きしめられている羽未を見て、困惑した表情を浮かべる。しろは、その気持ちわかるぞ。

「……それではお客様。さっそくお部屋にご案内いたします。こちらへどうぞ」

……少し考えて、俺は何も見なかったことにした。敢えて恭しく頭を下げると、そのまま家の奥に向けて歩き出す。

「は、はいっ。それでは、お邪魔しますねっ」

そんな俺の意図を組んでくれたのか、公子さんと男性は努めて俺の後に続いてくれた。

……その後、客室へと移動した俺たちは、民宿の設備の説明を交えながら色々な話をした。

それによると、このかっこいい男性……祐介さんは公子さんと夫婦で、俺が浜辺で出会った風子さんは公子さんの妹になるそうだ。

「なるほど……つまり、ふうちゃんと鷹原さんは一度会っていたんで

すね」

「そうなんです。その時になんか、誤解されたみたいで」

「ふうちゃん、思い込みが激しい時があるし……ヒトデが絡むと、なおさらね」

公子さんが風子さんの方を見ながら、納得顔をしていた。その様子からして、いつもこんな感じなんだろう。

「この島に来ればヒトデに会えると聞いていたので、それはもう死ぬ気で探していましたっ」

誰から聞いたのかわからないけど、そう言っつて胸を張る。俺が遭遇したのはまさにその現場だったわけだ。

そんな風子さんの服装は、星の飾りがついた帽子と、うっすらと星の模様が入った上着、背中には星型のリュック。ヒトデ好きを前面に押し出していた。

「……ところで、このスイカを貰ってくれないか」

その時、祐介さんが困った顔をしながら俺たちの前にスイカを置いた。

「えーっと、ずっと気になっていたんですけど、そのスイカはどうしたんです?」

「昼間、島を観光していたら、道を歩いていたおじいさんに貰ったんです。たくさん採れたから……と」

俺の疑問には公子さんが答えてくれた。たくさん採れたからって、見ず知らずの観光客にあげるのもどうなんだろう。まあ、スイカが嫌いな人はいないだろうけどさ。

「島の皆さん、観光客の私たちに色々とくださったんですよ。さすがに持って帰れないので、皆さんで召し上がってくださいっ」

そう言うと、公子さんは自分の鞆からたくさんのミカンやピーマンを取り出す。あれも全部、島の誰かからもらったんだろうか。

「……見ず知らずの俺達にさえ、無償で施してくれる。本当、愛にあふれた島だな」

畳の上に並べられた品々を見ながら、祐介さんがしみじみと言っていた。まさか、お客さんから貰い物するなんて思わなかった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「おまたせしましたー」

そして夕食時。俺たちは家族総出で完成した料理を運ぶ。

島の食材を使ったお馴染みの料理もあるけど、メインはしろはが気合を入れて作ってくれたヒトデチャーハンだ。ヒトデの形に盛りつけられているだけで、味はいつものしろはのチャーハンだから、きつと気に入ってもらえるはずだ。

後はそれっぽい形のコロツケとか、星形のお麩を浮かべたお吸い物とか用意してみた。気に入ってもらえるといいけど。

「美味しそうですねっ」

「はい！ 食べるのはもったいないですが、きつそくいただきますっ！」

風子さんは持っていたインスタントカメラで料理の写真を何枚か撮ると、きちんと手を合わせてからヒトデ型のチャーハンを口に運んだ。

「んんー！ー！ これはお姉ちゃんのチャーハンよりおいしいです！」

風子さんはヒトデチャーハンを頬張りながら、心底嬉しそうな顔をする。一か八かだったけど、うまくいったみたいだ。喜んでもらえて良かった。

「この島はチャーハンが名物なのか？」

「そうです」

いつもは人見知りするはずのしろはが、はつきりと答えていた。いやいや、別に名物ってわけじゃないから。

「チャーハンも美味しいけど、それはしろは先輩の料理が特別なだけさ。この島の名物はやっぱり山菜と魚だぜ？」

そんな折、物怖じしない識が笑顔でそう言う。

「なら、これも島で水揚げされた魚なのか？」

「はい。今朝揚がったばかりのチヌです。こちらの青ミズの和え物も、島で獲れたものを使っています」

風子さんがヒトデ風料理に舌鼓を打つ一方で、祐介さん達は刺身や小鉢を楽しんでくれていた。

チヌは良一が、青ミズは天善がそれぞれ持ってきてくれたやつだ。こっちも、喜んで盛られているようで何よりだ。

……それじゃあ配膳も終わったし、俺たちは失礼しようかな。

「美味しいな。さすが岡崎が勧める宿だけある」

そんなことを考えていた矢先、祐介さんがそんなことを口にする。

「え？ 岡崎さんを知っているんですか？」

岡崎さんというのは、俺が学生時代にこの島で知り合った人だ。普段は本土で電気工の仕事をしているらしい。

出会った時にはすでに結婚されていて、お子さんもいたんだけど、今も定期的に島を訪れてくれる。その度、人生の先輩として色々な相談に乗ってもらっているんだ。

気が付けば、すっかり家族ぐるみの付き合いをさせてもらっている気がする。汐ちゃん、そろそろ中学生だっけ。

「実を言うと、俺は岡崎と同じ職場でな。一応、入社当時は指導する立場だった」

「あ、もしかして愛でスパナを回す男……」
「……何？」

その言葉を聞いて、祐介さんの表情が明らかにひきつった。以前酒の席で岡崎さんから聞いた話をそのまま口に出したのだけど、これは言うてはいけない事だったんだろうか。

「……………いや、岡崎がそう思うのも無理はないか。俺はかつて、残りの人生は全て愛する人に捧げると誓った。つまり、俺は愛という永久機関を持って、スパナという武器を振るっているわけだ」

祐介さんは箸を置いて、目を隠すようなポーズをしながらそう続ける。音楽には疎いんだけど、まるでラブソングの歌詞のような、歯の浮くような台詞だった。

「しかし……岡崎から話は聞いていたが、料理も予想以上に手が込んでいるし、接客態度も申し分ない。まだ若いのに立派だな」

「え？ あ、ありがとうございます」

そこからの思いがけない言葉に、一瞬素になってしまった。まさか褒められるなんて。

「謙遜せず、誇っていいと思う。これも愛が為せる業か」

「は？..」

それに続いた言葉に、俺としろはは思わず声をハモらせる。待つて。どうしてそういうことになるの。

「だってそうだろう。二人の愛で、宿泊客に思い出という名の……形のない贈り物をするわけだ。その思い出は、この島を、この宿を訪れた全ての人の心にいつまでも残り続けると……俺は信じている」

「は、はあ……」

……この祐介さん、顔もかっこいいんだけど、言葉も一つ一つがかっこいい。それに言い方は悪いけど、浸っている。

「祐くんがああなってしまうのはいつものことなので、気にしないでくださいねっ」

煮魚の骨を丁寧に取り除きながら、公子さんがあつけらかんと言う。なんとというか、すごくキャラの濃い人たちだ。

「そ、それでは失礼します。どうぞ、ごゆっくり」

この期を逃す手はないと、俺は一礼してからしろはの手を取り、客室を後にした。

愛という言葉を連呼されて、しろはは今にも倒れそうなくらい赤面していたし。ここは逃げさせてもらおうことにした。

「おかーさん、かおまっかー」

「本当だぜ。今にも煙が出そうだ」

急ぎ足で客室を出て、自分たちの部屋へと向かう最中、羽未と識がしろはを見ながら、無邪気にそう言っていた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……そしてその日の夜。

食事と入浴を済ませて、まったりと家族の時間を過ごしていると、時計の針はいつしか22時近くになっていた。

さつきまで羽未と一緒に折り紙をしていた識も、欠伸を一つかみ殺した後、寢床がある蔵へと戻っていった。

「ふぁ……」

その識を見送った直後、俺も大きな欠伸が出してしまった。机で書き物をしてきているしろはに悪いと思い、慌てて口をふさぐけど、出てしまったものは戻らない。

「そろそろいい時間だし、羽未ちゃんと一緒に寝ていいよ。私ももう少しで終るから」

少しだけ机から顔を上げながら、そう言ってくれた。さすがに申し訳なく思うけど、睡魔には勝てそうもない。

「そうだなあ……それじゃあ羽未、そろそろ寝ようか」

羽未に声をかけながら押入れを開けて、布団を敷く。その間にも、また欠伸が出てしまった。

「風子、参上です！」

……その時、寢室のふすまが開け放たれて、風子さんが踊り込んできました。

「「え？」」

俺としろはは完全に虚を突かれて固まってしまった。その間にも、風子さんはずんずんと部屋の中へ歩みを進める。

「羽未ちゃん、今日は風子と一緒に寝ましょう！」

そして羽未の手を取り、そう言い放つ。

「待て待て。いつの間にかそんな約束をしたんだ」

「そんなルームサービスがあると書いていましたっ」

「悪いけど、この宿にルームサービスはないから」

「というわけで羽未ちゃん、行きましよう」

「人の話を聞けっ！」

ついお客さんだと言うことを忘れ、大きな声が出てしまった。なんというか、本当に不思議な子だ。

「それでは、一緒に寝るのは諦めます。その代わりに、少しの間風子と一緒に遊びましょう！」

風子さんは羽未の手を握りつつ、反対の手にトランプを持っていった。無数のヒトデの柄の入ったトランプだ。あんなの、どこで売ってるんだらう。

「羽未ちゃん、風子と一緒に遊びましょう！」

「うーん、じゃあ、ちよつとだけ……」

懇願する風子さんに根負けし、ついに羽未も首を縦に振った。というか、この子はどうしてここまでして羽未と遊びたいんだらう。

「ありがとうございますっ。それでは行きましょう！」

「わあー……」

そして返事を聞くが早いか、がっしと羽未を抱きかかえて、あつという間に客室へと戻っていった。なんて速さだ。

「……羽未、連れて行かれちゃったけど、良かったのか？」

少しして我に返り、しろはにそんなことを聞いてみる。連れていったのは風子さんなんだけど、時間が時間だ。同室の二人に迷惑がかかったりしないだらうか。

「うーん……少しくらいならいいんじゃないかな。こういう出会いも必要だと思っし」

せつかく民宿をやっているのだから、泊まりに来てくれた島外の人とは、羽未も積極的に交流する。これもしろはの教育方針だ。

「それではお披露目します！　これが風子の必殺技！ヒトデイズドです！」

「おおー」

ちようどその時、客室の方から二人の楽しそうな声が聞こえた。

「……今回ばかりは、羽未に悪影響あるかもしれないぞ。急にヒトデ好きになったらどうする？」

「さ、さすがにそれは……ないと思いたいけど……」

俺が冗談半分にそう言うと、しろははどこか不安そうに襖の先へと

視線を送る。

「今日のお客さんとの出会いも、巡り巡って羽未ちゃんのためになる……と、良いな……」

そして自分に言い聞かせるようにそう言って、机の方へ視線を戻した。

苦笑いを浮かべながらその様子を眺めた後、俺は近くに開かれたままになっていた羽未の絵日記帳に目を通す。

『7月29日 天気：はれ

きょうは、むしとりのりべんじをした。あおせんせーにおそわつたら、おおつきなちようをつかまえられた。ばたふらいますたーすごい！

……そんな文章の上に、大きな蝶を捕まえた羽未と、その羽未に拍手を送っている蒼の姿が描かれていた。

「はは、今日は蒼の印象が強すぎたなあ」

結局、俺は虫を一匹も捕まえられなかったし、今日は潔く負けを認めよう。

「ほら羽依里、また見てる」

微笑ましい気持ちになっていると、しろはの尖った声が飛んできた。

「いや、バタフライマスター蒼の活躍をさ……ふああ」

しろはの方を向きながら絵日記帳を閉じると、一層大きな欠伸が出た。どうやら、限界みたいだ。

「布団も敷いたんだし、先に寝ていいよ」

「羽未もないし、久しぶりに膝枕とかしてくれたりぐっすり眠れるかも」

「し、しないから！ ほら、ちゃんと布団で寝て！」

そう言いながらすり寄ってみたけど、しろはは顔を赤くしただけで、膝枕はしてくれなかった。

「残念だなあ……それじゃ、おやすみ」

「うん。また明日ね」

しろはに挨拶をしてから布団に潜り込むと、さすがに疲れていたのか、俺の意識はすぐにまどろみの中へと沈んでいった。

第七話・完

第八話 7月30日

「羽依里くん！ うみさん！ 朝だぜ！」

……朝。鳥のさえずりと共に、今日も識の元気な声が民宿加藤家に響き渡る。

「ああ……識、おはよう」

上半身を起こしながら朝の挨拶をする。右腕に重さを感じて見てみると、羽未が俺の腕を枕にして眠っていた。記憶はないけど、俺が寝た後にしろはが客室から連れて戻ったんだろう。

「ほら羽未、もう朝だぞー」

「うみゅー……」

自分の腕を軽く揺すりながら、羽未に声をかける。不機嫌そうに眉間にしわを寄せるだけで、起きる気配はない。

「……うみさん、本当に朝に弱いんだね」

「そうなんだよ。昨日も夜遅くまでお客さんの部屋で遊んでたみたいでさ……おーい」

苦笑する識に返事をしながら、今度は羽未の肩を揺する。そうすること、ようやく目覚めてくれた。

「うー、ヒトデがいつびき、ヒトデがにひき……」

……否、まだ寝ぼけているみたいだ。昨日風子さんと遊んだ影響か、意味不明なことを呟いている。

「ほらほら、しっかり起きて。顔を洗って、髪も梳かなきゃ」

「うんー。おにのおねーちゃん、いこー」

眠そうに目を擦りながら起き上がり、識と一緒に洗面所に向かう羽未を見送ってから、俺は布団を畳み始めた。

「いつてきまーすー！」

「いつてらっしやい。三人とも、今日も頑張っつてね」

「うん！」

エプロン姿のしろはに見送られ、俺たち三人はラジオ体操へと向かう。

今日も蝉は朝からはぎやーぎやーと空を叩いているし、雲一つない空からは負けじと太陽の光が皆さんさんと降り注ぐ。これぞ夏、といった感じだった。

「おはよー。今日も早いわねー」

ちりりん。と自転車のベルが聞こえ、振り返るとそこには空門姉妹の母親……空門碧（みどり）さんの姿があった。姉妹を合わせたような顔立ちで、相変わらず若々しい。

「おはようございます。碧さんこそ早いですね。今日も本土でパートですか？」

「そーなの。月末近いから、もう大忙し。帰りはまた最終便になりそう」

「大変ですね。頑張ってください」

「ありがとー。三人もラジオ体操、頑張つてねー」

ちりん。ともう一度ベルを鳴らしながら俺達を追い抜くと、颯爽と港の方へ去っていった。あの人は本土でパートしてるんだけど、いつもこんな時間に島を出てるんだな。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「皆、おはよう」

「おはよー！」

「おはようだぜ！」

石段を登って神社に到着すると、そこには沢山の子供たちに加え、紬と静久、蒼や夏海ちゃんの姿があった。

「……あれ、今日はなんか人が少ない気がするな」

「藍は朝から職員会議なんだって。準備があるとかで、朝早く飛び出

してったわ」

境内を見渡しながら率直な感想を口にすると、蒼が教えてくれた。時々忘れそうになるけど、藍って学校の先生だったな。

「鷗さんもサマーキャンプの話し合いがあるとかで、のみきさんと一緒に朝から役所に行くそうです」

「ああ、そうなんだ」

堀田ちゃんと木陰でお喋りをしていた夏海ちゃんが寄ってきて、同じく教えてくれる。この感じだと、良一や天善も仕事かなあ。しようがないことだけど。

「家の前で会った時、鷗さん、カンヅメはいやだよー。とか言いながら、のみきさんに引っ張っていかれてました。朝ごはん、缶詰なんですかね?」

「おいおい」

口元に指を当てた夏海ちゃんがそう首を傾げる中、堀田ちゃんが鋭くツツコミを入れていた。夏海ちゃん、その缶詰とは微妙に意味が違うと思うけど。

「さあ皆、今日も来てるなー! ラジオ体操を始めるぞー!」

……そんな話をしていた矢先、ラジオ体操大好きさんがやってきた。今日もラジオ体操が始まる。

「第二の体操! 横隔膜の振動だ! うるあああああー!」

「うるあああああー!」

ラジオ体操大好きさんの指示に合わせて、皆で大きな声を出して横隔膜を動かす。

「ぶえええええー!」

「むぎゅー!」

「おっぱー!」

「チャーハー!」

大きな声で横隔膜を動かささえすれば発する内容に決まりはないので、それぞれが好きな言葉を叫んでいた。中には子供たちの前で

言つちやいけない言葉もある気もするけど。

「うう……羽依里くん、これは本当に運動になつていいのかい？」

「ラジオ体操大好きさんを信じてやれば、全て運動になるんだ。頑張れ」

「ほらそこ！ 私語は慎め！ ラジオ体操舐めんな！」

「す、すみません！」

「ぶえ……あの人はラジオ体操の鬼だね……」

「続いて、第三の体操！ 一秒間！ 真剣な目！」

「星屑ロンリネンス……」

……その後も俺たちは、相変わらずラジオ使わないラジオ体操に精を出したのだった。

「今日のラジオ体操はここまで！ さあ、スタンプとログボはこつちだぞー」

全身に不思議な疲労感が表れ始めたころ、ようやくラジオ体操が終わり、羽未や識、夏海ちゃんがスタンプとログボを受け取る。今日のログボはまるで木片のような謎の物体だった。

「え、なにそれ？」

笑顔で俺の方へ戻ってきた三人が手にするものを指差しながら、俺は思わず聞いていた。

「何を言っているんだい。これは鯉節じゃないか」

その問いには、識がすぐに答えてくれた。言われてみれば、小さいけど鯉節だ。削る前の状態だけだ。

「これを一人一本あげるなんて、相変わらず島のログボは太っ腹だなあ」

「おいしそうー」

「はい！ これで朝から鯉節チャーハンが作れますよ！」

夏海ちゃんは本当に嬉しそうにログボの鯉節を掲げていた。さすが、チャーハンの子だ。

「そーいえば、明日は羽依里がログボ当番の日だったわねー。頑張っ

て用意しなさいよー?」

「え?」

……そんな夏海ちゃんを微笑ましく見ていたら、蒼から衝撃的な事実が告げられた。

「俺の番なの? 初耳なんだけど」

「あれ? のみきから当番表、届いてない?」

「あー……」

……言われてみれば昨日の夕方、玄関扉に書類が挟まっていた気がする。民宿の準備でバタバタしていて、靴箱の上に置きっぱなしだ。月末近いし、水道代の請求だと思ってた。

「ごめん。たぶん届いてるけど、中を見てなかったよ」

「念のために聞いて良かったわー。皆楽しみにしてるから、ちゃんと用意してあげなさいよー?」

「わかってる。今日は午後から時間あるし、探してみるよ」

「もし良い品物が見つからなかったら、駄菓子屋に来なさい。安くしとくわよー?」

「そ、それは最後の手段つてことにしておくよ……」

どこか余裕のある蒼にそう言葉を返して、俺は識や羽未を連れだつて神社を後にしたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「ただいまー!」

元気な羽未を先頭に加藤家に帰宅すると、味噌汁のいい匂いが鼻をつく。

「おかえりなさい……って、何持ってるの?」

出迎えてくれたしろはも、羽未と識が持つ物体を不思議そうに見ていた。

「へへ、これは鯉節だぜ!」

「きょうの、ログボー！」

「ああ……今日のログボ担当は良一だった気がするけど、鰹節にしたんだ」

羽未から受け取った塊をしげしげと眺めながら、しろはは納得顔だった。良一のことだから新鮮な魚をログボにするのかと思ったんだけど、違ったみたいだ。

「それでしろは先輩、さっそくこの鰹節をおむすびの具にしたいんだ！ 削り箱を貸しておくれよ！」

「いいよ。削り箱……確か、向こうの棚にしまっておいたはずだけど」
そう言いながら台所へ向かうしろはと識を見送って、俺と羽未は手を洗いに洗面所へと向かった。

……その後、一足先にお客さん用の朝ごはんを用意して客室へと提供した。

ちなみにその献立は、識が作ったおかかおむすびと、みそ汁、野菜の浅漬けに目玉焼きという簡単なものだったけど、風子さんを意識してか、目玉焼きはヒトデの形に焼いてあった。こんな形の型があったんだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……そして俺たちも朝ごはんを済ませた頃、「朝食、おいしかったですつ。ごちそうさまでしたつ」と、公子さんたちが食器を片付けに来てくれ、一行はそのまま加藤家を出発することになった。

俺たち家族もそれを見送るため、玄関へと移動する。

「……それでは風子、帰ってしまいます」

「それは構わないが、その前に羽未を離してやってくれないか？」

「ふうちゃん、くるしい」

玄関先で名残惜しそうにする風子さんは、羽未をがっしりと捕まえていた。

「ほらほらふうちゃん、いい加減離してあげないと。羽未ちゃん、困ってるよ?」

その様子を見ていた公子さんがたまらず声をかける。本当だ。このまま羽未を持って帰られたらたまったもんじゃない。

「んー、名残惜しいですが、ここでお別れですっ」

姉に咎められて、風子さんはようやく羽未を解放する。仲良くしてくれるのは嬉しいんだけど、この溺愛っぷりはどうしたことだろう。

「そうです。うみちゃん、これ、あげますっ」

そしてどこに持っていたのか、風子さんは木彫りのヒトデを羽未に手渡していた。随分大きな彫刻だけど、手作りなんだろうか。

「ありがとー」

「これを風子だと思って、毎日抱いて寝てくださいいっ」

「えー」

……無意識だろうけど、あからさまに嫌な顔をした。羽未もあんな表情できるんだ。

「さ、さすがに硬くて一緒には眠りにくそうだから、居間に飾っておくことにしようね」

「うんー」

その様子を見て、しろはがすかさずフォローしていた。居間に置くのは良いんだけど、気がついたら勝手に増えてそうで、なんか怖い。

「ヒトデの島はヒトデだけじゃなく、可愛い女の子もいましたっ。また、うみちゃんに会いに来ますっ」

もう一度しっかりと羽未を抱きしめてから、風子さんは一足早く表へ飛びだしていった。

「……最後までふうちゃんがご迷惑をかけしてすみません。なにぶん、変わった子なので」

「いえいえ。きつと羽未にとっても良い夏休みの思い出になったはずですよ」

「そう言ってもらえると嬉しいです。お世話になりました」

公子さんはそう言って俺たちに頭を下げ、風子さんを追いかけていった。

「……世話になったな」

「いえ、道中お気をつけて」

「ああ。俺も街に戻ったら、この愛溢れる宿について、職場の皆に話そう」

「ぞ、そうですか。ありがとうございます」

一人残った芳野さんと言葉を交わすと、そう言いながら顔を覆う。昨日の様子からして、変に湾曲して伝わらないことを祈るばかりだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……お客さんを見送った後、俺は識と手分けして客室の片づけをしていた。

「羽依里くん、このタオルはどこに持っていけばいいんだい？」

「ああ、そのこのシーツと一緒に洗濯カゴに放り込んでおいてくれたらいいよ。その後、畳の上を掃いてくれるか？」

「了解したぜ！」

シーツとタオルをひよひよいと持ち上げると、そのままパタパタと脱衣所の方へと走っていった。少し前まで働きたくないとか言っていたのに、根は真面目で働き者の、良い子じゃないか。

ゴミ箱に入っていたゴミを回収しながら、俺はそんなことを思っていた。

「……そうだ。布団も干しておかないと」

綺麗に畳まれていた布団を一枚ずつ庭へ持ち出し、物干しざおに引っ掛ける。今日もいい天気だし、布団はまたほかほかになりそうだ。

「おかーさん、さんすうおわったー」

「うんうん。よくできたねー。次はなにしようか」

「んー、なつのももするー」

……庭に出ていると、広く開け放たれた居間の方からそんな会話が聞こえてきた。どうやら、しろはが羽未の勉強を見てくれているらしい。

今のところお客さんの予定も入っていないし、今日はできるだけ羽未のために時間を使ってあげようかな。ログボの件もあるけどさ。

「羽未、今日はどこか行きたいところはある？」

……というわけで、羽未の宿題が終わったタイミングでそう声をかける。

「んー、だがしやさん！」

口元に手を当てて少し考えるしぐさをしてから、そう答える。うんうん。駄菓子屋なら、お安い御用だ。

「いいよ。それじゃ、しつかりと帽子を被って。今日も暑いからね」

「うん！ おかーさん！ ぼうしー！」

ぱあつと笑顔の花を咲かせた後、ダッシュで帽子を探しに行った。あの様子からして、何か欲しいものでもあるのかな。

「いってきまーすー！」

「うん。いってらっしやい」

手早く身支度を終えた羽未に急かされながら、駄菓子屋へ向けて出発する。しろははそんな俺たちを笑顔で見送ってくれる。

ちなみに出かけ際、識にも声をかけようとしたけど、その姿を見つけれなかった。掃除の後、蔵にでも籠ってるのかな。

……まあ、俺たちの行き先はしろはが知っているし、何か用事があつたらすぐに追いかけて来るだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「くーださーいなー」

「あ、いらつしやいませー」

羽未と一緒に駄菓子屋のガラス戸を開けると、そこには堀田ちゃんがいた。

「よう、羽依里、羽未ちゃん。おはよう」

「おはよー!」

そしてその傍らに、立ったまま缶コーヒーを飲んでいる良一の姿があった。

「良一も来てたのか」

「朝の仕事が終わったからな。船の上で軽く朝飯を食ってからの、コーヒータイムだ」

手にした缶コーヒーの底をくるくると回しながらニカッと笑う。なんとというか、満ち足りた男の顔をしていた。

「それ、おいしいのー?」

「うまいぞ。羽未ちゃんも飲むか?」

その笑顔のまま、羽未に缶コーヒーを差し出そうとする良一を慌てて制止する。

「ストップ。良一、お前の持つてるそれ、ブラックコーヒーだろ。さすがに羽未には早いぞ」

「冗談だ。羽未ちゃん、これは苦いから、飲むのはもうちよつと大人になつてからな」

「えー」

あ、そこで残念がるんだ。大人の味に興味を持つには、まだ早いと思うけど。

「その代わり、俺が好きな駄菓子を一つ買ってやるぜ」
「やったー!」

続く良一の言葉に羽未が歓喜の声をあげていた。どうした良一、今日は随分気前が良いじゃないか。

「良一、いいのか?」

「構わないぜ。それに、今日はでかい魚が何匹も獲れたからな。懐はあつたかいんだ」

良一はそう言いながら、羽未を連れて商品棚の方に行ってしまった。一人残された俺はやることもなく、商品棚の整理をしていた堀田ちゃんに声をかけてみることにした。

「ところで、今日は蒼くないんだ?」

「蒼さんは夏海さんと奥の部屋にいますよ。鬼姫プランクやってます」

「え、鬼姫プランク?」

「あれ、鷹原さん知らないんですか? 島民なら誰もが知ってる、あの鬼姫プランクですよ」

意外そうな顔をされたけど、分からない。初耳だ。

「良一も知ってるのか?」

「知ってるぞ。この島じゃ、男は四天王スクワット、女は鬼姫プランクってのが定番だからな。子供でも知ってる」

「じゃあ、羽未も知ってるの?」

「うんー。がっこーでならったー」

両手に駄菓子を持ちながら羽未が答える。ええ、学校で習うの?

「蒼たちが奥でやってるんだよね? ちよつと見て来てもいい?」

「構わないと思いますけど……鷹原さんも物好きですねえ」

そう言って苦笑されたけど、どんなのか気になるんだもん。

好奇心に負けた俺は、静かに店の奥へと歩みを進め、ふすまに手をかける。その時、少しだけ嫌な予感がした。

「……実は鬼姫プランクはもう終わってて、汗かいた二人が着替えてたりしないよな?」

「……おいおい。そんなラッキースケベ狙ってるの?」

「いや、狙ってないけど」

思わず口を突いて出た言葉に、堀田ちゃんが冷静にツツコミを入れていた。基本礼儀正しい子なんだけど、時々出てくるこのキャラはなんなんだろう。

「えつと、一度声掛けてから開けたらいいんじゃないですか?」

場の空気を感じ取ったのか、堀田ちゃんはそう取り繕うと、奥の倉庫へと消えていった。足りない駄菓子でも補充しに行ったのかな。

「えーっと、ふたりとも、入っていい?」

「いい、いいわよー」

「いいですよー……」

堀田ちゃんに言われた通り、一度声をかけてみる。なんか苦しそうな声が返ってきたけど、大丈夫かな。

静かにふすまを開けると、そこでは畳の上に両肘とつま先をついて、汗だくになりながら姿勢を維持している二人の姿があった。

「え、これが鬼姫プランク? どう見ても普通のプランクだけ……」

「は、話しかけないで……あぐっ」

「も、もうダメです……わぷっ」

俺が話しかけたことで集中の糸が切れてしまったのか、二人はほぼ同時に体勢を崩し、畳に突っ伏してしまった。見た感じ、すごいトレーニングになってるみたいだけど。

「お二人とも、おつかれさまです」

それからしばらくして、壁を背にして休んでいた二人の元へ堀田ちゃんが冷たいタオルを持ってきてくれた。

「ほっちゃん、ありがとー」

「冷たくて気持ちいいわねー」

「蒼、さっきの鬼姫プランク……だっけ? 最近流行ってるのか?」

タオルを受け取る蒼に、俺はそう聞いてみた。風を通すために開け放たれたふすまの向こうには、羽未と良一の姿も見える。

「これ、昔からあるわよ。それこそ、四天王スクワットの女性版みたいなものだしねー」

首元の汗を拭いながら充実した顔で言うけど、俺は本当に知らない。

「これを極めれば、伝説の鬼姫と同じく立派なスタイルが手に入ると話よー。ね、夏海ちゃん」

「はい！ 目指せ、鬼姫スタイルです！」

「え、鬼姫？」

さつきから気になっていたけど、由来になっている鬼姫って誰だろう。

「あたしも詳しくは知らないけど、こんなきついトレーニングに名前を残して行くくらいだから、きつとナイスボディーの持ち主だったんじゃないかしら」

「いや、俺が知りたいのはそう言うことじゃなくて……」

「……昔、島民を災いから守ってその命を散らした鬼の姫様のことだよ」

……その時、良一がそう教えてくれた。なるほど。そんな謂れがある人物がこの島にいたのか。

「……って、良一は鬼姫の謂れも知ってるのか」

「まーな。この島じゃ有名な話だしよ。むしろ、羽依里が知らねーことに驚いた」

「そうよねー。羽未ちゃんも鬼姫の話は知ってるわよね？」

「うん！」

さつき、羽未は学校で習ったと言っていたし。蒼と一緒にやってる辺り、夏海ちゃんも知ってるっぽい。

どうやら、知らなかったのは本当に俺だけらしい。もう島に住んで長いのに、こんなこともあるんだな。

「ところで羽依里、今日はログボ買いに来たの？」

そんなことを考えていると、壁を背にしていた蒼が立ち上がり、背伸びをしながら言った。

「いや、違うよ。駄菓子屋には羽未が行きたがっていたからさ」

……というかログボ買うって何。なかなかのパワーワードなんだけど。

「品質保証で安心お手軽。駄菓子屋のログボを是非ご検討ください」

「ウインクしながら言われても使わないからな。絶対自力で用意してやる」

「ま、せいぜい頑張んなさいよー」

そう言葉を返すと、蒼は表情を崩しながらひらひらと手を振る。一応、応援してくれているみたいだ。

「そうだ羽未、駄菓子屋の次はバイクで島を巡らない？」

良一に買ってもらったステイックゼリーを真剣な表情で食べる羽未へ、俺はそう声をかける。あわよくば島を巡るうちに、良いログボが見つかるかもしれない。佐藤さんや高橋さんに会った時、野菜を分けてもらえたりさ。

「まあ待て。ログボ探しの前に、少し遊んでいかないか？」

「え、遊ぶって何で？」

「……これだ」

俺が不思議に思つて良一を見ると、彼は飲み終わったらしい缶コーヒーの空き缶をこれ見よがしに見せてきた。空き缶を使った遊び。まさか。

「……缶ケリか」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……それから15分後。駄菓子屋の前には見慣れた仲間たちが集まっていた。

わざわざ島内放送を使って呼び出されたメンバーの中には、紬や鷗、識、のみきに加えてしろはの姿もあった。

「……どうして私まで呼び出されるの」

「まーまー、親子で参加するのもいいじゃない」

「そうだぞ。それに、羽未ちゃんがおかーさんと一緒に遊びたいと言ったんだ。これは羽未ちゃんのためのイベントだから、その願いを叶えるのは当然だ」

「そ、そうなんだ。なら、いいけど……」

良一から事の顛末を知らされたしろはは微妙な顔をしていたけど、

準備を進める中で本当に羽未がそれを希望したんだ。羽未の願いなら仕方ない。

「というか、のみきや鷗はこんな所に来てていいのか？ サマーキャンプの話し合いで、缶詰になってたんだろ？」

「全然構わない。討論も煮詰まっていたところだしな。私と鷗に召集がかかった時点で一旦お開きにした」

「ちよつと他の用事もあるから、続きは15時からだねえ。鷗だけに、ようやく羽を伸ばせるよー」

なんかうまいことを言いながら、鷗はぐーつと突きあげるように羽……じゃない、腕を伸ばす。役所での話し合いとか、想像しただけで肩が凝りそうだ。

「……それで、蒼と堀田ちゃん、夏海ちゃんも缶詰りに参加するみたいだけど、駄菓子屋の店番は？」

「無人販売で大丈夫でしょー。なんだかんだで皆、店の周りにいるわけだし」

あつげらかんと言うけど、本当に大丈夫なのかな。イナリでも呼んできた方が良くもしいれない。

「駄菓子屋もそうですけど、しろはさん、民宿の電話番号は大丈夫なんですか？ なんなら、また私が行きますけど」

「あ、それなら大丈夫。一応、鏡子さんに頼んでおいたから。今度はちゃんとお昼ごはんにカップうどんも用意してきたし」

「なら、いいですけど……」

俺と同じように、夏海ちゃんは民宿の電話番号の心配をしてくれていた。昨日の一件もあるから、今日はしろはも抜かりないみたいだ。

「それにしても、缶詰りとか久しぶりだねー」

「はい！ ずっと前、シズクと二人でやって以来です！」

「ええ、ツムツムとズクズク、二人で缶詰りやったの？ それまたハードだねえ……」

駄菓子屋前の道路に置かれた空き缶を囲みながら、他の皆がそんな話をしていた。缶詰り、確かに懐かしい。何年振りだろう。

「ところで羽依里くん、さつきから言っている『カンケリ』とはどんな

遊びなんだい？」

……その時、識がおずおずと聞いてきた。

「識は知らないのか。缶ケリっていうのは、かくれんぼと鬼ごっこを合わせたような遊びなんだ。まずはじゃんけんで鬼を決めて、他の誰かが缶を蹴る。鬼はその蹴られた缶を拾って元の場所に戻ってくるんだけど、鬼以外の皆はそれまでに隠れてしまってるんだ」

「なるほど。そこまでは普通のかくれんぼだね」

「缶ケリの神髄はここからだぞ。それから鬼は隠れている人を探すんだけど、隠れている相手は鬼に見つかった瞬間、鬼との競争が始まるんだ」

「え、競争するのかい!？」

「ああ。鬼は相手より早く缶の元へ戻り、その名前を呼んで『ポコペン』と宣言すれば、相手を捕まえることができるんだ」

「その『ぽこペン』ってなんだい？」

「よくわからないけど、昔からそれを言うルールなんだ」

「魔封じの呪文のようなものだね。了解したよ」

「それで、鬼に捕まった人は缶の周りに集まっているんだ」

「わかりやすいね。それで、全員捕まえれば終了なのかい？」

「そうだけど、もし隠れている人が鬼より早く缶のところへ行き、それを蹴ったら、それまで捕まっていた人も逃げていいんだ。リセットだよ」

「なるほど。それをさせないように、鬼は細心の注意を払うわけだ。面白そうじゃないか」

識もルールは理解してくれたようで、うんうんと頷いていた。自称鬼だし、あの足の速さだ。もし識が鬼になったら強敵になりそうだ。

……それから全員でじゃんけんをすると、まるで導かれるように識が鬼になった。

「さあ羽依里くん、思いつき蹴っておくれよ！」

識は鬼になったというのに、めちやくちや嬉しそうだった。普段以

上にギラギラと瞳を輝かせている。

「それじゃ、蹴るぞー」

俺は言われるがまま、思い切り缶を蹴った。渾身の力で蹴り飛ばされた缶は快音を響かせながら。住宅地の向こう側へとすっ飛んでいく。

「あー、ごめん、飛ばし過ぎたかも」

「全然かまわないぜ！ あれを拾ってくればいいわけだね！ それじゃ、その間に隠れておいておくれよ！」

識はそう言うと、意気揚々と缶を探しに行った。その姿が見えなくなったのを確認して、俺たちも隠れられそうな場所を探す。

「さて、どこに隠れようかな……」

皆で取り決めた範囲は駄菓子屋周辺。羽未はしろはと一緒に隠れるみたいで、俺は少し考えた後、駄菓子屋の脇に隠れることにした。

元は細い路地だったであろうここには、今は駄菓子が入っていたと思われる段ボール箱や発泡スチロールの箱が押し込められ、ごちゃごちゃしていた。ここに潜めば、そう簡単には見つからないと思う。

さらに俺は念を入れて、目の前にあつた段ボール箱を頭から被ってカモフラージュする。この手の段ボールには持ち運ぶ際に手を入れる穴があるんだけど、そこがちょうどのぞき穴のようになっていて、視界も良好だ。

「さーて、どこに隠れたんだい」

……やがて、缶を手にした識が戻ってきた。皆も息を潜めているみたいで、周囲にはセミの鳴き声しか聞こえない。

「うつきよおおおー！ー！」

そして元の場所に缶を置くと、ためらうことなく猛スピードで走り出した。

隠れる場所は駄菓子屋の周辺のみだし、考えられる場所をしらみつぶしに探す作戦なのかもしれない。

「へへ、良一先輩、見つけたぜー！」

「うおお、マジかよっ！」

……そんな矢先、駄菓子屋の裏に隠れていたらしい良一がさっそく

見つけた。

叫び声をあげた後、良一も全力で缶の所まで走っていったけど、識の方が速かった。あの良一がこうもあっさり捕まるなんて。

「鳴先輩見つけ！ ポコペン！」

「ひーん」

「紬先輩見つけ！ ポコペン！」

「むぎゅー！？」

「のみき先輩見つけ！ ポコペン！」

「くつ、しまった……」

それから識はその実力をいかんなく発揮し、立て続けに三人を捕まえていた。開始5分としないうちに、残るは俺としろは、羽未、蒼と夏海ちゃん、堀田ちゃんの6人になってしまった。

「こつちの方から羽依里くんの匂いがあるぜ……！」

識の実力に驚愕していると、当の本人が意味不明なことを口にしながら俺の隠れ場所へとやってきた。これはまずい。

「……夏海さん、行きましよう！」

「皆さん、今助けますよ！」

一度駄菓子屋の裏手に回ろうか、それとも勝負するか……なんて考えていた最中、缶を挟んで道の反対側……診療所の塀の陰に隠れていたらしい堀田ちゃんと夏海ちゃんが二人同時に飛び出してきた。

「そ、そんな所に隠れていたのかい!？」

俺の目の前まで来ていた識は一気に踵を返すと、ものすごい速さで缶の方へと走っていった。本当にあの速さ、どこから来るんだろう。

「夏海先輩、堀田先輩見つけ！ ポコペン！」

先の二人も全力で缶へ滑り込んだけど、識の脚力がそれに勝り、あと少しというところで捕まってしまった。アイデアは良かったけど、夏海ちゃんたちの救出作戦は失敗に終わった。

残るは俺としろは、羽未の家族三人と蒼だけ。どうせなら家族の連係プレイで皆を救出したいところだけど、羽未としろははどこに隠れているんだろう。足の速い識と真っ向勝負しても、残りのメンバーじゃ到底勝てそうもないし……。

「うーん……さすが識、足速いわねー……」

「あ、蒼?！」

「しー。声出したら、居場所がバレちゃうでしょ」

戦略を練っていたところ、いつの間にか隣に蒼がいた。俺と同じように段ボールの間に隠れて息をひそめていたのか、今の今まで気づかなかった。

「そろそろ人も減ってきたし、奥の手を使った方が良さそうね」

「え、奥の手?」

「羽依里が今やつてるみたいに段ボール箱を頭に被って、缶に向かって突撃するの。鬼は当然気づくけど、顔が分からないから名前を言えない。その隙を突いて缶を倒すのよ」

かぼつ。と自分の顔に段ボールをかぶせながら、蒼が得意げに言う。見た目はかなりシユールだ。

「鬼が名前を間違えたら、もう一度最初からになるルールだったよな。それを踏まえれば確かに良い作戦だけど、かなりズルいような……」

「う、うるさいわね……勝てば官軍よ!」

「……そこに誰かいるのかい?」

「げ」

……さすがに声が聞こえてしまったんだろう。識が俺たちに気づいて、ゆつくりとこつちに歩いてくる。

……これは蒼の作戦通り、段ボールを被って飛びだすしかないか。

「……うみちゃん、走るよ!」

「おーっ!」

……そう考えて、俺も段ボールを被り直した矢先。駄菓子屋の店内から羽未としろはが飛び出してきた。あの二人、まさか店の中に隠れていたのか。

「うみさんとしろは先輩見つけたぜ! ポコペン!」

「うみやー!」

そして見事に轟沈していた。しろはと羽未は俺たちと隠れている場所も近かったし、どうやら俺と蒼に向けられた識の言葉を自分たちへのものだと勘違いして飛び出したらしい。いくらなんでも、二人で

識に真っ向勝負を挑むのは分が悪すぎる。まさに最強の鬼だ。

「……今ねー」

羽未としろはを捕えて、識が一瞬油断したタイミングを見計らって蒼が飛び出して行く。段ボールを被って全力ダッシュしていく様は異様だけど、あれなら顔が分からない。例え識が缶の近くに居ようと関係ないはずだ。

「……よし、俺も行くぞー」

そして俺も蒼と同じように段ボール箱を被って飛び出す。同時攻撃なら、勝率も上がるはずだ！

「は、羽依里くんと蒼先輩見つけたぜ！ ポコペン！」

……識は一瞬だけ動揺したけど、迷うことなく俺と蒼の名前を口にして缶を踏んだ。

……あれっ？

「くっそー。どうして俺だとわかったんだ。顔はしっかり隠していたはずなのに」

見事に全滅した俺たちは、次の鬼を決めるために缶の周りに集まっていた。

「そりゃ、あたしと羽依里しか残ってないんだから、一緒に出て行ったら分かるに決まってるでしょー！」

「あそっか」

この段ボール作戦、よく考えたら人がたくさん残っていることが前提の作戦だった。蒼が呆れるのも納得だ。

「はあ……それじゃ、識を除いた皆でじゃんけんして、新しい鬼を決めましよー」

「よーし。じゃんけんけん……」

「……お前たち、こんな所に集まって何をしている」

まだ時間があるということ、もうひと勝負……というところで、少し離れた場所から知った声があった。

「あ、ひーjeejeeー！」

声のした方を見てみると、しろはのじーさんが歩いてきた。こんな所にいるなんて珍しい。

「皆で羽未と遊んでまして。缶ケリをしていたんです」

「そうか。まあ、あまり騒がないようにな」

「はい。もちろんです」

じーさんは俺から答えを聞くと、興味が無くなったのか俺たちの横を通り過ぎようとする。

「ねー、ひーじーもいっしょにあそぼー?」

そのすれ違い際、羽未がその太い腕を取ってそう懇願していた。

「む……? わ、わしも一緒にか……?」

「うんー。いっしょがいいー」

ひ孫からの突然のお願いに、じーさんは驚いた顔をしていた。あそこまで動揺したじーさん、久しぶりに見たかもしれない。

「だ、駄目だよ羽未ちゃん。おじーちゃんは忙しいんだよ」

「うー……」

その様子を見てしろはが仲裁に入るけど、羽未は今にも泣きそうな顔でじーさんを見る。

「……わ、わかった。少しだけだぞ」

さすがのじーさんも、羽未にあんな表情をされると断れず、まさかの参戦となった。

改めてじーさんにルール説明をした後、鬼を決めるじゃんけんをする。その結果、次は俺が鬼になってしまった。

「ひーじー、おもいっきりけつてー」

「よーし、思いつき蹴っちゃうぞお」

最初こそあまり乗り気でなかったじーさんだけど、すぐにデレデレモードになった。やっぱり、ひ孫は強しだ。よもや、しろはのじーさんと一緒に缶ケリをする日が来るなんて。

「……ふんー」

まるで金属バットで殴ったかのような音がして、空き缶がかつとん

でいった。たぶん、俺の倍くらい飛んだ気がする。

「それじゃ羽依里、頑張つて探してこいよー」

「見つけるまで、三分くらいかかるかもねー」

「くっそお。缶ケリマスター羽依里を舐めるなよー!」

余裕綽々と歩いていく皆を見送りながらそんなことを口走ってしまい、すごく恥ずかしくなった。誰も聞いていないことを祈りつつ、俺は缶の飛んでいった方向へとひた走った。

やっとのことで缶を探し出し、元の場所へ戻ってくる。周囲を見渡しても、当然誰の姿もない。

「よーし、まずは……」

俺は少し考えて、一番にしろはを捕まえることにした。どうせなら、他の皆をバシバシ捕まえる所を一番近くで見てもらいたいし。

そう考えた上で、俺が発する言葉は一言だけだ。しろはのことは、島の誰よりも知り尽くしている自信がある。

「……そういえば、あんかけチャーハンって美味しいよな」

「あ、あんなのチャーハンに対する冒瀆だし! 別々に食べれば……はっ」

「しろは見つけ。ポコペン」

「あああああ」

俺が呟いた直後、近くの茂みの中に隠れていたしろはが飛び出してきた。まずはしろはゲットだ。

「羽依里、たばかったな……」

しろはは頭を抱えながら缶の近くにやってきた。悪いけど、そこで俺の雄姿を見ていてくれよ。

……その後、店の中に隠れていた蒼と堀田ちゃんの駄菓子屋コンビを捕まえて、電柱の陰に隠れていた良一もデッドヒートの末に捕まえた。今のところ順調だ。

ちよつとリスクはあるけど、今度は診療所の方も見てみよう。あそこの壁の裏にも、人が隠れられるスペースがあったし。

「……目標補足！ カモメ号、発進！」

「それー！ー！」

そう考えながら缶のそばを離れた瞬間、のみきと紬に押されて路地から鷗の乗ったスーツケースが飛び出て、缶へと向かっていく。

「なんのー！」

鷗のことだし、スーツケースを使ったこの手の作戦は見越していた。

元々缶の方へ意識を向けていたこともあり、俺はそこから最低限の動きで缶の元へと戻る。

「のみき、紬、鷗見つけ！ ポコペン！」

「うう、無念……」

「見つかってしまいました……」

「くっ。完全に隙を突いたと思ったんだが……」

三人まとめて仕留めると、スーツケースを引いた鷗を筆頭にとぼとぼと缶の元へとやってきた。ふふ、そう簡単にやられてなるものか。缶は死守するぞ。

だいぶ人数が減った中、足の速い識と、とにかく迫力のあるじーさんを警戒しつつ、またじわじわと缶から離れる。

そういえば、羽未や夏海ちゃんの姿もない。てつきり、羽未はしろは、夏海ちゃんは堀田ちゃんと一緒に隠れてると思ったんだけど。どこにいるんだろう。

7、8メートルほど離れた辺りで、ちらりと缶の方を見る。今の所、誰かが飛び出してくるような気配はない。捕まえた皆が談笑しているくらいだ。

……よーし。二人ともいいよー！

……しかしその時、鷗の口がそう動いた気がした。

思わず凝視すると、鷗の横に置かれたスーツケースがゆっくりと開

いて、中から夏海ちゃんと羽未が出てきた。ちよつと。嘘だろ。

「羽未さん、やっちゃってくださいー！」

「えーいー！」

慌てて戻ろうとしたけど、さすがに距離が離れすぎていた。かつこーんと綺麗な音がして、缶は蹴り倒された。

「し、しまったあぁーいー！」

まさか、鷗の突撃作戦そのものが囿で、本命はスーツケースの中に隠れていたなんて。ギリシア神話のトロイアの木馬みたいなことしないでほしい。

……缶が倒されたことで、また最初からやり直しになったのだけど、一度切れてしまった集中は戻らず。その後はグダグダだった。

「段ボール作戦、行くわよー！」

「うわーいー！ 鬼の側になってみると、段ボールすごく怖い——！」

数人捕まえたところで、段ボール箱を頭に被った三人が一斉にこっちに向かってきた。完全に虚を突かれた俺は名前を言う暇すらなく、缶は蹴り倒されてしまった。

「いくぞ。三谷のせがれ！ 羽未の救出作戦だ！」

「は、はいいー！」

……再びリスタートした直後、幸先よく羽未を捕まえたけど、それを見たじーさんが良一を引き連れて突っ込んできた。

「ひいー！」

その剣幕に思わず羽未を庇ってしまって、缶が一瞬で倒された。いや、怖すぎる。

「羽依里くん、甘いぜ！」

かつこーん。

「し、しまったー！ー！ー！」

「さっきのおかえしだよ。えい！ー」
かつこーん。

「ま、まさか鷗に缶を蹴られてしまうなんて……不覚だああ……！」

「スキあります！ パリングルスビーム！」
かつこーん。

「うわー！ー!? 紬の目から謎の光線が——!?」

「羽未さん、やっちゃってください！」

「えーい！」
かつこーん。

……その後も缶を起こしては倒され、起こしては倒され……結局、俺は昼までずっと鬼をやり続ける羽目になってしまった。

まあ、羽未も皆と一緒に楽しんでくれたようだし、結果オーライかな。ものすごく疲れたけどさ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……やがてお昼時になり、その場は解散することになった。なったんだけど……。

「おじーちゃん、羽未ちゃんのためとなったら元気過ぎ」

「おなかすいたー」

じーさんだけは息一つ乱さずに帰っていったけど、他は全員、駄菓子屋の前から動けないでいた。皆、全力で遊び過ぎだろ。

「帰ってお昼ごはん作らないといけないけど、なんか作る気力湧かないわねー」

「そ、そうですね……蒼さん、簡単に作れそうなもの、駄菓子屋さんに売ってませんでしたっけ？」

「一応あるわよ……にやが谷園のチャーハンの素」

「それは論外です」

ベンチに座って空を仰いでいた蒼と夏海ちゃんが、そんなやりとりをしていた。しろはも疲れているみたいだし、お昼どうしよう。

「……そうだが皆、お昼なんだけど、海の家に行ってみない？」

俺は皆の顔を見渡しながら、そんな提案を試してみる。静久と天善は缶ケリに参加していなかったし、きつと海の家準備をしているに違いない。

「そうですね。海の家も今日から本格オープンなので、カレーもたくさん用意してあると思います！」

カレーという単語を聞いて、膝の上に座る羽未のお腹が可愛らしい音を立てた。どうやらその音は、隣にいたしろはにもすっかり聞こえたらしい。

「うーん……羽未ちゃんもお腹空いてるっぽいし。敵勢力に頼りたくはないけど、背に腹は代えられないよね……」

敵勢力って。昨日もそうだったけど、相変わらずチャーハン派閥とカレー派閥の軋轢はすごい。

「……あの、その海の家、私も行ってみたいですか？」

不服そうなのは横顔を眺めていると、夏海ちゃんがおずおずと手を挙げる。

「そういえば、夏海ちゃんは海の家に行ったことなかったっけ」

「はい、昨日はその、電話番号しましたので」

「あー……うん。そうだったね」

ここにいるメンバーのほとんどは、昨日のうちに海の家へ足を運んでいるけど、民宿で電話番号してもらっていた夏海ちゃんだけは行っていない気がする。

「じゃあ、一緒に行こうか」

「カレーが美味しいんですね。楽しみです」

「……止めはしないけど、夏海ちゃんはチャーハン派だと信じてるか

ら。取り込まれないでね」

「は、はあ……」

嬉しそうに話す夏海ちゃんの両肩に手を置きながら、しろはが祈るように言う。大丈夫だよ。さっきの蒼とのやりとりを見る限り、この子、完全にチャーハン派閥だからさ。

「俺らも昼はカレーにするかなー。のみき、良いか？」

「ああ。食事当番の良一が言うのなら、異論はない。せっかくだし、紬や堀田ちゃんも来るといい」

「はいー」

そんな感じに続々と賛同してくれ、結局皆で海の家へ向かうことになった。こうやって大勢でワイワイ歩いていると、夏休みって感じがして、懐かしい気分になる。

……10分ほど歩いて到着した海の家は、たくさんのお客さんで賑わっていた。紬が何日も前から港でチラシを配っていたし、その多くが観光客みたいだ。

「あら、皆来てくれたのね」

あまりの盛況っぷりに中に入るのを躊躇っていると、水着の上にエプロンをつけた静久が笑顔で出迎えてくれた。

「お客さん、たくさん入ってるみたいだな」

「ええ、お陰様だね。もしかして、皆も食べに来てくれたのかしら」

「ああ、そのつもりだったんだけど……」

「ありがとう。外側の席が空いてるから、そこで待っていて」

忙しそうなら出直そうか……と言うより早く、静久から外の席を勧められた。昨日はこの場所にテーブルはなかったはずだけど。お客さんが増えたから、増設したのかな。

「皆は座ってくれよ。人数分のお冷、取ってくるからさ」

俺はそう伝えて、一人店内へと向かった。

予想はしていたけど、席という席は埋まっていて、皆がカレーを食べていた。壁にはサザエのつぼ焼きやタコ飯といったメニューも掲げられているのだけど、そちらを注文している人は皆無だった。

「えーっと、確か給水器はこっちだったよな。すみません。通してください」

昨日もお邪魔したし、勝手知ったる海の家。俺は人波をかき分けながら給水機へ向かう。

「天善天善天善天善……！」

その道中、厨房の奥から呪文のような天善の声が聞こえた。同時にカチャカチャ音がしているので、たぶん皿を洗っているんだろう。

天善頑張れ……と心の中で応援しながら、俺は人数分のお冷を用意して、席へと戻ったのだった。

「……皆、お待たせしてごめんなさいね」

お冷を飲みながら談笑していると、静久が俺たちの席へとやってきた。

「静久、忙しい時間に来てごめんな」

「構わないわ。お客さんは多いけど、基本注文は皆カレーだから。ごはんをよそって、カレーをかけるだけだもの。提供まではあつと時間よ」

静久の視線の先を見ると、先程まで店内にあふれていたお客さんはだいぶ減っていた。静久の言う通り、お客さんの回転は速いみたいだ。

「それで、注文は決まっているかしら？」

「はい！ カレーください！」

「カレー！」

夏海ちゃんと羽未が同時に声をあげる。俺達も苦笑しながらもそれに準じ、全員がカレーを注文した。

「ご注文承りました。すぐに用意できるから、待っていてね」

静久はさらさらとメモを取ると、そのまま店の中へと戻っていつ

た。

「……はい。チキンホワイトカレー、おまちどおさま」

それからほどなくして、大きなおぼんに沢山のカレーが乗せられてきた。

「静久、手伝うよ」

「そうですね！」

さすがに数が多いし、配膳の全てを静久に任せるわけにはいかない。俺たちはリレーでもするようにカレーを運ぶ。

「……あれ？ 数多くないか？」

人数分のカレーを配膳し終えた後も、おぼんには二人前のカレーが残っていた。

「ふふ、私たちも今からお昼なの。ようやく時間ができたしね」

少し照れくさそうに言う静久の背後には、天善の姿も見える。ああ、二人も今からお昼なのか。

「そういうことなら皆、もう少し詰めてくれ」

静久たちも揃ったところで改めて挨拶をし、一斉にカレーを食べ始める。

……うん。昨日も食べたはずだけど、やっぱり美味しい。島の新鮮な食材を使っているからかな。

「んー！ 静久さん、美味しいです！」

初めて食べた夏海ちゃんもご満悦の様子だった。なんだかんだで、皆カレーは好きだよな。

「……島の人、いないよね……？」

そんな中、しろはだけが何かを警戒するように時折周囲を見渡していた。いくらチャーハン派閥筆頭でも、そこまで気にしなくてもいいと思うけど。

「しろはちゃん、そんな心配顔しなくてもいいわ。こつそりと食べるに

来てくれる島の人もいるし、顔を合わせた時点でお互いさまよ」

「確かにそれは一理あるよな」

人差し指を立てながら力説する静久に妙に納得しながら、カレーをすくっては口に運ぶ。エビやホタテ、そしてイカ。色々な具材が入っているのもあって、一口ごとに味が違って楽しい。

「昔は、誕生日にこっさりカレーを食べに来る人も居たそうよ。祖父も誕生日の人には、カレーを無料で食べさせてあげたらしいわ」

「そうなんだね。なら、僕も誕生日にはカレーを食べに来ることにするよー」

「そんなことしなくても、チャーハン作ってあげるし！」

頷きながらカレーを頬張る識に対して、しろはが珍しく大きな声を出していた。現在はおむすび派筆頭の識を、何が何でもチャーハン派閥に引き込みたいらしい。

「……そういえば、識さんの誕生日っていつなんですか？」

誕生日という単語が気になったのか、夏海ちゃんが識にそんな質問をしていた。

「僕かい？ 僕は7月4日さ」

「あ、じゃあ同じ月なんですね」

「そう言う夏海先輩はいつなんだい？」

「私は7月23日です！」

「……なるほど。もしかして、名前の由来は語呂合わせなのかい？」

「そうです！ 夏に生まれたのもあって『なつみ(723)』なんです

よー」

へえ。夏海ちゃんの名前にそんな由来があったのか。

「この中だと、次に誕生日が近いのは紬かしらね。8月31日よ」

「ほう。恐怖の夏休み最後の日だな」

「ハイリさん、その言い方にはゴヘイがあります！」

スプーンを手にしたまま、紬が憤慨していた。そんなこと言われても、その日は全国の子供たちにとって恐怖の日のはずだ。

「でも、その翌日は羽未の誕生日だな」

「そうだね。羽未ちゃんの誕生日は9月1日だから」

「おとなりさんですね！」

「うん！」

羽末と紬はがっしりと握手を交わしていた。月は跨いでるけど、確かにお隣さんだな。

「そいえば、静久の誕生日は4月29日なんですよね？ これもゴロ合わせでしょーか」

その時、紬が思い出したかのように言う。確かに名前の感じが語呂合わせっぽい。

「どうかしら。両親に詳しく聞いてみたことはないのだけど、私の名前は祖父がつけてくれたらしいから、もしかしたらそうかもしれないわね」

静久が笑う。こうして見ると、語呂合わせの名前ってのは思いのほか多いのかもしれない。

「蒼さんたちの誕生日はいつなんですか？」

「んー、あたしと藍の誕生日は9月20日よー」

カレーの付け合わせの福神漬けをかりこりと食べながら、蒼が答える。

「あの、ずっと気になってたんですけど、双子の誕生会ってやっぱりケーキは二つあるんですか？」

「うちは大きいの一つだったわねー。第一、二つあっても食べきれないしさ」

興味津々の夏海ちゃんに、蒼が懐かしむように答える。空門姉妹の誕生会。島に来てから何度か経験したことがあるけど、祝う相手が二人いるだけあって、すごく賑やかだったのを覚えている。

「なっちゃん、ちなみに私の誕生日は4月4日！」

「俺は10月10日だぞ」

そんな折、誕生日トークに入ってきたのは鷗と天善だった。なるほど。この二人はゾロ目で覚えやすいな。

「……誕生日プレゼントは郵送でも受け付けますので」

澄ました顔で言ってたけど、冗談じゃないよなあ。鷗の場合。

「ゾロ目といえば、のみきの誕生日は2月2日だぞ。ついでに俺は2

月9日で、夫婦で誕生日が近いんだ」

「すごい」

羽未が目を丸くする傍らで、良一はこっそりとのみきの肩に手を回していた。おうおう、見せつけてくれるな。

「わ、私と羽依里だって負けていないし」

そんな二人を見て、変な対抗心が芽生えたのだろうか。しろはが語尾を強めていた。ちなみに俺の誕生日は5月21日。しろはの誕生日が6月8日で、その差は18日。圧倒的に負けてる。

……って、何を張り合っているんだらう俺たち。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……海の家での食事を楽しんだ後、皆と別れて加藤家へ帰宅する。

電話番号をしてくれていた鏡子さんにお礼を言う、「ううん。私も美味しいカツプうどん、食べられたから。ありがとうね」と、逆にお礼を言われた。ちらりと見えたパッケージには『走馬先生厳選シリーズ』と書かれていた。よくわからないけど、高級カツプうどんなのか。

「はい。これ」

そんな鏡子さんを見送り、居間に腰を下ろして一息ついていると、しろはから牛乳を渡された。

「ありがとう……でも、なんで牛乳？」

「牛乳はカレーの匂いを消す効果があるから。しっかり飲んで」

真顔で言った後、しろははごきゅごきゅと喉を鳴らす。もしかしてこれ、カレー食べるたびに毎回飲まなきゃいけないのかな。

「うーん……これ、牛乳だけじゃだめかも。服にも匂いついちゃつてるし。羽依里、今度駄菓子屋で消臭スプレー買っておいで」

古風な瓶の牛乳を喉に流し込んでみると、そんな言葉が聞こえた。思わずしろはの方を見ると、すんすんと自分の服の匂いを嗅いでいる。消臭スプレーとか、何もそこまでしなくても。

「羽依里、やっぱりカレー食べたのがバレるといけないから、今から上着だけでも着替えて」

「え、今ここで？」

「うん。今ここで」

普段のしろはらしからぬ冷たい言動と、これまた真顔で差し出された手に言いしれぬ恐怖を感じ、俺は着ていた上着を脱ぎ、しろはに手渡した。

その後、しろはと羽未も着替えに行つたみたいだ。まあ、三人とも缶ケリでたくさん汗かいていたし、いいけどさ。

「……やっぱり、羽依里の服からカレー臭がする……裏切りの匂いだし……！」

そんなことを考えながら、俺も新しい服を取りに脱衣所へ向かうと、家族の服を洗濯カゴに放り込みながら、しろはがわなわなと震えていた。

……今度から、海の家に入る時は上半身裸で入ろうかな。あそこは海水浴場の区画内だし、のみきに撃たれることもない……と、思う。

着替えを終え、少しの休憩をはさんだ俺は、ログボを探して島内を巡ることにした。居間の時計も14時を指したばかりだし、まだ時間はたっぷりある。

一緒に行きたいと全力で訴える羽未をなんとかなだめ、しろはに後を託して俺はガレージへと向かう。さすがに、羽未にログボを知られるわけにはいかないしな。

「羽依里くん、どこかでかけるのかい？」

ガレージからバイクを引っ張り出していると、蔵から識が出てきた。見慣れた制服の上に着物を羽織っている所からして、どうやら俺たちと同じように着替えたみたいだ。

「ああ、ちよつとログボ探しをね。識もおむすびポーチ持って、どこか行くのか?」

「へへ、実はさつき、鏡子さんからおむすびをもらったんだ! お昼に食べる予定だったけど、カップうどんを食べたから余ったらしくてね。非常食さ!」

そういえば、鏡子さんが帰り際、識に何か渡していた気がする。一応、お昼は自前で用意していたんだ。

「ところで、ログボって言うのと、ラジオ体操のかい?」

「そうだよ。これって当番制になっていてさ。定期的に誰かが用意する決まりなんだ」

「ちよつと羽依里くんの順番というわけか。気を付けて行っておいでよ!」

「ああ、夕方には戻れると思うから……」

笑顔で見送ってくれる識に手を振りながらバイクに跨った時。あの考えが浮かんだ。

「……そうだ、識は山菜に詳しいしさ。良かったら、一緒に来てくれないか?」

「え、僕もかい?」

「ああ。バイクで風を切って走ると、気持ちいいぞ」

俺はそう言いながら一度バイクから降りて、座席をポンポンと叩く。

「うーん……じゃあ、よろしくお願いするよ!」

「ごつちこそ、よろしく頼むな。ほい、ヘルメット」

識は少し考えてから了承してくれた。それを確認した俺はバイクの収納スペースから予備のヘルメットを取り出して手渡す。いくら島だからって、ノーヘル運転、ダメ絶対。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それで、どこに行くんだい？」

「まずは港に行ってみようと思うんだ。商店に手頃な品物があるかもしれないしさ」

背中にくっついていてる識へそう言葉を返しながら、住宅地を進む。しばらくすると島の中央を走る一本道へと差し掛かった。

この辺まで来ると、建物といえば遠くに見える小学校くらいで、左右には畑が広がっている。見晴らしも良いし、バイクで走るにはなかなか気持ちのいい場所だ。

「羽依里くん、もつと飛ばしておくれよ！」

「え、もつと？」

その時、背中の識が興奮気味に言う。

初めてバイクに乗った時はぶえぶえと泣き叫んでいたのに。二回目となると慣れてきたんだらうか。

「ああ。この乗り物は走るより速いのに、全く疲れないからね！僕は風になりたいんだ！」

……なんか一昔前の歌の歌詞みたいなことを口走っていた。

「悪いけど飛ばせないよ。昔、事故をしちやってね。それ以来安全運転を心がけているんだ」

「え、そうなのかい？」

「学生時代だけど、雨の中を急いでてスリップしちやったんだ。幸い、怪我はなかったんだけどさ」

久々に思い出したけど、あの時はしろはや夏海ちゃん、島の皆にたくさん心配をかけてしまったっけ。俺を含めて、誰も怪我をしなかったのが不幸中の幸いだった。

「だから、安全運転な」

「ああ、了解したぜ！ 安全第一だ！」

サイドミラー越しに識の笑顔を確認しながら、俺はバイクの速度を一定にしつつ進んでいったのだった。

「……あれ、羽依里さんじゃないですか」

やがて小学校の前を通りかかった時、藍から声をかけられた。

「よう。今日は仕事じゃなかったのか？」

返事をしながらバイクを止める。藍は目の前の校門に寄りかかるようにしながら、パツクのフルーツ牛乳を飲んでいた。

「仕事はしてますよ。今は休憩時間です。ところで羽依里さんこそ、識ちゃんと二人でどこ行くんです？」

「明日のログボを探してるんだ」

「ああ……そんなの、駄菓子屋に行けば一発じゃないですか。品質保証で安心お手軽。駄菓子屋のログボですよ？」

俺の目的を聞いた藍は、さも当然のように言う。しっかりと妹の店を宣伝してくるよな。

「確かにお手軽だけど……それは最後の手段にしようと思ってるんだ。なるべく自力で見つけたものにしたいたいしさ」

「そうですね。まあ、せいぜい頑張ってください」

ひらひらと手を振りながら、達観した表情を見せる。ぐぬぬ。妹と同じような仕草しやがって。目にももの見せてやるからな。

『ちよつと空門せんせー、いつまで休憩してるんですかー？ 午後の会議始めちゃいますよー？』

「む」

そんなことを考えていた矢先、聞き覚えのある音楽の後に校内放送が流れた。

「呼んでるぞ。空門先生」

「わ、わかってますよ。もう。忙しなくてすね……」

「頑張れよー」

やれやれ、といった風に背伸びをした後、藍は校舎へと戻っていく。俺はその背中を見送った後、再びバイクを発進させた。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

……それから数分間バイクを走らせて、港の商店に到着したんだけど……ログボに使えるそうなのは魚の干物や鳥白島まんじゅう、イナリ最中くらいしかなかった。

「この鳥白島まんじゅう、なかなか美味しいぜ？」

試食用に貰ったまんじゅうをもぐもぐと食べながら、識が言う。俺も半分もらったけど、島の塩を使った塩まんじゅうだった。生地塩気とあんこの甘みが絶妙で、好きな味だ。

「こっちのイナリ最中は見た目も可愛いし、良い感じなんだけどなあ」「ひとつ150円らしいね。20個入りを買うと割引されて2500円になるみたいだぜ」

確かにお得感はあるけど、正直観光客価格だし、これを買うと予算オーバーになってしまう。

……結局、俺と識は肩を落としながら商店を後にしたのだった。

「はあ……どうせ明日配るんだから、賞味期限の近い割引品でもあるかと思っただけだなあ」

「そうだね……」

「……あれ、二人とも、大きなため息ついてどうしたの？」

識と港で頭を抱えていると、いつものようにスーツケースを引きながら鴎が寄ってきた。今日は暑いからか、反対側の手には日傘を持っている。

「何か心配事？ 私で良ければ、相談に乗るよ？」

鴎は自らの分身であるスーツケースに腰を下ろして俺たちを見る。この際だし、相談してもいいかもしれない。

「実は、ラジオ体操で配るログボを探しててさ」

「ほう、ログボ」

興味のある話題だったのか、鴎が身を乗り出してきた。

「ああ。鴎なら何を用意する？」

「三角形の秘密と、パリングルスのセット……とかどう？」

「豪華だけど、できるだけお金をかけない方向でお願いしたい」

「じゃあ、手作りのボトルシップ」

「え、手作り？」

「うん。廃材利用で作るから、必要経費は限りなく0に近いし。材料さえ集まれば、量産体制に入れるよ？」

鴎は腕をまくる仕草をしながら言う。半袖の服から見える腕は細いけど、鴎は恐ろしく手先が器用だ。たぶん、本当に材料があればあつという間に作ってしまうんだろう。

「もしかして鴎、手伝ってくれるのか？」

「うん！それで、納期はいつまで？」

「明日」

「…………ごめん無理」

「だ、だよな…………」

納期を伝えたとたん、鴎は一気に萎れてしまった。例え俺と識が手伝ったとしても、今から材料集めないといけないし。さすがに無理な話だ。

「とんだブラック企業だよ…………せめて、一週間は欲しかった…………」

「気持ちだけで十分だよ。後は俺たちで何とかするから。鴎、ありがとうな」

不満顔の鴎にお礼を言ってから、俺たちは港を後にしたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

…………それからは再びバイクに跨り、自宅で修理屋の仕事をしていた天善に話を聞いてみたり、道中で出会った良一やのみきに助言を求めたりしたけど、これといった成果は上げられなかった。

特にのみきは俺たちを憐れんでくれ、「役所のお茶菓子を横流ししてやろうか？」とまで言ってくれた。さすがに断ったけど、あの目、本気だったよな…………のみき、過去にログボで嫌な思い出でもあるんだろうか。

「……よし。到着だ」

散々島内を巡った拳句、俺たちは山の中へとやってきていた。例の秘密基地を超えた先の、うっそうと草木が生い茂る鳥白島の秘境まで足を運んだ目的はただ一つ。山菜取りだ。

「識先生、よろしくお願いします」

「羽依里くん、顔が疲れているよ……」

俺はそう言つて、頭を下げる。島中を走り回ったせいで、バイクのガソリンも残りわずか。こうなったら、識に全てを委ねるしかない。「まあ、探してはみるけど……春や秋ならまだしも、夏だからね。あまり期待はしないでくれよ」

口ではそう言いつつも、ためらいもなく茂みの中へ分け入つていった。俺はそんな識の姿に感服しながら、急ぎ足でその後続いた。

「……それで、何を探すんだ？」

「ひとまずワラビだね」

道なき道に行く識の背中にそう質問を投げかけると、予想外の答えが返つてきた。

「え、ワラビって春の山菜のイメージなんだけど」

「確かにそうだね。今の時期、春に生えたワラビはすすくと育っているんだけど、その根元をよく探してみれば、遅く芽吹いた新芽が見つかることがあるんだ」

識はそう言いながら、自分の背丈ほどある草の中に頭を突っ込み、その根元を探る。まさか、この大きな草がワラビなんだろうか。ここまで長けるものなんだ。

「ほら、あつたぜ」

大きく成長したワラビに俺が驚愕している間に、識は目当ての山菜を見つけたらしい。草まみれになりながら起き上がった識の手には、見慣れた小さなワラビが握られていた。

「おお、本当だ」

「感心しないで、羽依里くんも手伝っておくれよ。これと同じものを探すんだぜ！」

「わかった。この草の下だな……」

俺は見よう見まねで目の前の茂みに頭を突っ込む。ログボ用だし、できるだけたくさん集めないと。

「だ、駄目だ……」

意気込んだものの、無数のやぶ蚊の洗礼を受ける羽目になるわ、マムシを見つけてしまうわで、結果は散々。

場所を変えながら30分ほど粘ったけど、全くと言っていいほど成果は上がらなかった。それこそ、春はそこら中に生えていた気がするのに。

「夏の山菜は数が少ないからね。少し採れただけでも、良しとしないといけないさ」

識の手には、10本近いワラビの新芽が握られていた。対する俺は1本。それもだいたい長けていて、なんとか食べられるサイズのやつだ。

「さすが識だな。恐れ入ったよ」

「にへへ……褒めても何も出ないぜ。それより、もっと集めるなら、フキやウワバミソウも探す必要がありそうだよ。向こうに秘密の採取場所があるから、ついておいでよ」

笑顔の識は、膝についた汚れを払いながら立ち上がり、更に山の奥へと進んでいく。本当、彼女がいてくれて助かった。

……さっきの場所から更に山の奥、行く手を阻む草の壁を越えた先に、突如として開けた空間が現れた。

まるで意図的に隠されているようなその場所は、周囲を大きく育った木々に囲まれて日光こそ届きにくそうだけど、地面は落ち葉が堆積

してふかふかだ。これなら、山菜が育つのも良い環境かもしれない。

「ついたぜ。ここには露がたくさん生えているんだ。あの辺りの……」

「……識、ストップ！」

「ぶええ！」

妙な気配を感じた俺は、今まさに足を踏み入れんとする識の襟首を掴んで制止させる。同時に、奥の暗がりでは巨体がのっそりと動く。

「……イノシシだ」

……どうやら、識の言う秘密の採取場所には先客がいたらしい。気配からして、あれはナベじゃない。正真正銘、野生の猪だ。

「識、気づかれないうちに、ゆつくりと下がって」

本来、猪は臆病な動物だ。変に刺激を与えたりしなければ、滅多に人を襲うようなことはない。俺はかつて、しろはのじーさんから聞いた言葉を思い出しながら、識に指示を出す。

「羽依里くん、あの猪を捕まえる事ができれば、良いログボになるんじゃないかい？ ごちそうだぜ？」

……俺の思いとは裏腹に、識は明るい声でそんな提案をしてきた。

「識、それ本気で言ってる？」

武器や罾もなく、素手で野生の猪を捕まえるなんて、到底無理な話だ。

「ゴフゴフゴフ……！」

できるだけ小声で話す俺たちの会話を理解しているのか、猪はすでに戦闘モードになっている。よし。こうなったら……！

「識、りゅうじんはかんしようだ！」

「あれは水中専用の技だから、地上では使えないぜ！」

思わずペケモントレーナーのように識へ指示を出すけど、バツジの数が少ないのか、言うことを聞いてくれなかった。というか、あれって水中用の技だったのか。

「ポンポン！」

……その時、草藪を抜けて、俺と識の前に颯爽と青いキツネが現れ

た。どうやらイナリが助けに来てくれたらしい。これは助かった。

「イナリ、でんこうせっかだ！」

「ポン？」

同じように指示を出したけど、伝わらなかった。そりやそうか。他人のペケモンだしな。

……って、現実逃避してる場合じゃない。冷静になれ、鷹原羽依里！

「ゴフゴフゴフ……！」

「ポンポン！ フー……！」

相手が増えたせいとか、猪は明らかに興奮している。イナリも威嚇してくれているけど、猪と狐じゃ体のサイズも違う。このまま素直に退散してくれそうにはない。

「ぶえい！」

「ポン！」

そう考えた矢先、猪が突進してきた。イナリも識も反射的に横っ飛びで避けるけど、猪はすぐに反転して、再び攻撃姿勢をとる。もう一度突っ込んでこられたら、今度こそ怪我をしてしまうかもしれない。

くそ。何もしてないのに、どうして俺たちを狙ってくるんだ……？

「うう……イナリ先輩、頑張っておくれよ……！」

……そんな折、イナリの勝利を願って必死に手を合わせる識の指の間に、無数のワラビが挟まっているのが見えた。これはもしかして。「識、その手に持ったワラビを捨てるんだ！ たぶん、あのイノシシはそれを狙ってる！」

「で、でも、せっかく採ったワラビだぜ？ これを捨てたら、明日の口グボがなくなってしまうよ!？」

「気にするな！ 命あつての物種だ！」

「わかったよ……えい！」

開き直った識は、持っていた山菜を全力で茂みの奥へと投げ捨てた。猪もそれを追って山の中へと消える……と、思いきや。

「ゴフゴフゴフ……！」

俺の考えとは裏腹に、猪は怒りの矛先をこっちに向けたままだっ

た。目的は山菜じゃなかったのか？

「は、羽依里くん、話が違うぜ!？」

「くそ。どうなってるんだ」

困惑する識を庇うように、俺はイナリと並んで識の前に立つ。あの山菜の他に、奴にとって魅力的な何かがあるのか？ あるとすれば、それは……。

「……そうだ識、そのおむすびだ！ おむすびポーチに入っている、おむすびを捨てろ！」

……必死に考えを巡らせた結果、そんな結論に辿り着いた。識は出発前におむすびを用意していたはずだし、奴の目的が山菜でないとする、おむすびの可能性が高い。

「いやだ！ これだけは絶対に捨てない！」

しかし、識はおむすびポーチを両手で庇うようにして持ち、断固拒否の構えだ。ええ、さっきの山菜はすぐに捨ててくれたのに。

「ゴフゴフ……!？」

そうこうしている間にも、猪は鼻息荒く攻撃姿勢をとる。もはや一刻の猶予もない。

「ええい、許せ識!？」

俺は力ずくで識の手からおむすびポーチをひったくると、その口をこじ開けておむすびを取り出し、猪へ向かって放り投げる。

「ゴフゴフ!？」

今度こそ俺の予想は当たったようで、猪は地面に落ちたおむすびに飛びつくと、勢いよくかじりついた。よし、今のうちに逃げよう。

「うう……!？」 羽依里くんがおむすびを捨てた！ ひどい……ひどいよ……!？」

安堵しながら振り返ると、識は島中に響き渡るんじゃないかという大声で泣いていた。足元にいるイナリも反応に困っている様子で、両手で顔を覆う識を心配そうに見上げていた。

「えーっと、その、やむを得なかったとはいえ、ごめんな……!？」

「……ゴブツ!？」

その号泣っぷりに、思わず謝っていると……おむすびを食っていた

イノシシが急に苦しみだし、泡を吹いて倒れた。おそろおそろ近づくと、どうやら気絶しているらしい。

「は、羽依里くん、あの猪、どうなっちゃったんだい？」

予想外の出来事に、識も泣くのをやめ、びくびくと痙攣している猪を遠巻きに見ていた。一気に食べ過ぎて、喉に詰まらせてしまったんだろうか。

——へへ、実はさつき、鏡子さんからおむすびをもらったんだ！

……その時、俺は今更ながら思い出した。

確か識のおむすびは、鏡子さんからもらったものだと言っていた。つまり、あのおむすびは鏡子さんの手作りだった可能性が高い。

……鏡子さんお手製のものを食べてしまったのなら、猪がああなっってしまったのも納得だ。というか、事情を知ったら急に可哀想になってきた。

「よくわからないけど、気絶してるうちに逃げるぞ。イナリも、来てくれてありがとうな」

「ポーン」

その事実を識に告げるのは酷な気がして、俺は話をはぐらかして山を後にしたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

無事に山を下りた俺たちだけど、ログボ用の山菜を失って、結局駄菓子屋で手持ち花火の詰め合わせを買うことにした。「やつぱりねー」と勝ち誇った蒼の顔を、俺はしばらく忘れないと思う。

「おかえり。ずいぶん時間かかったんだね」

紆余曲折あったログボ探しを終えて加藤家に戻ると、しろはが出迎えてくれた。玄関先に置かれた時計は17時半を回ったところ。夏

は日が高いからか、気を抜くとすぐこんな時間になってしまう。

「……ところで二人とも、どこまでログボを探しに行ったの？」

しろはは泥と草にまみれた俺と識の姿を見て、笑顔だった。いや、笑ってるんだけど、これは怒ってる。俺には分かる。その目が、「すごく汚れてるんだけど。洗濯、大変なんだけど」と言ってる気がする。

「よーし識、今から風呂掃除をするぞー！」

「りよ、了解だぜー！」

それを察した俺と識は、逃げるように風呂場へと向かう。掃除が終わったらそのまま湯を張って、早めに入浴を済ませてしまおうという魂胆もあった。

進んで風呂掃除をした甲斐もあつてか、その後はしろはの機嫌も直っていた。

掃除を終えた流れで風呂を沸かし、先に入るように識へ伝えただけで、「一番風呂は殿方だぜー！」と、断固として譲らなかつた。

随分古い考えだなあと思いつつも、言われるがままに少し熱めの風呂で汚れを荒い流す。それから縁側で火照った身体を冷ませていると、縁側の端に羽未の絵日記帳が置かれているのに気がついた。

「色鉛筆も散乱してるし、今日の分は書き上げたのかな？ どれどれ……」

今日こそ俺のことを書いてくれただろうか。そんな期待を抱きながら絵日記を手繰り寄せ、ページを開く。

『7月30日 天気：はれ

きょうは、おとーさんやひーじーじといっしょに、かんけりをした。ひーじーじは、あきかんをそらのむこうまでけつとばしていた。すごいー！』

……そんな文章の上には、島の皆に囲まれたじーさんがキラキラの笑顔で缶を蹴つ飛ばす絵が描かれていた。こんな笑顔のじーさん、俺

は知らない。

「……また見てる。どう？ 今日こそかつこいいおとーさん、描いてもらえてた？」

何とも言えない気持ちでいると、エプロン姿のしろはが絵日記を覗き込んできた。

「いや、またじーさんに負けたよ。それにしても、羽未は日に日に絵日記書くの上手になってるよな。さすが、しろはの娘だ」

俺はパラパラと絵日記をめくる。しろはも絵はうまいし、その才能はしつかりと羽未にも引き継がれているみたいだ。

「ほ、褒めても晩ごはんのおかずは増えないんだからね。ほら、羽依里も準備手伝って」

「わかった。わかった」

しろはは恥ずかしさを隠すように顔を背けながら、俺の袖を引っ張る。そろそろ夕飯の時間らしい。

「いただきまーす！」

……俺としろは、羽未、そして識の4人で囲む食卓。この光景にもだいぶ慣れてきた。

「んー、おいしいー」

今日のメイン料理はトンカツらしい。きつね色に揚がったそれを、羽未は口を大きく開けて頬張る。本当に美味しそうに食べるなあ。

「トンカツなんて珍しいな。豚肉、もらったのか？」

「ううん。実はこれ、シシカツなの」

「え、シシカツってことは、イノシシの肉？」

「そう。イノキングの沢田さんが分けてくれたの。久々の大物ゲットだつて」

しろははそう言って笑うけど、俺は昼間山で出会った猪を思い出していた。あいつ、あの後無事に息を吹き返したんだよな？ 捕まったりしてないよな？

「……」

俺の向かいに座る識もどうやら同じ心境のようで、なんとも言えない顔でシシカツを見つめていた。

「しっかり下処理してから、小麦粉と卵、パン粉をつけてカラツと揚げたの。内ロース肉だから、柔らかくておいしいでしょ」

俺たちの事情を知らないしろはは、嬉しそうに解説してくれる。無心で口に運ぶと、豚のそれとはまた違う、旨味の詰まった濃厚な油と肉汁が染みだしてくる。確かに美味しい。

「衣をつけるところは、羽未ちゃんも手伝ってくれたんだよ」

「がんばったー」

「そうなのか。そう言われると、衣も別格な気がするな」

「えへへー」

少し大袈裟な反応をすると、羽未は純粹に喜んでくれる。早くに料理に興味を持つことは良いことだよな。

「そのうち、めきめきと腕を上げて、しろはより美味しいチャーハンを作れるようになったりして」

「しゅぎよーするー」

両手に握りこぶしを作って、やる気満々だった。羽未もしろはがチャーハンを作るところは毎回見ているだろうし、案外すんなりと作れるようになるかも。

「まだ羽未ちゃんには早いよ。チャーハン作りは10歳になっただけから」

一方、しろはは至って真面目にそう言う。料理に関しては、彼女なりのポリシーがあるみたいだ。

「……うみさんが修行を始めたら、毎日チャーハンになりそうだね」

「ありえそうだ。朝は必ず、羽未の作ったチャーハンとかさ」

「朝からチャーハンとか、栄養が偏るし。せめて、お味噌汁はつけないと。それに……」

……やがて自然と識も加わり、会話は弾んでいく。

少し不思議な家族団欒を楽しみながら、今日も夏の一日は過ぎていった。

第八話・完

第九話 7月31日（前編）

「羽依里さん！ うみさん！ 朝ですよー！」

「おはようだぜ！」

……朝。今日も早朝の加藤家に夏海ちゃんと識の声が響きわたる。

「ああ、おはよう。二人とも」

俺は上半身を起こし、開け放たれた襖の向こうから差し込む朝日に目を細めながら二人に挨拶を返す。

「今日は夏海先輩が漬物を持ってきてくれたぜ！」

「漬物？」と言葉を返しつつ夏海ちゃんの手元を見ると、彼女はタツパーを持っていた。

「はい！ いつも野菜だけだと悪いので、今日は大根の漬物を持ってきました！」

「え、もしかして鏡子さんのお手製？」

俺は思わず表情を引きつらせる。布団の上だけど、心なしか後ずさってしまった気もする。

「いえ、私が漬けたので大丈夫です！ 安心してください！」

笑顔でそう言って、ずいつ、とタツパーを差し出してきた。夏海ちゃん、漬物作れるんだと感心しつつ、俺も起き上がって漬物を受け取った。

鏡子さんや俺を含め、加藤家の人間には料理ができない呪いがかかっている。鏡子さんの姪にあたる夏海ちゃんも当然、その呪いの影響下にあるはずなんだけど、彼女の場合はそれなりに料理ができる。それこそ、チャーハンへの情熱が加藤家の呪いを跳ね返していると思えなかつた。

「ありがとう。おいしそうだね」

「えへへ……味の方はあまり自信ないですけど」と、はにかみながら言う夏海ちゃんにお礼を言っつて、蓋を少しだけ開けて中を確認する。既にカットしてくれているみたいで、規則正しく並んだ白い大根と、独

特な香りが鼻をつく。

「チャーハンに使えばきつと美味しい漬物チャーハンができると思いますー!」

「はは、そうだね。久しぶりに夏海ちゃんのチャーハン食べたいかな」

「そうですか? じゃあ、しろはさんに聞いてみますー!」

「え?」

言うが早いか、俺の手からタッパーをひったくると、ぱたぱたと台所へ走っていった。思わず口から出てしまったけど、これは朝からチャーハンになる流れかな。

「夏海先輩も気が早いぜ。すぐにチャーハンなんて考えず、まずはおむずびのお供にすればいいじゃないか」

識が夏海ちゃんの背中を見送りながら、ため息混じりに言う。俺からすれば、どつちもどつちだなあ……と思いつつ、隣で気持ち良さそうに眠る羽末の背を揺らしたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「第三の体操! 一秒間! 真剣な目!」

「星屑ロンリネンス……」

羽末を起こした後、いつものように識と夏海ちゃんを連れ立ってラジオ体操へと参加する。

今日は俺が用意した品物がログボとして配られるんだけど、子供たちの反応はどうだろうか。なんか、ドキドキするな。

「よし、今日のラジオ体操はここまでー! さあ、スタンプとログボはこっちだぞー」

やがて本日のラジオ体操が終わり、ログボが配られた。

「あ、今日のログボは花火なんですね」

「えー、食べれない」

「なんか、しょぼーい」

子供たちは誰がログボを用意したかなんて知らないから、なかなか辛らつな言葉を浴びせてくる。うぐうつ、俺は皆のためを思って……！

「これじゃ、チャーハンの具にもなりません。むむむ……」

ペしペしと乱暴に花火セットを扱いながら言う。そんな、夏海ちゃんまで。

「……せっかく羽依里くんが用意したログボなのに、皆好き放題言っているね。僕が一言がっつんと言ってあげるよ！」

「ちよつと識、ストップ！」

語尾を強める識を俺は慌てて制止する。昨日一緒にログボ探しをしたし、彼女の気持ちもわかるけど。

「実は、ログボを用意した人物は子供たちに知られちゃいけないという青年団のルールがあるんだ」

「え、そんなものがあるのかい？」

「ああ、それを破ってしまうと、それから一週間ラジオ体操大好きさんの刑に処せられるんだ」

「なんだかよくわからないけど、すごく恐ろしい罰な気がするよ……」

識はガタガタと震えていた。これは嘘のような本当の話だ。何年前か前、この規約を破った団員がそれから一週間、喉を枯らしながらラジオ体操をしていたのを覚えている。俺は同じ轍は踏みたくない。

「羽依里、残念だったわねー」

識をなだめた後、俺が人知れず肩を落としていると、わざとらしい笑みを浮かべた蒼がやってきた。くそ、人の気持ちも知らないで。

「……品質保証で安心お手軽。駄菓子屋のログボじゃなかったのか？」

「二応、あたしは駄菓子の詰め合わせを勧めたじゃない。変わり種を狙うって、花火セット選んだのは羽依里でしょー？」

ため息混じりに「確かにそうだけど……」と、言う俺に、蒼は「まあ、アフターケアはやってあげるけどねー」と笑顔だった。アフターケア

? なんだろう。

「はなび、うれしいー」

一方、羽未だけが嬉しそうに花火の入った袋を抱きしめていた。お
お……そう言って喜んでくれるのは羽未だけだぞ。

思わず抱きしめたくなるのをぐつとこらえ、俺たちは手を繋いで帰
路についたのだった。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

加藤家に帰宅すると、夏海ちゃんと識はすぐに台所へと向かって
いった。残された俺と羽未は、ひとまずログボの花火を靴箱の上に置
き、洗面所で手を洗ってから居間へと向かう。

すると食卓には、すでに5人分の目玉焼きや野菜サラダ、味噌汁が
用意されていた。朝の様子からして、朝ごはんのメインは夏海ちゃん
のチャーハンになりそうだし、しろはが栄養バランスを考えて作って
くれたのかな。

「お待たせしました！ 漬物チャーハンです！」

羽未と並んで座っていると、そんな声とともに目の前にチャーハン
が置かれた。どうやら夏海ちゃんのチャーハンが完成したらしい。
さすが早い。

「羽依里さん、なんかラジオ体操の後元気なかつたので。漬物チャー
ハン食べて、元気出してください」

ひげ猫エプロンをつけた格好で、そう言って笑ってくれるけど、元
気がなくなつた原因は夏海ちゃんにもあるんだよ……とは、とても言
えなかつた。

その後、識やしろはも食卓につき、朝ごはんが始まった。

俺もいつまでも引きずつても仕方ないし、挨拶をして漬物チャー

ハンを口に運ぶ。

「おお、美味しい」

正直、あつたかい漬物ってどうなのかと思つたけど、これは美味しい。細かく刻んだ漬物が良いアクセントになって、味付けが絶妙だ。

「おしよゆうとつて、おとーさん」

「いいぞ。羽未は醤油派だもんな」

言いながら、俺は目の前の醤油さしを羽未に手渡す。慣れた手つきで回しかけると、小瓶はそのまま夏海ちゃんへと手渡される。

「二人とも、あまりかけすぎちゃ駄目だよ。今日はチャーハンだから、味濃いんだし」

そう言つてしろはが注意すると、二人が揃つて「はい」と返事をした。一方の識は、何もつけずに目玉焼きを食べていた。何かかけないのか問うと、「素材の味があるから、余計な味付けは不要だぜ!」と言つていた。まるで昔の人みたいな言い方だなあ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「それでは、お邪魔しましたー」

朝食を終えて、夏海ちゃんは元気いっぱいに去つていった。

「それじゃ羽未、今日の宿題をしような」

「うんー」

洗い物をしろはに任せて、俺が羽未の勉強を見る、いつもの流れ。本格的に一日が動き出す前の、朝の穏やかな時間だ。

「うみさん、漢字の勉強をしているのかい?」

「そうー」

俺の膝の上で鉛筆を動かす羽未を眺めていたら、識がやってきた。

本来、羽未が学校で漢字を習うのはもう少し先なんだけど、『余裕があるうちに簡単な漢字は書けるようになってほしい』というしろはの方針もあつて、夏休みの間に少しずつだけ漢字の勉強を進めている

んだ。

「あれ、その漢字は何て読むんだい？」

そして羽未の書き取りノートを覗き込んだ識が、そんなことを言っていた。

「いち、にー、さーん」

羽未が指し示す通り、そこには『一』、『二』、『三』といった初歩的な漢字が書き綴られていた。いくらなんでも、これが読めないはずはないんだけど。

「うーん、僕の知っている漢字はこうだぜ？」

そう言うと、余っていた鉛筆を手にし、ノートの端に『壺』、『弍』、『参』……と漢字を書き始めた。難しい方の字を知ってるなあ。

「むずかしいー」

俺が苦笑していると、見たこともない字を前にした羽未が首をかしげていた。これだけ難しい漢字を知っているんだし、きつと識も羽未の字がたどたどしいから、読みにくかったただけだろう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「しゅくだい、おわったー」

「うんうん。今日も頑張ったね」

宿題を終えた羽未をひとしきり褒めた後、俺は今日の予定を確認する。夕方にお客さんが来るから、午後から民宿の準備をするにしても、午前中は羽未のために使えそうだな。

「さあ羽未、今日は何して遊ぼうか」

「えーつとねー」

「ウミさん、あそびにいきましょうー」

……そのタイミングを見計らったかのように、紬がやってきた。今日の紬は真っ白いワンピースに、同じ色のリボンで長い金髪をまとめていた。

「ナツミさんやホツタさんも待ってますよー」
「いくー!」

すでに今日の宿題という夏休みの呪縛から解放された羽未は、笑顔
を爆発させながら紬について行ってしまった。

「……あれ?」

羽未と一緒に遊ぼうと思っていたのに、気がつけば俺一人だけが取
り残されていた。まさか、羽未についていくわけにもいかないし、逆
に暇になってしまった。

「えーつと……おーい、しろはー」

手持無沙汰になってしまった俺は台所へと向かう。そこではしろ
はと識が料理をしていた。二人とも、かっぼう着姿が似合っている。

「あれ、こんな時間から料理をしてるのか?」

「うん。山菜をたくさんもらったから、早いうちに下処理をしてしま
おうと思って」

「しろは先輩、こっちの鍋もお湯が沸いたぜ!」

「うん。ありがとう」

名前はわからないけど、綺麗に皮を剥かれた山菜が煮え立つ鍋に投
入されていった。たぶん、これで灰汁を取るんだろう。

「羽未が遊びに行っちゃって暇だからさ、何か手伝おうと思ったんだ
けど……」

「うーん……識も手伝ってくれてるし、今のところは大丈夫だよ。民
宿の準備も午後からで間に合いそうだし、午前中は好きに過ごしたら
?」

「じゃあ、そうしようかなあ」

一応手伝いを申し出るも、にべもなく。何もせずに台所に立ってい
ても邪魔になるだけだし、しろはがそう言うのならお言葉に甘えさせ
てもらおうかな。

俺は財布だけを手にすると、蟬が元気に鳴き始めた島へと繰り出し
た。この感じ、なんだか久しぶりだ。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「こっちの大きなテントを先にお願いしまーす！」

ぶらぶらと行く当てもなく住宅地を歩いていると、役所の前に大きなトラックが止まり、何やら作業が行われている場面に遭遇した。何をしてるんだろう。

「あ、羽依里ー。おはようー」

どこか聞き覚えのある声がすると思つたら、作業服を着た人たちの中心で鴫が指示を出していた。半袖半パン姿で髪型はポニーテール。その上に麦わら帽子を被っているもんだから、近づくまで気づかなかった。

「鴫、朝から精が出るな。サマーキャンプの準備か？」

「そうー！ 今朝の船便でようやく注文してたテントが届いたから、仕分けして運んでるのー！」

笑顔で言う鴫の後ろでは、本土から来たであろう作業員の人たちが手分けしてトラックにテントを運んでいた。中には良一の姿もある。

「良一も頑張ってるんだな」

「おう。俺はテントに詳しいからな。鴫に頼まれて、組み立ての指導役だ」

ニカツと笑う。なんというか、海の仕事をしている時より生き生きしている気がする。さすが、島随一のテントコレクターだ。

「そうだ。良かったら俺も手伝おうか？」

「ううん、本土からたくさんの方が手伝いに来てくれるから、大丈夫！」

こちらにも手伝いを申し出るけど、笑顔で断られてしまった。慣れている人が多いなら、かえって邪魔しちゃうかもしれないな。

「わかった。二人とも、頑張ってくれな」

鴫と良一にそう声をかけて、俺は役所を後にした。次はどこに行くう。

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

「……羽依里さん、一人で暇そうにしていますね」

その後、再び住宅地をさすらつていっていると、駄菓子屋の前で藍に声をかけられた。どうやら今日は仕事が休みらしく、肩を出した白いシャツに、青色のハーフパンツというラフな服装だった。

「今日はたまたまだ。いつもは猫の手も借りたくらいに忙しいんだぞ」

「はいはい。そうですか」

藍は店前のベンチに腰掛けて、身体を左右に僅かに揺らしながら言う。くそ、全く信じていないな。

「ところで、蒼は？」

そんな藍の横を通り過ぎ、店主を探してカウンターの奥を覗くけど、そこには誰の姿もなかった。

「今日は堀田ちゃんも夏海ちゃんもお休みで、蒼ちゃんも用事があるということなので私が代わりに店番をしています。ぶえ」

そういえば、その二人も紬や羽未と一緒に遊びに行ってるんだ。蒼もいないとなると、どうりでお店の中が静かなはずだ。

「それで、お客さんも来なくて私も暇してるんです。せつかくですし、羽依里さんもこちらへどうぞ。ぶえー」

俺の方を見ながら、ちよいちよい、と手招きしながら言う。もしかして、隣に座れど？ 俺の貴重な夏休みを、藍のために使えと言うのか？

「そんな顔しなくてもいいじゃないですか。減るもんじやないですし。ぶええー」

嫌だという感情が思いつき顔に出ていたらしく、そんなことを言われた。いやいや、減るから。俺の時間は刻一刻と減っているから！ なんて心の中で訴えていると、時折変な音がしていることに気づいた。

「……藍、さつきからなんか聞こえるんだけど」

「気のせいじゃないですか。ぶえええー」

いや、気のせいじゃない。確かに聞こえるんだけど。ぶえってる。

「藍、もしかして何か食べてたりする？」

「ああ、これですよ」

藍がちよろつと舌を出して見せる。その上には、真ん中に穴が開いた丸い駄菓子に乗っていた。

「ああ……フエガムか。懐かしいな」

基本はガムなんだけど、あの穴に向けて空気を出し入れすると、良い音が鳴る駄菓子だ。子供の頃は無駄に鳴らして遊んでいた気がする。

「違います。これはブエガムです」

……ぶえがむ？

直後、ぶええええーと、何ともいえない音が響き渡る。というか、どつかで聞いたことあるんだけど。

「新しいものもありますし、羽依さんもやってみますか？ 不思議と癖になりますよ。ぶえええー。ぶえええええー」

「い、いや。俺は遠慮しておくよ」

やめて。どことなく藍の声色を含んでいるもんだから、なんかぶえる藍のギャップに笑ってしまう。

「そうだ藍、ラムネ貰っていい？」

「いいですよ。80万円です。ぶえええー」

藍はぶえぶえ言うだけでレジ対応はしてくれなかったもので、俺は立ち上がってカウンターに代金を置き、フリーザーからラムネを取り出す。

「……ところで、しろはちゃんとは最近どうですか」

瓶を地面に立てて、しゅぽん。とビー玉の栓を抜いた時、藍が唐突に聞いてきた。

「変わりないけど。相変わらず最高の妻だぞ」

「……言ってるで恥ずかしくないです？」

「まったくもってこれっぽっちも」

ごくり、とラムネを一口飲む。暑い中歩いてきたし、その爽やかさが全身を駆け巡る。思わず「ぷはー」と息を吐きながら空を見上げると、大きな入道雲がもくもくと立ち昇っていた。まさに夏だ。

「それで、二人目はまだです？ 私としては、次も女の子が良いんですが」

「ぶっ!？」

……喉元を過ぎようとしていたラムネが気管支に入りそうになった。いきなり何の話をしてるんだ。

「誰かに聞かれたら、誤解されるようなことを言わないでくれ」

「いいじゃないですか。減るもんじゃないですし」

……さつきも同じやりとりをした気がする。少しニュアンスは違うけど、今の話を誰かに聞かれたら、俺への信頼は減ってしまうわけだけど。

「……そういえば今日のログボ、花火だったんですね」

「え？ ああ、そうだけど」

微妙な空気になりかけたところで、藍がスパッと話題を変えた。さすが先生。空気を読む力に長けている。

「それなら、夜は皆で花火大会をしませんか？ 蒼ちゃんにも伝えて、お店の花火も特別に提供しますよ」

「気持ち嬉しいけど……今日、お客さん来るんだよ」

「ダメ元でお客さんも花火に誘ってははどうです？ 無理なようでしたら、羽未ちゃんだけでも私と蒼ちゃんだけで引き受けますから」

仕事があることを伝えると、そんな言葉が返ってきた。蒼がアフターケアも考えてるって言うってたけど、そういう意味だったんだろうか。

「じゃあ、もし俺たちが行けそうにない時は、羽未をよろしく頼むな」
「任せましたよ。場所は海の家近くの浜辺で、時間はそうですね……20時にしましょうか」

「20時だな。羽未に伝えておくよ。ありがとうな」

「べ、別に羽依里さんにお礼を言われても嬉しくありませんから」

藍は何故か動揺しながら立ち上がり、「私も何か飲みます」と、フ

リーザーの方へ向かった。俺はそんな背中を見送った後、自分のラムネに口をつける。お昼には羽未も帰ってくるだろうし。その時に伝えてあげようかな。夜に楽しみができて良かった。

「……ゴフゴフゴフゴフー！」

「ぶうー……！」

ちょうど口いっぱいラムネを含んだ時、目の前を羽未と夏海ちゃんを乗せたナベが走り去っていった。あまりに衝撃的な光景に、俺はラムネを思いつきり吹き出してしまった。

「うわ、汚いですね。どうしたんです？」

飲み物を物色中で、今の光景を見ていなかったんだろう。藍が俺の周囲の惨状だけを見て、あからさまに嫌そうな声を出した。

「げほげほ……いや今、目の前をナベが通り過ぎていったんだよ！」

「それで、どうしてそこまで動揺するんです？ よくある光景じゃないですか！」

よくあるのかよと心の中でツッコみつつも、俺は「その背中に夏海ちゃんと羽未が乗ってた」とむせ込みながらに伝える。

「……どうしてそれを早く言わないんですか！」

それを聞いた藍はすぐさま道に飛びだすと「二人とも、止まってください！」と、叫ぶ。

「あ、ナベ、ストップ！」

藍の声に気づいた夏海ちゃんが声をかけると、砂埃を巻き上げながら、ききききー、とナベが急停止した。猪は走り出したら止まらないなんて迷信だ。

「二人とも、何やってるの？」

俺と藍は、ゴフゴフ言いながらアイドリングのように身体を上下させるナベに近づきながら尋ねる。

「漁港に向かっていている途中なんです。どうやら、屋台が出ているみたいで！」

「え、屋台？」

「うん。やたいー！」

ナベの背中に器用に乗る羽未は嬉しそうに言う。船の利用者を

狙って、フェリー乗り場がある港側に屋台が出ることはあるけど、漁港の方に出るなんて珍しい。

「なんか、車で売りに来てるらしくて。珍しいですし、気になりませんか？」

「気になるね」

俺は正直に答えた。大体、島にやってくるのは骨組みを組んだ屋台だし。今流行りのキッチンカーとかだろうか。

「というわけで、ちよつと視察に行つてきますね！ 紬さんも後で来ると思うので、心配しないでください！」

夏海ちゃんは笑顔で言う。「ナベ、全速前進！」と指示を出し、再び道路を疾走していった。ほとんど走つてないけど、車に気をつけるんだぞー。

「ちよつと羽依里さん、そのまま見送つてどうするんですか。心配なので、様子を見て来てくださいよ」

「え、俺？」

「当然です。私は店番がありますからね。それにもし、いかがわしいお店だったらどうするんですか」

「いや、いくらなんでも真昼間の漁港にそんなお店は……」

「なんで羽依里さんが顔を赤くするんです！ いいから、さつさと行つてくださいー！」

※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

藍に蹴り出されるように駄菓子屋を後にして、俺は漁港へと向かった。そこには軽トラを改造したような屋台が出ていて、一人の男性が忙しそうに作業していた。

「本当に車だね。何を売ってるのかな」

そんな軽トラからだいぶ離れた場所で、隠れるように様子をうかがう羽未と夏海ちゃんに声をかけると、こちらを振り向きもせず「のぼりも出ていないので、わかりません」と声が返ってきた。

「そうです。この際、羽依里さんを先頭にして様子を見に行きましよう。男の人ですし！」

「いきましょー」

「え、ちよつと待って」

その直後、笑顔の二人に背中を押されて、じりじりと屋台の方へ近づくことになった。正直、俺も怖いんだけど……。

「おっ、お客さん第一号やな！ いらっしやいませー！」

漁港は見晴らしがいいし、速攻で店員の男性に見つかってしまった。関西弁だし、やつぱりちよつと怖い。

「……あれ？ 彩人おじさん!？」

その時、背後の夏海ちゃんが声を上げた。名前を呼ばれた本人も「誰かと思ったら、なっちゃんやないか！ 大きくなつたなー！」と、嬉しそうに返事をしていた。もしかしてこの二人、知り合いなのかな。

「えつとですね。この彩人おじさんは、私のお父さんのお兄さんなんですよー！」

俺や羽未も一通り挨拶をした後、夏海ちゃんがそう説明してくれた。ということは、俺や羽未も遠い遠い親戚……ってことになるのかな。

一瞬、頭の中に家系図を思い浮かべたけど、途中でごちゃごちゃになったので考えるのをやめた。夏海ちゃんが親戚というなら、そういうことにしておこう。

「それで、その……彩人さんはどうして鳥白島に？」

「ワイはこう見えて、神戸でうどん屋を経営してるんや。そんで時々、こうやって出張販売してるわけやな」

ニコニコ顔で言うその手元には『走馬うどん』と書かれたのぼりが握られていた。なるほど、うどん屋さんかあ。

鳥白島がある地方は、うどんが名産だとは聞いていたけど、島ではカップうどんばかりで本格的なものを食べたことがなかった。

島にうどん屋さんはないし、一度しろはに頼んだこともあるけど、うどんは神域だから打てない……とかなんとか言われた記憶がある。

「彩人おじさんのうどん、久しぶりに食べてみたいですねえ」

「そかそか。なら、ちよつと待つとき。すぐに準備したるから」

言ってから、手にしていたのぼりを台座に立てる。ちらりと見えたけど、改造された軽トラの中に、テーブルやイスがコンパクトに収めてあった。すごいな。

「あ、せっかくですし、開店準備手伝いますよ！」

「てつだうー」

その様子を見ていた夏海ちゃんと羽未が、そう申し出ていた。「おおきになー」と、彩人さんも快諾しているのを見て、俺も一緒に手伝うことにした。二人が手伝うのに、大人の俺が手伝わないわけにはいかないし。

……というわけで、三人で軽トラから折り畳み式のイスやテーブルを出しては、漁港の空きスペースに並べていく。

テーブルの上に敷いたクロスと、日よけの parasol がカラフルなのもあって、殺風景な漁港が一気に華やかになった気がする。

ある程度作業が進むと、軽トラの方から出汁の良い香りが漂ってきた。これは、かつお出汁かな。

「……よし、準備完了や。なっちゃんたち、食べたいもん選びや」

やがて開店準備が整ったらしい。彩人さんがそう言っつて、カウンターの奥からメニュー表を渡してくれた。すでに席に着いている二人に代わって、俺がメニューを受け取る。

……待てよ。本場のうどんって食べたことないけど、もしかして高いんじゃないだろうか。一応、それなりの額を財布に入れてきたけど、三人で二千円越えは覚悟しておかないといけないかも。

「そんな顔せんでも、お値段はお手頃や。三人でも千円行かんと思うから、安心して奢ったり」

考えが顔に出ていたんだろうか、彩人さんが調理スペースから身を

乗り出しながら言う。そ、そうなのか。

なんとなく安心しながら席に戻り、三人でメニュー表を覗き込む。そこに並んでいたメニューは、ひやかかけ、ぶっかけ、生醤油、ひや玉、かしわおにぎりの五種類。予想以上にシンプルだった。値段はうどんの並盛が一律250円。おにぎりが150円。確かにリーズナブルだ。

「お、遅れてしまいました〜」

どのうどんにしようかな……なんて考えていたその時、紬が息を切らせながらやってきた。

「あれま、こりやまた、可愛らしいお嬢ちゃんが来ましたなあ。まあ、水でも飲んで落ち着きや」

「ど、どもです」

汗だくになっている紬を見て、彩人さんが冷たい水が入った紙コップを手渡す。それをごくごく飲んだ後、紬はお礼を言って、自己紹介をした。

「……事情はようわからんけど、紬はん、猪の後を走って追いかけるなんてムチャやわ」

「むぎゆ……我ながらムボーな挑戦でした。こーかいの連続です……」

大分落ち着いてきたけど、灯台からここまで走ってきたらしい紬が息を整えるには、もう少し時間が必要みたいだ。今も彩人さんからタオルを借りて、むぎゆむぎゆ言いながら必死に汗を拭いている。

「ど、ところで、このアヤトさんのお店は一体何を売っているのでしょうーか」

「うどんらしいよ。ほら、これがメニュー」

席にもたれて、物珍しそうに軽トラの屋台に視線を送る紬に、俺はメニューを渡してあげる。続けて「冷たいうどんもあるし、せっかくだから食べてみない？」とも聞いてみる。

「そうですね。走ってお腹もぺこぺこですし、食べてみたいですよー！」

冷たいうどん、と聞いて紬の瞳が輝く。灯台からここまで走って消費したカロリーも相当なものだろうし、エネルギーを補給しないかね。

「よっしゃ。なら、気合い入れて作ったるわ。他の皆も注文決めてや」「えーつと、それじゃ、私は『ひやかかけ』にします！　これが一番、うどんの味が分かりますし！」

「お、さすがなっちゃん、わかっとなるな。流水で冷やすから、コシも出るしな」

「俺も『ひやかかけ』にしようかな。暑いし、やっぱり冷たいのが食べたいい」

「そうですねー」と紬も賛同して、同じく『ひやかかけ』を選んだ。一方、羽未はそれじゃ味気ないだろうと『ひや玉』の小を頼むことにした。

ちなみにひや玉というのは、冷たいうどんに生卵を乗せて、生醤油をかけて食べるものらしい。美味しそうだし、後で一口分けてもらおうかな。

「うどん茹でるのはそれなりに時間かかるから、これでも食べて待つといてや」

注文を終えて、セルフサービスになっているお冷を飲んでいたら、彩人さんがおにぎりを四つ、俺たちの席に運んできてくれた。

「え？　頼んでませんけど」

「サービスや。あんたたちがこの島で最初のお客さんやからな。その代わり、しっかりと宣伝頼みまっせ」

調理スペースに戻りながら、彩人さんが手を振る。俺たちは「ありがとうございます」とお礼を言って、おにぎりにかじりついた。

「おお、うまい」

作り置きされていたらしいおにぎりは、鶏肉の入った鳥飯おにぎりだった。もちろん冷たいのだけど、それによって鶏の旨味がお米の一粒一粒に染み込んでいた。これは美味しい。

「んー、おいしいー」

隣に座る羽未もご満悦のようで、手のひらに米粒をつけながら、あつという間に食べてしまった。

その様子を微笑ましく見ていると、「にしても、女の子三人も侍らせて、兄ちゃんもやりますなあ」と、彩人さんが冗談ぽく言う。羽未は娘だし、夏海ちゃんは親戚だし、紬はその、二人の友達だし。変な勘違いをしないでほしいんだけど。

「ほい。ひやかかけ三つに、ひや玉一つ。おまちどーさん！」

しばらくして、注文したうどんが俺たちの前に運ばれてきた。予想はしていたけど、ひやかかけは黄金色の冷たい出汁に、体を冷やし過ぎないようにとネギと生姜がトッピングされたシンプルなもの。

それでも、うどんの一本一本がツヤツヤと輝いていて、見た目だけで十分美味しそうだ。

「ひや玉の生醤油はこれを使ってや。見た目の割に辛いから、お嬢ちゃんが食べる時はかけ過ぎんようにな」

「うん！」

目の前に置かれたうどんに、羽未は目を輝かせていた。純白の麺の中央に、黄色い卵が鎮座して、その脇にネギが乗る。これもシンプルだけど、おいしそうだ。

「よし、羽未、醤油の量はこれくらいでいいか？」

生醤油の入った小瓶を受け取って、丼ぶりの半周程回しかける。色は薄目だけど、まずはこれで様子見してもらおうかな。

「それじゃ食べようか。いただきます」

続けて俺が挨拶をすると、他の皆も「いただきます」と声をそろえてから、思い思いにうどんをすすりはじめる。

「……おお」

俺も一口食べてみる。これは、感動的な美味しさだ。本土に外出した時、時々うどんは食べるけど、それとはレベルがまるで違う。麺に歯が跳ね返されそうなコシがある一方で、出汁はあっさりしてるのに深みがある。まさにうどんのために、調整に調整を重ねて生み出された出汁という感じがした。

「んー、美味しいです！」

「そうですね！ このノドゴシがたまりません！」

夏海ちゃんや紬も嬉しそうにうどんを口に運ぶ。紬、喉ごしなんて言葉を知ってるんだね。羽未も「おいしいー」と、満面の笑みを浮かべているし、走馬うどんは好評のようだった。

「……おじさん、また腕を上げましたね！」

一気に半分くらい食べた夏海ちゃんが、彩人さんの方を向きながら言う。当の本人は昼食なんだろうか、自分で作ったうどんを自分で食べながら「いや、今日のうどんは少し柔いで。まだまだ、修行が足りんわ」なんて言っていた。歯ごたえ十分だし、美味しいと思うけどなあ。

「……彩人さん、ごちそうさまでした。代金はいくらです？」

本場のうどんを堪能して、器を返却しながら尋ねる。この手の店の場合、基本料金は先払いなだけで、彩人さんも夏海ちゃんに会えたのが嬉しかったのか、すっかり忘れてしまっていたらしい。

「おおきに。四人でちょうど千円や」

「あ、自分の分は払いますー！」

そして俺が財布を出そうとした矢先、紬がそう言いながら俺の前に出た。

「別にいいよ。ごちそうするから」と伝えるけど、紬は断固拒否。スカートのポケットに手をつっ込んで、財布を取りだそうとする。

「……むぎゆ？」

しかし、その格好のまま固まった。どうしたんだろうと思っていると、今度は顔を赤くしながら、おろおろしはじめた。これは、もしかして。

「わ、わたしとしたことが、お財布を灯台に忘れてしまいましたく……」

頭を抱えた後、がっくりとうなだれていた。紬らしいといえば紬らしいけど、本人はショックに違いない。

「……こうなったら、カラダで払いますー！」

だからか、涙目でそんなことを言っていた。ちよつと紬、誤解されるようなこと言わないで。

「今回は俺が出しておくよ。いつでも好きな時に返してくれていいからさ。」

見るに見かねて、俺は笑顔で言つてポケットに手をつ突つ込む。同時に「兄ちゃん、女の子三人に奢つたるなんて太っ腹やな！ よっ！ さすが島の男！ 男気あるで！」なんて、彩人さんの声が聞こえた。まったく、茶化さないでほしい。

「……あれ？」

おそらく、この時の俺は、紬と同じような格好で固まっていたと思う。おかしいな。ポケットにあるはずの財布がないぞ。

ラムネを買つたし、駄菓子屋では確実に持っていたはずだ。ということは駄菓子屋か、漁港に来るまでの間に落としたのかな。

「兄ちゃん、どうしたんや？」

目を見開いて硬直している俺に、彩人さんが不思議そうに声をかけてくる。俺は意を決して、言葉を吐き出した。

「あの、体でお支払いしても、いいでしょうか……」

第九話・完